令和５年度

幼稚園・幼保連携型認定こども園
教職２年目研修

課題研究レポート

令和６年３月

沖 縄 県 立 総 合 教 育 セ ン タ ー

令和5年度 幼稚園･認定こども園教職2年目研修 研究一覧

園　　名	氏　　名	研究テーマ
名護市立羽地幼稚園	松田　恵利香	自然に親しみ、好奇心・探究心を育むための環境構成と援助の工夫 ―身近な動植物とのふれ合いを通して―
宜野座村立松田幼稚園	大城　和生	幼児が動植物の観察ができる環境構成の工夫と主体的に取り組む姿勢 ―身近な生き物と触れ合いを通して―
伊江村立伊江幼稚園	喜屋武 かおり	言葉による伝え合いを楽しむ為の環境構成と援助の工夫 －クラスの集まりや読み聞かせを通してー
嘉手納町立嘉手納幼稚園	吉本　結花	友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わうための援助の工夫 ―共同的な遊びや活動を通して―
久米島町立清水幼稚園	若杉　裕子	多様な園児がすごすことに配慮した援助や環境の工夫 ―預かり保育においての援助や環境を通してー
南風原町立津嘉山幼稚園	山城　理夏子	自立心を育むための環境構成と援助の工夫 ―友達との関わりを通してー
南風原町立北丘幼稚園	前里　美沙	伸び伸びと遊び、自己発揮するための援助の工夫 ―幼児理解の視点から環境構成や援助の在り方を探る―
宮古島市立狩俣幼稚園	上里　美希	幼児教育と小学校教育との円滑な接続について ―「幼児教育と小学校教育の架け橋期特別委員会」における議論等を踏まえて―
竹富町立はてるま幼稚園	根本　ユリ	友だち同士互いを認め合い、思いを伝え合って遊ぶ楽しさを味わうための援助の工夫 ―日々の生活や遊びを通して―
竹富町立うえはら幼稚園	真謝　紀香	幼児期の運動遊びを充実していくための援助の工夫 ―多様な動きが経験できるような取組みを通してー
国頭村立くにがみこども園	須田　由希乃	基本的生活習慣を身に付けるための環境構成と援助の工夫 ―「やってみよう」という自立への気持ちを育む―
国頭村立くにがみこども園	金城　沙織	食への興味・関心を育み楽しく食べるための工夫 ―食べものを大切にする感謝の心を通して―
大宜味村立おおぎみこども園	野村　利加子	自信を持って、自分の思いや考えを言葉で表現するための援助 ― リズム遊びを通して ―
今帰仁村立認定こども園みらい	大村　絹恵	遊びの連続性を大切にした教育・保育の工夫 ―１号認定の園児に焦点を当ててー
今帰仁村立認定こども園みらい	田中　美和	自分を素直にのびのび発揮できる子どもの育成 ―保護者支援を通してー
名護市立緑風こども園	仲程　利枝子	魅力ある園環境をめざして ―遊びの動線を生かした環境構成の工夫―
名護市立緑風こども園	長山　史子	「たのしい！」「やってみたい！」園児の遊びが充実するための環境構成や援助の工夫 ―園児理解を深め、一人一人の興味や関心に応じた関わりを通して―
金武町立金武こども園	前田　鈴乃	新しい言葉に出会う楽しみや、言葉を豊かにしていくための援助の工夫 ―言葉を使った遊びを楽しむ経験を通じてー
浦添市立浦添こども園	比嘉　恵秀	身近な自然に親しみ、主体的に遊びこむ幼児の育成 ―草花に直接触れ、心を動かす体験を通して―
浦添市立牧港こども園	眞榮田　美保	互いの良さを認め合う環境構成と援助の工夫 ―友達と心を動かす出来事を共有する体験を通してー
浦添市立内間こども園	普天間　愛未	友達と過ごす楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫 ―基本的生活習慣の自立と遊びを通して―
浦添市立内間こども園	高宮　藍	主体的に遊びを楽しむ子の育成 ―運動遊びを通じてー
那覇市立大道みらいこども園	沖本　理子	主体的に遊び、友達と一緒に活動する楽しさを味わうことができるような環境構成と援助の工夫 ―園児一人一人の内面理解を通して―
那覇市立樋川みらいこども園	仲原　真衣	幼児が「自ら食べてみたい」と思う援助の工夫 ―色々な食材に興味・関心が持てるような活動を通して―
那覇市立城西こども園	金城　ひかり	互いのよさを認め合い、思いやりの心を育むための環境構成と援助の工夫 ―言葉による伝え合いを通してー
那覇市立城南こども園	山入端　悠香	友達と一緒に活動する楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫 ―保育教諭や友達との関わりを通して―
那覇市立小禄南こども園	根間　浩美	言葉での関わりを深め、認め合い育ち合う学級作り ―互いの思いに気付き、共感し合える経験を通して―
那覇市立天妃こども園	伊良波　芽依	思わずやってみたくなるような環境構成と援助の工夫 ―製作遊びやお話作りにおける表現活動を通して―
那覇市立真嘉比こども園	﨑枝　華鈴	友達の良さに気づき、一緒に活動する楽しさを味わうための援助の工夫 ―お店屋さんごっこを通してー
那覇市立真和志こども園	新垣　遥	友達の良さに気付き、協力して活動する楽しさを味わうための援助の工夫 ― 学級活動や遊びの場を通して ―

那覇市立久場川みらいこども園	新垣　菜美	楽しく意欲的に基本的生活習慣を身に付けるための環境と援助の工夫 ―一人一人の興味関心や発達段階に合わせた環境構成や援助を通して―
那覇市立天久みらいこども園	瑞慶山　翔子	友達と活動する楽しさを味わうための援助と環境構成の工夫 ―身近な生き物に興味や関心をもって関わる体験を通して―
糸満市立糸満南こども園	長嶺　美希	主体的に取り組める環境の構成や援助の工夫 ―身近な自然と触れ合う遊びを通して―
糸満市立喜屋武こども園	松田　由野	園児が意欲的に活動できる環境構成や援助の工夫 ―身近な自然環境や活動を通して―
糸満市立兼城こども園	金城　夏美	食べる喜びや楽しさを味わうための環境構成や援助の工夫 ―様々な活動や栽培活動を通して―
糸満市立真壁こども園	安里　まき子	小学校教育へと繋がる園児の発達と学びの連続性を目指して ―園児の主体的・対話的な深い学びに繋がる環境づくりと援助を通して―
宮古島市立上野こども園	友利　美菜	遊びが豊かに展開される環境構成と援助の工夫 ―様々な感触に直接触れ、心動かされる体験を通して―
宮古島市立伊良部こども園	下地　智菜	園児が安心感を持って園生活を送るための保育の工夫 ―人との温かい関わりの中でアタッチメントの形成を目指す―
宮古島市立下地こども園	糸数　七海	言葉が伝わる楽しさ、話す面白さを育む環境の工夫 ―保育教諭や友だちと安定した環境の中で、月齢に応じた生活や遊びを通して―
石垣市立あらかわこども園	宮良　茜	園児の好奇心・探究心を育むための環境構成と援助の工夫 ―身近な環境との関わりを通して―
石垣市立まきらこども園	古賀　知子	食べる楽しさや喜びを味わうための環境構成と援助の工夫 ―食への興味・関心を育むための活動を通して―
金武町 杉の子幼児学園	渡久地　珠伊	自分の思いを言葉で伝える ―日々の会話や発表を通して―
金武町 杉の子幼児学園	崎浜　未来	食への関心を育てる援助の工夫 ―ひとり一人がやってみたいと思う食育活動―
うるま市 天願こども園	金城　優衣	食を営む力の基礎を培い、楽しく食べる子どもに成長するために ―食事をすることは嬉しい！楽しい！大好き！―
うるま市 天願こども園	天願　紗弥香	触れ合いを通して育つ心の成長、豊かな感性を引き出すための援助の工夫 ―異年齢児交流を通して育む力―
うるま市 勝連こども園	安谷屋　舞海	相手の思いや気持ちに気づき、共同性が育ちあう学級づくりの環境構成と援助の工夫 ―保育教諭や友だちとの関わりを通して―
中城村　クリスチャン教育センター幼稚園	渡慶次　リミ	お友達の思いがある事に気づき一緒に関わる楽しさを味わう為の援助の工夫 ―教師や友達との関わりを通して―
中城村　学校法人平安学園平安幼稚園	松堂　由莉亜	基本的な生活習慣を育むための援助の工夫 ―日々の保育を通して―
中城村　中城ひらやすこども園	山口　花生	思いや気持ちを伝え合う楽しさを育むための工夫 ―言葉の面白さや仕草に着目した保育教諭の援助・環境構成を通して―
浦添市　ハイジこども園	大城　玲香	基本的生活習慣を身に付けるための環境の構成と援助の工夫 ―自立心を育むための環境の構成と援助の工夫を通して―
浦添市　ハイジこども園	玉寄　久奈	物や命を大切にしようとする姿勢や意欲を生み出し育むための工夫 ―身近な環境と生き物との共存を通して―
浦添市　あおいこども園	下地　涼香	「できた！」と喜びを感じられる環境構成と援助の工夫 ―身体を使った遊びや保育教諭の関わりを通して―
浦添市　あおいこども園	城間　果南	幼児期に言葉豊かに表現するための環境構成と援助の工夫 ―身近な人や友達に伝え合う楽しさを通して―
浦添市　あおいこども園	平安山 りのあ	遊びを通して身近な人や物への興味関心を広げる ―様々な遊びの中で、やってみようとする気持ちを育む環境構成と援助の工夫を通して―
浦添市　牧港ひまわり幼稚園	比嘉　詩織	１人ひとりの個性や想像力を育む ―身近なものから楽しさを感じて―
浦添市　へいあん福祉会ほるとのきこども園	又吉　未来	１歳児の簡単な日常への言葉の獲得と他児との関わりの工夫 ―身近な人的環境との関わりを通して―
浦添市　勢理客こども園	知花　優海子	協同性を育む援助の工夫 ―「やってみたい」の気持ちが広がる保育環境―
浦添市　勢理客こども園	山﨑　織穂理	食に興味を持ち意欲的に食べられる環境作り ―安心感のある雰囲気で食べたいを引き出していく―
那覇市　ナザレ幼稚園	眞志取　都	主体性を育むための環境構成や援助の工夫 ―自信を持って行動する心を育むために―
那覇市　社会福祉法人郵住協福祉会立安謝こども園	下地　奈津衣	安心できる環境の中で、意欲と達成感を育み楽しさを味わえる援助の工夫 ―友達や保育教諭と一緒に生活や活動を通して―
那覇市　城岳こども園	砂川　妃	「もったいない」の気持ちを育む環境構成や援助の工夫 ―保育教諭や友達とともに遊びや活動を通して―

那覇市　認定こども園小禄こども園	大津　美咲	互いのよさを知り、一緒に活動をする楽しさを味わうための援助の工夫 ー園生活の中で自分の思いを伝え、友達の思いに気付く経験を通してー
那覇市　高良こども園	上地　なつみ	認め合い、育ち合いにつながる学級づくりの工夫 ー幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿の視点を通してー
那覇市　社会福祉法人さくら会立神原こども園	伊波　友菜	自ら進んで食べてみようとする気持ちを育むための工夫 ー食べる喜びや楽しさ、食べ物への興味関心を持つためにはー
南城市　あおぞらこども園	新垣　菜々子	互いに認め合いながら、自分の感情と相手の気持ちに気づく ー友だちと関わり合いながら育むー
南城市　玉城こども園	金城　早希	自然や人との豊かな関わりを通し、主体的に遊びこむ幼児の育成 ー心動かされる体験を通して言葉で伝え合う喜びを味わえるようになるための援助の工夫ー
南城市　知念こども園	當眞　真依子	幼児が遊びこむための環境構成と援助の工夫 ー遊びこめる環境づくりと援助を通してー
南城市　知念こども園	宮平　希	気持ちを伝えることができる子を育むための援助の工夫 ー友達や保育教諭との関わり・遊びを通してー
南風原町　開邦幼稚園	佐久川 果奈子	体を動かすことを楽しみ、健康な心と体を育む環境構成と援助の工夫 ー日々の様々な活動を通してー
南風原町　開邦幼稚園	平田　彩夏	伝え合う力と思いやりのある幼児の育成を目指して ー言葉や人と関わりあう環境つくりを通してー
大宜味村立　おおぎみこども園	宮城　はるか	ー緒に活動する楽しさを味わうための援助と環境構成の工夫 ー友達や保育教諭との関わりを通してー
豊見城市立　上田こども園	森　彩乃	幼児の好奇心や探究心を育み遊び込める環境構成と援助の工夫 ー幼児理解に基づいた保育実践を通してー

自然に親しみ、好奇心・探究心を育むための環境構成と援助の工夫
―身近な動植物とのふれ合いを通して―

名護市立羽地幼稚園　教諭　松田　恵利香

Ⅰ　テーマ設定の理由

情報社会の中でパソコンや携帯電話等の情報端末は、生活の一部として存在し、幼少期から動画視聴やゲームにふれる習慣が多く見られるようになっている。また、コロナ渦の影響で、過去３年間は家庭で過ごす時間が多く、自然体験や人との関わりなど直接体験が乏しい状況にあった。『幼稚園教育要領解説』第２章第３節「環境」の領域には「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」とある。幼児にとって、自然を感じ取る体験の中で、身近な動植物にふれる機会をもつことは、命の不思議さや大切さに気づいたり、思いやりの気持ちを抱いたりするなど心を豊かに育むことに繋がると考える。

本学級は、５歳児（１年保育）、男児６名、女児５名、計１１名が在籍し、内３名が初めての集団生活である。様々な遊びの中で友達同士誘い合い、ごっこ遊びや集団遊びを楽しんだり、飼育しているメダカやウサギの世話を喜んでしたりする姿が見られる。しかし、園庭で見つけたチョウやバッタ等の虫にとても驚いたり、雑に扱ってしまったり、また、落ち葉や土に触れることに抵抗する姿も見られ、子ども達が自然や生き物と関わる経験が少ないことを感じた。

そこで、身近な動植物とのふれ合いを通して、好奇心や探究心をもって自然の不思議さや面白さに気づき、命の尊さを感じ大切にしようとする心を育みたいと考え、本テーマを設定し研究することとした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　幼児が興味関心をもって身近な自然と関わろうとする環境構成の工夫

草花や野菜、小動物等とのふれ合いを通して、動植物に興味をもち、発見する楽しさや好奇心、探究心が芽生えるような環境構成の工夫をする。

２　体験する喜び、発見、驚きなどを友達と共有できる援助の工夫

幼児の思いや気づきを受け止め、友達同士で話し合ったり、相談したりする場をもち、興味関心が広がるような援助をする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例①「チョウを育ててみたい！」

【幼児の実態】

・ウサギの世話を喜んでする子が多いが、園庭にいるチョウの幼虫やバッタ、畑のミミズなどに驚き怖がって逃げる子、たくさん捕まえて観察ケースに集め、おもちゃの様に扱う子など、身近な生き物と関わる経験の少なさを感じた。

【教師の願い】
・身近な生き物に興味をもち、親しみをもって関わってほしい。
・生き物の命の不思議さや大切さに気づいてほしい。

【◎教師の援助・△環境構成の工夫】

◎教師自身が、生き物に親しみ、手にのせたり、話しかけたりしながら、子ども達が少しずつ興味をもって関われるようにする。

◎「これ、何？」「この葉っぱにたくさん幼虫がいる！」など、幼児のつぶやきや発見を受け止め、共感する。

◎全体の場で、個々の発見や気づきが発表できるよう場の設定を行う。

◎『かばまだら』、かわいいむしのえほんシリーズ（『かまきりのかまくん』『てんとうむしのてんてんちゃん』）など、虫に関する絵本の読み聞かせを通して、生き物への親しみがもてるようにする。

◎「チョウになるのを近くで見てみたい！」「どうやって変身するの？」など、子ども達の「やってみたい!知りたい！」の思いに寄り添い、クラスで話し合いながら飼育できるようにする。
△取り出しやすい場所に図鑑コーナーを設置し、ブックスタンドには、特に身近にいるチョウの幼虫に興味がもてるよう『幼虫』図鑑を置き、手に取りやすいようにする。
△幼児なりのイメージを大切にしながら虫捕り網や観察ケースが自由に作れるように、様々な廃品の材料を準備しておく。
△保育室の玄関に飼育ケースを置き、登園しながら様子が見えるように設置する。

【園児の変容】
・教師が、虫に親しむことで「怖くないの？」「さわってみようかな？」と、興味を示しトウワタについているカバマダラの幼虫を見つけて観察するようになった。
・「チョウに変身するところ見てみたいな！」と、つぶやく子の姿から幼虫の飼育が始まった。
・カバマダラの気持ちになり、飼育ケースに小枝の橋を作ったり、紙にお風呂やトイレ、まくらやお布団を描いて入れたりと、親しみをもって関わる姿が見られた。

【結果と考察】
・身近な生き物にふれ、実際にカバマダラの幼虫を飼育することで、その成長変化を間近で観察することができ、命の不思議さや尊さが感じられる経験になったと考える。
・カバマダラが幼虫から蛹、蛹から成虫へ成長した喜びを友達同士で共感し合い、飛び立つ姿を見送ることで愛着心をもち、カバマダラの家族をイメージして「お母さんのところに帰ってね！」「また、遊びに来てね！」と話す姿に繋がったと考える。

実践事例②「畑に何を植えようかな？」

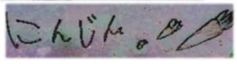
【幼児の実態】
・１学期に、キュウリやゴーヤー、スイカ、トウモロコシを栽培し、収穫して美味しく食べた経験から、２学期に入り「また、何か植えたい！」「次は何食べる？」と話す子ども達の姿が見られた。一人一人の意見を聞きながら「どんな野菜を育てたいか？」と、話し合いをすることにした。

【教師の願い】
・１学期、野菜の苗植えと収穫を喜んで行ったが、日頃の世話が疎かになりがちだった為、ていねいに世話ができるようにしたい。
・「この時期に育てられる野菜は何かな？」野菜の成長変化に興味をもち、栽培、収穫、食べる過程を楽しんで味わってほしい。

【◎教師の援助・△環境構成の工夫】
◎子ども達と育ててみたい野菜について話し合い「どうやって植えるのかな？」「どうやって実がつくのかな？」など、自由に想像しながら期待感がもてるようにする。
◎小学校の畑を見に行ったり、畑博士の園長先生に、旬の野菜について教えてもらったりし、栽培する野菜をみんなで決められるようにする。
◎野菜を栽培する準備として、畑の大切さを伝え、朝のぴかぴかタイムで少しずつ畑の草取りや石拾いを行い、畑が整っていく様子が体感できるようにする。
◎野菜の成長変化を楽しみながら継続的に世話ができるようみんなで話し合い、看板作りを行う。
△旬の野菜について子ども達と園長先生が話し合える場をもつ。
△子ども達が草取り、石拾いをした後、小学校職員の協力を得て、耕運機で畑を耕してもらう。
△子ども達が野菜の世話や収穫がしやすいように野菜の種類に合わせて各コーナーの広さや場所を考慮する。

れたす　どれにしようかな

絵と文字で看板作り



トマトの収穫

だいこんのはっぱ
さいこう！

【園児の変容】

・看板の文字を見ながら「玉ねぎ、大きくなっている！」「人参の葉っぱ出てきたよ！」「ピーマン、花咲いている！」などと、それぞれの野菜の成長に気づき、教師や友達に嬉しそうに話す姿が見られる。
・「大きくなってね！」「美味しくなってね！」と声をかけながら野菜に水やりをする姿が見られる。

【結果と考察】

・野菜コーナーの看板作りをしたことで、野菜の名前を言いながら水やりをしたり、それぞれの野菜の芽や葉っぱの形、花や実のつき方などを比較したり、興味関心をもって世話する姿に繋がったと考える。
・トマトを喜んで収穫して食べたり、ピーマンやレタス、大根葉などを調理して味わったりと、栽培、収穫、食べる体験を通して、野菜への興味関心が高まったと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・カバマダラの飼育で、成長変化をとげる姿に驚いたり、喜んだりし、友達と感情体験を味わいながら、命の不思議さや尊さに気づくきっかけになったと思われる。
・生き物の命について、子ども達なりに考えるようになり、捕まえたチョウやバッタ、カマキリなどを観察した後は、「また遊ぼうね！」「また来てね！」と、捕まえた場所に優しく放してあげる子の姿が見られるようになった。
・野菜の看板作りをすることで、主体的に畑の水やりをしたり、「大きくなっている！」と、成長に気づいて嬉しそうに教師や友達に伝えたりする姿が見られた。また、自分達で育てた野菜の収穫を喜び、味わうことができた。

②課題

・生き物の飼育や栽培活動など、観察の足あとが見やすいように子ども達と絵や文字、写真などを活用した記録などの工夫が必要だと感じた。また、それらを通して、遊びの様子や発見、気づきなどを日常的にクラスで共有したり、保護者へ「今の子どもたちの姿」を発信したりすることで、子ども達の更なる好奇心、探究心に繋がると感じた。

③実践を通した気づきや考えなど

・身近な自然にふれ合う体験を通して、「これ、カバマダラだよね！」「ミミズは、畑に住んでいるんだよね。」など、様々な生き物が自分達と身近な場所で共存していることに気づくことができたと考える。また、野菜の成長を見て、「お花が咲いている！きれい！」「トマトの葉っぱ触ったらトマトのにおいがする！」など、子ども達の感性豊かな気づきや発見の面白さをあらためて感じることができた。教師が、個々の思いや表現を受け止めることで、子ども達の興味、関心に繋がっていくことの大切さを学んだ。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・身近な自然に教師自身が興味関心をもち、目を向けることが大切だと感じている。子ども達の「これ、何だろう？」「これ、面白い！」などのつぶやきや気づきを捉え、分かりやすく写真や記録を視覚化し、更なる好奇心、探究心に繋げるための教師の言葉かけや援助の工夫について学んでいきたい。また、園庭での動植物とのふれ合いから地域の自然素材の良さに気づけるような環境構成に繋げていきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省２０１８『幼稚園教育要領解説』フレーベル館
岡上直子２０１７『ワクワク！ドキドキ！が生まれる環境構成ー3・4・5歳児の主体的・対話的で深い学びー』ひかりのくに
大豆生田啓友２０２２『子どもと自然』Ｇａｋｋｅｎ

様式３「課題研究レポート」

幼児が動植物の観察ができる環境構成の工夫と主体的に取り組む姿勢
～身近な生き物と触れ合いを通して～

宜野座村立松田幼稚園　教諭　氏名　大城　和生

Ⅰ　テーマ設定の理由

本園の広い園庭で、のびのび過ごせることもあって遊びの中から友だちとの関りが多くなり、中でも園庭の真中にホウライカガミがあり、そこにオオゴマダラ等の蝶々が集まったり、セミやバッタなどの昆虫も多く生息していたり、子ども達にとってとても楽しく観察できる環境となっている。しかし、生き物を捕まえた後、捕まえて虫かごに入れたままの状態が続いている。そこで、子ども達がよりよく興味を持ち、生き物と関わる中で意欲的な関りができる環境作りや生き物に対しての思いやりの心を持って関われるように育ってほしいと願い、テーマ設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 観察コーナーを設け、自主的に観察したり、図鑑などを使って名前や特徴などを調べられるようにする。

② 命の大切さを知る。

③ 動植物との関りや見て感じたことを発表の場を作り、自身が体験したことを発表できるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

①　観察コーナーを設け、子ども達が自主的に図鑑で調べる、観察できるようにする。

②　命の大切さを知り、優しい気持ちをもって動植物に関わる。

③　行事を通して自身が体験したことや感じたことを発表会で披露する。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

・実践①　コーナーを作ることで、自身が捕まえた昆虫をすぐ確認したり、図鑑と照らし合わせることで、「あっ！〇〇だ！」と自信が発見したともに伝え合うことができた。また、捕まえた昆虫の写真を掲示することで、いつ、どこで、誰が捕まえた等、いろんな発見をすることがで、自然に触れ、好奇心や探究心を持つことができた。

・実践②　普段の遊びの中で、捕まえた昆虫を放置したり、むやみに触り、足や羽などが取れたりしてしまう事がほとんどでした。慰霊の日取り組みでの出来事で、命の大切さを知る機会がありました。その際、昆虫も人間と同じ命の話をしていくと、「優しくした方がいいね。」「どうしたら、元気になるかな？」等少しずつ、優しく接する子が増えてきました。中には、「僕が帰る時に逃がしたいので、観察したいです。」と自ら話をする子もいました。そのこと

から子ども達は生命の不思議さや導きについて気付くことができました。

実践③　11 月の学習発表会で松田幼稚園が園内で関わる昆虫、オオゴマダラを中心に発表を行いました。幼稚園に来たオオゴマダラが卵から幼虫、さなぎ、成虫に成長する様子をエリックカールの「はらぺこあおむし」の曲に合わせて替え歌を作りながら、手作りの衣装や道具を使って歌いました。保護者からは「とてもわかりやすい。」「幼稚園での取り組みがよくわかりました。」等、いろんなお言葉があり子ども達の取り組みについて知ってもらい、成長を喜んでいただきました。自分たちで作った衣装や小道具を使い、先生方や友だち、保護者へ経験したことや考えたことを学習発表会で表現することができた。

② 課題

・子ども達の取り組みに対して、小さなことも常に耳を傾けていくようにしたが、なかなか要求にこたえることができなかった。例えば使いたい道具の使い方を何度も知らせるようにしていたが片付けができず、やりたい事や興味を持った遊びを取り入れるが、持続していくことができなかった。

・観察コーナーでの取り組みで子ども達や保護者から、捕まえた昆虫の紹介をすることができていることはとても良かったが、同じ昆虫が多く、一定期間が過ぎるとなかなか数が増えないことや、子ども達の関心を持続させることに苦戦しました。

・昆虫へ関心がない子には無理なく接するようにしていたが、自主的に興味が持てるような取り組みができていなかった。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇今後も今回の取り組みの反省を生かし、遊びの中で子ども達の遊びの展開やそれを持続していく事を大切にしていきながら、自主的な遊びや生命の大切さ、豊かな感情や表現等、幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿を意識した環境の構成や子どもとの関り方を工夫していきたい。

〈主な参考文献〉

＊2 ページから 3 ページにまとめること

言葉による伝え合いを楽しむ為の環境構成と援助の工夫

～クラスの集まりや読み聞かせを通して～

伊江村伊江幼稚園　教諭　喜屋武　かおり

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼稚園教育要領解説』第２章「言葉」の領域のねらいに「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝えあう喜びを味わう。」とある。幼児は園生活の中で心動かせる体験を通して、自分の思いを言葉や動作で伝えたり表現したりすることで、伝わる喜びを味わい伝える大切さ、伝わる喜びを感じられると考える。

本学級は、4 歳児（2 年保育）男児 8 名、女児 7 名、計 15 名在籍しており、同じ保育所からの入園である。男女の仲はとてもよく、ごっこ遊びやボール遊びを好んで活発に体を動かし遊ぶ姿があるが、会話が並行的で自分のことを話すことで満足し相手の話を聞かないで次の活動へ移る子が多い。又、帰りの会や朝の会で保育者の話を最後まで聞かず途中で話し出したり、話に集中できずよそ見したりする姿も見られる。

このような実態を踏まえ、「先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり話したりが出来るようになって欲しい」との願いを持ち、自分の思いを発表し相手の話を聞く場の環境構成や、絵本や物語に親しみ、言葉に対する感覚を育むような援助の工夫が必要だと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　話を聞こうとする意欲や態度を育てるための工夫

絵本や紙芝居を通して友達と同じ世界を共有する楽しさを味わい、美しい言葉を使い伝えあう楽しさを感じてもらうため、保育者や保護者の読み聞かせの時間を設ける

２　自分の体験したことや考えを表現しようとする環境の構成と援助の工夫

遊びの中や生活の中で体験したことや感じたことを発表する場を設け、みんなでその思いを共有、共感できるような援助の工夫を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

１ 話を聞こうとする意欲や態度を育てる

実践事例１

（幼児の姿）４月
・集まりに時間がかかり、集まってもおしゃべりが多い。話を聞いていても自分の事を話し出す子が多く、集いに時間がかかる。

⇨

（教師の願い）
・自分の思いだけでなく相手の思いに気付いて欲しい。話を聞く事の大切さや聞く態度を身に付けて欲しい。
・「今何の時間なのか？」時間のけじめが少しづつ身について欲しい。

○環境構成・☆保育者の援助	変容
《4 月下旬》 ○並ぶ順番、座る場所を決める。（ベルを集合の合図とする。 ☆手話ソング・手遊びを導入として使用する。 ☆話が長くならないよう、簡潔に話を終わらせる。	○自分の場所がわかり場所の取り合いもなく座ることが出来るようになった。 ○手話を覚える為、保育者へ視線が向き、自然と話を聞く姿勢がとれるようになってくる。
《5 月・６月・７月》 ○絵本貸し出し帳の作成。 ○５歳児の保護者による読み聞かせに参加し絵本を読んでもらう楽しさを味わう。 	○5 歳児と一緒に活動する事で、静かに話を聞く雰囲気を感じ、クラス内での集いでも意識する姿が見られる ○絵本への期待や、感想を話す子が増えた。

○当番活動の充実（号令をかけるなど前に出る機会の設定）
☆5 歳児の保護者による読みかせを一緒に聞き、読み聞かせの雰囲気を味わう。
（６月～保護者による読み聞かせ）
☆仕事の合間を縫って、来園してくれている事を伝えて聞く姿勢を一緒に考えていく。
☆読み聞かせの後の振り返り。
（絵本の感想を発表する場の設定）

○給食献立紹介、食育の言葉紹介もお願いすると、皆の前に立つことを楽しみにするようになった。
○保護者の来園で、体を話し手に向けて最後まで静かに話を聞けるようになる。
○手を挙げて、絵本の感想をみんなに伝えることを楽しみにする。
○読んでもらった絵本を探して、借りて読む姿が見られる。

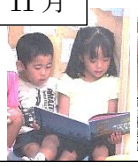
《１０月》
☆「なぞなぞ」「ことばあそび」ゲームを楽しむ。
☆絵本コーナーを利用し、なぞなぞやあみだくじを掲示する。
（あみだくじの先には、昔話のタイトルを貼り、帰りの会で読む。）
☆絵本コーナーにテーブルや、クッションを用意し、ゆったりと過ごせるスペースを作る。

○絵本コーナーのあみだくじを利用することで昔話に触れるきっかけとなり、昔話借りる子が増えた。
○子ども達の会話の中でもなぞなぞを楽しむ。（昔話なぞなぞもあるので、今まで興味を持たなかった昔話にも興味を持つ子が増えた。）
○「これおもしろかったよ」「読んだら貸してね」と絵本を通しての会話が増える。

４月

読み聞かせ

11 月

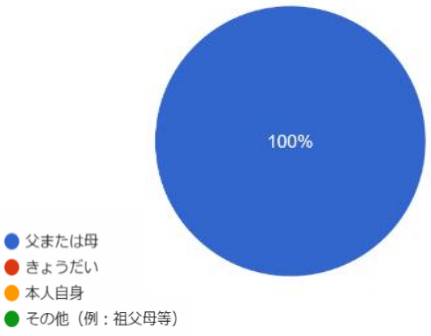


自然と体の向きが読み手へ向くようになる

絵本コーナーへ入る際は、履物をそろえるようになる。

《保護者による読み聞かせについてアンケート結果》

(1)　主に誰が読み聞かせをしていますか。



(2)　読み聞かせを通して子どもの成長が感じられた点がありましたらお書きください。

○読み聞かせ前の他者紹介で　緊張が伝わりながらも、しっかり言えた瞬間。
○寝る前の会話が増えました。
○物語のストーリーを理解することができるようになっていたり、語喩力が増えたりと日々の生活で成長を感じることがふえています。
○読めないところは教えながら　自分で読んでみると頑張っています
○静かに聞けるようになった。

（結果・考察）

・集まりの合図に素早く反応し遅い子へは「ここだよ」と声を掛け合う姿が見られるようになった。
・保育者が話をしたことを、再度確認していくことで、聞かないとわからない（答えられない）という事に気づき子ども同士で「しー」「静かに」と声を掛け合い話を聞こうという意識が高まった。
・集いだけでなく保護者による読み聞かせを聞く場面を多く持つことで、話を聞く姿勢を意識して聞くことが出来るようになった。

２．自分の体験したことや考えを表現しようとする環境の構成と援助の工夫

（幼児の姿）
・誕生会の出し物やや振り返りなど、人の前に立つと尻込みする子が多く自分から前に出て発表・表現する子が少ない。

（教師の願い）
・表現する楽しさや、聞いてもらい、思いが伝わる楽しさを感じて欲しい。

実践事例２

内容・環境構成	変容
異年齢交流 （ひまわり組と出し物に参加） 男児＝国頭さばくい 女児＝手話（虹の向こうに） ☆５歳児の演目に混ぜてもらい楽しさを味わう。 	○5歳児が一緒にいる安心から前に出て、表演する。（照れくささがあり、振りが小さくなっていたが楽しんでいた）
自分の考えを創出する場の設定(ペープサート) ○日頃の集いで「野菜」の手遊びを取り入れる ○５歳児のペープサート作りの様子、演じている様子を見る。 ☆好きな野菜を選びイラストを作成。野菜の写真を用意して絵を描きやすいようにする。	○友達と話し合いながら野菜の担当を決めイラストを描く。描けないところは「手伝って欲しい」と保育者や友達の手を借りて仕上げていく。 ○ペープサートが出来上がると、遊びの中でも友達と見せ合ったり、送迎の保護者に見せたりしているうちに発表することへ期待を持つようになる。
認め合う場の設定(ペープサート) ○「ふうせん」のパネルシアターを見る。 ☆　色から連想する物を話し合い、自分の好きな色を紹介して色から連想する物をペープサートにしていこう	○自分のイメージを発表したくて、意欲的に制作に取り組む。作品が仕上がると見せ合い、歌いながら表現する。自分で作り上げた物を「上手」「かわいい」と褒められることで、みんなの前で堂々と発表する姿が見られた。

（結果・考察）

・自分のイメージをみんなに認めてもらうことで、人前に出て発表する楽しさ、認めてもらう喜びを感じることができた。

・５歳児が良い手本となり、子どもたちの『やってみたい』につながっていった。

・子ども達への発表のきっかけ作り、環境を整えて触れる機会を多く持つことの大切さを改めて感じた。

Ⅳ　実践の振り返り

・保育者の協力や異年齢児との関わりで「聞く」「見る」「発信する」という経験を重ねることで、色々なことに興味・関心を持つようになり、やってみたいという自己発揮に繋がっていった。

・子どもの目線に合わせ、気持ちに寄り添うことで子どもの興味を知り、環境を構成していくことが出来た。常に職員間で連携を取りながら振り返りを行い、今何が必要かを考えていき共通理解の下、子ども達を見守ることの重要性を改めて感じた。

・保護者による読み聞かせ、絵本貸し出し等で「お父さんに、違うお話してもらいたいから」と言いながら毎日違う絵本を借りる子、「これ、お母さんが好きな本だよ」と嬉しそうに絵本を借りる子、「今日は、お母さんが来てくれる」と来園を心待ちにする子と、子どもの期待も大きくなっていき、子どもの情緒の安定につながったように感じる。保護者と共に同じ目線で子どもを見守ることの大切さを感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・一人ひとり育った環境や状況が違うことを考慮し、気づきや思いを丁寧に受け止めながら、子どもの視点に立ち対話を考えていく。

・職員間で共通理解を図り、子どもが思いを伝えあい遊ぶ楽しさが感じられるような環境構成を工夫して行く。

・遊びを通して気づいて学べるよう、ねらいを持った活動を展開していく。

〈主な参考文献〉

・武藤　隆　監修　2017 年告示版「幼稚園教育要領ハンドブック」

・横山　洋子　著　　ナツメ社　「子どもの育ちをサポート！生活とあそびから見る「１０の姿」

様式３「課題研究レポート」

友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わうための援助の工夫
―共同的な遊びや活動を通して―

嘉手納町立嘉手納幼稚園　教諭　吉本　結花

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼稚園教育要領」第二章「人間関係」において、「友達と様々な心を動かす出来事を共有し、互いの感じ方や考え方、行動の仕方などに関心を寄せ、それらが行き交うことを通して、それぞれの違いや多様性に気付いていくことが大切である。また、互いが認め合うことで、より生活が豊かになっていく体験を重ねることも必要である。」とある。また、それを通して、「遊びの中でお互いのよさなどが生かされ、一緒に活動する楽しさが増してくる。」とある。

園児は友達と関わる中で様々な出来事を通して色々な感情を味わい、その感情を共有しながら活動を進めていくことで、友達との関わりを深め、充実した幼稚園生活が送れるのではないかと考える。

本学級は４歳児、男児９名、女児１０名、計１９名が在籍しており、そのうち６名が新入園児である。仲の良い友達と好きな遊びを楽しんでいる子がほとんどだが、中には、友達と上手く関わることが出来ず、教師との関わりばかりを求めてきたり、１人で遊ぶことが主な園児もいる。

このような園児の実態を踏まえ、園児が自ら友達と関わり、充実した園生活を送れるようになるには、どのような援助や環境が必要なのかを研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①友達の良さに気付き、関心を持てるような援助の工夫

・友達に関心を持ち、関わりを持てるような声かけや援助をしたり、関わりを深めていけるように環境を工夫する。

②共同的な遊びや活動に繋がる環境作り

・友達と遊ぶ中で楽しさを感じたり、協力して活動を進めていくことの充実感を味わえるような遊びや活動を検討し、取り入れていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組

実践事例①「流しそうめんしよう！」

＜幼児の実態＞

・砂場で穴を掘ったり、型抜きをしたりして楽しんでいるがそれぞれが孤立していて共同の遊びが見られない。

＜教師の願い＞

遊びを通して、友達や教師に自分の思いを伝えながら一緒に遊ぶ楽しさを感じてほしい。

＜遊びの様子＞

一生懸命砂場にバケツで水を運んでいた園児。しばらくはバケツを使って水を穴に溜めていたが、以前に年長さんがトイを使って水を流していたのを思い出し、「あの流しそうめんやりたい！」という言葉が出たため、教師と一緒に道具を探し、トイを見つけた。最初は角度をつけずに置くだけで、水が流れなかったが、「どうやったら、水が流れるかな？」等と問いかけながら一緒に考えると、色々な道具を使ってトイの角度を変えてみたり、つなぎ目を工夫したりして上手く水を流すことが出来た。

＜教師の関わりと環境構成の工夫＞

・子ども達が遊びこめるように時間を確保し、子ども達のリクエストに応じて道具を提案したり、気持ちに共感しながら一緒に遊びを楽しめるようにしていく。

・友達の遊びに興味を持っているが、自分から入って行けない子には教師が仲立ちをし、遊びに入りやすい雰囲気を作っていく。

＜園児の変容＞

１人1人の遊びから、「楽しそうなことをやっているな～！」と同じ場で遊んでいる友達の姿に目を向けるようになり、刺激を受け、「仲間に入れて！」「どうやってやるの？」「もっと水を追加しよう！」等と友達とやり取りをしながら、一緒に遊ぶ姿が見られるようになった。また相談しながら色々な道具を探して使ったり、協力しながら遊びを進めていくことで関わりを深め、その後も別の遊びに誘い合ったりして一緒に遊ぶ姿が見られるようになったり、様々な遊びへと発展していく様子が見られた。

実践事例②「どろだんご作り」

＜幼児の実態＞

・どろんこに興味があるが、触ったり掘ったりするだけで遊びが進まず、すぐに飽きて他の遊びに移ってしまう為、友達同士の関わりにまで発展しない。

＜教師の願い＞

友達と一緒に遊びを進めていく中で、共通の目的を見出し、工夫したり相談しあったりしながら遊ぶ楽しさを味わってほしい。

＜遊びの様子＞

園庭のどろんこに興味を持った子ども達。どろだんごの絵本を読むと「やってみたい！」と声があがり、どろだんご作りが始まった。完成したどろだんごを「ピカピカに出来るんだって！やってみる？」と教師が提案すると、興味を持ち色々な道具を使って何日もかけて磨き、少しずつ光ってきたどろだんごを友達と見せ合ったり「どうやったらもっと光るかな？」「これ使って磨いてみて！」と教えあったり相談し合いながら、「どろだんごの続きしよう！」と毎日継続して遊びを進めていく姿が見られた。

丸くするの難しいね～

ほら！こうやったらきれいに出来るよ！

さらさらの砂をつけてみよう！

見て～光ってきた～

＜教師の関わりと環境構成の工夫＞

・子ども達の興味関心を引き出せるよう、絵本を読んだり、必要な道具を用意し遊びが発展するように援助していく。

・どろだんご作りをしている友達の様子を遠巻きに見ていて気になりつつも、いつも一人遊びをしている A 君に「〇〇が上手に作っていたよ。作り方聞いてみたら！」等と教師が声かけをして友達と関われるようなきっかけを作っていく。

＜園児の変容＞

どろだんご作りにあまり興味を持たなかった子に、色々な道具を提案したり、実践して見せながら誘ったりすることで興味を持ち始め、遊びに参加するようになった。また、興味はあるが見ているだけでなかなか遊びに入れなかった子が友達に作り方を教わったりして、関わりを深めながら楽しむ姿が見られるようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

・園児の興味関心に沿った遊びや道具等を提案したり、環境構成を工夫していくことで興味関心を引き出すことができ、友達同士道具の使い方を教えあったり、「次はこうやってみよう！」等遊びが発展していくきっかけ作りができた。

・子どもの遊びや活動の様子を帰りの会等で全体で共有し、「〇〇さんのどろだんごがピカピカになってきたよ！」等と紹介したりすることで、「自分もやってみたい！」と遊びの中で目的を持って楽しむことができたり、友達との関わりがなかなか持てなかった子も、だんだんと興味をもって遊びに参加するようになり、友達との関わりが少しずつ見られるようになってきた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・子ども達一人一人の性格やどのようなことに興味・関心を持つのか等、幼児理解を深めながら、子ども達が自己発揮できるような援助の仕方や環境構成を工夫していきたい。また、友達との関わりを深め、幼稚園生活を楽しめるような遊びや活動を検討し、日々の保育に取り入れていきたい。

・一人で遊ぶことが多かった子も徐々に友達との関わりが増えてきているが、引き続き寄り添いながら友達との関わりの中で楽しさや充実感を味わえるように援助をしていきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成３０年　『幼稚園教育要領解説』　フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

多様な園児がすごすことに配慮した援助や環境の工夫
―預かり保育においての援助や環境を通して―

久米島町立清水幼稚園　教諭　若杉　裕子

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼稚園ではおおむね４時間の教育課程に係る教育時間終了後に降園する園児と、その後夕方まで在園する園児とに分かれる。この特性上、多様な生活をしていることから、園児の在園時間の違いに配慮し、園児一人一人が安心していくことができるよう、環境を構成していくことが重要とされる。また、在園時間が長くなることに加えて、園児の「在園時間の違い」の視点から、園児の実態に応じて柔軟な「教育及び保育」に配慮する必要がある。

本園の実態として、５歳児１年保育の３４名が在籍し、その内３０名が預かり保育を利用している。この実態から、教育課程に係る教育時間とその前後の「教育及び保育」とのつながりを意識し、そこでの遊びを中心に相互の関わりを考慮しながら、「集中して遊びに取り組む場と家庭的な雰囲気の中でくつろぐ場の配慮」や「一日の生活の連続性への配慮」の視点を意識した援助の工夫や、多様な子どもの生活を見通した環境をどのように構成していくとよいかを考えたく本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　ゆったりとした中で集中して遊びを展開できる環境の工夫

幼児一人一人が個々のペースで好きな遊びをゆったりと十分に楽しめるような環境作りを行う。

②　午前の保育と午後の保育の思いをつなぐ援助の工夫

幼児の思いに寄り添いながら、気持ちを十分に受け止め、幼児にとって充実し、一人一人の実情に合った援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】「この毛糸でマフラーを作りたい！」

《預かり保育時間における幼児の遊びの様子》

・午前の教育時間に制作コーナーから、小さな毛糸の塊を見つけたＡ児とＢ児。預かり保育時にこの毛糸でマフラーを作りたいけど作り方がわからないから教えてほしいと教師に訴えた。そこで、牛乳パックと割り箸を用いて作った編み機でマフラーを作れることを提案し、マフラー作りが始まった。

《教師の願い》

・午後のゆったりとした時間を利用して教師が丁寧に関わりながら、無理なく一人で作ってみることに挑戦するよい体験になってほしい。

・作りたい気持ちを大切にしたい。また、今回をきっかけに他の幼児が興味をもつ機会になってほしい。

《教師の援助・環境構成》

・ゆったりした雰囲気の中で作り始めることができるよう心掛け、編み機作りから一緒に行う。

・必要に応じて環境を再構成し自分のペースでじっくりと進めていけるようにする。

・手順を覚えた子どもは、集中して作れるよう個別のスペースを確保し、取り組んでいる様子を見守り、悩みながら作る幼児の側に付き、気持ちに寄り添いながら援助をしていく。

・興味を持った幼児が取り組めるよう、必要な材料を準備する。
・翌日、教育時間の中で続きができるよう、担任に預かり保育時間に取り組んでいることを伝え、思いをつなぐ。

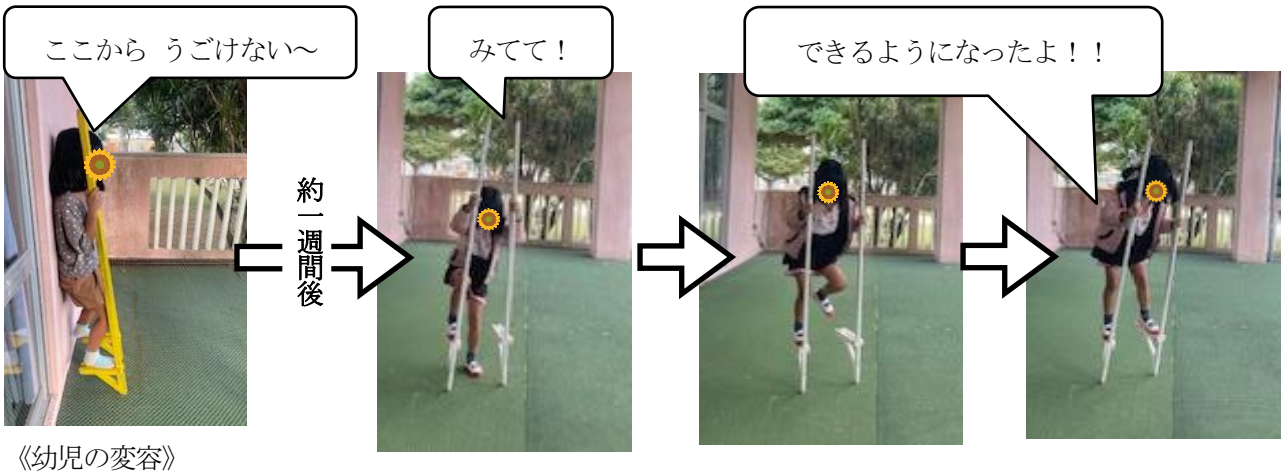
《幼児の変容》
・A児をきっかけに、マフラー作りに興味をもつ幼児が増えた。
・編み方がわからなくなると、はじめは教師に助けを求めていたが、次第に幼児同士で教え合う姿が見られるようになり、集中して取り組むため、落ち着いて遊ぶ姿が見られることが増えた。
・「続きは明日やる！」と自分自身で区切りをつけ、違う遊びを楽しんだり、反対に、クールダウンをするためにマフラーを編み始める幼児もいた。
《結果と考察》
・作りたい気持ちを実現できるよう、配慮しながら環境を構成していったことで、一人一人が自分のペースで楽しみながら取り組めるようになったのではないかと考えられる。
・完成すると、達成感に満ちた表情を見せ、次は家族のために、次はもっと長くしてみるなどとそれぞれが目的をもってマフラー作りに挑戦するようになった。

【実践事例２】「秘密の練習」

《預かり保育時間における幼児の遊びの様子》
・戸外遊びでは、バッタや蝶を捕まえて遊んだり、しっぽ取りをしたりと活発に遊ぶ姿が見られる。しかし、竹馬などの運動遊びは消極的な様子が見られ、友だちに誘われて運動遊びを始めても直ぐに諦めて他の遊びを楽しむ姿が見られる。

《教師の願い》
・繰り返し楽しむ中で、「やってみたらできた！」を経験してほしい。

《教師の援助・環境構成》
・「秘密の練習やってみる？」と子ども達に提案し、心を弾ませながら挑戦できるようにする。
・教師自身が手本となり、運動遊びに挑戦し、幼児と楽しさや悔しさなどの気持ちを共有する。
・一人一人の実態に合わせ、無理のないように配慮する。
・幼児の頑張りを認めたり、励ましたりしながら、できるようになったことを共感しながら自信や意欲につながるようにする。
・預かり保育での様子を担任に伝え、情報を共有する。



《幼児の変容》

・「秘密の練習やって先生をびっくりさせる！」と担任にできるようになった姿を見せるために、前向きに挑戦するようになった。

・幼児同士で、教え合ったり、励まし合う姿が見られるようになった。

・できるようになったことが増え、自信をもって様々なことに挑戦するようになり、教育時間にも挑戦するようになった。

《結果と考察》

・教師が幼児の意欲を引き出すような声掛けをしながらゆっくりと時間をかけ、丁寧にスモールステップで進めたことで、小さな「できた！」の積み重ねができたと考える。

・担任に見せることを目標にしたことで、驚いてもらうことを楽しみにしながら取り組み、披露できたことは、幼児にとって大きな自信につながったと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

担任と預かり保育での様子を共有したことで、教育時間と預かり保育時間が切り離されることなく、幼児にとって一日の生活を通して遊びがつながり、経験したことがつながり、育ちや体験したことをつないでいくことができた。

②　課題

「この時間だからこの環境」と時間の区切りで環境を決めてしまう事もあるため、時間ごとに見られる幼児の実態に合わせた環境、援助を考えていく必要があり、家庭に帰ってからの幼児の生活のリズムも考慮した遊びの展開や環境の構成が課題である。

③　実践を通した自身の気づき、考えなどを書いてください

一日を通して変化していく様々な時間の中で、どの時間においても幼児が遊びを十分に楽しみ、満足感を味わえるような環境を構成していくことの重要さを改めて感じた。自分のペースでやりたい遊びに取り組めるよう、環境を再構成したり、時間を調整しながら一人一人の興味や関心のある遊びを広げ、深めていくことで、今日から明日への遊びや活動の連続性ができていくのだと感じた。

Ⅴ　　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなどを書いてください

今後も、午前と午後をつなぐことを心掛け、時間的なゆとりをもって、柔軟に幼児に関わることを大切にし、幼児一人一人の育ちを保障できる環境構成の在り方を日々模索し、実践し、改善を繰り返し続けていきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成３０年３月　『幼稚園教育要領解説』　フレーベル館

内閣府　文部科学省　厚生労働省　令和４年３月　『幼保連携型認定こども園における　園児が心を寄せる環境の構成』
フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

自立心を育むための環境構成と援助の工夫
―友達との関わりを通して―

南風原町立津嘉山幼稚園　教諭　氏名　山城　理夏子

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼稚園は、幼児にとって遊びを通して人と関わる力の基礎を育む大切な役割を担っている。また、「人間関係」の領域に関係が深い「自立心」は、幼児教育の中核を占めるものだとされ、近年重視されている非認知的能力にあたる。幼稚園教育要領の１０の姿に示されている自立心の項目では、「遊びや生活の中で様々な事に挑戦し、失敗も繰り返す中で、自分でしなければならないことを自覚するようになる。教師や友達の力を借りたり励まされたりしながら、難しい事でも自分の力でやってみようとして、考えたり、工夫したりしながら諦めずにやり遂げる体験を通して達成感を味わい、自信を持って行動するようになる。」とある。

本学級の実態としては、５歳児（２年保育）計２８名（進級児９名）の園児が在籍している。入園当初から活発に伸び伸びと過ごし、好きな遊びの中で友達と関わり、一緒に遊びを楽しむ姿が見られる。様々な活動に興味を持って関わろうとする姿が見られる反面、苦手なことや難しいことはすぐに諦めてしまい、教師に助けを求める姿が見られる。

このような実態を踏まえ、身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、友達との関わりを通して自ら考えたり工夫したりしながら諦めずに取り組もうとする気持ちを育むための環境構成や援助の工夫を探っていきたいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①自分のよさや友達のよさを知り、互いに認め合いながら友達との関わりを楽しむための援助や環境構成の工夫

幼児一人一人のよさを認めたり、全体に知らせたりすることで、自己肯定感を高め自信や意欲に繋げていく。また、遊びの中で子供たち同士を繋げ、互いのよさに気づき、認め合いながら遊びを楽しめるようにする。

②幼児が最後まで取り組もうとする気持ちを育むための援助や環境構成の工夫

失敗しながらも繰り返し挑戦したり、達成感や満足感を味わったりする経験を通して、自分なりに試したり工夫したりしながら粘り強く取り組もうする気持ちを育めるような援助を工夫する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例】「色水研究所～試したり工夫したりしながら、いろんな色を作ろう～」

□ 幼児の姿　　○教師の読み取り　◎教師の願い　◇環境構成　☆教師の援助

【興味・関心】

身近な植物に興味を持ち花摘みをしたり観察したりする姿が見られた。その中で色水作りの経験のある子が「指でつぶすと色が出るよ」「ピンクの色水ができたよ」と色水作りを楽しむ姿が見られるようになった。

○身近な植物に興味が高まっているな
◎植物から色が出る面白さや不思議さを感じてほしいな

◇教師間で遊びの発展の見通しを話し合ったり用具を出すタイミングや言葉かけの仕方を確認した。
◇子供たちがすぐに遊べるよう、また、使いたい植物を選べるように、色が出る、匂いのある様々な植物をコーナーに置く。

【植物から色が出る面白さや不思議さを感じながら】

色水コーナーでは作りたい色の花を探したり、「棒の方がつぶしやすいよ」と木の枝で花をつぶしたりと自分なりに考え

○指以外でつぶす方法に気付いているな
◎すり棒やすり鉢、軽量カップ等の道具を出すことで自分なりに考えたり試したりしながら遊ぶ楽しさを感じてほしいな

ながら色水作りを楽しんでいる。
　道具を使って色水を楽しむようになると、指でつぶした時よりも色が出ること等に気付き、友達と気付いたことを伝え合う姿が見られた。また、友達同士で色水の作り方や花のある場所を教え合う姿も見られた。

◇必要な道具を取り出しやすいように道具ワゴンを用意する。
道具・・・すり鉢、すり棒、
透明カップ、
じょうご、
計量カップ等

○植物から色が出る面白さや不思議さを感じているな
○気付いたことを友達に伝えたり、遊び方を友達に教えたりする等、友達との関わりが見られるな
◎友達とのつながりがもっと広がってほしいな

☆子供たちの気付きや驚きに共感したり友達とのつながりが広がるような言葉かけや援助をしていく。
☆作り方が分からず困っている子には、「○○さんが素敵な色水を作っていたよ。どうやったのか聞いてみるといいよ」等の言葉をかける。

【繰り返し遊ぶ中で試したり工夫したり】

　出来た色水の美しさに感動したり、試したり工夫したりする姿や友達のしていることに気付き、自分の遊びに取り入れる姿が見られた。
　作りたい色を作るために、自分なりに考えたり、試したり、友達と教え合ったりしながら繰り返し楽しんでいた。

○分からないことを友達に聞いたり自分なりに考えたりして解決しようとしているな
○今まで経験したことを思い出し自分なりに考えたり試したりしながら色水を作っているな
◎試行錯誤しながら遊ぶ楽しさを感じてほしいな

☆以前の絵の具遊びの経験を思い出せるような言葉をかけ、どうしたらいいか考えたり、工夫したりできるように言葉をかける。

○できた色水の美しさに感動しているな
◎明るさ・角度によって、見え方や色のわずかな変化等にも気付いてほしいな
◎友達のしていることにも気付いてほしいな

☆子供たちのつぶやきをひろい、色のわずかな変化等に気付き、考えたり試したりしながら遊ぶ楽しさを感じられるようにする。
☆試したり工夫したりしている姿や友達と教え合ったりしている姿を認めたり周りの子へ知らせたりしていく。

○作りたい色の花を選び、色水を作っているな。紫やピンクの、色水を作っている子が多いな。
◎他にもたくさんの色があることに気付いてほしいな。

◇たくさんの色があることに気付き、関心がもてるように園舎内のホールに、絵の具で作った色水やカラーチャートを置く。
「○○色と○○色を混ぜたと思う」等、混ぜた色の予想を立てたり、どうしたら作れるのかを考えたりする姿が見られた。

◇試行錯誤を楽しめるよう、園庭の色水コーナーに『色水研究所』と名前をつける。また、様々な色があるこ

とに気付けるようテーブルにカラーチャートを置く。

【こだわってじっくり遊ぶ】

カラーチャートを見ながら作った色を比べたり、カラーチャートにある色を作るために友達と試行錯誤する姿が見られた。また、水の量によって色水の濃さが変化することに気付き、自分の作りたい色に近づくよう、水の量を調整する等こだわって色水を作る姿が見られた。

○どの植物を使えばどんな色ができるか気付いているな
○友達と一緒に考えを出したり友達に聞いたりしながら工夫して様々な色を作ることを楽しんでいるな
○じっくり遊び込む中で、数量への興味・関心が芽生えているな

☆一人一人の工夫や友達と教え合っている姿等を認めたり周りの子へ知らせたりしながら、友達と試行錯誤しながら遊ぶ楽しさが感じられるような言葉かけをする。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・自然に触れたり関わったりする中で、子供の豊かな思考力、表現力が育まれてきた。
・自分の作りたい色に近づくように、計量カップで水の量を調整する等、友達と一緒に試行錯誤を積み重ねることで、数量や文字への興味関心、感覚が芽生えてきた。
・教師が言葉を添えることで、子供は「どうなるんだろう」と観察したり考えたり工夫したり試したりと、さらに遊び込み探求心が芽生えていた。また、試行錯誤する経験を積み重ねる中で美しさや不思議さ等に気付いたり関心を寄せたりする等、さらに遊び込む姿に繋がった。
・遊びを持続し、発展させ、遊び込むことで、幼児は楽しさや達成感を味わい、次の活動に取り組んだ際にもやり遂げようとする姿が増えた。また、自分がしなければいけないことに気付き自分たちで道具を準備したり、最後まで片付けたりする姿が見られた。
・心動かされるような体験をした際に、したり見たり聞いたり感じたり考えたりしたこと等を自分なりに言葉にして伝え合う姿が見られた。

②　課題

・子供たちが互いの良さに気付いたり認め合ったりすることができるよう、話し合いの場の工夫
・やり遂げる経験や満足感や達成感を味わう経験を積み重ねることができる遊びの場の工夫とその環境構成の工夫

③　実践を通した自身の気づき、考えなど

・子供たちの興味・関心を捉え環境を構成することで、子供たちが主体的に環境に関わる姿が見られたことから、教師が願いや意図をもって環境を構成する大切さを改めて感じた。活動の主体は幼児であることを忘れず、幼児の活動が生まれやすく展開しやすいよう環境を構成、再構成していきたい。
・考えたり試したりしながらやり遂げた経験や友達から認められた経験が自信に繋がり、次の活動への意欲になると改めて感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・思いや考えを伝え合ったり認め合ったりしながら遊びを進めていけるよう、振り返りの場の持ち方（小集団や全体等）を工夫したり遊びの様子を可視化（ウェビングマップやドキュメンテーション）したりする等の子供同士を繋ぐための援助や環境構成をさらに工夫していく。
・やり遂げた経験を積み重ね、粘り強く取り組もうとする気持ちが育つよう、新しい事や少し難しい事にも取り組めるような環境を構成・再構成する。
・自立心を育むため、引き続き子供の発達や興味・関心、遊びの様子を捉え、職員間で連携し、環境構成や援助の手立てを探っていく。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成 30 年　「幼稚園教育解説」　フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

伸び伸びと遊び、自己発揮するための援助の工夫

―幼児理解の視点から環境構成や援助の在り方を探る―

南風原町立北丘幼稚園　教諭　前里　美沙

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼稚園教育要領解説』の第１章第１節「幼稚園教育の基本」を踏まえ、教師は「幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。」とされている。

本学級の幼児の実態としては、５歳児（２年保育）、男児１０名、女児１４名、計２４名が在籍し、全員集団生活の経験がある。子ども達は園内外の環境に積極的に関わって忍者森や固定遊具などで遊びを楽しむ姿が見られる。その反面、興味・関心はあるが遊びがなかなか継続しない、不安から慎重になり伸び伸びと遊べていない姿なども見られる。伸び伸びと遊ぶことで自己発揮をし、様々な体験から学びに繋がることを踏まえ、子ども達が伸び伸びと自分のやりたいことに向かって取り組めるよう、幼児理解を深め、環境構成や援助について研究を進めたいと思い、本研究テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　幼児が主体的に遊びや活動に取り組むための環境構成の工夫

(1) 日々の保育や振り返りから幼児の遊びを読み取り、遊びや生活に応じて幼児がやってみたいと思える環境構成を行う。

２　幼児が自己発揮していけるための教師の援助

(1) 一人一人の幼児に寄り添い、応答的に関わりながら信頼関係を築いていく。

(2) 発達や興味・関心を捉え、幼児理解を深めていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例「ケーキ屋さん」

《幼児の実態》

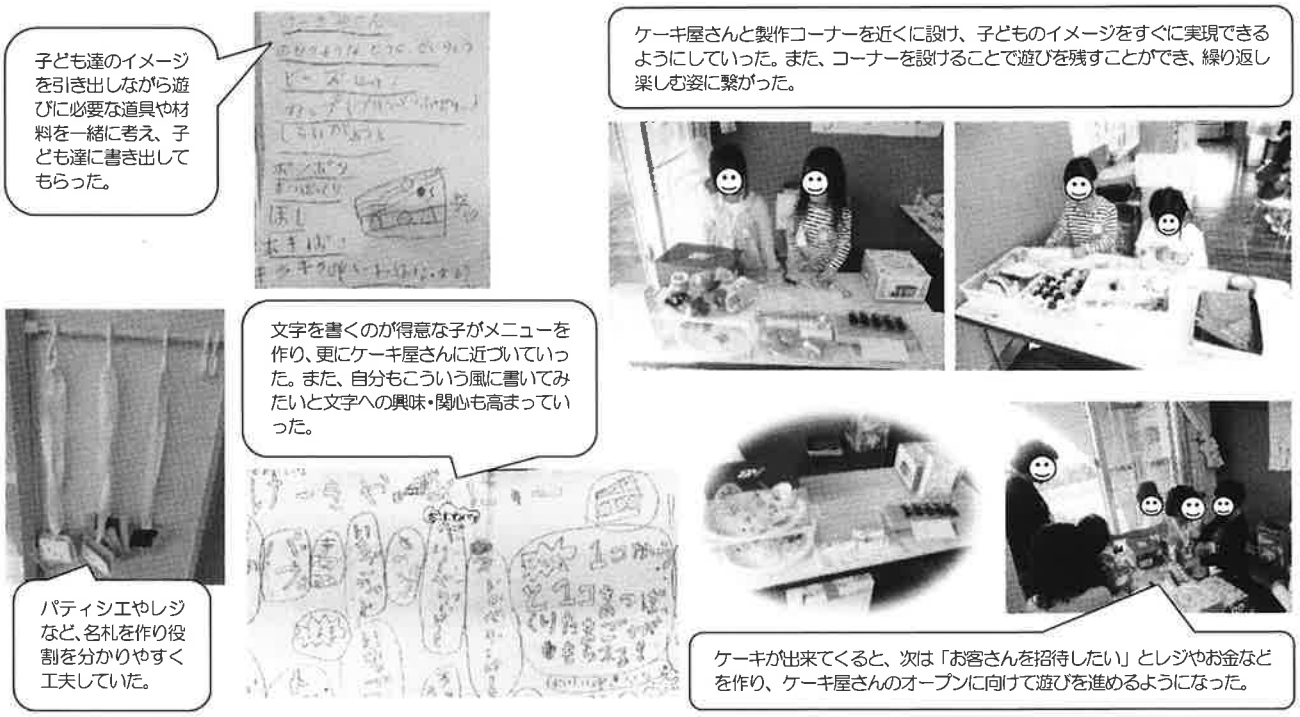
・友達と一緒にお化け屋敷ごっこやお家ごっこなど、イメージを共有しながらごっこ遊びを楽しんでいるが、なかには思いや考えを伝えるのが苦手な子や自分の思いばかりを通そうとしてしまう子がいる。
・遊びに必要な物を作り、ごっこ遊びに取り入れて楽しんでいるがその日限りでなかなか継続しないことがある。
・自然物を使ったケーキ作りから、戸外でのケーキ屋さんが始まり「お部屋でも続きをやりたい」と室内でのケーキ屋さんが始まった。

《教師の願い》

・好きな遊びを通して、自己発揮してほしい。
・自分の思いや考えを伝えられるようになってほしい。
・友達の良さに気づいたり、認め合ったりしながら、一緒に遊びを進める楽しさを感じてほしい。

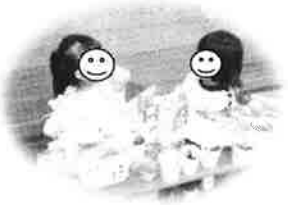
《教師の関わりと援助》
・子ども達の姿や声などから興味・関心を捉え、やりたい！を実現できるよう応答的に関わりながら援助していく。
・子ども達との対話を通して遊びに必要な物や場を一緒に整えていく。
・思いや考えに共感しながら一人一人を受け止め、自己発揮ができるよう関わっていく。
・教師も一緒に遊びに加わり、必要に応じて言葉を補ったり、思いや考えを整理したりして、友達と一緒に遊ぶ楽しさが感じられるようにしていく。
・遊びの振り返りを通して、イメージを共有したり、遊びの発展に繋げたりしていく。
・友達と一緒に遊ぶ中で、友達の良さに気づいたり、認め合ったりできるよう言葉を掛けていく。

《園児の変容》
・遊びの中で「〇ケーキを作ろう」「ケーキ屋さんこうだったよね」など、同じ目的に向かって、イメージを共有し、思いや考えを伝え合いながら遊びを進める姿が見られる。また、友達のアイディアや意見を受け入れ「いいね！」と共感しながら楽しんでいる。
・必要な物を自分達で製作し、ごっこ遊びに取り入れて楽しんでいる。
・コーナーができたことで、繰り返し楽しみ継続して遊ぶことが増えた。
・自分の思いや考えが相手に伝わる嬉しさを経験することで、友達や教師に積極的に関わる姿が見られるようになった。また、相手の思いに気づき、良さを知ることで友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう姿が見られるようになった。



《結果と考察》
・子ども達の「やりたい！」を実現できるように関わってきたことで「こういう風にしたい」とイメージをもち、思いや考えを伝えることに繋がった。
・遊びに必要な物や場を一緒に考え整えていくことで、「次はこうしよう」「こうしたらいいんじゃない？」など、アイディアが次々に浮かび、環境の再構成を繰り返していくことで遊びが継続し深まっていった。
・自分の思いや考えを伝え合う中でトラブルになることもあったが、教師が見守ったり必要に応じて仲介し、様々な感情体験をしてきたことで、友達同士で話し合って解決しようとする姿が見られるようになった。
・遊びの中での役割分担を通して、「〇〇さんは何が得意だよね」「〇〇さん上手だから作ってもらおう」など、友達の良さに気づき認め合うことで、友達との関わりが深まった。また、友達に良さを認めてもらうことで自信に繋がり自己発揮する姿が増え、幼稚園へ登園することや友達と関わることへの期待や嬉しさが更に高まったと思う。

・振り返りを通して、遊びを共有することで「次は○○ごっこしたい」「自分達は○○しよう」など、他の子への刺激となり遊びへの意欲が高まり、自分達で思いや考えを伝えながら遊びを進めることに繋がったと思う。



振り返りを通して、遊びを共有していくことで、他の子も「やってみたい！」と自分のやりたい遊びを見つけ、友達とイメージを共有しながらジュース屋さんやレストラン、射的屋さんなど、様々なごっこ遊びが展開されるようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・日々の保育や振り返りから幼児の遊びを読み取り、幼児のやってみたい！を実現できるよう援助や環境構成を行うことで、伸び伸びと遊ぶ姿に繋がった。
・思いや考えを肯定的に受け止めながら、一人一人の幼児に寄り添い、応答的に関わっていくことで自己発揮に繋がった。
・一人一人の発達や興味・関心を捉え、幼児理解を深めていくことで、個々に合った援助を行うことができた。

②課題

・保育の振り返りや反省を工夫し、更に幼児理解を深めながら援助や環境構成を行っていきたい。
・子どものつぶやきをしっかりと聞き、遊びや友達との関わりを読み取っていく。
・教育課程やねらいなどを理解し、この経験を通して何を学んでほしいのか、どういう風に育ってほしいかなど、教師の意図をしっかりと持ち、幼児の主体性とのバランスを大切にしながら援助していく。

③実践を通した自身の気づき、考えなど

・実践を通して、教師の役割の大切さを改めて感じた。子ども達が伸び伸びと遊び、自己発揮するためには、教師との信頼関係が大切で、その土台がないと主体的な活動や友達との関わりも難しいのだと感じた。４月から一人一人に寄り添い肯定的・応答的に関わることを意識してきたことで、子ども達は安心して園生活を過ごすようになり、思いや考えを伝えながら自己発揮する姿に繋がっている。
・幼児の主体性と教師の意図のバランスの大切さを感じ、どちらかが一方的になってしまうと幼児期の大切な経験に繋がらないことを改めて学んだ。今後もバランスを大切にしながら、幼児が伸び伸びと遊び自己発揮できるよう援助していきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・幼稚園教育要領解説や参考文献、研修など理論研究を深めていく。
・今後も一人一人に丁寧に関わり幼児理解を深め、環境や援助のあり方を探っていく。
・保育の振り返りや反省の仕方を工夫し、日々の保育に活かしていく。
・職員との連携を図りながら、様々な保育観に触れ、専門性を高めていく。

〈主な参考文献〉

文部科学省　2018年　『幼稚園教育要領解説』　フレーベル館
汐見稔幸　2020年　『ゆるゆる学ぶ保育の質と指針・要領』　臨床育児・保育研究会
横山洋子　2016年　『発達にあわせた保育の環境づくりアイディアBOOK』　ナツメ社

様式３「課題研究レポート」

幼児教育と小学校教育との円滑な接続について

―「幼児教育と小学校教育の架け橋期特別委員会」における議論等を踏まえて―

宮古島市（立）　狩俣幼稚園　教諭　氏名　川田　美希

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼稚園教育要領第３節５小学校との接続にあたっての留意事項では『（１）幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基盤を培うようにする．（２）幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校生活が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育小学校教育との円滑な接続を図るように努めるものとする。』と示され、接続が一層進むよう記載内容の充実が図られている。

しかし、本園の実態として小学校と同じ校舎内に保育室がありながらも、幼小接続に関しては、スタートカリキュラムやアプローチカリキュラムの協働作成には至らなかったことや、幼稚園教諭と１年生担任教諭のみの連携になってしまっているため、幼小接続の重要性についての共通理解が十分に図ることができなかったことが課題だと感じている。

そこで本研究では、架け橋期特別委員会における議論等を踏まえた幼小接続に向けた体制づくり、２年間を通した架け橋期カリキュラムの作成を通して、お互いの保育・教育について理解を図ることで幼稚園教育と小学校教育の接続が円滑になるのではないかと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１．１０の姿を捉えた保育の充実

幼児の興味や関心を捉え、遊びが展開・発展するように保育教諭が意図や見通しをもって環境構成や援助を行う。

２．架け橋期カリキュラムの作成

本市のフェーズの実態を把握、共通の視点を明確化し、連続・一貫性を踏まえたカリキュラムを作成する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

１．保育の充実（４・５歳児）

＜園の実態＞

・小学校の校舎内に保育室があるため、幼小連携がとりやすい。小学生との朝の挨拶を交わしたり、休み時間に一緒に遊んだりするなど日頃から関わりが多く、お兄さんお姉さんに見守られながら安心して園生活を過ごせる環境にある。また 4 歳児 2 名、5 歳児 4 名クラスの異年齢保育で園生活を過ごしている。

＜幼児の実態＞

・好きな遊びを見つけ取り組む姿があるが、なかなか遊びが続かず他の遊びを繰り返している。

＜教師の願い＞

・遊びを発展させるために、自分の考えを伝えたり友だちの考えを聞いたりする。

・気の合う友だちと一緒に遊びを楽しむ中で、友だちの良さを認め、互いに考えを出し合いながら、一緒に遊びを作り出そうとする。

＜保育の実践＞

幼児の姿	◎環境構成　◇教師の援助 捉えられる１０の姿
５月３１日 友達や環境にも少しずつ慣れ、安心して自分の好きな遊びを見つけていく中で、廃材コ―ナーにあるアイスのカップを見つけると、アイスに見立てた工作を作り、隣にあるままごとコーナーでアイスやさんを楽しんでいた。 	◎遊びの中で必要な道具を作り活用していけるように隣にままごとコーナーを設置する。 **健康な心と体** アイスやさんに必要なものを作ったり、準備したりする。 ◇教師も一緒になって遊びを楽しむことで、様々なことに興味が持てるようにしたり、友達との関わりが持てるよう仲介役になったりする。
６月５日 戸外あそびが始まると満開に咲いていたあさがおに園児が気づき、「先生！あさがおがたくさん咲いているよ！色水つくろう！」と嬉しそうに伝えにきた。発見した園児とあさがおを使って、色水あそびを楽しんでいると、興味をもった他の園児も集まり、様々な色の色水が完成した。 	**自然との関わり・生命尊重** あさがおの変化などに気付き、身近な植物に関心を持つ。 ◇出来上がった色水を並べて色の違いに気付けるようにする。
６月５日 色水あそびの後、色とりどりに並んでいる色水を見て、「ジュースみたい」のつぶやきから色水と先週作ったアイスを使ってお店やさんが始まった。 	◎前回作ったアイスクリームが活用できるように、いつでも取り出せる場所に保管する。 言葉による伝え合い 状況に応じて、気付いた事を相手に伝え、伝わる喜びを感じる。
６月７日 前日に作った色水で一人の園児が再びジュース屋さんを始めたが、悲しそうな表情で教諭に話しかけてきた。 S 児「先生・・お客さんがこない」 教諭「なんでこないのかな～？」 S 児「・・・わからない」 教諭「友達にも聞いてみる？」 A 児「なんでこないか知ってるよ」 S 児「なんで？」 A 児「ジュースが見えないからだよ。紙を別の所にはってみたら？」	◇遊びの中から問題が起きた時に、どうすればよいのか問いかけ自分達で解決できるように援助した。 ◇解決策がでてこない様子だったため、友達の意見も聞いてみるよう促して、幼児同士の関わりを広げていく。 自立心 先生や友達に頼りながら、なぜ上手くいかないことを考えたり、工夫したりする。

楽器をならしてみるのは？

やった、大成功！どんどん集まってきたよ

たのしそうだな・・・

◇自分のアイディアを出したくなった幼児が、増えてきたので、幼児同士の関わりを見守る。

思考力の芽生え
物の性質や特徴を生かして、遊びの中で役立てる。

ところが・・・
ライバル店オープン!!!

楽しそうなジュース屋さんを見ていた幼児が、隣にもお店やさんを出店！！すると、最初に始めた園児のところには、またまたお客さんが減り、S児が「もう嫌だ！」と怒ってしまった。

◇幼児の失敗も成功も肯定的に受け止め、「もう一度一緒に考えてみう」と励ましながら幼児の思いが実現できるよう援助する。

怒ってしまったS児を気にかけたH児。
H児「みんなのお店にしたら？」
教師「それってどんなお店？」
H児「旅行に行ったとき、みんなが座れるイスと机があったよ！だから、イスと机を準備すればみんな座れるよ！」

H児のアドバイスで机とイスを準備した。
大型つみきの向きを変えて工夫しながら、机が完成した。
みんなで楽しめるお店になった。他にも大盛りラーメンを完食するとシールがもらえたり、必要なお金を作ったり、やり取りも広がり、みんなで楽しんでいた。

◇幼児のイメージを他の幼児にも共有できるよう問いかける。

道徳性・規範意識の芽生え
友達の気持ちに共感したり、より楽しく遊べるように提案したりする。

文字などへの関心・感覚
遊びの中で看板やお金など必要感をもって文字・数字に親しむ。

協同性
実現したいお店のイメージを共有したり、お互いが納得できる代案を考えたりする。

お金が必要だ！

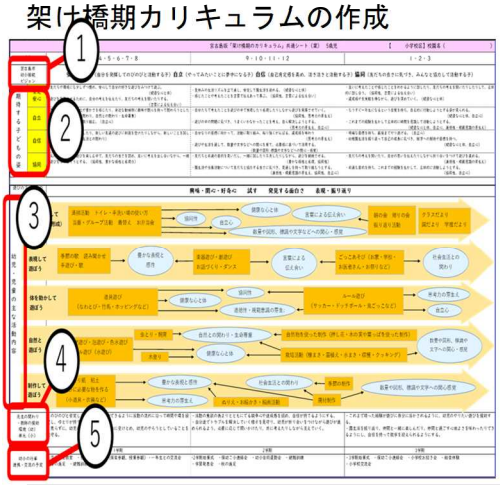
いくらですか？

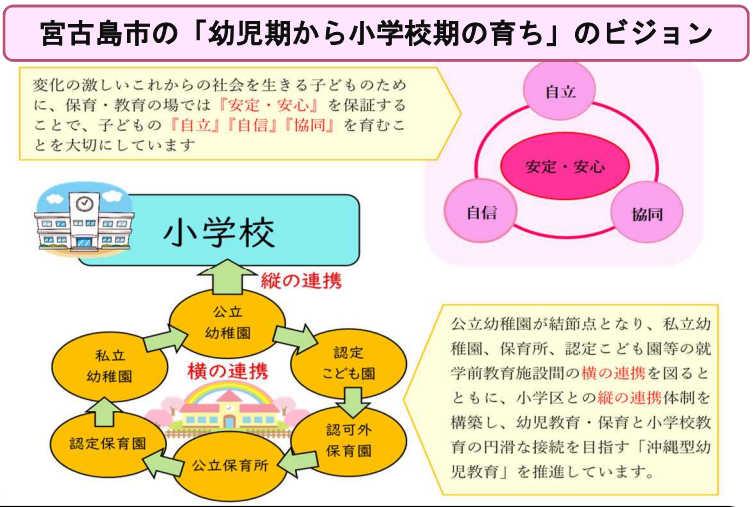
「５」ってどうやってかくんだっけ？

＜考察＞

- 最初は、売り買いだけのごっこ遊びが、日々の経験を重ねていくなかでいろんなアイディアが生まれ、遊びが豊かになっていった。
- 今の経験を生かした一人一人のアイディアを出し合ったことで、自分達で楽しさを見出し、遊び込む姿の中に、発見の喜びが育まれたと考える。
- 遊びの中で、発見したこと、考えたこと、感じたことなどを友達と伝え合うことで相手のよさに気付いたり、協同して活動したりする楽しさを味わうことができたと考える。

２　架け橋期カリキュラムの作成





① 期待する子ども像として宮古島市の幼小接続ビジョンを位置づけた。
② 宮古島市の接続ビジョンを幼小連携で目指す子どもの姿と位置づけた。
③ 幼児・児童の主な活動内容
- 主な子どもの活動を４つに分類した。１年担任のアンケートから、生活習慣についての声があったので、主な活動の中に園生活についても位置づけた。
- 学期に分けて期待する子どもの姿を記載。小学校につなぐので、共通言語である「幼児期の終わりまでに育って欲しい１０の姿」を入れた。
- 子どもの遊びは継続することもあるので、どの時期にもあてはまるように区切る線を外した。
- 小学校の学びに繋なげていくため、矢印で表している。
- 活動で育つ主な「１０の姿」を位置づけた。

④ 先生との関わり、教師の援助を位置づけた。
⑤ 小学校との連携・交流会の活動予定を位置づけた。

Ⅳ　実践の振り返り

１　成果

（１）　近隣園の先生方や本市プロジェクト協議会と連携を図り、合同で架け橋期のカリキュラムを作成することができた。

（２）　カリキュラムを作成する中で、円滑な幼小接続のためには日々の保育の充実が重要であると再確認し、保育の充実を図ることができた。

２　課題

（１）　園・小学校との協働によるカリキュラムの見直し及び作成

（２）　子どもの実態に沿って、主体的で・対話的な深い学びの充実が図られるようなさらなる保育の実践

３　実践を通した気づき、考え

この研究を通して、幼児理解や環境構成、保育者の関わりを見直すことで、幼児の探求が高まり主体的に遊ぶ姿に繋がることがわかった。今後も幼児の実態に沿った環境構成や援助の工夫に努め、よりよい保育の充実を図っていきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

1. 教師同士の連携強化を図り、お互いの教育・保育についての相互理解を深めていく。
2. 幼児理解を深め、幼児が遊び込めるような環境構成と教師の援助のあり方を見直していく。

＜主な参考文献＞

文部科学省　2018「幼稚園教育要領」「小学校教育要領」
2022「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」
「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料（初版）」
「学び舎生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について
～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」

様式３「課題研究レポート」

友だち同士互いを認め合い、思いを伝え合って遊ぶ楽しさを味わうための援助の工夫
―日々の生活や遊びを通して―

竹富町立はてるま幼稚園　教諭　根本　ユリ

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼稚園教育要領解説「人間関係」の領域において、「友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう」とあり、幼児は、集団の生活や遊びの中で、互いに影響し合い成長していくとされる。

学級の実態として、5歳児（2年保育）、男児３名、女児５名、計８名のクラスで、保育所からの進級園児に６名に、男児２名が転入してきて加わり８名となった。女子が多いクラスなので、女子同士友達に対して強い口調で伝えることも多く、トラブルが多い。友だち同士、良さを見つけ合えるような雰囲気作りや遊びを通して、自分の気持ちも伝えながら、相手の気持ちを考えられるような援助の工夫をしたいと思い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①学級の集まりなどを通して、友達の考えや感じたことなどを共有する時間を設ける。また、自分の気持ちを相手に伝えたり、相手の気持ちを考えられるような雰囲気作りや活動の工夫。

②クラス活動を通して、興味があることを友だち同士共有したり、協力したりする楽しさを味わえるような環境構成や援助の工夫。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】学級の集まりを通して、お互いの気持ちを考えてみよう。

（園児の姿）

年長は女子が多いのもあり、遊びを自分たちで広げていくこともできるが、言い合いなどのトラブルも多い。また、自分の気持ちを相手に言えない子もいるので、言える子の意見が通ってしまうことが多い。

（教師の願い）

遊びも広がっているのだから、お互いを認め合って楽しく過ごしてほしい。自分の気持ちだけではなく、相手の気持ちを考えられるようになってほしい。

＜教師の援助・環境構成＞

・帰りの集まりの時にその日の振り返りをしていると、自分の意見を言えない子（A児）に対して強く意見を通そうとしている（B児）の姿が見られ、集まりを中断し話し合いを設けた。

・A児が泣き出したので落ち着いてから話を聞くと、時間はかかったが自分の気持ちを少しずつ話すことができた。

・A児の話だけではなくB児の意見も聞き、クラスのみんなの意見も聞いた。色々な意見が出て話し合い、A児もB児も自分の気持ちを伝えながら話し合いを終わることができた。

（考察）

・まだトラブルになることはあるが、意見があまり言えなかったA児も、嫌なことは嫌だと伝えられる

ようになってきて、他の子も、自分の意見を無理矢理通すことは少なくなり、相手の意見も少しずつ聞けるようになってきた。

【実践事例２】花壇作りまでの道のり

（園児の姿）

外で活発に遊ぶ子が多く、生き物に興味がある子もたくさんいる中で、散歩に行った際に、ちょうちょの幼虫を見つけ、幼稚園で育て、ちょうちょになるまで見届けた経験から、ちょうちょに興味を持つ子が増えた。

（教師の願い）

幼虫を見つけて観察するのはいいが、毎日の掃除やエサの交換を、教師が声をかけないとできないので、自分たちで声をかけ合いながらしてほしい。

＜教師の援助・環境構成＞

・まず興味のある子だけ集まり、幼虫が何の幼虫で、何を食べるか図鑑で調べ、幼稚園のまわりのどこにその植物があるか探しに行った。

・毎日のえさをどうするかみんなで話し合い、お当番にはせず、遊びの時間に取りに行くことに決まった。

・散歩に行くと、花がたくさん咲いている場所でちょうちょがたくさんいるのを発見し、幼稚園にもちょうちょがくる花を植えたいとの声が出た。さっそく食草を植え育て始める。また、幼稚園の園庭に花壇がないのでみんなで作ろうと話し、ＰＴＡの方に協力してもらい、最後はみんなでペンキで絵を描いて仕上げた。

・見つけたり育てたちょうちょは逃がしているので、幼虫からちょうちょになるまでの写真を撮って残し、壁にどんどん貼っていくことで、みんなで見ながら会話も広がっている。

（考察）

・幼虫を見つけたことで、みんなで話し合ったり考える機会も増えた。

・エサをどうするか話し合ったときに、偶然Ａ児とＢ児の通園路にあることがわかり、Ａ児もＢ児と相談し、自分から登園するときに取ってくるとみんなに伝えていた。あまり自分から積極的に行動しないＡ児が自分からみんなに提案をするきっかけになった。

・幼虫を発見したことで、子どもたちの気持ちを聞きながら色々な形にでき、毎日の楽しみも増え、協力して花壇も作り上げることができた。

Ⅳ　実践の振り返り

（１）成果

①毎日の振り返りで、その日のことをみんなで考え話し合っていくことで、学級の連帯感も生まれ、意見をなかなか言えない子も、言える環境を作ることで、少しずつ相手に伝えることができるようになってきた。また、自分の意見を通そうとする子も、少しずつ相手の話が聞けるようになってきた。

②幼虫を見つけたことから始まり、どうしたらちょうちょが幼稚園に来てくれるか、エサをどうするか、など自分たちで考えながら花壇を作るまでにつながった。花が咲き始めたので、生き物だけではなく、色水遊びなど、これからの遊びにもどんどん広がっていくことができる。

（２）課題

①まだまだ友だち同士のトラブルはあり、教師が間に入らないと解決しないこともあるので、自分の意見を伝えるだけではなく、相手の気持ちを少しずつ考えられるような雰囲気作りや環境を引き続きみんなで考えていきたい。

③実践を通して、何か特別なことがなくても、日々の中で遊びを見つけ、その遊びがどんどん子どもたちの発想で広がっていくことがあると実感し、子どもたちの声を聞き流さず、一つひとつ大切にしながら保育をしていきたいと改めて感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

（１）今年度もまだまだ行事はたくさんあるので、学級の一人ひとりが意見を言い合えるような雰囲気作りができるように、一つひとつ丁寧に進めていきたい。

（２）見つけたちょうちょの写真を貼っていく中で、植物の写真も貼っていきたいとの意見が出たので、子どもたちの「やりたい」の気持ちを大切にしながら過ごしていきたい。

〈主な参考文献〉「波照間の自然：奥土晴夫」　「幼稚園教育要領解説：文部科学省」

様式３「課題研究レポート」

幼児期の運動遊びを充実していくための援助の工夫

―多様な動きが経験できるような取組みを通して―

竹富町立うえはら幼稚園　教諭　真謝　紀香

Ⅰ　テーマ設定の理由

体を動かす機会の減少は、「意欲や気力の低下、対人関係などコミュニケーションをうまく構築できないなど、子どもの心の発達にも重大な影響を及ぼすことにもなりかねない」と危惧されている。

本学級の幼児の実態としては、４歳児（２年保育）男児５名、女児３名、計８名在籍し、初めての幼稚園生活ではあるが、環境に早く慣れみんな仲が良く、おままごとや制作遊びを好んで楽しんでいる姿がある。

戸外遊びでも、固定遊具の滑り台やブランコ、砂場遊びなどのびのびと活発に過ごしている。しかし、ほとんどの男児においては、走る姿がぎこちなかったり、よくつまずいたり、ちょっとしたことで転んでバランスを崩す子、ぶつかって転倒する子など、体の発達がゆっくりなのか、この時期の体の発達や運動面などの育ちがどの程度ないといけないのか、とても気になっている。

幼稚園教育要領に「幼児は様々な環境に取り組んで活動を展開することを通して、様々な場面に対応できるしなやかな心の働きや体の動きを体得していく。さらに、自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体を育てることは、困難な状況において、その幼児なりにやってみようとする気持ちを持つことにつながる」とあります。

それらのことを踏まえ、一人一人の運動能力を高めることや危険を回避する力を身に付けていくためにはどうしたらよいかテーマを設定し研究をすることにした。

Ⅱ　研究に対する具体的な手立て

①　多様な動きを経験しながら運動の楽しさを感じる遊びの工夫について

子どもたちが、何度も繰り返し遊べるよう環境構成の工夫をし、また子どもたちの好きな音楽をかけ盛り上げたりして、楽しく取り組めるような援助を行う。

②　子どもたちが積極的に取り組むことができる体を動かす遊びについて

個々が自由に遊ぶ姿をよく観察しながら、教師も一緒になって運動遊びを楽しむ。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例１】

《幼児の実態》

園庭では、ブランコや滑り台、固定遊具などで遊んだり、好きな友達同士で鬼ごっこやかくれんぼをしてのびのびと遊ぶ姿がみられる。しかし反面、「外は暑いからいやだ～」「お部屋の中で遊びたい」とブロックあそびや、製作あそびと室内遊びが多くなりがちで、インドア男子～と、女の子たちから呼ばれることもある。また、その中には走り方がぎこちなくつまづいてこけたり、頭からよく転ぶなど動きが不器用な姿も見られている。そこで多様な動きを経験させるために、室内に巧技台を設置し、サーキット風に楽しめるよう環境の設定を図った。

《教師の願い》

・いろいろな運動遊びを経験し、体を思い切り動かす気持ちよさを体験してほしい。

・いろいろな場面で、積極的に自ら進んで体を動かそうとする気持ちへと育ってほしい。

初めは低めに平均台の棒を設置し、さらにはしごや滑り台をつなげた。子ども達は新たな環境に喜んで遊びだし、運動が苦手なA児も、友達が挑戦する姿を見て平均台をゆっくりと歩き出したり、はしごを登ったり楽しむ様子が見られた。２回目、３回目まで教師が土台を作っていたが、そのうち子ども達の方から「先生、ここかえていい？」と平均台の棒の高さを変え傾斜をつけだした。

サーキットのおもしろさを感じるようになり色々と変化を楽しむ中で室内での遊びが「せまい」という声が出てきた。「園庭はもっと広いよ！」との教師の声かけで子ども達は大喜び！さっそく外へ巧技台を運び出した。「こう重ねたら階段になったよ」「ダンボールも使いたいな」などの声も出たりと、自分のやりたい形をするのに「ちょっと手伝って」「こんな形にしようよ！」など気の合う友達同士でサーキットの形を広げ、どんどん遊びこむ姿が見られた。

【実践事例２】

《幼児の実態》
- 自分でできるがしようとしない姿も多く見られ、気持ちが向くまでに時間がかかったり、気持ちを向けるための教師の援助が必要だったりする。
- 戸外をあまり好まず、運動遊びをしたがらない。
- 固定遊具で、遊ぼうとしない。
- 集団は、保育者と一緒であれば参加しようとする。
- 人の多さ(騒々しい雰囲気)や初めてのことが苦手なため離れて様子をうかがっている。

《教師の願い》
- 体を動かしながら、友達と楽しさを共有してほしい。

運動会に向けての取り組みの中で、かけっこをしにグランドに行くことになった。集団での取り組みになると外に出るのも嫌がるB児だが、おんぶをすると落ち着いてみんなの近くにいることができる。しかし、かけっこになると「今日は暑いからしません」と理由をつけ走ることを嫌がるため、時には教師がおんぶをして一緒に参加をした。三度目の練習の日、文字や数字をすぐに覚え言葉を巧みに発するB児がいつものように、「今日の気温は32度なので走りません」と言ってきた。そこで、B児に「○○先生が、ゴールで怪我をしているから、助けに行ってくれる？」と伝え救急箱を渡した。するとあれほど嫌がっていたB児がすかさず救急箱を手に取りゴールに向かって走って行った。その後も、一緒にいると安心できるお友達に「いくよー」と誘ってもらえることでスムーズに参加する姿や、表現遊びでは見ているだけのB児に「水やりしてみる？」とじょうろを教師が渡したことで、お芋さんになっていたお友達に水やり役ができた。綱引き遊びでは審判役をし、自ら運動遊びに関わる姿がみられた。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・多様な動きを経験させる環境の工夫を行うことで運動遊びの経験が広がり、色々な遊びに挑戦したり進んで体を動かして遊ぶことが増えた。

・遊びが広がる中で、話し合ったり協力したりして同じ目的に向かって作り上げていく様子から、協同性の育ちが見られた。

・集団参加が苦手なB児が教師のことばかけで、かけっこに自ら参加することができた。また、気の合う友達のことばかけにより、スムーズにみんなの輪の中に入り遊びを共有していく姿が見られ成長へと繋がった。

②　課題

・安全面での配慮として、一番に教師の意識が必要なこと、また子ども達には、巧技台の使い方や片付けの仕方などを通し、道徳性や安全性の意識につながっていけるようにしたい。

・暑さが苦手で外に出たがらないB児が、自ら外に出て遊べるような環境の工夫。

・個々の支援が必要な子への対応をしていくために、もっと行動を観察し、手立ての仕方を学んでいく必要がある。

③　実践を通しての気づき・考え

・三つの資質・能力である「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」をもとに子どもの育ちを捉え、学ぶことができた。

・教師のほんのちょっとした声かけが、刺激となって子どもの遊びに変化を与えている。そして、その環境が遊びを広げ深めていく一つの手立てになることを知った。また、子どもには子どもの思いがあり、教師の勝手な解釈で変えさせようとするとやる気をなくすので、様子を見守り、子どもの思いを理解したうえで対処していく事が大切だと痛感した。

Ⅴ　今後の実践に向けて

様々な環境構成の工夫を行いながら、子ども達の遊びの姿を観てきた。その中で感じたことは、運動面での向上を図ることは表面の育ち（多様な動きを経験）からみえる、できるようになった姿だけではなく、経験することによって「楽しい」「できた」「もっとやりたい」というような充実した気持ちや、個々によって育ちが違うこと。内面的な育ちを知る事がとても大切であると分かりました。

今後はさらに色々な運動を総合的に取り上げ、望ましい運動機能の発達を経験させていきたい。そのために、子どもの興味・関心のある遊びを観察し、その遊びを大切に見守り、子どもの思いやしようとしていることを理解し、子ども側に立って考えていきたい。また、具体的な指導のねらいを明確にしていきながら、その指導の反省や方法を見直し改善していきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成30年　幼稚園教育要領解説　株式会社フレーベル館

基本的生活習慣を身に付けるための環境構成と援助の工夫
―「やってみよう」という自立への気持ちを育む―

国頭村立くにがみこども園　保育教諭　須田　由希乃

Ⅰ　テーマ設定の理由

２歳児（６年保育）　男児７名、女児４名、計１１名が在籍。２歳児クラスは２クラスということもあり、クラス編成はあるものの、落ち着いて新学期がスタート。担任が変わり緊張していたのか４月は落ち着いた雰囲気だったが、５月に入り信頼関係が築かれてくると、今まで簡単な身の回りのことを自分で出来ていたことも甘えからなのか「やって―」と伝える姿が見られる。また、遊びに夢中になったり保育教諭の声掛けに対し違うことをやったりと自分の姿(気持ち)も見せるようになる。

甘えとジブンデの自我の芽生えで揺れる姿の中で、２歳児の主な保育は基本的生活習慣の確立する第一歩となる大事な時期で、幼児期に培った力がこれからの園生活や社会生活に繋がっていく。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説書』の第２章第３節「健康」の領域に「生活に必要な基本的な生活習慣については、一人一人の状態に応じ、落ち着いた雰囲気の中で行なうようにし、園児が自分でしようとする気持ちを尊重すること。また、基本的な生活習慣の形成に当たっては、家庭での生活経験に配慮し、家庭との適切な連携の下で行うようにすること」と記されている。様々な経験や保育教諭や友達との関わりの中で「できた」という達成感や充実感から自信をつけ、自分でやってみようとする姿が育つにはどのような環境構成や援助が必要かを研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　生活習慣の理解と把握

・子ども達、一人一人の月齢を踏まえた発達段階の理解と把握

２　園児が自分でやりたいを行えるような援助と工夫

・自ら進んで「できた」ことに達成感を味わえるよう一人一人との関わりを大切に個に応じた援助

Ⅲ　研究計画

月	研　究　計　画
4 月～5 月	幼児の実態把握・課題の検討
6 月	研究テーマの検討(テーマ設定の理由、研究内容、研究計画の検討を含む)
6 月～11 月	理論研究・保育実践
8 月	中間検討
12 月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取組(実践)

１　実践事例（１）　「自分でできたよ」

【幼児の姿】

・食後の着替え終えた洋服を洗濯袋に入れる様に促すと、袋を持ってきて「先生　やって」と言う姿がある。

・ままごと遊び、人形遊びではバックに玩具を入れて歩き楽しんでいる姿がある。

【保育教諭の願い】

・自分でできた喜び、できる自信を味わって欲しい。

・進級に向け、自分で身の回りのことができるようになって欲しい。

【保育教諭の援助・環境の構成】
・幼児の姿で上げた二つの“入れる”の違いは何なのかを考えた時
① 対象物の大きさ
② 対象物の重さが違うことに着目。
それまでタオルに洋服をくるんで渡していたが、１つ１つ入れる様に促すと入れる姿が見られた。その為、洗濯物袋入れの箱を作り、朝のお支度で準備を保護者に依頼。着替えコーナーに洗濯物袋を設置し、その場で脱いだら袋に入れられるようにした。

【幼児の変容】
・保育教諭の近くですぐに出来ることで、安心感もあり、まずは自分でやってみようとする意欲的な姿が見られる。
・洋服をたたむ。裏返しになっていたら直す事にも興味を示し、やってみようとする子もいた。

【結果と考察】
・洋服を脱ぎ捨てて、トイレに行く事がなく入れ間違いもほとんどなかった。
・広いスペース確保にもつながり、着脱の援助や洋服のたたみ方を伝えるなど、一人一人とゆっくりその子のペースに合わせて関わることが出来た。
・環境を作り直すことで、園児や保育教諭の安心感やゆとりが生まれることを感じ、環境構成の大切さを感じた。

【牛乳パックで作った洗濯物入れ】

【朝のお支度置き場】

【着替えスペースに洗濯物入れをセットした様子】

２　実践事例（２）　「お着替えできるかな」

【幼児の姿】
・新入児だが集団生活の経験あり。
・気になる物があると、そこに目がいってしまい着替えなど終わるのに時間がかかる。
・その都度、声掛けや側に付き対応するが、側に付くことで、保育教諭の介助がないとやらない面がでてきた。
・生活において、物や遊ぶ友達、座る場所等にこだわりを見せることがある。

【保育教諭の願い】
・着替え終わってから遊びに移って欲しい。
・自分でやってみる意欲を持って欲しい。

【保育教諭の援助・環境構成】
・プリンセスやネコになりきって遊ぶ姿があり、保育教諭も役になりきり関わり楽しく着脱を促していき着替えに意識が向くように関わる。
・夏のある日、同じ洋服を持っている他児に「このプリンセス〇〇の」と奪い取り着ようとするトラブル確かに本児も持っていて、着ている時に鏡の前でポーズを取ったりしてお気に入りの様子がある。

本児が今、お気に入りの洋服があるのではと思い保護者にその様子や家での様子を聞くと保護者も心当たりがある様子。本児のお気に入りの洋服準備をお願いする。次の日、いくつか洋服を準備している。着替え時間、自分の洋服を見るなり「わー　私のプリンセス！」と嬉しそうにし自ら着替えに

取り組んでいる。その日の様子を保護者に伝え共有、感謝を伝える。このことで、保護者も本児にあわせて着替えを準備している。

【幼児の変容】
・着替えの時間を楽しみにし、すぐに着替えコーナーに来るようになる。
・着脱も意欲的に取り組むようになる。

【結果と考察】
・保護者がいくつかの洋服を準備していることで、気分が違うと自らカバンを取り出し、洋服を選び着替えを喜ぶ姿が見られる。
・着替え終わって遊び始めると次の歯磨き時間に来なくなるので、歯磨きも一連の流れに入れることで遊びの時間も十分に確保できるようになった。

Ⅴ　実践のまとめと考察

1　実践のまとめと考察

・生活習慣を身に付けるためには園だけの取り組みだけでなく、家庭との連携が大切だと感じた。
・子どもの行動の背景を読み取る力が必要だと思った。
・子どもの発達に個人差もあるので、一人一人の実態に合わせて環境構成の工夫や丁寧な援助が必要だと感じた。

2　今後の課題

・クラス単位で行ったため、3 歳児に向けて、学年同士のすり合わせが必要な点がある。
・個々に合わせた声掛けや援助を引き続き行いながら、職員間で共通理解や連続性ある教育及び保育が出来るようにしたい。
・これからも成功体験や様々な経験が味わえる環境構成の工夫や幼児一人一人の発達や特性についてさらに理解を深められるように取り組んでいきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

食への興味・関心を育み楽しく食べるための工夫

―食べものを大切にする感謝の心を通して―

国頭村立くにがみこども園　保育教諭　金城　沙織

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」第３章第３節には「園児が自らの感覚や体験を通して、自然の恵みとしての食材や食の循環・環境への意識、調理する人への感謝の気持ちが育つように、園児と調理員等との関わりや、調理室など食に関する環境に配慮すること。」と記されている。

本クラスは、男児１１人、女児１０名、計２１人の４歳児クラスである。食事面では、偏食の子が多く食材を見た目で食べようとしない子、苦手な食べ物をこっそりティッシュに包み捨てる子の姿も見られた。フォークやおはしが上手く持てない子、姿勢の悪い子など多くの課題点を感じた。このような実態を踏まえ、食への興味関心が持てる環境作り、地域の人との関わりを通しての食へ関わる環境、食べることのできる食材が増える嬉しさ、楽しさを感じて欲しいと思い、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　食材への興味・関心を育むための援助と工夫

・栽培・収穫を通して植物の生長を喜び、それを調理して食べる喜びを感じる。

・地域の方の畑で収穫体験を行い収穫の楽しさ、収穫した野菜のおいしさに気付く。収穫したものを家庭へ持ち帰り、家庭でも食に対する興味関心が持てるようにする。

２　毎日の食事が楽しみになるような働きかけ

・八百屋さんから園に納品される野菜や果物を園児が受け取り(納品体験)、調理場まで食材を届ける体験を通して次の日の食事を楽しみにできるようにする。また調理員との交流を通して調理してくれる人への感謝の気持ちを持てるようにする。

・栄養士さんから姿勢の正しさについてのお話をしてもらい、正しい姿勢、食事時のマナーについて意識できるようにする。

Ⅲ　研究計画

月	研　究　計　画
４月～５月	幼児の実態把握・課題の検討
６月	研究テーマの検討
７月～１１月	理論研究・保育実践 (中間検討)
１２月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取り組み(実践)

１　実践事例(１)「食べ物への興味・関心を育むために。」

《幼児の実態》

・食材や食べ物を見た目で判断し、手が進まない子がいる。

・苦手なものを床下に落とし踏んだり、ティッシュペーパーにつつみ、こっそりゴミ箱に捨てる子が

いる。
・「〇〇おいしくない」「好きじゃない」とお友達の声に便乗して食べなくなる子がいる。

《保育教諭の願い》
・苦手な食べ物、初めて食材にも興味をもって挑戦できるようになってほしい。
・食べ物を粗末にせず、大切にする気持ちを持ってほしい。

《保育教諭との関り・援助》
・畑やプランターなどに子ども達が植え付けできるように環境を整える。種まき、苗の植え付け方を知らせる。
・グループごとにマークをつけ生長を観察しながら、世話をする楽しみを感じられるようにする。
・自分で収穫した野菜を調理場に届け、その日で調理してもらい、給食やおやつで提供してもらいみんなで食べる楽しさを感じた。
・地域の方の畑にお邪魔させていただき、季節の野菜の収穫体験を行った。野菜がどのように育ち、どうやって収穫するのかを実際に体験し、収穫した食材は家庭にも持ち帰り、自分で収穫した物を家族の方に調理してもらい食べてもらう機会ができた。

水やりの様子
大きくな～れ

とれたジャガイモを、お家でお料理してもらいました！

とれたてコーンはあまくておいしい～

《子どもの変容》
・菜園活動に興味を示し、野菜が生長する姿を見て、保育教諭に声掛けされ水やりしていた子どもが積極的に水やりをして「また伸びた」「おおきくなってる」と生長に期待する声があった。
・「とうもろこしってこんなやってなっているんだ」と野菜によって収穫する違いに気付く声、楽しさを感じることができた。
・実際に収穫した食材をその日で調理してもらい、お友達同士「〇〇も食べてみて」「おいしい」「甘い」「食べられなかったのに、食べられた」の声や、自分で収穫した嬉しさから、食べてみようという意欲に繋がり美味しさに気付くきっかけとなった。

《結果・考察》

・自分で育てた食材を、収穫する体験を行うことで自分が食べている食材はこんな風に育つという気づき、食材の感触、匂い等五感を使い食の大切さ、食べる楽しさを感じるきっかけとなった。体験することで食べてみようという意欲に繋がることが改めて実感することができた。

実践事例（２）「毎日の食事が楽しみになるように。」

《幼児の実態》

・「今日のご飯なに？」と毎日の食事を楽しみにしている子の声があるがメニューによっては、「えー嫌だ」と食事の時間が嫌と感じてしまう子もいた。

《保育教諭の願い》

・食事の時間が楽しいと感じてほしい。
・食事が提供されることへの感謝の気持ちを持ってほしい。
・食べるときの姿勢やマナーを意識してほしい。

《保育教諭との関わり・援助》

・園に納品される野菜や果物を実際に八百屋さんとの納品体験を行い、調理場の先生へ届ける体験を行った。
・栄養士さんによる食べる時の姿勢の大切さ、食材には栄養がありどのようなパワーに代わるのか等のお話をしてもらうための場を設けた。
・調理場から配膳するお手伝いを行い「いただきます」「ごちそうさま」と挨拶を交わし、食事を作ってくれる方の存在を知らせる機会を作った。

納品体験！
次の日の食材を受け取ります。

調理場のせんせい
何してるのかな～

赤・青・緑
野菜のもつパワーについて学んだよ！

八百屋さんに
お散歩にきました！

《子どもの変容》

・野菜の名前、種類を覚えることができ、散歩で八百屋へ行った際にはレタスとキャベツの区別がつくようになっていた。
・食べ物を粗末にする姿を見て「調理場の先生が頑張って作っているんだよ」「今日もおいしいご飯ありがとう」と子ども達が会話の中で感謝の気持ちが芽生えてきた。
・納品体験を通して「こんなにいっぱい使うんだ」食材を見て「明日のご飯は〇〇かな？」と想像し、調理場の先生との交流、会話する楽しみを感じることができた。
・食事をする際には、「肘つけたらダメだよね」等、姿勢を正そうと意識する様子が見られた。

《結果や考察》

・食事ができるまでには大勢の方が関わりできていることを知り、感謝の気持ちを持って残さず食べようという気持ちに繋がった。
・自分が納品した食材が料理される嬉しさから食べる意欲に繋がり、食事の楽しさを感じるようになった。
・食事を食べる際に繰り返し声掛けすることで、マナーがあることを知り日頃の食事に対する意識が変わってきたことを実感することができた。

Ⅴ　実践のまとめと考察

・食事を楽しく食べるきっかけとなってほしいという気持ちから、食育に関わる取り組みを日々の教育及び保育に取り入れたことで、子どもたちの食への興味を感じられ、感謝の気持ちを育むきっかけとなれたのかなと実感することができた。食事の時間が嫌だと感じてしまはないような工夫をすることの大切さ、生活する中で欠かせない食事が楽しみに変わるきっかけとして食材に触れる、五感を使う体験や地域の方と食へ関わる交流を通して「食べることができた」「おいしい」と食を身近に感じることができるように関わりを大切にしていきたいと改めて感じた。子ども達への声掛け一つ一つが意欲に繋がり、気づきを与える、自分自身も気づかされるきっかけとなることができた。十分に体を動かし遊び、空腹感を感じ、食べ物を食べた時の満足感を心と体で味わう。さらに、気持ちが安定し、活力が湧き、積極的にいろいろな活動をするようになる。このような体験を繰り返すことは、園児が食べることの楽しさや喜びに気づき、充実した生活をつくりだす上で重要であると改めて実感することができた。

〈主な参考分献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年　『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』フレーベル館

様式３ 【課題研究報告書】

自信を持って、自分の思いや考えを言葉で表現するための援助

―リズム遊びを通して―

大宜味村立おおぎみこども園　教諭　野村　利加子

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章「言葉」の領域において「言葉は、身近な人との関わりを通して次第に獲得されるものである。（中略）この思いが高まると、園児はその気持ちを思わず口に出したり、親しい相手に気持ちを伝え、共感してもらうと喜びを感じるようになる。このような経験を通じて、自分の気持ちを表現する楽しさを味わうことが大切である。」と記されている。また、「人間関係」の領域には、「園児は自分に愛情をもって温かい目で見守ってくれる保育教諭等との生活では、安心して自分らしい動きができ、様々な物事への興味や関心が広がり、自分から何かやろうとする意欲や活力も高まる。」とある。このことから、保育教諭は園児の内面の気持ちに寄り添い安心できる環境をつくり、自分の思いや意思を伝えながら信頼関係の構築をすることが大事だと考える。

本学級の実態として３歳児（６年保育）計１９名が在籍し、ほとんどの子が特定の友達と仲良く遊んでいる一方で思っていることを上手く伝えられず何をして遊んだらいいのか、誰と遊んだらいいのかわからずに部屋を歩き回ったり、自分の思いを通そうとして手が出てトラブルになったりすることがよくある。また、友達の輪の中に入れずに保育教諭のエプロンをつかんでいる子や、保育教諭との関わりを求め「できない」と泣いて訴える子がいる。

このような園児の実態を踏まえ、園児が好きな活動で自分らしい動きをする中、環境構成の工夫により言葉を獲得していき、自信を持って自分の思いや考えを表現していけるのではないかと考え本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 言葉で伝えられるようになるための保育教諭の援助の工夫
- リズム遊びを毎日取り入れる環境構成に努め、その場に合った言葉の使い方や友達への関わり方の援助を工夫する

② リズム遊びを通して、友達との触れ合いや言葉のやり取りを意図的に経験させるような援助に努める
- 人数を増やしたり減らしたりする事で仲間に入る・受け入れられる経験が出来るように工夫する

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）【実践事例１】

「リズム遊びを通して『一緒にやろう』『いいよ』と仲間に入る経験をするための活動」

≪　幼児の実態　≫
- 友達と遊びたい気持ちはたくさんある子ども達ですが、自信のなさや自分の思いを上手く伝えられずにすれ違い際に叩いたりあっかんべーとちょっかいをだしたりしてトラブルになっている。
- 戦いごっこが徐々に本気になって、喧嘩に発展している。
- リズム遊びや手遊びが好きで、前に出て発表して楽しんでいる子がいる。
- 「一緒に遊ぼう」「いいよ～」と言葉のやり取りが上手く、優しい子がいる。一方で友達が近くにくると「○○はあっちいって」と仲間外れにする子もいる。

≪　保育教諭の願い　≫

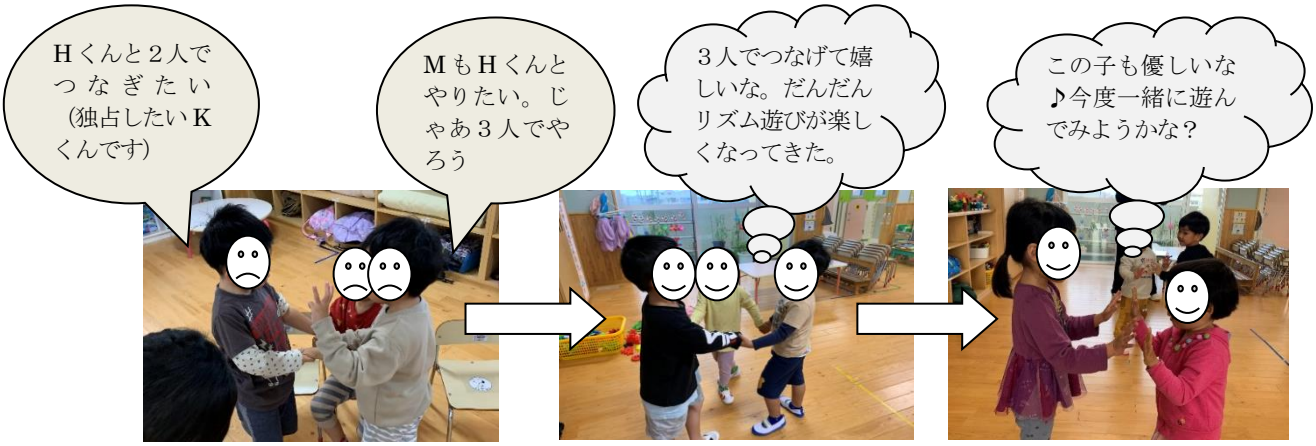
・遊びたい気持ちを言葉で伝えて欲しい。
・リズム遊びを通して友達のよさに気付いてほしい。
・クラス全体の仲間意識が強まってほしい。

≪　保育展開・幼児理解　≫

・友達と遊び始めると意見の違いや月齢差から、トラブルに発展する事が多かった。また、戦いごっこをしかけたりすれ違い際にタッチをしたりする姿があった。他の園児はその行動をよく思わず、「〇〇が叩いた」等の保育教諭への訴えがあり困っていた。行動を観察していくうちにこれは「一緒に遊びたい」気持ちの表れであることに気付き、言葉にするのが難しいためにこういう行動をしていると理解しリズム遊びを取り入れた。

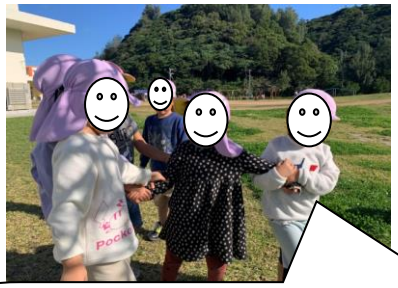
一人遊びが多くこだわりが強いＭくん。友達と一緒にやりたい気持ちもありますが、恥ずかしい気持ちもあってなかなか言い出せない様子です。

好きな子と手を繋げずに嫌と顔を伏せているＨさん。隣のＡさんは生活の中で困ったときに黙ってしまうので、この時もなんて声をかけたらいいかな？と考える時間をつくるためにすぐに援助するのではなく様子を見守っていました。



≪　幼児の変容　≫

・リズム遊びを始めた時はやらないと言ったり、逃げたりする子もいた。その時は無理強いせずに子どもの気持ちに寄り添う事で徐々に参加する事ができるようになっていった。
・毎日繰り返し曲を流し触れさせた事で、「今日は誰とやる～？」とみんなに声をかけると慣れてきたのか、恥ずかしさがなくなったのか笑顔で友達と一緒に楽しむ事が出来るようになった。
・ふれあい遊びを通して友達との関わり方を知ったり、友達は優しい、楽しいと知ったりすることが出来た。
・一人遊びの多かったＭさんですが、自由遊びでも積極的に友達と関わる姿が多く見られるようになった。



あぶくたったの集団遊びをしている様子です。
「鬼さん、おいで～」と手を引いています。
自分も鬼になりたいと訴えていた M さんですがじゃんけんをして順番を決めて、鬼になるまで我慢する事ができました。

自分のスペースを持ちながらも友達の近くで遊びを楽しんでいます。次は友達と一緒に一つのものを作るようになると嬉しいです。

【　結果と考察　】

・なんでも援助するのではなく意図的に考える場面をつくることで仲間に入れて欲しい時、困っている時にどうすればいいのかを自分で考える力が育つ。その為、遊びの中で自分の気持ちを伝えたり友達同士で遊んだりする姿も多く見られるようになったと考える。
・「一緒にやろう」と誘い「いいよ」と仲間に入る・受け入れられる経験をすることで自分の自信に繋がり、保育教諭以外の人のよさを知り友達の輪が広がるきっかけになったと考える。
・リズム遊びを通して友達と関わることで、友達と一緒に体を動かしたり、触れ合ったりする事で心の満足につながり健康な心と体、情緒の安定へと繋がったと感じた。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果
・始めはやりたくないと逃げていた子も「先生とやりたい」との発言から、担任も一緒にリズム遊びを楽しむ事を繰り返していくうちに勇気を出して「３人でやろう」と好きな友達に思いを伝える姿が見られ、子どもの成長を間近に感じる事ができた。
・一人遊びが多かった子や保育教諭のエプロンを引っ張って不安がっていた子も「○○さんとやってみる？」と保育教諭の提案に応じながら様々な友達と活動を繰り返していくうちに、友達のよさに気付き、「いっしょにあそぼう」と自ら友達の輪に入って遊ぶ姿も見られるようになっていった。

② 課題
・できない子や困っている子に目を向けすぎてしまい、できている子や楽しんでいる子を褒め伸ばしていこうとする援助に課題が残る。

③ 実践を通した自身の気づき、考え
・この実践を通して保育教諭に見守られながら安心して活動をする中、仲間に入れてもらう経験が園児の自信につながり、自分の思いや考えを表現していけるような園児の育ちになることが分かった。

Ⅴ　今後の実践に向けて

園児が更に自己発揮し、一人一人のよさを伸ばしていくためにも幼児理解に努める。自信がついたことで自分の思いや考えを表現し、友達とも自ら関わり遊ぶ姿が見られ嬉しく思う。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の第２章人間関係（４）の領域に「物事をやり遂げる喜びは園児一人でも生じるが、皆でやったということやその成果を共に喜ぶことの方が園児にとってより大きな意味をもつ。」とあるので、今後は皆で一つの目標を目指す活動を取り入れ、少人数のグループではなくクラス全体での育ちを願い、援助していきたい。

〈主な参考文献〉

○内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館

遊びの連続性を大切にした教育・保育の工夫

～１号認定の園児に焦点を当てて～

今帰仁村立認定こども園みらい　保育教諭　大村　絹恵

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の第１章第３節２「幼保連携型認定こども園として特に配慮すべき事項」に、「園児の一日の生活の連続性及びリズムの多様性に配慮するとともに、保護者の生活形態を反映した園児の在園時間の長短、入園時期や登園日数の違いを踏まえ、園児一人一人の状況に応じ、教育及び保育の内容やその展開について工夫をすること」とある。

本学級の実態としては、5歳児クラス（男児１３名、女児７名）計20名が在籍し、内、１号認定（（注）参照）の園児が５名いる。クラスのほとんどが進級児であるが、新しい友だちとも仲良くなり、それぞれが好きな遊びを楽しみ、のびのびと過ごしている。しかし、午後１時３０分に降園する１号認定の園児との遊びの繋がりが途切れてしまうことがあり、翌日の遊びに向かう姿に温度差を感じることがある。これから、夏休み等の長期休暇もあることから、遊びの連続性や友だちとのつながりに課題があると考えた。一人一人を大切にする観点から、全員が楽しめて満足できる連続性のある教育・保育を目指したい。また、私自身、１号認定を受け持つことが初めてであり、１号認定と２号認定の園児の遊びの連続性や繋がり、友だちとの関係を深めるための環境構成や援助の工夫について研究したいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　家庭との連携

⑴ １号認定の園児の家庭での状況を把握する。

⑵ 園での園児の様子や活動の様子、友だちとの関わりなどを伝える。

２　１号認定園児一人一人の一日の活動の把握、及び友だちとの活動がつながるような援助の工夫

⑴ 園児が、明日の活動を楽しみに思えるような言葉かけや援助を行う。

⑵ 長期的な休暇、園児が過ごす家庭等の生活の場が異なることを踏まえて、それぞれの多様な経験を出し合いながら、友だちとの遊びに取り入れられるようにする。

Ⅲ　研究計画

月	研　究　計　画
４～5月	園児の実態把握・課題検討
６月	研究テーマの検討（テーマ設定理由、研究内容、研究計画の検討含む）
7～11月	理論研究、保育実践
９月	中間検討
１２月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題実践に向けた取り組み（実践）

今回の研究テーマの対象となる５名の１号認定の状況を述べる。但し、この課題研究レポートでは、A 児と B 児を取り上げる。

・A 児（男児）・・3 歳児からの入園。
・B 児（女児）・・今年度、幼稚園からの転園。
・C 児（男児）・・3 歳児からの入園。
・D 児（男児）・・今年度からの入園、初めての園生活。
・E 児（女児）・・2 歳児に入園、2 号認定だったが母の退職に伴い９月より１号認定となる。

１　家庭との連携・・・A 児のケース

【幼児の実態】

A 児は、登園時に不安そうな姿が見られたが、新しい環境に少しずつ慣れ、仲の良い友だちと一緒にブロックやダンゴムシ探しなど好きな遊びを楽しんでいる。家庭で時間の余裕があるのか、登園時間がゆっくりで、家庭の都合で休むこともある。

【保育教諭の願い】

1 号認定ゆえ、園で過ごす時間は短いが、その中で一人一人が伸び伸びと園生活を送り、友だちと関わりながら楽しく遊んでほしい。また、保護者に園生活の様子を知ってもらい、共に園児の成長を認め合いながら喜び合いたい。

【教師の援助・環境構成】

1 号認定の園児達が、伸び伸びと過ごせるように周りの園児への言葉かけやそれぞれが好きな遊びができるよう教具などの環境構成に配慮した。その上で、まず、A 児の保護者に登降園時のクラスの様子を見てもらい、園児の様子や活動の様子、友だちとの関わりを伝えるようにした。また、室内で作った作品などを見せるようにした。それとともに、保護者の話に耳を傾け、気がかりなことなどがあるとその都度時間をとって話をするようにした。

５月には、保護者面談を行い、A 児の園の一日の流れや活動の様子を伝えたり、家庭での様子を伺ったりして、幼児理解に努めた。９月にも保育参観を行い、主に友だちとの遊びの様子など、園での遊びの様子や友だち関係などを見てもらった。

担任として、1 号認定の園児の遊びが連続するように、個々の遊びの内容をメモし、翌日、できるだけ継続できるように努めた。

【幼児・保護者の変容】

遊びの連続性を意識したおかげで、今日、明日の活動を楽しみにしている園児の姿がある。A 児が楽しんでいる姿を見ることで、保護者も喜んでいる。また、保護者が安心して送り出すことで、子どもも安心して登園するようになっている。さらに、登園時間（８：３０）に間に合わせて登園するようになった。一方で、1 号認定の保護者同士で、登降園時におしゃべりや情報交換をして、仲良くなっている。

※エピソード　～「お母さん、バイバイ！」～　５月、A 児（男児）

登園時、母親と挨拶を交わした時、表情が暗いなと感じて言葉をかける。すると母親から「A は、友だちと遊んでいますか？主人には、友だちに嫌なことされたと話をするのですが、私にはしないんです」話を聞いてみると、遊んでいる時に「やめて」と言ったが、友だちがやめなかったことが嫌だったとのこと。A 児はおとなしい子で、友だちとの関わりの中でうまく言葉にして言えないところはあるが、仲の良い友だちが増えてきていることや友だちとふざけてじゃれあうこともあり、お互いに「やめてよ」「〇〇もやったさ」と言い合っていることもあることを伝えると「そんなこともあるのですね」と驚いていた。友だちと関わる中でぶつかり合うこともあるが、お互いに相手の気持ちに気付き、わかりあっていく過程を今、経験していることを知って、涙を浮かべていた母親に笑顔が戻った。「私も気づかないこともあるので、何か気がかりなことがあれば、また、お話してください」と伝える。母親の様子を察して、心配そうに遠くから見ていた A 児が駆け寄ってきて、「お母さん、バイバイ！」とハイタッチ

をした。
その後、A 児の母親は降園時に他の保護者と会話したり、本園の子育て支援センターに A 児の妹を連れてきたりして、A 児の遊ぶ姿を見て嬉しそうな様子がみられる。

【結果と考察】
A 児の家庭の状況を把握することで、担任の幼児理解が深まった。また、園での友だちとの関わりなどについて、保護者へ伝えたことで、保護者も少し安心したようである。すなわち、園やクラスの様子を発信すること、保護者とコミュニケーションをとることを通して、家庭との連携をとったことで、園児が園生活に期待をもって生活することにつながったと考える。

２　１号認定園児一人一人の一日の活動の把握、及び友だちとの活動がつながるような援助の工夫・・・B 児のケース

【幼児の実態】
B 児（女児）は、今年度、本園へ入園してきた。明るい性格で、友だちと仲良く関わっている。自分が帰った後、「みんなで○○するんでしょう」と少し残念がる姿も見られる。リーダー的要素があり、一人一人に声をかけて遊びに誘う姿が見られる。人懐っこく、他児から好かれている。しかし、疲れた時は動こうとしないマイペースな面もある。

【保育教諭の願い】
友だちと遊びを伝え合いながら、お互いの遊びがより豊かになっていってほしい。

【教師の援助・環境構成】
午前中の教育時間に、ゲームやわらべうたあそびなどの集団あそびの時間を意識して設け、様々な友だちと遊ぶ機会をつくった。午後に始まった遊びは、1 号認定の子は関わっていないので、その遊びを楽しんでいる子や得意な子を「先生」にして、1 号認定の子に伝えてもらうように言葉かけを行った。また、夏休みの長期休暇前に、「夏のすごしかた」のしおりをつくり、クラス全体で夏の過ごし方を共通理解した。また、夏休み期間中に絵本貸出日や英会話教室への参加を呼びかけ、園に来る機会をつくった。2 学期が始まる時に持ってきてねと歯みがきカレンダーを用意した。そのカレンダーは「宿題ごっこだよ。どんな色でぬりたいかな？」「始業式の時に、見せ合いっこしようね」と 2 号認定の子にも配った。
次の日も遊びの続きができるように、「つづきをします」カードを置いたり、友だちと約束する姿を見守ったり、帰りの会で振り返りをすることで、明日の活動を楽しみに思えるような言葉かけをした。
毎月一回の誕生会は午前中に行っているが、誕生ケーキはおやつの時間（１５：００）に食べている。昨年までは、１号認定の子は午前中で帰っていたが、今年は、誕生月のときはそのまま残ったり、一旦帰ってからおやつの時間に来たりして、クラスのみんなとお祝いのケーキを食べるようにした。

【幼児の変容】
できるだけ多くの子と関わるよう配慮し、集団あそびを通して、友だちの関わりが広がっていった。その中でB 児も「続きは、明日しようね」と友だち同士で話をして、遊びを切り上げる姿がある。
1 号認定の子が帰るときに、「また、明日遊ぼうね」「明日は、○○しようね」など声を掛け合う姿や女の子は、「バイバイ。またね」と抱き合う姿も見られる。1 号認定の子も他の園児と同じようにクラスの一員として解け合ってきたように見える。

※エピソード　～「すごいね！こんなにできたんだ！」～　１０月、B 児（女児）
5 歳児クラスは、まんたぐみとじんべえぐみ（当クラス）の 2 クラスがある。おばけの絵本から刺激を受けて、まんたぐみでおばけめいろ（おばけやしき）づくりがブームとなっていた。「お客さんも呼びたいよね」「小さい子が怖がるかもしれないからキラキラめいろもつくろう」となり、じんべえぐみからも数名の子が仲間に入っていった。B 児も時々一緒に仲間に入り、穴を開けたり、カラーセロファンを貼ったりして、光が入って怖くないようなめいろづくりを友だちと楽しんで作っていた。並行して、

じんべえぐみでは「お店屋さんもしたい」と声があがり、お店屋さんの準備が始まった。B 児も「あー、忙しい！やきそばたくさんつくらなきゃ」と友だちを誘って、品物作りも楽しんでいた。帰りの会が始まる時間になると「もっと作りたかったけど、明日つくろうね」と友だちに声をかけていた。翌日、登園してキラキラめいろを見た B 児が「すごいね！こんなにできたんだ。かわいい！」と完成したキラキラめいろを見て、友だちに話しかけていた。お客さんが来る当日、B 児は「いらっしゃいませ」と年下のクラスの子に声をかけめいろを案内したり、お店屋さんで売り子をしたりと楽しむ姿があった。

【結果と考察】

集団あそびを意識して取り入れたことで、友だちの輪が広がり、関わりが深まった。5 時間の教育時間しか園にいない 1 号認定の子が知らない遊びが時々出てくることを考慮し、友だちとの伝え合いを通して、その遊びの面白さを共有し、深め合う機会を作った。そのおかげでお互いの遊びが広がっていった。また、短い時間であっても遊びや関わりを大切にすることで、仲間意識が芽生え、明日も一緒に遊びたいという思いが出てきて好ましい状況である。これからも、1 号認定だけでなく、クラスの園児一人一人をしっかりと見て、今必要としているのは何かを判断し、適切な環境構成と援助を工夫していきたい。

Ⅴ　実践のまとめと考察

1 号認定の園児に焦点を当てたことで、逆に、こども園での多様な子ども達をどう受け入れるかについて幅広く考えることができた。一人一人の集団生活の経験年数や在園年数、在園時間の違いがあり、1 号認定のように午前の園児もいれば、長時間在園している子もいる。2 号認定でも、保護者の勤務状況に応じて短時間保育の園児もいる。それが不利にならないよう、それぞれの生活の仕方やリズムを考慮しながら、一日の自然な生活の流れを作り出すこと、好きな遊びが連続できるよう配慮していきたい。どの園児も個性がある。教育・保育の時間の長短にかかわらず、それぞれの個性を伸ばし、友だちと関わりながら成長できるようにこれからも努めていきたい。

ダンゴムシのお家をつくったよ
（A児）

歯みがきカレンダー
（B４サイズで）

キラキラめいろへようこそ！
いらっしゃいませ～（B児）

（主な参考文献）

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年　『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』　フレーベル館
・武藤　隆　監修　２０１７年　『２０１７年告示板　幼保連携型認定こども園　教育・保育要領ハンドブック』　学研

(注)

○こども園の 1 号認定、2 号認定、3 号認定について

・1 号認定・・・子どもの年齢が 3 歳～5 歳で、保育を必要とせず、幼稚園として利用される保護者が対象。
　　基本的に教育時間のみ利用だが、延長保育や一時預かりを利用することもできる。
・2 号認定・・・子どもの年齢が 3 歳～5 歳で、保育を必要とし、保育施設として利用される保護者が対象。
・3 号認定・・・子どもの年齢が 0 歳～2 歳で、保育を必要とし、保育施設として利用される保護者が対象。

○本園の保育・教育時間

・開園時間・・７：３０から１８：３０　延長保育　１９：００まで
・教育時間・・８：３０から１３：３０までの５時間

自分を素直にのびのび発揮できる子どもの育成

～保護者支援を通して～

今帰仁村立認定こども園みらい　保育教諭　田中　美和

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年は国際化、情報化が進み多様な考えや価値観に触れる機会が多くなっている。子育てに関する情報や知識も多く入ってくるため、子育てのヒントを得ているように感じるが、理想と現実の差に子育ての悩みを感じている保護者の姿がある。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』第４章第２節２には「保護者が子どもの成長に気づき、子育ての喜びを感じられるように努めること」とある。子どもの成長には個人差があるのが普通であるが、それを十分理解できず焦っている保護者も見られる。

本学級は３歳児、男児８名、女児７名、計１５名が在籍している。全体的に、素直で明るく、体を動かして遊ぶのが好きである。どの家庭も愛情いっぱい子育てしているのが伺えるが、親の期待が大きく、それに応えようと無理している子どもの姿も見える。ＳＮＳや書物等などで得た知識を実践してみるがうまくいかない、兄姉の時とは違う、どう対応していいのかわからない等、子育ての悩みを連絡帳や面談時に伝えてくる保護者が多い。子育てに一生懸命の保護者に園での遊びや生活の様子、全国の事例等で得た知見を伝えることで、子育てのヒントを共有することができるのではないか。また、子どもの成長について保育教諭と保護者が話し合い、ありのままの我が子と向き合えたら、子育てを楽しめるのではないかと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　日常の様々な機会を活用した保護者支援について

⑴ 連絡帳や日々の会話や面談を通して、園での様子を伝えたり、保護者の思いや願いを受け止めたりしながら、子どもに対する共通理解を深めていけるようにする。

⑵ ICT を使って保育内容を発信したり、保育参観などを通して、園児の姿や集団生活の様子及び、遊びのねらいや意図を伝えることで、家庭での子育てのヒントになるようにしていく。

２　認定こども園の特性を生かした支援について

⑴ 職員間でのカンファレンスを通して、情報を共有しながら、一人一人の子ども理解を深め、子育てに悩んでいる保護者の援助につなげていく。

⑵ 気になる子どもも含めて、関係機関や専門機関と連携をとるとともに、研修等で幅広く学び、適切な援助ができるようにする。

Ⅲ　研究計画

月	研　究　計　画
４月・５月	園児の実態把握・課題検討
６月	研究テーマの検討(テーマ設定の理由・研究内容・研究計画の検討を含む)
７月～１１月	理論研究・保育実践・振り返り
９月	中間検討会
１２月	研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取組

【　実践事例　】　『ありのままでいいよ』　A児

《幼児の実態》
・自分の感じたことや経験したこと、見たことなどを自分の言葉で相手に伝えようとする。
・よく考えて話を聞いていて、自分の経験したことと結びつけて捉えることができる。
・繊細な面があり、用心深いところがある。
・承認欲求が強い。失敗することを恐れ、見通しが持てないことへは消極的である。
・自分の思いを伝える際、大人の顔色を伺いながら話すところがある。
・弟が生まれ、お姉ちゃんだから！という気持ちと、本当は自分も甘えたい気持ちなどを抱えている。

《保護者の実態》※「」は、おたより帳から引用
・「もう４歳になるので自立に向けて、自分のことは自分でさせるようにしています」（４月）と書くほど、母親は自立に期待感をもっている。
・母親は育児のことに多くの知識を持っている。困ったことはネットやSNSで調べ、実践したりして、子育てに一生懸命である。母親のA児への期待は大きい。
・父親は大らかで、A児の思いに耳を傾けている。A児の姿と母親の思いに板挟みになることもある。

＊保護者のねがい＊
・物怖じせず、いろんなことに、どんどん挑戦してほしい。
・自分の身の回りのことは、自分でできるようになってほしい。

＊保護者の子育ての悩み＊
・この年齢では○○のことは当然できると考えているが、それができていない。どこに原因があるかはわからないが、ついつい強く当たって、子どもはしょんぼりしてしまい、後悔することが多い。

＊保育教諭のねがいと思い＊
A児へ
・ありのままの姿を受け止めてもらい、見守られている安心感のなかで、いろんなことに挑戦してほしい。

保護者へ
・子どもの成長を焦らず見守り、ありのままの我が子と向き合いながら、少し肩の力を抜いて、子育てを楽しめるように援助していきたい。

月	保護者の子育ての悩み ※「」は連絡帳より引用	保育教諭の関わりと援助	A児と母親の姿や変容
5月	「えんぴつの持ち方は上手ですが、お絵描きは苦手なようです。絵らしい絵を描かないので気になります。園で沢山描かせてほしいです」 	「本当、持ち方上手ですよね。今日、お母さんの絵を描いたのですが『目と～』と言いながら、お母さんを思い浮かべるように、楽しそうに描いていました。『上手に描けないんだよね』と言いながら初めは描いていましたが、描いてるうちに楽しくなっていったようです。うまい下手ではなく、今日みたいに描くことが楽しいと感じていけるようクラスでもやっていきたいと思います。」と今日の本児の活動を通して、できるできないではなく楽しいと感じることが本児の育ちにつながることを伝える。	母の日に似顔絵をﾌﾟﾚｾﾞﾝﾄしたA児。「マーマ、喜んでたよ。うれしいって」と嬉しそうに話していた。母親からは『こんなに描けるなんて。びっくりしました。うれしかったです。楽しんで描いたのがよかったんですかね』とおたより帳に書いている。
6月	「上の子あるあるだと思うのですが、弟にかまうことがどうしても多くなっているなかで‘自分も同じように抱っこして’と言ってきます。バランスよく愛情を注いでいるつもりですが、どうしても下の子に手がかかるので、我慢させていることが多いよね…と日々パパと反省しています。」	・私自身の子育てと重なり、お母さんの気持ちに共感することを伝えると『先生はどんな風にしているのですか？』と聞かれた。私の息子は自分でできることもやってほしいという時があって、自分のことを見て！という甘えたいサインだと思うので、その時は手伝うようにしてた。たくさん手をかけた分、逞しくなってい	母親：翌日「昨日はありがとうございました。いろいろとアドバイスいただけることに感謝です」と話していたが、表情はスッキリした様子ではない。 A児：登園時、泣いて離

		くことを願いながらやってあげていたことをA児の姿と重ねてほししいなと、思いながら話す。	れられないことが続いている。
6月	「最近は私がこう言うだろうな。どうせダメって言うのだろうな。と考えているのか『チョコ買わないよ』『これやりたいって言わないよ』と言ってきます。本当はやりたいはずなのに、反対のことを言ってきます。否定的な言い方は私のせいだと反省。言い方を肯定的に変換して声かけしようと思います。日々気づかせてくれる娘に感謝です」	・自分を振り返っていることがすごいです。なかなか難しいですよね、と母親の姿を受け止める。園での本児の様子を伝えながら、同じような姿があること。私自身も同じように肯定的に言葉を使っていきますね、と伝える。	・母親「最近は、怒らないように意識しているからか、娘が素直に甘えたり、表情も柔らかくなっている気がします」と書いている。 ・A児「もっとパパといたかった」と登園時に泣いていた理由を自分から教えてくれた。
7月	「いろんなことをやってごらんと促すと『できない』『わかんない』と言ってきます。以前も相談したと思うのですが、中々チャレンジしようとしないのが気になります。声かけも工夫はしているつもりですが、難しいです…(笑)何でもやってみる！とチャレンジできるようになってほしいのですが…」	・その日、私は休みだったが代替の保育教諭と情報共有ができていたため、代替の保育教諭が本児の園での姿を伝え、虫怖いといいながらも、友達と楽しそうに虫捕りしていたことを伝えてくれていた。	「園での様子から、いろんな遊びに挑戦していることを知り、安心しました。友達の存在も心強いです」とおたより帳に書かれている。
8月	「夕食時、パパの椅子の横に自分の椅子を自分で用意し終え、自分で食べると思いきや『よしっ！手伝おっか』とパパに向かって手伝ってほしいことを堂々と言っていたので、大爆笑でした。最近は、怒るのもあきらめて、手助けしています。本当は自力で食べてほしいのですが…」	「最高にかわいいｴﾋﾟｿｰﾄﾞですね。気持ちが言えるって素敵ですね。そして、その思いに応え、受け止めってもらっているこの時間が、Aさんの心を満たし、これからのAさんにつながっていくのだと思います。みんなで爆笑しながらのやり取りが目に浮かび、ほっこりしました」と返事する。	連絡帳を読んでと持ってくるA児。読み上げながら、笑う私に『Aが言ったんだよ。だって、やってほしかったから』と言う。『やってって言えてよかったね。先生もうれしい』と伝えると、満足そうであった。
9月	「娘はとてもマイペースだなと最近とても思います。言動を見ていてとても面白いです。これから弟とどんな会話をするのかとても楽しみです」	・園でも自分のペースで身の回りのことを頑張っていること、その姿を十分に受け止め、自信につながるような言葉かけをしていきたいと伝える。	A児：「見ててね」と苦手な物も、進んで食べようとする姿が出てきた。
10月	「最近は運動会の話で盛り上がっています。コドモン(筆者補足説明：ICTで保育の様子を写真やドキュメンテーションで発信)を見ると益々、楽しみになります。一緒にコドモンを見ながら『マーマ！ちゃんとAのこと見つけてよ』と話したり、おちゃらけて行進するマネをしたり、ウキウキモードです」	・早く走れるようになりたいからと「ごはんを分けずにたべたい」と頑張っている姿を伝える。 	・A児「見ててよ！」と走って見せたり、友達と一緒に楽しそうに走る姿がある。 ・母親：「強い体になるためのことわかる？」とクイズを出してきたので、こんなことまで園で話していて、よく聞いてそれをやってみようとするところに成長を感じると話す。
12月	両親そろって、保育参観する。	・母親がドキュメンテーションを見ている側へ行き「自分からいろんなことに挑戦し、楽しんでいますよ。今日うまくできなかったけど、また明	保育参観の感想 「子ども達の姿がとても癒しでした。Aもお家にいるときと変わらず

12 月		日やる！という事を言ったりもしますよ。すごいですよね。毎日がつながっていて…本当、成長って積み重ねなんだな…と子ども達の姿から感じます」と本児が、できる、できないにとらわれず、目の前のことに挑戦したり、楽しんでいる姿があることを伝える。	マイペースに過ごせていて安心しました。先生にも話しかけたり、先生の子ども達への接し方、勉強になりました。子ども達に丁寧に向き合ってくださり感謝です」とあった。

【エピソード】（１２月の生活発表会あとの保護者とのやりとり）

保護者：「生活発表会、とてものびのびしていて、また大好きな友達と一緒に笑顔で踊っている姿に、ほっこりしました」（連絡帳に記載）

～その日のお迎えの時「先生ありがとうございました」から会話が始まった～

保育教諭：『取り組みの中で、他の先生達からも言葉をもらったことが、本人のなかに積み重なり自信になっていったのだと思います』

保護者：『こんな風にＡのこと想ってくれて、ありがとうございます』

保育教諭：『それは私達だけではなく、お父さんやお母さんがいつも園でのこと話題にしてくれて、一緒に取り組んでくれたからですよ』

母親は目をウルませ『積み重ねなんですね。A、頑張っているんだね』と言い、Ａの頭に手を添えた。

【結果・考察】

母親とのやりとりにおいて、思いを丁寧に聞き、受容し、認めることを優先しながら、日々の保育のなかでのＡ児の姿から今必要な援助とはどんなことだろうと一緒に考えてきたことが、Ａ児への理解に繋がっていったと考える。ドキュメンテーションも用いたことで、言葉だけでは伝えきれない育ちを伝えることができたと考える。また、保育参観を通し、他の子と触れ合っている我が子の姿を見たことで、自分の子どもの育ちを客観的に捉えることができていったと考える。ありのままの我が子に目を向けられるようになってきたことで、母親からは「～してほしい」という言葉より「かわいいです」「おもしろいです」「楽しみです」という言葉が多く綴られるようになってきた。

Ａ児は、自分の思いを受け止めてもらったり、それに対して両親が笑って応えてくれたことで、ありのままの自分でいることの心地よさを感じ、その安心感が意欲的に生活する姿に繋がっていったと考える。

Ⅴ　実践のまとめと考察

子育てにおいて結論を急がず焦らず、しかし、いつか届くといいなという思いを持ち続けながら、根気強く園での様子を伝え、気長に成長を見守ってほしいと保護者支援を続けたことが結果としてよかった。これも職員間で情報を共有し、相談できる環境があったからだと考える。情報共有する中で、自分の保育や援助、保護者への働きかけを振り返ることにも繋がった。また、本報告書では実践事例は一つしか取り上げることはできなかったが、保護者支援をしなくてはいけない家庭がその他にもあった。例えば、保育教諭が保健師との仲介役をし、定期的な巡回の際に相談し、療育機関とつなげたことにより、保護者が不安や困り感を他と共有でき、子育ての改善のきっかけをつかめた家庭もある。

どの保護者もわが子の健やかな成長を願い、手探りで一生懸命子育てをしている。しかし、理想と現実の少しのずれ等で悩みも尽きないのだろう。こども園の特性を生かし、子どもの育ちに見通しをもち、連続性のある保育実践のもと、職員間で連携を図りながら今後も保護者支援に努めていきたい。

〈主な参考・引用文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成３０年３月　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル社

田中　康雄　執筆　２００８年3月　『気になる子の保育Q&A』　学習研究社

汐見　稔幸　著　２０１８年5月　『こども・保育・人間』　学習研究社

永野　典詞・岸本　元気　著　２０１６年１１月　『保護者支援～保育ソーシャルワークで学ぶ相談支援　［新版］～　風鳴舎

大豆生田　啓友・岩田　恵子　著　２０２３年2月　『保育ドキュメンテーションの作り方』　西東社

魅力ある園環境をめざして

― 遊びの動線を生かした環境構成の工夫 ―

名護市立緑風こども園　主幹保育教諭　仲程　利枝子

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第１章第１節１(2)では、乳幼児期の教育及び保育においては、園児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味を持って環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければならない。その際、園児が環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになることが大切であると述べられている。保育教諭は、園児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。

本園の実態として、保育所から幼保連携型認定こども園に移行し２年目にはいり、試行錯誤しながら新園舎での環境の充実に取り組んでいるところである。園児の姿として、好奇心旺盛で色々な物に取り組もうとする姿が見られ、自分から好きな遊びを見つけ、友だちと関わって遊ぶ姿も見られる。一方で試行錯誤しながら夢中になって遊びこむには、環境が十分ではない様に感じる。

そこで、園児が「おもしろいな」「もっとやりたいな」と生き生きと過ごし、自ら発見したり試行錯誤したりして、充実感や満足感を味わうために、遊びの動線を生かした魅力ある園環境を目指したいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　自ら関わりたくなる園庭環境の工夫

発見や試行錯誤をしたりして、充実感・満足感が味わえるように、生き物が集まる食草や遊びに活用できる草花を育てる。五感を使って楽しめるコーナー作り(香りハーブコーナー・ビオトープ・畑コーナー)をする。

②　遊びの動線を意識した環境の構成の工夫

園児の発達、興味や関心を捉え、自ら関わって遊ぶ事が出来る環境の構成に取り組む。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

１　実践事例　「ビオトープづくり」５歳児

【園児の姿】

・カエルの飼育をきっかけに、「園にもカエルの池を作りたい」と男児が花壇にカエルの池作りを始めた。
・保育教諭も一緒に掘ると他児も興味を示し、スコップやヘラを持ってきて一緒に掘り始める。
・今までの経験から、「おたまじゃくしを入れてカエルにしたい」「ヤゴを入れたい」等イメージを膨らませている。

【保育教諭の願い】

・園児のイメージを大切にしながら、やりたい気持ちを実現し達成感や充実感を味わってほしい。
・友達と一緒に遊びを進めたり、広げたりする楽しさを味わってほしい。
・生き物に興味や関心を深め、疑問に思ったことを調べたりして探求する楽しさを味わってほしい。

【○環境構成の工夫　◇保育教諭の援助】

○遊びの動線を意識しながら、池を作る場所を決め、水鉢やプラ舟を設置しておくことで遊びが進めやすいようにする。
○石や流木、水辺の植物や水草を用意する。
◇保育教諭も一緒に遊びながら安全な用具や道具の使い方を知らせる。
◇試行錯誤する姿を見守り、必要に応じた言葉掛けをして遊びが深まるようにする。

◇遊びのイメージを共有できるように、丁寧に関わり、お互いの思いを伝え合いながら遊びが進められようにする。

【園児の変容】

・作り始めた時は男の子が中心になり、「さあ、仕事の時間だ！」と工事現場をイメージして楽しむ様子が見られたが、水鉢やプラ舟にグッピーを入れて池の形になってくると、「たのしそう」「何がいるの？」と他児にも興味が広がっていった。「カエル池」と名前を付け、少しずつ、形になってくると、よりイメージが広がり、本物の川のように周りに植物を植えることや浮草を浮かべてみたらどうかなど、提案したり、目的の実現に向けて、考えを出し合い協力しながら楽しむ姿が見られた。

・オタマジャクシを入れると、すくおうとしたり、手を入れたりする事があったが、ルールを決めたり生物との関わり方を伝えると大事に扱う姿や年下の園児にも教えてあげる様子が見られた。

【結果と考察】

・園児の遊びの姿から必要な素材や道具を準備することで、園児が主体的に遊びを進めることできた。

・「どうやったら水が貯められるか」「雨が降っても溢れないようにするにはどうしたらよいか」「長くして川にしたい」など、思ったことを友達や保育教諭と話し合い、より良い方法を提案したり、試行錯誤したりしながら解決していくことで池作りを実現することができたと考える。

・池が完成した後、クラスみんなで捕ってきたオタマジャクシを放す。どこに隠れているかな、目を凝らしのぞきこみ見つけては楽しむ姿が見られる。「もっとこうしたらいいんじゃないかな」とアイディアがでて遊びが充実し楽しんでいる。

２　実践事例

【園児の姿】
・長い園庭に沿って、３歳児４歳児室、奥まったところに５歳児クラスがあり、それぞれ自室前で遊ぶ姿が多い。
【保育教諭の願い】
・園庭の奥まで足を運んで異年齢で交流を楽しみ、お互いの遊びに刺激をもらえるといいな
【環境構成の工夫や保育教諭の援助】
・フェンス沿いにバタフライピートンネルを作り、園庭の奥のスペースまで足をはこぶ仕掛けを作る

【園児の姿】
・各クラス、栽培物を植え生長を楽しんでい
【保育教諭の願い】
・食べるだけではない栽培物の出会いも楽しいかも！
【環境構成の工夫や保育教諭の援助】
・たわしになったヘチマを用意し探求心をくすぐり関心が高まるようにする。

トンネルを起点に遊びが広がる。

ごわごわの感触！触っているうちに種発見！177 個あるよー

【園児の変容・考察】
・トンネルがあると通りたくなる！行き来する姿が増えた。５歳児の竹馬技術も憧れ。
・小さい子に頼まれ花を取ってあげるなど、遊びで関わる姿も多くなる。

・同じ植物でも花、葉、実と観察し、時間がたつと色や形も変化することなど､様々な気づきがあり不思議さや面白さが味わえる 。観察することで数的興味も高まった。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

・園舎の入り口から続く、長い園庭を生かせるよう、フェンス沿いに植えられた、色水に使える植物でトンネルを作る。園庭の奥のスペースまで「行ってみたいな」と興味が広がるよう遊びの場を設けていくことで、遊びの動線が生まれ様々な活動や異年齢の交流にもつながった。一番奥にある５歳児保育室前のフェンスには、ホウライカガミが茂り何種類もの蝶が訪れる虫捕りスッポットがあり、そこからのびる花壇や畑でビオトープ作りや、野菜（へちま・かずら等）の栽培をして遊びの動線を意識した構成を工夫できた。また、園児の日々の遊びの様子から興味や関心のあることを探り、保育教諭が園児と共に遊び感動や面白さを共感したり、環境の構成を一緒に考えたりすることで「どうしたらできるかな」とより考えを深め、試行錯誤することを引き出し充実感や満足感につながったのではないかと感じる。

② 課題

・０歳児から５歳児までが在園するこども園では、それぞれの年齢に応じた遊びを大切にし、ビオトープのように安全対策をしながら、皆で観察したり発見したりできる場の工夫や植物のように長期的に準備をして年間を通して園児の遊びが充実するよう配置や動線を考えていかなければならないと感じた。

③ 実践を通した自身の気づき

・環境の構成を考える上で、園児の興味・関心がどこに向いているか、園児理解を深めるためには、一人一人を理解する視点を保育教諭自身が磨き、発達を見通した長期的な環境構成と園児の実態に合わせて柔軟に環境を再構築していくことが大切であると再認識できた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・園児の興味や関心をしっかり捉え、一人一人の発達にとって意味のあるものか、保育教諭間で園児の姿を共有し多面的な見方や意見交換も大切にしながら、園児理解を深め、更に園児の、好奇心や探求心が膨らむような、魅力的な環境の構成と援助に努めて行きたい。園児が「おもしろいな」「もっとやりたいな」と生き生きと過ごし、自ら発見したり試行錯誤したりして、充実感や満足感を味わうために、環境の再構築や遊びの動線を考えながら魅力ある園環境を今後も目指していきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館
内閣府・文部科学省・厚生労働省　『幼保連携型認定こども園における　園児が心を寄せる環境の構成』フレーベル館

「たのしい！」「やってみたい！」園児の遊びが充実するための環境構成や援助の工夫

ー園児理解を深め、一人一人の興味や関心に応じた関わりを通してー

名護市立緑風こども園　保育教諭　長山　史子

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第一章（２）①幼保連携型認定こども園における教育及び保育において、乳幼児期の発達の特性を踏まえ、生活を通して計画性をもった適切な教育及び保育が行われなければならず「環境を通して行う教育及び保育」が基本と記載されている。また、園児一人一人の環境への関わり方が異なるため、発達の特性（その園児らしい見方、考え方、感じ方関わり方など）を理解することが大切であるとある。

本園は、０～５歳児の６年保育で、本学級は、３歳児男児７名、女児７名の計１４名が在籍しており特別な支援を要する子や途中入園の園児もいる。学級の実態としては、いろいろな遊びに興味をもつ子ども達だが、遊びが続かず様々な遊びを転々としたり、他クラスへ遊びに行ったりしてしまうこともある。また、自分の思いが通らないと泣き続ける、怒り続ける、部屋からとびだしていく等、感情のコントロールが難しい子もいる。このような姿は園児の興味や関心に合った環境構成が十分ではなく、楽しさや充実感が得られてないのではないか、一人一人の行動や思いを理解することでその子に寄り添った援助ができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　園児の興味や関心、行動を捉えるための園児理解に努める

・保育教諭が一人一人の発達の特性（その園児らしい見方、考え方、感じ方、関わり方など）を理解し、環境構成と援助の工夫を行う

・ドキュメンテーションを取り入れ、子どもの活動や保育を可視化して子どもの育ちを読み取り、園児理解が深められるようにする

②　園児の遊びが充実するための環境構成や援助の工夫

・園児が何に興味や関心をもっているのかを捉え、思わず「やってみたい！」と関わりたくなるような、また、遊び込めるような環境を構成していく

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践実例１】「夏の遊びやってみたい！～色水遊びの環境構成と援助の工夫～」

（園児の姿）
・園庭に出ると、学級テラス前に設置してある滑り台や三輪車、砂遊びを楽しんでいることが多い。
・１、２歳児が砂場で遊び始めると、自分の遊びを邪魔されたくない、じっくり遊びたいからなのか砂場から離れて遊び始める。

（保育教諭の願い）
・３歳児がじっくりと遊べるような空間（場）がほしい。
・自然物を取り入れた遊びも楽しんでほしい。
・好きな遊びを通して友達との関わりに繋がってほしい。

（◎環境構成の工夫　☆保育教諭の援助）
◎学級テラス前に、立ったまま遊べる高さのあるテーブルや座ってじっくり遊べるテーブルと椅子をスノコで作成して設置した。
◎色水遊びに使えるような草花（チョウマメ、トレニア、アサガオなど）コーナー作り、子ども達と一緒に育てながら、栽培物の生長にも気づけるよう配置にも工夫した。
◎色水・泡遊びが楽しめるような用具や道具を準備した。
◎遊びが継続できる「続きコーナー」を作る。
☆保育教諭も一緒に遊び、子どもの気づきや発見、驚きなど遊びの楽しさを共有していった。

スノコでテーブルと椅子を作成

ブルーベリージュースもいれてみよう

黄色に少し紫を混ぜると、色が変わるよ

遊びに使っていいお花コーナー

また続きをするから置いておこう

【園児の変容】
・テーブルや椅子を設置したことで、砂や土、泡遊びなどをじっくり楽しめるようになった。
・隣に座っている友達の作っているものに興味を示して、同じものを作り、お店屋さんごっこに発展したりなど、友達との関わりが増して遊びが広がってきた。
・続きコーナーを作ったことで、翌日も「今日も〇〇したい」と遊びが長い間続いたり、お迎えの時に自分で作った物を保護者に伝えたりする姿がみられるようになった。
・遊びに使っていいお花コーナーを作ったことで、自分の作りたい色水をイメージしてお花を選んだり、砂だけで作っていたケーキにお花を飾ったりと遊びやイメージが広がっていく姿がみられた。
【考察】
・テーブルや椅子を設置したことで、じっくりと遊べる空間（場）となり、隣や目の前の友達の遊びを見て、「やってみたい！」という気持ちに繋がったのではないか。また、「どうやって作ったの？」などの言葉のやりとりが自然と増えて、友達との関わりが広がったのではないかと考える。
・色の変化がわかりやすい透明の容器やボールやザル、すりこぎや泡立て器などやってみたくなる道具を用意したことで子ども達の興味・関心に繋がったのではないかと考える。
・子どもの遊ぶ場を考えて、栽培物（アサガオや花）や続きコーナーを近くに設置することで、子ども達の遊びが広がり、同じ遊びをじっくり楽しむ姿に繋がったのではないかと考える。

【実践事例２】「何かな？」「面白そうだな」　～A 君の姿を追って～

（園児の姿）
・クラスからすぐに出ていき、他のクラスで遊ぼうとする。
・自分の思い通りにいかないと、すぐに怒ったり泣いたりして、その場を離れようとする。

（保育教諭の願い）
・クラスでも、楽しいことを見つけて遊べる時間が長くなってほしい。
・クラスの友達との関わりがもてるようになってほしい。

（◎環境構成の工夫　☆保育教諭の援助）
☆本児がどのような遊びに興味をもっているのか、また、他のクラスで遊んでいる時はどのような遊びをしているのかを本児の行動から探っていく。
☆他クラスの担任と協力しながら、本児の姿や行動の情報交換を行う。
◎本児が興味をもって遊んでいるものをクラスにも準備する。

（病院ごっこ）

楽しそう！やりたいな

（待合室）

順番を待つのが苦手な A 君も患者さん役で座って待っています

「何が必要かな？」

生き物が好きなので、部屋の入口に生き物コーナーを設置。登園後のお楽しみタイムとなり、じっくり観察しています。

【園児の変容】
・本児が興味を持っている物や遊びをクラスに取り入れることで、クラスの中で過ごす時間が少しずつ長くなってきた。
・友達と同じ遊びを楽しみ、一緒に遊ぶ姿も見られるようになったが、自分の思い通りにならないと怒りだしてしまう。しかし、その都度、保育教諭が友達との関わりを援助することで「かして」や「ありがとう」などと言葉で伝えることが少しずつできるようになってきた。
【考察】
・A 児がどうして他のクラスに行くのか、そこにどんな好きな物や遊びがあるのかなどをじっくり探っていき、保育室の環境構成を工夫したことがクラスで過ごすことに楽しさを感じてきたことに繋がったのではないかと考える。
・A 児の姿を捉えての環境構成を工夫してきたが、それは他の子達にとっても遊びたい環境となり、楽しさがうまれることで A 児が友達との関わりに繋がってきたのではないかと考える。友達との間で起こる、自己主張で怒ることは、関わることでうまれてくるプラスのことと捉えて、これからも関わり方を援助していく。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

・遊びが広がるように、何が必要なのか、どのような援助が必要なのかを一人一人の興味・関心を読み取りながら環境構成を工夫し充実させていくことで「やってみたい！」と主体的な遊びに繋がったのではないかと考える。
・子どもの行動や思いに合わせて環境を再構成していき、また、「どんなものがあったらいいなと思う？」などと子どもの思いを聞きながら一緒に作ったり準備したりすることで、一人一人の「楽しい！」が他児の興味・関心となり、友達との関わりに繋がったのではないかと考える。

② 課題

・友達と言葉のやりとりをしながら遊びを楽しむ姿が見られてきたので、引き続き友達との関わりが広がるような援助や環境構成の工夫をしていきたい。

③ 実践を通しての気づき

・園児の遊びが充実するための環境構成や援助の工夫には、園児の興味・関心を丁寧に読み取ろうとする園児理解が重要であることを再認識することができた。
・子どものありのままの姿を受け止めながらも、自分自身の援助に対して常に振り返りをすることがよりよい環境構成や援助の工夫に繋がると感じた。

Ⅴ　　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・子ども達が「たのしい！」「やってみたい！」と興味・関心がくすぐられる“仕掛け”を環境構成や援助に散りばめられるような保育ができるよう、今後も園児理解のための視点や手立て等を学んでいきたい。
・ドキュメンテーションで子どもの姿や学び、保育の振り返りを可視化することで、他職員との対話を生み出して保育の質を高めていきたい。対話を通して自分自身が見えていなかった園児の姿を捉え、子ども一人一人の園児理解を深められるようにしていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館
・大豆田啓友・岩田恵子　『保育ドキュメンテーションの作り方』　西東社

新しい言葉に出会う楽しみや、言葉を豊かにしていくための援助の工夫

―言葉を使った遊びを楽しむ経験を通じて―

金武町立金武こども園　保育教諭　前田　鈴乃

Ⅰ　テーマの設定理由

【幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説】第２章第４節の領域「言葉」では、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」と述べられている。社会性が著しく発達していく幼児期においては、言葉を交わして友達と十分に関わることが重要だと考える。

学級の実態として、５歳児計２２名在籍し、好奇心旺盛な子の姿が多く、様々な活動に興味を持って取り組む姿がある。集会の場では、保育教諭の話に興味をもって聞くことができる子が多いが一方で、途中で話を遮り、最後まで話を聞くことが難しい子の姿も見られる。友達との関わりでは、自分の気持ちを主張するが、相手の主張は受け入れず、一方的に話し、相手の話を聞いていない様子が見られる。思いの違いからトラブルが起こると、すぐに保育教諭に訴える。園児同士で思いを伝え合い、受け入れられるようになるための環境構成や手立ての工夫を課題とし、本研究のテーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 絵本や物語に触れ、言葉遊びを通して言葉を豊かにする環境構成・援助の工夫

園児が生活する中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しみ、言葉遊びやリズミカルな節回しの手遊び、身近な地域文化の歌やリズムを体で感じながらいろいろな言葉を使って表現する楽しさを感じることができるようにする。

② 新しい言葉や体験したことを言葉に話したくなるような環境構成や援助の工夫

園児の伝えたいという思いや相手の話を理解し、聞きたいという気持ちを大切にし、園児同士の言葉の交流が図れるように場の設定をする。園児が相手の話を集中して聞くことができるように、伝え合うための工夫や援助を行い、保育教諭も共に聞くという姿勢を大切にしていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

１　実践事例　（１）「言葉遊びを通して言葉を豊かにする」

園児の実態

・絵本等で知った地域伝統芸能やリズム遊びを好み、昆虫や動物の名称をリズムに合わせて口ずさんで表現することを楽しんでいる。効果音に合わせ、リズムをとりダンスや、体を動かして表現することに挑戦し、自信を持って表現できるようになる。

・地域伝統芸能祭を通じて、リズムをつけて表現する掛け声「サーサーサーサー。ヨーチャイ。ヨーチャイ」に合わせて動作を楽しんでいる。島言葉の歌やリズム体操を取り入れることで、更に興味関心を持つようになった。

【保育教諭の願い】

・園児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現に触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにする。
・地域文化に親しみ、自分なりのイメージを広げ、それを体で表現する楽しさを味わえるようにする。

【保育教諭の援助(◎)　環境構成(★)】

◎言葉の音の響きの楽しさを共感する。また、言葉はただ単に、意味や内容を伝えるだけではなく、声として発せられた音声の響きやリズム、音としての楽しさや美しさを伝える。

★沖縄の伝統文化・芸能に触れる中で、島言葉の由来や意味を伝え、言葉の詩に出会えるように、沖縄・島言

葉の絵本コーナーを作る。
★「くわっちぃ一数え歌やうちなーぐち５０音」の視聴覚教材や、いつでも見て触れられるように、ひらがな・島言葉コーナーを作る。
◎家庭や地域での様々な生活体験を通じて具体的なイメージや言葉を豊かにする。
◎言葉の名称やイントネーションの難しさを伝え、家庭や地域の方との交流につなげる。
◎地域の人とのつながりを深めながら、図書館の「絵本の読み聞かせ」に参加し交流を図る。身近なおじいちゃんの読む絵本や、古くから親しまれてきた童歌、島言葉の楽しさを味わえるようにする。
◎人の話を最後まで聞くことが苦手な子がいるため、表情カードを持って読み聞かせをする。
◎絵本の言葉ひとつひとつに興味を持たせるために、アニマシオンを取り入れる。
（読書の楽しさを伝えるとともに、自然に読むための力を引き出すことを目的としている。）
【園児の変容】
・「いーやーさーさー」というような言葉の音の響きを楽しみ、様々なイメージを広げる。
・言葉の意味が分からない時は、保育教諭に何度も質問をする姿が見られた。繰り返し体験することで、言葉遊びの楽しさを味わう。
・他児の刺激を受け、生き生きと感じたことをそのまま表現する姿が見られる。
・「先生、今日もくわちぃ一数え歌を歌いたい。」と要望し、振り付けも子ども同士で考えて表現する姿が見られる。
・誕生日会や行事で発表し、表現する楽しさを味わい、異年齢児に教え合う姿も見られる。
・地域の人とのつながりを通じて、身近な町の歴史や文化に親しむ。
・覚えた言葉で、劇遊びに発展し、覚えたお話しの場面に応じ、友達と表現する事を楽しんでいる。

自分の住んでいる町の「金武町　かるた」遊びを楽しむ。
・ゆっくり読みながら、かるた遊びを楽しんでいる。ひらがなが読めない子には、保育教諭が代読し、町の文化や偉人への興味関心を高める。

★「島言葉：ご馳走数え歌」の絵本を作成。
・視聴覚教材を用意し、ちびっこ先生が読み聞かせをする様子。
・ちびっこ先生が読み聞かせをすることで、他児が興味関心を持つようになった。

◎絵本の読み聞かせでアニマシオンを取り入れる。
◎絵本の内容に合わせた○×クイズを取り入れる。ちびっこ先生に読んでもらう等の工夫をする。
・絵本に興味がない子も、アニマシオンを取り入れると集中して聞くようになった。

◎絵本の読み聞かせや集会の前に「聞く」という意味を分かりやすく伝える。
◎絵本の読み聞かせの前に表情カードで分かりやすく伝え、掲示する。

・グループで、島言葉カード遊びや「ひらがなカード遊び」をする様子。
・ちびっこ先生がカードを読みあげる様子。

２　実践事例　（２）「新しい言葉や体験したことを話す」
園児の実態
・言葉の発達や発音の個人差が大きく、話し出すタイミングや聞いて、待つことも課題が見えてきた。園児の理解力などに配慮する必要がある。また、相手の話を最後まで聞けず、途中で自分の話をする子もいるため、伝え合うための工夫や援助を行っている。話し手や話しの内容に興味関心をもつことができるように、保育教諭も園児と共に聞くことを楽しむという姿勢を大切にしている。

【保育教諭の願い】

・自分の思いを言葉で伝え、聞いてもらえる体験を通して、相手の話を聞く力を育む。
・遊びや生活の中で、言葉で伝え合うことの大切さを知り、言葉のやり取りを楽しみ、語彙力を高める。

が・なにをした」と言葉を組み合わせる言葉遊びを実践し、分かりやすく伝えていく。
◎集会で発表の場を設けるが、言葉での表現が苦手な子がいるため、保育教諭が代弁しながら、話すことの楽しさを伝える。同時にどんな気持ちだったのか等、インタビューしながら、緊張しないで話せる場を作り、発表する楽しさを体験させる。
★お話しづくりのカードやひらがなカードを用意し、いつでも活用できるように環境を整える。
◎読み書きする関心や能力は個人差があるため、ひらがな表や絵本、標識で分かりすく掲示する。
◎園児の言葉の表現を豊かにするために、家庭や地域での様々な生活体験が具体的なイメージとして捉えられるよう背景や情景を言葉にし、伝える。
◎友達同士で自由に話せる環境を構成し、園児同士の心の交流が図れるように、絵カードや視聴覚教材を活用し、工夫する。
【園児の変容】
・ごっこ遊びで、看板やメニュー、名前などをそれぞれ園児なりに読んだり、書いたりすることが増えた。
・絵本や紙芝居、お話しづくりを通じて、お話しの世界を楽しみつつ、いろいろな言葉に親しみを持つようになった。
・好きな文字を選び、文章を考えたり、文章をイメージし、絵を描いたり、友達の話に興味関心を持つようになった。
・ルールを変えたり、友達同士で楽しいアイディア(食べ物や動物、友達の名前)を出し合い、難易度が高くなるが上手に遊ぶようになり、言葉遊びの楽しさを知る。
・生活発表会の出し物「お話し作り・劇遊び：田芋太郎・くわちぃ一数え歌」の練習に励み、意欲的に取り組む姿が見られる。

他児に対して、自分の気持ちを伝えられない子や相手の気持ちを読み取ることが苦手な子には、「どんな気持ち？」とイラストを用いて気持ちを代弁し、具体的な言葉かけを行う。自分の感情や相手の感情を言葉で伝える経験を増やしていく。

・お話し作りの様子　「劇遊び：田芋太郎」お話をちびっこ先生が発表する。
・発表タイムで、自分の作った作品を紹介しながら、腹話術で話すことを楽しみ、自分の気持ちを言葉で表現することで自信につながった。

★お手紙・ひらがな・しまことば５０音表コーナーで、手紙を書いている様子

★お手紙で気持ちを伝え合い、お互いの良さを認め合うようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

・園児も様々な言葉を使うようになり、覚えた言葉や場面に応じ身体表現を楽しむようになった。言葉のやり取りを楽しみ、「田芋(まぁむ)太郎」の劇遊びにつながり、生活発表会で披露できるまでに発展し、言葉遊びが広がった。
・くわっち一数え歌を通じて、町の特産品である「田芋」郷土料理に親しみ、食への興味関心が高まった。
・なかなか単語が出てこず、言葉に埋まってしまう子も、「ひらがなカード」で単語を作る遊びをしたり、挑戦しながら遊ぶ姿もよく見られるようになった。
・言葉でうまく表現できない場合でも、具体的なイメージが持てるように絵カードを利用することで安心して話す子が増えた。
・言葉遊びが発展し、ひらがなトランプやかるたを作成して遊ぶ姿も見られた。

② 課題
・園児が沖縄の文化や伝統に親しむ中で、地域の人との交流や地域文化に触れる体験を重ねる工夫をしていきたい。
・地域の人材、図書館、公民館などとの連携・協力を図り、異なる文化にも触れる機会を増やしていきたい。

③ 実践を通じて、園児の興味関心のあるリズム遊びを言葉で表現することや言葉を使うことの難しさを感じたが、園児と保育教諭の心の交流が図れ、一人一人が楽しいと思えるようになった。園児が言葉遊びの楽しさに興味関心を持ち、生活発表会の「お話し作り・劇遊び：田芋太郎・くわっち一数え歌」等の言葉遊びに繋げることが出来たのが良かった。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・園児が生活や遊びの中で友達との関わりを深め、互いの思いを伝え合う喜びを味わえるように、保育教諭の言葉掛けの工夫が大切である。また、言葉掛けで通じないこともあるので、イラストや文字、園児の様子などを掲示し、視覚化する。絵本の読み聞かせを通じて友達の思いに気付けるような環境や教材の工夫をしていきたい。
・帰りの会や集会だけでなく、遊びを通じて言葉で表現する楽しさを味わえるような活動や教材の工夫を取り入れていく。
・一人一人の発達や内面の理解を深めて関わり、育ちを援助していけるように、園児の姿や活動、自身の援助の仕方を振り返り、質の向上に努めていく。

＜主な参考文献＞

内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成３０年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　株式会社フレーベル館
０～６歳児「言葉を育てる」保育　令和３年　日本国語教育学会監修　株式会社東洋館出版社

身近な自然に親しみ、主体的に遊びこむ幼児の育成

―草花に直接触れ、心を動かす体験を通して―

浦添市浦添こども園　保育教諭　比嘉　恵秀

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「環境」の領域に「身近な自然に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味関心を持つ。」と記されている。

本学級の幼児の実態としては、５歳児（３年保育）計１７名在籍し、興味のある遊びを見つけて楽しんだり、保育教諭や友達と積極的に関わる姿があり、どの子も安心感を持って過ごしている。

園庭では、野菜や植物を育てたり、ビオトープがあり、オタマジャクシやちょうちょなど生き物への興味はあるが、シロツメクサやオオバコなど自然に生えている植物への興味はあまりなく、遊びの広がりもなかった。そのような実態から、身近な自然と関わり、見つけたことや気付いたことに喜び、自然物で遊ぶ楽しさを感じ、試行錯誤し、考えたり、工夫するなど好奇心や探究心を持つ中で、充実感、満足感を味わってほしいと願い、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　自ら身近な自然環境に関わりたくなる環境構成の工夫

遊びの中で、子どもが身近な自然に関わろうとする姿を大切にし、「楽しそう」「やってみたい」という気持ちや心が動かされるような環境構成をしていく。

②　自然物を遊びや生活に取り入れ、考えたり、試したり工夫して遊ぶ環境構成と援助の工夫

身近な自然物に触れ、遊びに取り入れようとする。その際に、気付いたことを試したり、考えたりする中で、充実感や満足感が持てるような援助をしていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例１】「自ら身近な自然環境に関わりたくなる環境構成の工夫」（４月～５月）

園児の実態

・園庭では、オタマジャクシやちょうちょなど生き物への興味があり、触ったり観察を楽しんでいる。
・園庭の花をままごとなどの遊びに取り入れている。
・シロツメクサやオオバコなど自然に生えている植物への興味はあまりなかった。

保育教諭の願い

・身近な自然と関わり、見つけたことや気付いたことを喜び、自然物で遊ぶ楽しさを感じてほしい。
・保育教諭や友達と一緒に、植物を使った遊びを楽しんでほしい。

《　環境構成の工夫（☆）・保育教諭の援助（〇）　》

☆植物の遊び図鑑を掲示したり、植物を部屋に飾ったりして興味が持てるようにする。

☆集まりの場で、遊び方の紹介や楽しさを伝えたり、植物のある場所を共有する。

☆あさがお、まつばぼたん、ひまわり、サツマイモなどの植物を育てる。また、思い切り遊べるように、

花の量や種類を用意し育てていく。
○シロツメクサで指輪や冠を作ったり、オオバコでひっぱり遊びなど、遊び方を知らせたり、やって見せることで、楽しさが感じられるよう関わる。
○風車が回る面白さや不思議さを一緒に味わい、共感していく。
○植物の生長に気づいたり、楽しく関われるような言葉かけを行っていく。

《園児の変容》
・友達や保育教諭を誘い、オオバコひっぱり遊びではどうやったら勝てるのか、どの草が強いのか、色々と試していく姿が見られた。
・アダンの風車の面白さを感じると、「作ってみたい」「どうやって作るの？」「この葉っぱ使うんだね」と風車作りに興味を持ち、作り方を保育者に教えてもらったり、図鑑を見ながら作っている。

《結果と考察》
・遊び方を保育教諭がやってみせたり、遊び方図鑑を掲示することで身近な植物に興味を持ち、面白いと思ったり、できるようになったことを喜ぶ姿が見られた。
・植物が園庭のどこにあるか分かったり、見つける嬉しさや遊ぶ楽しさを味わいながら、考えたり試したりする姿や、友達や保育教諭を遊びに誘い、植物を通して関わりが広がる姿が見られた。

【実践事例２】「自然物を遊びや生活に取り入れ、考えたり、試したり工夫して遊ぶ環境構成と援助の工夫」（５月～８月）

園児の実態
・植物をままごと遊びに取り入れたり、飾ったりして楽しんでいる。
・あさがお、ヒマワリ、マツバボタンなど育てている植物の生長に気付き、友達と伝えあったり気付いたことを調べたりしている。

保育教諭の願い
・身近な植物を色水遊びなど、色々な遊びに取り入れ、気付いたことを試したり、考えたりする中で、好奇心や探究心を持って遊んでほしい。

《　環境構成の工夫（☆）・保育教諭の援助（○）　》
☆色水遊びができるよう、ボールやすり鉢などの用具を整え、取り出しやすいようにする。
☆作った色水を入れる素材（ビニール袋、牛乳パック、コップ、ペットボトルなど）を用意する。
○どのようにしたら植物から色が出るのか、どの植物からどんな色が出るのか、自ら取り入れていく姿や考えていく姿を見守ったり、一緒に考えていく。
○不思議さ、面白さ、色が出た感動を共に味わえるように関わる。
○分からない時には周りの友達の力を借りたり、聞いてみるなどすることで新たな気付きがあったり、考え方が広がるようにしていく。

《園児の変容》

・あさがお、マツバボタン、シロツメクサなど色々な植物を色水遊びに使っていくことで、色が出る花の種類が分かってきて、友達と伝えあっている。また、色を濃くするために、花の数や水の量を調整したり、自分のイメージしている色を作るにはどうしたら良いか試行錯誤する姿がある。

・赤、黄色など色を混ぜて、色が変わっていく面白さを感じたり、友達と共感しあっている。

・色水の作り方を知っている子が、遊び方、すり鉢の使い方を知らない子へ教えてあげる姿が見られた。

・色水をペットボトルに入れる際に、じょうごを使うなど道具を使ったり、色々な方法を取り入れて楽しんでいる。

《結果と考察》

・植物への興味から、色水遊びの用具を準備したことで身近な植物を色水遊びに取り入れる姿が見られた。子ども自身の発見や気付きに共感し、一緒に面白がることで興味が広がったと思う。

・色水遊びの面白さを感じながら、繰り返し遊んでいく中で色々な発想が生まれ、やりたいことを試したり、考えたりすることができ、探究心を持って楽しむことができた。

・色々な用具を使いながら、使い方を工夫したり、試していくことで自分のイメージしているもの、考えたことを表現する楽しさを味わうことができた。

Ⅳ　実践の振り返り

・身近な自然、植物に直接触れる体験を通して、様々な発見や気付きがあった。また、楽しさや面白さを感じ、自ら遊びの中に取り入れようとする姿が見られたことを嬉しく思う。友達や保育者と一緒に遊び、感じたことを伝えあい、共感し、関わりが深まっていったように感じる。

・草花に触れることで心を動かし、遊んでいく中で、試行錯誤したり、工夫する姿があった。探究していく姿を私自身も一緒に楽しみ、感動し、不思議さを味わうなど共感的態度で接することができた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・園内の植物について調べたり、遊び方など色々な方法があることが分かった。季節によってどんな植物があるのか、また、様々な自然事象に興味関心を持てるような園庭の環境を含め再構成し、子どもの好奇心や探究心を育めるような保育をしていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成30年　幼保連携認定こども園教育・保育要領

・遊びが学びとなる子ども主体の保育実践　子どもと自然　学研プラス

・おきなわ　あそびの図鑑　『伝承葉っぱあそび』　『季節の草花あそび』

互いの良さを認め合う環境構成と援助の工夫

―友達と心を動かす出来事を共有する体験を通して―

浦添市立牧港こども園　保育教諭　眞榮田　美保

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼児は、保育教諭に温かく見守られているという安定感のもと、園生活において友達や保育教諭などと触れ合う中で、遊びや活動する楽しさを味わう。ときには幼児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤を通し、理解し合う体験や一緒に活動する楽しさを味わい、共感や思いやりの心が育まれる。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の第２章「人間関係」の領域には「友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう」とあり、友達と様々な心動かす出来事を共有し、互いの感じ方や考え方、行動の仕方などに関心を寄せ、それらが行き交うことを通じて、それぞれの違いや多様性に気付いていくことが大切であると記されている。

本学級の幼児の実態としては、５歳児（３年保育）男児１６名、女児１４名、計３０名在籍している。進級児が多く活発でのびのびとしているが、発言力のある一部の子ばかりで話を進めてしまい、遊びが一方的で長続きせず、相手の思いがわからないためトラブルになってしまうことがある。

幼児が互いの良さを認め合い、安心して思いを伝え合うことができるようになるには、どのような環境構成や援助の工夫が必要か、研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 一つの目的に向かってイメージを共有し、工夫したり、協力する楽しさを味わえるような遊びを取り入れる。

② 互いの感じ方や考え方、行動の仕方に関心を寄せ、考え方の違いにそれらが行き交う場面作りを行う。

③ 保育教諭が理解者となって受けとめ、温かい声かけをして、安心して思いが伝える場にできるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組

実践事例 「 アイドル☆コンサート 」

【 幼児の姿 】

・友達の遊びに興味を示して仲間に入って遊ぶが、発言力のある一部の子だけでやりとりをしてルールを決めたり、意見の食い違いで折り合いがつかず、すぐにその場から離れてしまう子がいて、少人数に分かれて遊ぶ様子が見られる。

・女の子数名が折り紙で作ったパペットで遊んでいたので、パペットを出し入れしやすいように壁面収納にすると、それぞれのパペットにアイドルの名前をつけて楽しむ姿が見られるようになった。ダンスが好きな子が多いので、保育教諭がＣＤと紙芝居舞台を用意すると、興味を示してパペットを作ったり、動かして遊びたいという子が増えてきた。

パペットを作って、ままごとをして遊ぶ様子。

パペットの家を作ると、それぞれの部屋に名前をつけて楽しむ。

紙芝居舞台とＣＤを用意すると、パペットを動かして遊ぶ様になった。

【 保育教諭の願い 】

・ダンスの好きな子が多いので、遊びに取り入れながら、一つの目標に向かって友達や保育教諭と一緒にイメージを共有して楽しんでほしい。
・発言力のある一部の幼児だけでなく、消極的な子も一緒に参加して、クラス全体で共通の遊びを楽しんでもらいたい。

【 環境構成と援助 】

・幼児の言葉やダンス表現を受けとめながら道具、材料、及び音響を準備してアイディアを引き出したり、年少・年中児に見せる場をつくって環境構成を整えることで、表現が深まる楽しさを味わえるようにする。
・話し合いの場をつくり、一部の子だけでやりとりをするのでなく、保育教諭が仲介に入りながら、みんなが話しやすく、話を聞いてもらえる雰囲気作りを行う。
・目的に向かって、幼児同士でアイディアを伝えあったり、工夫しあったりできるようにして、「それいいね」「やったみたい」とお互いの良いところを認めていけるように、支持的風土のある雰囲気の中で進められるようにする。
・幼児がいつでも使って遊べるように、道具を取り出しやすいように配置しておく。

【 幼児の変容 】

・最初は、教室内でパペットを動かすところを年少児に見せて満足していたが、曲に合わせて振付を楽しむようになると、ダンスをする子や司会の役割をする子が出てきた。遊ぶ人数や見学に来る年少児の数が増えてくると「ホールの舞台を使って見せたい」という声があがり、ダンスや道具の演じ方にも意識して、リーダーを中心として話し合いをするようになった。
・友達が作った物の良さに気付いて褒めたり、「自分もやりたい」と真似したりしながら、友達との関わりが増え、一つのものをみんなで作り上げることを楽しんでいた。
・一部の子だけで話を進めてトラブルになることもあったが、遊びが深まるにつれて役割を交代したり、物を譲るようになってきたりと、友達に対する思いやりの気持ちが芽生えてきた。
・アイドルコンサートごっこを重ねていくことで、音響係や客席側でチケットを売る役割などにも気づき、自分たちで準備をするようになった。その様子を見て輪が広がり、男の子たちも一緒に手伝ったり、アイディアを出し合う姿が見られるようになった。
・普段は恥ずかしがって人前に出ない子が、友達に誘われて一緒にダンスに参加することで、進んで人前に出て踊ったりするようになった。繰り返し楽しむうちに自信がついてきた様で、見てもらいたい、認めてもらいたい気持ちがでてきた。
・共通の目的ができたことにより、アイドルコンサートごっこを始める際に友達同士で声をかけあい、準備や片付けなど率先して進めるようになった。
・コンサートごっこで自信がついてきた様で、「お父さん、お母さんや１号認定の友達にもコンサートを見せたい。」という声があがるようになり、誕生会の演目にもつながった。
・年長児が遊んでいる様子を見て、年少・年中児も真似して一緒に遊ぶようになり、ダンスの振付や衣装の作り方を教えて楽しんでいた。

年少児を呼んで、曲に合わせてパペットを動かして見せている場面。

友達と試行錯誤しながら、協力して衣装作りをしている。

男の子達が「うちわ売り場」を準備している場面。チケットも必要だと話し合っている。

誕生会の演目に、アイドルコンサートを披露する。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・友達と教え合ったり考えを受けとめる様子を、保育教諭が気付いて「それ、いいね」など肯定的な言葉をかけていくことで、子ども達同士でも認め合う言葉がでてくるようになった。
・保育教諭が話し合いの場を意図的に作っていたが、実践を通して子ども達自身で話し合いをするようになった。消極的な子もメンバーの一人として、自然と輪の中に入るようになった。
・リードしている子が中心となって話を進めていたが、友達同士と話し合う場で、自分の思いだけではうまくいかないことがあることに気づき、役割を交代する場面も見られるようになった。
・他クラスの職員にも協力してもらい、年少・年中児を連れてアイドルコンサートごっこの様子を見てもらったり、質問をしてもらったことで、幼児自身でどのようにコンサートをするか工夫したり、考える機会を持つことができた。
・アイドルだけではなく裏方など出来る役割を見つけて、クラス全体で同じ目的を達成し、楽しさを共有することができた。
・年長児を真似て年少・年中児も一緒に遊びに参加するようになり、関わりが増えた。ダンスの振付や衣装作りを通して、小さい子のお世話をすることを楽しんでいた。

②　課題

・幼児一人一人に目を向けて話しかけるようにしたが、同じように話を聞いたり、機会を与えることへの難しさを感じた。
・実践スタートが夏休み始めから２学期前半までの、２号認定の２１名の幼児たちの取り組みとなった。２学期が始まり、１号認定の幼児たちも一緒にコンサートごっこに参加する子もいたが、２学期の行事が始まり､担任も切り替えの週となったので､１号認定の幼児にとって十分に遊ぶ機会がもてなかった。
・ドキュメンテーションを作っておらず、取り組みの後半に保護者に向けてドキュメンテーションで伝えた。活動のスタートから日々の様子や幼児の成長をドキュメンテーションにして、教室に掲示して保育教諭が話題にしたり、自分や友達の取り組む様子を可視化することで、さらに興味・関心を持って振り返ることが出来たと思われる。

③　実践を通した自身の気づき、考え方

保育教諭が意図的に肯定的な言葉を発する事により、幼児同士でも良いことを言葉にして伝えることが増えたと感じた。消極的な子が人前に出て踊ったり、裏方でそれぞれ自分の役割を自己発揮したりと、主体的に動くようになったのも、自分自身を温かく受け入れてもらえる場や、他者に認められる喜びを実感できたからこそだと思う。

また、ミーティングで情報共有を行い職員同士の連携を図ったことで、年少・年中児が年長児の遊びの様子を見学に来て一緒に遊んだり、年少・年中児から憧れの存在として見られるようになるなど、幼児同士の関わりが増えた。消極的な子も自信をもって年下の子に教えたり、お世話する姿がみられるようになった。

今回の実践は、園全体を巻き込んでの取り組みとなり、幼児の成長を共有できたことも嬉しく思う。

Ⅴ　今後の実践に向けて

アイドルコンサートを実現するために、幼児同士で工夫したり協力しながら、お互いを認め合える姿が見られた実践となった。今後は、一人一人の幼児の実態や内面の良さに目を向け、十分に自己発揮ができているか、確認しながら関わっていきたい。また、友達同士で遊ぶ中で、共通の目的が生まれるように、子どものつぶやきに耳を傾け、アンテナをはって環境構成を工夫できるように努めていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成３０年　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館
無藤隆　２０１７年　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領ハンドブック』 学研教育みらい

様式３「課題研究レポート」

友達と過ごす楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫
―基本的生活習慣の自立と遊びを通して―

浦添市立　内間こども園　教諭　氏名　普天間　愛未

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、デジタル化が急速に進むと同時に新型コロナウイルス感染症が流行し、社会問題となった。その影響として子ども同士の関わりや実体験の機会の減少が考えられる。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第２章第４節「人間関係」において「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。」と示されている。また、内容の（１）「保育教諭等や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。」とあり、さらに内容（３）「自分でできることは自分でする。」と記されており、自立することや人と関わる力の大切さを改めて感じる。

本学級は男女各９名、計１８名の３歳児学級で、ほぼ全員集団経験があるにもかかわらず、園生活に慣れるのに時間がかかった。個々の発達段階や生活経験の差が大きく、一つ一つの行動に声かけや援助が必要な幼児が複数名いる。そのような実態を踏まえ、生活に必要な態度や習慣を身につけ、友達と関わって遊ぶ楽しさを感じられるようになってほしいと考え、本テーマを設定し研究を進めていくことにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 基本的生活習慣（排泄・着脱）を自ら身につけていけるような環境構成と援助の工夫

② 幼児が友達に興味や関心をもてるような環境作りと個々への配慮

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

１　実践事例１「排泄・着脱を身につけていけるような環境構成と援助の工夫」

（１）　幼児の実態

・紙パンツの子もいれば排便時のお尻拭きに挑戦している子もいる。また、握力が弱くトイレットペーパーをちぎる力がない子や大量に巻き取ってしまう子もいる。

・着脱の際「できない、やってー」の声が多い。また全身裸のまま排泄を済ませに行く子や汚れた服と着替えの服が散乱してしまう子がいる。

（２）　保育者の関りと援助

・個々の排泄間隔に合わせてトイレへの声かけをする。また、トイレ前にペーパーホルダーを設置し、いつでも挑戦できるよう環境を作る。

・個々の着替えセットと着替える場所を確保する。絵本を通して自分の身体の大切さを知らせ、絵表示と声かけにより着替え方を意識して取り組める環境と援助の工夫を行う。

（３） 幼児の変容

・４月から３名がトイレトレーニングを開始し、約２か月で１名は自立した。他２名は排便のみ紙パンツを使用しているが、排便の感覚が出てきている。女児がペーパーを巻き取っている姿を見る機会が増えた事により、男児も排便の際に自然と自らトイレットペーパーを取るようになった。

・着替えの際「裸になってるよー」「まちがえちゃった」など、友達同士で声をかけ合い意識する姿が見られるようになった。自分で着替えられるようになると、脱いだ服を畳む子も出てきた。畳んだ子が担任と喜びを共有している様子を他児が見て次々と真似し、２学期後半には畳む習慣もつきはじめてきた。

２　実践事例２「幼児が友達に興味や関心をもてるような環境作りと個々への配慮」

（１） 幼児の実態

・友達に話しかける積極的な子がいる中、なかなか園生活に慣れず、担任と１対１の関わりを求めて遊びに興味がもてない子がいる。また、好きな遊びを見つけられず、友達の遊びを見て１日の大半を過ごす子もいる。

（２） 保育教諭の関りと援助―E 児の場合―

・安心感を得られるように、本児の様子や欲求に応じて手を繋ぐなどスキンシップを図り、安定した情緒の中で安心して過ごせるように配慮する。

・個々の幼児の実態を踏まえ、興味に合わせた環境作りや遊びの充実を図り、時期を見て集団遊びを取りいれていくことで友達に興味をもつきっかけを作る。

６月頃
１人遊び
→
７月頃
友達に興味を持ち始める
→
１１月頃
集団遊びを経験
→
１２月頃
友達と同じ空間で
ままごとごっこ

（３） E 児の変容

・担任との関係性ができてくると安心したのか、次第に遊びへも興味をもつようになった。遊びの種類を増やしたり新しい活動を取り入れる中で好きな遊びを見つけられるようになり、一人遊びを十分経験すると他児が遊んでいる遊びにも興味が湧いてきた。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・排泄や着脱は毎日繰り返し行う活動だが、声かけだけでなく絵表示や絵本など視覚的な教材を用意することで、３歳児なりに自分達で確認しながら意欲的に進めて行く力がついたと感じた。

・遊びの充実に力を入れたが、E 児はなかなか遊びへ興味がもてていなかった。そこで、保育の基本に戻り、個の発達段階の把握と理解、さらに信頼関係を築くことを意識して援助を行った。すると、次第に笑顔で登園する日が増え、活動にも意欲的になった。

②　課題

・基本的生活習慣は同じ動作の繰り返しなので飽きてくると意欲低下が見られ、手を抜くことが増えてくる。意欲をもって取り組み、身につくまで声かけや援助の工夫が必要である。

・入園してから２、３カ月は複数名の幼児が同時に担任との１対１の関わりを求めてくるので、援助や配慮することが難しかった。どのような方法があるか更に模索していきたい。

③　実践を通して自身の気づき、考えなどを書いてください

園では同じ年齢の子が集団を形成して生活をしているので、互いに刺激し合い、友達に褒めてもらえることで意欲が引き出され自信となる利点があると思う。一方、個人差に対しては、実年齢や集団という枠にとらわれず、幼児一人一人の実態に合わせて援助する保育も大切にしたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○ 課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなどを書いてください

今回「基本的生活習慣の自立と遊びを通して」をサブテーマに研究を進めていく中で、研究を振り返ると活動に焦点を当てている事が多かった。子ども達の実態を踏まえた時に、いろいろな内面の動きがありその部分を捉えた事例も取り上げることで、より深みがある研究になったのではないかと考える。今後は、子ども達の内面の動きと保育教諭の環境と援助の工夫に焦点を当てた研究もしてみたい。

〈主な参考文献〉

日本建築学会　２０１４年　こどもの環境づくり事典　青弓社

川原佐公他５名　２０１４年　０～５歳児の発達と援助がわかる生活習慣百科　ひかりのくに

遠見才希子　２０２１年　だいじだいじどーこだ？　大泉書店

様式３「課題研究レポート」

主体的に遊びを楽しむ子の育成
―運動遊びを通じて―

浦添市立　内間こども園　教諭　氏名　高宮　藍

Ⅰ　テーマ設定の理由

社会環境や生活様式の変化から、子どもの体を動かして遊ぶ機会が減少している。体力や運動能力の低下といった体の問題だけでなく、意欲の低下や社会性の発達など心の問題にも大きく関与していると考えられている。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の第２章第４節（1）心身の健康に関する領域「健康」［内容］（4）に「心と体の調和的に促すためには、特定の活動に偏ることなく、様々な活動に親しみ、それらを楽しむことで心や体を十分に動かすことが必要である。」と記され、幼児期に必要な多様な動きの獲得や体力・運動能力の基礎を培うとともに、様々な活動への意欲や社会性、創造性を育むことが大切となる。

本学級の園児の実態としては、4 歳児（３年保育）男児 12 名女児 13 名計 25 名在籍し、活発に遊びを楽しむ子が多い。その中で、友達と一緒に遊びを進めるが一つの遊びが続かいないことや、意見のぶつかり合いから思わず手が出てしまうこともある。また、仲間に入りたいがどうしたら良いのか戸惑う子や、できないことを気にしてしまい満足できる遊びに繋がらない子もいる。そこで、園児が体を動かす楽しさを感じながら、様々なにことに挑戦し、友達と意見を出し合って遊びを発展させていく楽しさを十分に味わえるようになって欲しいと願い、運動遊びを通して研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 多様な動きが経験できる遊びを取り入れる。

② 楽しく体を動かす時間を確保する。

③ 発達の特性に応じた遊びを提供する。

④ 園児一人一人の発達に応じた遊びを提供する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

１　実践記録　フラフープ遊び

（1）環境構成・援助の工夫

① 子どもたちがフラフープを使ってできる動きには、どのような種類（回す、転がす、つかむ、跳ぶ、くぐる、）があるのかを調べ、必要な道具を準備する。

② クラスで取り組める時間を確保する。

③ 保育教諭も一緒に楽しみながら、子ども達の取り組む様子や工夫している姿を認めていくことで、より楽しさが伝えるようにする。

（2）　活動の様子

①　これまで楽しんできたフラフープの遊び方を子ども達と確認し、コーナーを作り、遊ぶ。

② 子ども達に経験して欲しい動きを取り入れ、遊びの中で動きのバリエーション（写真参照）を増やす。

③ 皆に見て欲しい姿があった時には、集まって遊び方を見る。

④　振り返りを行うと、感想や発見したことを話す。

↑牛乳パックで高さを出して跳んでいます。このあと、フープの下をくぐる動きも取り入れています。

↑始めはフープの色を決めて単独で進んでいましたが、最終的にリレー形式に発展していました。

↑転がっているフープをくぐりたい子、フープを転がしたい子で役割を決めて遊んでいます。

(3) 幼児の変容

① 始めは遠くから様子を伺っていた子も、徐々に集まり輪の中に入って遊ぶようになる。

② 試してみると意外と上手くできたことで自信が出てくる。少しずつ変化をつけていくことに楽しさを感じ始めている。

③ 友達の目が気になっていた子も他の遊び方を楽しんだ後から、回す練習を始めるようになった。

④ アイディアを出し合いながら、遊びを発展させようとする姿が現れ、『明日もやろう』と話す声が聞こえてくる。

2　実践記録　氷鬼

(1) 環境構成・援助の工夫

① 子ども達に経験して欲しい動き（走る、止まる、かわす、よける）を取り入れ、遊びの中で動きのバリエーション（座る、くぐる、立ち上がる）を増やす。（写真参照）

② ルールの確認が必要な場面では、皆で考える場を設ける。

③ クラスで取り組める時間を確保する。

(2) 活動の様子

① 慣れてきた頃に遊びのバリエーションを増やすことで盛り上がっていく。

・生活の中で子ども達に経験して欲しい動きを担任間で相談しながら取り入れる。

② ルールの確認を行う。

・遊びの中でも確認が必要な場面でも行い、子どもの意見を反映させる。

③ 鬼役は皆が交替でできるようにした。

・当番グループで分けると、子ども達は分かりやすかった。

⑤ 鬼が全員を氷にできるよう、バリエーションに合わせて鬼役の数を増やした。

↑鬼が氷になった子を視認できるようにポーズを決めると、遊びが続くようになりました。

↑氷になった子が歩き回ると訴えがあったので、皆でルールの確認をしました。

↑保育教諭は、氷になった子が、その場で待てる普段の遊びにはない動きを取り入れました。

↑足の間を通ってもらわないと助からないので、必死に仲間へ助けを求めるようになりました。

(3) 幼児の変容

①ルールの解釈の違いが起きても子ども同士で声をかけ合い、ルールの確認を行うようになった。

②走って逃げるだけでなく避ける、身をひそめる等の方法を子ども自身が考えるようになり、遊びから離れることがなくなった。

③友達同士で声をかけ合い、協力することも遊びの盛り上がりに繋がった。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

様々な遊び方があることで、子どもは自分で遊び方を選び試してみるようになり、繰り返し遊び始めていた。同じフラフープでも、多様な遊び方、遊ぶ場所が多くなることで、できないと気にする気持ちから試してみようと気持ちの変化が現れてきた。遊びが進むと、子ども達同士でアイディアを出し合い、発展していく様子がみられた。自分で選択して遊び始め、友達と意見を出し合って遊びを楽しみ、発展させていく姿は主体的に遊びを楽しむ姿の一つだと考える。

② 課題

一人一人の気持ちを踏まえクラス単独で取り組む時間を確保できるよう職員間の調整を行って進めた。より充実できる活動になるよう進めていくには、事前に計画を立て、行事やほかの活動とのバランスも重要になる。今回は、子どもたちの姿を捉えることを重点に置き進めたが、準備が十分に追いつけていなかった点もあり、計画的に行うことが課題となる。

③ 実践を通した自身の気づき、考えなどを書いてください

子どもが意欲的に活動に参加するようになるには、できるところからはじめ、多様な体の動かし方を経験できるよう進めていき、子どもが思わずやってみたくなるような工夫を行い、くり返し楽しむことでその質を高めながら自信を持たせていくことが重要となる。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○ 課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなどを書いてください

今回の研究を通して、幼児の思いや考えを理解し受け止め、幼児の可能性を理解し進めていくことで、クラスの子ども達が遊びに没頭し、主体的に遊びが楽しめる活動に繋げることできた。

子ども達が充実した園生活を送り、毎日降園する時に『今日も楽しかった』と感じて帰っていく姿を大切にしたい。その為に、保育教諭自身も子ども達と楽しみながら過ごしていくことを続けていく。それだけではなく、理論研究での学びが、幼児の理解と保育の評価が実施できる力となり、子ども達の活動がより豊かなものになると考える。

〈主な参考文献〉

文部科学省　2013 年　『幼児期運動指針ガイドブック　毎日、楽しく体を動かすために』　サンライフ企画

吉田伊津美　2015 年　『楽しく遊んで体づくり！幼児の運動遊び「幼児期運動指針」に沿って』　チャイルド本社

高浜介二・秋葉英則・横田昌子　2003 年　『4 歳児の保育　年齢別哺育講座』　ルック

様式３「課題研究レポート」

主体的に遊び、友達と一緒に活動する楽しさを味わうことができるような環境構成と援助の工夫

―園児一人一人の内面理解を通して―

那覇市　大道みらいこども園　保育教諭　氏名　沖本　理子

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、園児を取り巻く環境にはスマートフォンやゲーム等が身近にあり、自分で遊びを考えたり友達と一緒に思いを伝え合って遊ぶ機会が減っている。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第２章第４節「人間関係」の内容（８）には「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見いだし、工夫したり、協力したりなどする。」とあり、「園児が遊ぶ中で共通の願いや目的が生まれ、工夫したり、協力したりする楽しさを十分に味わうことができるようにすることが大切である。」とある。

本学級は、５歳児（３年保育）男児１８名、女児１３名、計３１名が在籍している。虫探しや製作遊びが好きな子が多い一方、自ら遊びを見つけられず「何したらいい？」と保育教諭に聞いたり、友達と一緒に遊んでいても遊びが広がらないことが多い。このような実態から、日々の保育の評価や指導計画、環境構成について改善が必要と考える。そこで、園児一人一人の内面理解を深め、興味関心を読み取り、環境構成や援助の工夫をすることで、園児が自らやりたい遊びを見つけ、友達と一緒に活動する楽しさを味わえるようになってほしいと思い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　園児を理解する

園児一人一人との信頼関係を築き、園児一人一人の心の動きを探り、内面を理解する。

２　園児が興味関心をもち、主体的に活動できるような環境構成と援助の工夫

園児が興味や関心をもち、関わりたくなるような環境構成をする。

３　友達と一緒に活動したり、繋がりを深めることができるような環境構成や援助の工夫

園児同士が関わりながら、互いのよさに気付き、共通のイメージや思いに向かって工夫したり、協力したりできるような環境構成と援助の工夫をする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例　「作るのって、楽しい！」から広がる友達との繋がり

[園児の姿]４，５月

・「せんせい、何したらいい？」と保育教諭に聞き、自分でやりたい遊びを見つけられない子がいる。

・保育教諭も一緒に遊んでいるときは楽しく遊べているが、保育教諭がその場から離れると子ども同士では遊びが続かなくなる。

[保育教諭の願い]

・遊び込めるような好きな遊びを見つけてほしい。

[保育教諭の援助（〇）　環境構成の工夫（☆）]	[園児の変容]
〇園児一人一人との信頼関係を築く中で内面を理解し、一人一人の興味や関心を探り色々な遊びを提案しながら一緒に遊んでいった。	・保育教諭が一緒に遊ぶと安心して遊び、自分から「〇〇やりたい」「〇〇作りたい」とやりたいことを伝えてくるようになってきた。
☆製作に必要な道具や材料、廃材等の置き場を整理し、園児が好きなように描いたり作ったりできる「せいさくコーナー」を整えた。 ☆作ったものを友達に紹介する場を設けたり、保護者にも見てもらえるように展示コーナーを整えた。 	・製作遊びを楽しむ園児が増えてきた。また、園児同士で作り方を教え合ったり、道具や材料を貸し借りする中で譲りあったりしながら関わりが深まっていった。 ・「今日は何作る？」と友達と相談し、工夫したり協力したりしながら遊ぶようになっていった。

[園児の姿]６，７月

・A 児、B 児が自由遊びの中で自分たちで作ったペープサートを動かしてセリフを言いながら遊んでいる姿があった。

[保育教諭の願い]

・A 児、B 児が遊びをさらに楽しんでほしい。また、A 児、B 児の遊びを友達にも見てほしい。

・友達と一緒に遊びを展開させながら、共通の目的に向かって工夫したり、協力したりする楽しさを味わってほしい。

［保育教諭の援助（〇）　環境構成の工夫（☆）］	［園児の変容］
〇遊びが広がるよう、保育教諭がお客さんになり声をかけたり一緒に楽しんだ。 ☆帰りの会などで遊びを発表する場を設けた。	・「なにしてるの～？」と集まってきた友達もお客さんに加わり「映画館ごっこ」が始まった。 ・A 児、B 児は「映画館ごっこ」の遊びが楽しかった経験から紙芝居も作り、それをクラス全体の前で自信をもって発表する姿も見られてきた。 ・遊びを共有したことでやりたい園児が増え、「映

☆大型紙芝居の台を遊びの中で自由に使えるように教室に用意した。 ☆製作に必要な材料を予測し、製作コーナーに用意しておいた。 ○園児同士がお互いのイメージが共有できずに困っている時には、会話に入り、共通のイメージを持てるように言葉を補ないながら援助した。	画館ごっこ」の遊びが広がった。他児も友達同士でイメージを共有しながらペープサートや紙芝居を作ったり、役割分担しながら“映画館ごっこ”のチケットを作ったりして遊びが広がっていった。

Ⅳ　実践の振り返り

１　成果

園児一人ひとりの内面を理解し、園児の興味や関心を読み取り環境の工夫と改善をすることで、園児が安心感をもち自己発揮しながら主体的に遊べるようになった。また、保育教諭が遊びを一緒に楽しみ園児の思いや遊びを繋ぐ援助を工夫したことで他の園児にも興味や関心が広がり、イメージを膨らませながら友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができるようになった。

２　課題

（1）友達と遊ぶ楽しさや遊びが盛り上がる嬉しさなどをさらに感じられるよう、今後も園児の内面理解をし、園児が主体的に遊びを展開していけるような環境構成の工夫と改善をしていきたい。

（2）園児の主体性が育ってきている中で、園児同士の思いや考えのぶつかり合いが見られることもあるので、それぞれの園児の思いや考えを十分に受け止めながら、園児同士で解決できるように援助の仕方を工夫していきたい。

３　実践のまとめ

今回の実践を通して、園児が今何に興味があるのか、遊びからどのようなことを経験し学びを得ているのか、園児の内面理解の大切さを実感した。また、園児自ら「やりたい」「やってみたい」と思わず関わりたくなるような環境の構成と、その環境が園児の興味や関心に沿っているかどうかを常に振り返り、見直していくことが大切だということを改めて学んだ。

Ⅴ　今後の実践に向けて

園児の育ちを捉え、今後は、共通の目的をもって協同的な活動を継続的に行える環境や根気強く試したり工夫したりすることができる環境の構成をしていきたい。また、一人一人の育ちを支えながら、集団としての高まりを促す援助を行っていきたい。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　厚生労働省　平成 30 年　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館
・文部科学省　厚生労働省　2022 年　『幼保連携型認定こども園における　園児が心を寄せる環境の構成』　フレーベル館

幼児が「自ら食べてみたい」と思う援助の工夫

―色々な食材に興味・関心が持てるような活動を通して－

那覇市樋川みらいこども園　保育教諭　仲原　真衣

Ⅰ　テーマ設定の理由

本学級には、３歳児（６年保育）男児１１名、女児６名、計１７名在籍している。クラスの大半は持ち上がりということもあり、給食時は気の合う友達と一緒に座り、嬉しそうに食事をする姿がある。しかし、野菜や豆類が苦手な子が多く、特に野菜の食感がしっかりと感じられる和え物などは全く食べようとしない子の姿も見られた。また、苦手な食材が入っているメニューがあると泣きだしてしまう子もいた。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「健康」の領域には「保育教諭等や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ」とある。また、第３章第３節「食育の推進」では、「食は、子どもが豊かな人間性を育み、生きる力を身に付けていくために、また、子どもの健康増進のために重要である」と記されている。

そこで、色々な食材に興味・関心を持ち、苦手な食材も自分から進んで食べてみたいという気持ちを持って楽しく食事をしてほしいと願い、テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ 課題に対する具体的な手立て

１　食材に興味・関心が持てるような環境の工夫について

(1) 園庭での野菜栽培を通して野菜の色や形、匂いなどを実際に見て観察していくことで、野菜に興味・関心が持てるように環境や援助を工夫する。

(2) 食に関する絵本の読み聞かせや歌などを通して、色々な食材があることやそれぞれの食材が自分の体を作っていることを知り、楽しみながら食材に興味・関心が持てるような環境構成の工夫をする。

２　自分から進んで食べてみたいと思える援助の工夫について

自分たちで育てた野菜を収穫し、実際に調理して食べることを通して、自分から進んで食べてみたいという気持ちを持って楽しく食事ができるような援助の工夫をする。

Ⅲ 課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例１】～「栄養についての歌や色分け遊びを通して」～

〔幼児の実態〕
・給食時、テーブルに並んだ食事を見て、緑色の野菜が入っている等の見た目の理由から全く食べようとしない子の姿がある。

〔保育教諭の願い〕
・一つ一つの食材に興味や関心を持ち、体の元気を作る色々な役割をしているということを知ることで、“食べてみたい”という気持ちが持てるようにしたい。

〔保育教諭の関わりと援助〕
・栄養に関する絵本の読み聞かせや「えいようのうた」を歌うことを通して、食材のそれぞれの役割について楽しみながら知ることができるように工夫する。
・色々な食材の絵カードを準備し、名前を知らせたり、またその役割について色分け（赤・黄・緑）が楽しめ

るコーナーを設けたりするなど､楽しみながら食材の持つ役割について知ることが出来るよう環境を工夫する。
・テーブルに並んだ給食を見ながら、献立の紹介の中で、どんな食材が使われているのかを子ども達と確認し合うことで、食材に興味・関心が持てるようにする。

〔活動の様子〕

〔幼児の変容〕
・食材の持つ役割について、友達同士で色分けを楽しんでいくうちに、食材の栄養の色を自然と覚えていった。
・給食時に献立の紹介の中で使われている食材を保育教諭が話すと、「ニンジンは緑色の野菜だよね」「牛乳を飲んだら体が大きくなるんだよね」などと話す子の姿が見られるようになった。また、食事中には、「お魚食べたから筋肉モリモリだよ」「早く走れるよ！」などと嬉しそうに保育教諭や友達に伝える子の姿があった。
・給食の食事を見て、「この野菜はなあに？」「これってほうれん草？」などと食材一つ一つに興味・関心を示す姿もみられるようになっていった。

《結果と考察》
・栄養に関する絵本や歌を活用することで、子ども達は色々な食材があることに気づくことができ、また、食材の持つ役割を知るきっかけになったと感じた。色々な食材の役割を知ったことで、給食の一つ一つの食材にも興味・関心を示す姿が見られ、自ら食べる姿が見られた。
・子どもたちの興味・関心を惹くためには、生活や遊びの中で楽しく知っていく体験や環境構成の工夫、また、保育教諭や友達と一緒に取り組むことが大切だと感じた。

【実践事例２】～「園庭での小かぶ栽培を通して」～

〔幼児の実態〕
・食感がしっかりと感じられる和え物が苦手な子が多く、給食時に和え物が出ると「食べたくない」と話す子が数名いるが、友達の食べる姿に関心を示す様子である。

〔保育教諭の願い〕
・園庭で年長児が育てている野菜が日々生長していく様子に興味を持つ姿があることから、育てやすい小かぶの栽培を通して、“どんな味かな？”“食べてみたい”という気持ちが持てるようにしたい。

〔保育教諭の関わりと援助〕
・園庭で栽培する小かぶに興味が持てるよう、誕生会の出し物でおおきなかぶのエプロンシアターを行う。
・プランターに小かぶの種を蒔き、毎日の水やりの中で生長を一緒に喜ぶことで、自分たちで育てた小かぶに愛着が持てるよう援助や声かけを工夫する。
・収穫時には、収穫した小かぶの色や形、匂いなどに気づき、興味が持てるような援助の声かけを工夫する。
・収穫した小かぶを園の調理室で厨房の方に調理してもらい、給食時に皆で食べることで、愛情を込めて育てた野菜を“自ら食べてみたい”と思いながら楽しく食べることができるようにする。

〔幼児の変容〕
・毎日水やりをしていく中で、小かぶの生長を楽しみにする様子があり、「芽が出た！」「葉っぱが大きくなっている！」「かぶが土から出てきている！」などと嬉しそうに保育教諭や友達に知らせる姿があった。
・小かぶを収穫した際は、「丸い！」「色が大根と似てる！」などと実際の野菜を見て気づいたことを伝える姿があった。保育教諭が幼児の気づきを全体に伝えることで、「本当だ！」「僕のかぶは、なんか細長い形だ

よ！」などと気づかなかった幼児も気づきを発見する姿があった。
・自分達で育てた野菜が調理されて出てきていることに喜び、嬉しそうに食べる子の姿があり、その姿を見て、和え物や青野菜が苦手な子も一口食べてみようとする姿が見られた。

〔活動の様子〕

《結果と考察》
・実際に栽培し、毎日水やりをしていく中で野菜に愛着が湧き、その愛着のある野菜を調理してもらい、実際に食べることで、“どんな味なんだろうか？”“食べてみたいな”という気持ちが持てたのだと思う。
・友達と一緒だからこそ、美味しそうに食べる子の姿が刺激となり、苦手な食材も“食べてみようかな”という気持ちに繋がったのだろうと考える。
・野菜苦手な子の中には、一口食べた後、「苦手だった」と話す子もいたが、保育教諭が「自分で食べてみたの！？すごいね！」と褒めると嬉しそうな表情が見られた。

Ⅳ実践の振り返り

１　成果
・栄養に関する歌や色分けを友達や保育教諭と楽しんでいくなかで、食材のもつ役割について興味・関心を持つ姿がみられるようになっていった。
・実際に自分で野菜を育てて、その育った野菜を収穫し給食時に皆で食べるという経験を通して、自ら一口食べる姿がみられた。

２　課題
本研究を通して、苦手な食材も自ら一口食べてみようとする姿が見られた一方で、苦手な食材の大きさや食感によっては、まだ少し抵抗がある様子も見られる。

３　実践を通した気づき
・今回の研究を通して、食材にはそれぞれ役割があり自分の体を作るために必要なものであるということを知ることが、“食べてみたいな”と思うきっかけの一つになると感じた。
・実際に自分で野菜を栽培することで、野菜の日々の生長を見ることができ、その生長を保育教諭が一緒に喜ぶことで、より食材そのものに愛着がわくと感じた。子ども達は自ら野菜の生長を見て、形や大きさ、匂いなどを感じとっていたが、その気づきを保育教諭が子ども達全体に知らせ共有することで、子ども一人一人がそれぞれ意識して気づきが得られると考える。
・友達と一緒に食べることも良い刺激となり、苦手な食材も食べてみようかなと思うことができたと考える。また、苦手な食材も一口食べてみることができたという経験が、その子の自信に繋がっていると考える。

Ⅴ今後の実践に向けて

今後は、本研究で得られた学びを活かし、“食べてみたいな”と思える経験を何度も積み重ねていき、苦手な食材も抵抗なく食べることができるような援助の仕方を工夫していきたい。

〈主な参考文献〉
・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　株式会社フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

互いのよさを認め合い、思いやりの心を育むための環境構成と援助の工夫
―言葉による伝え合いを通して―

那覇市立　城西こども園　保育教諭　氏名　金城　ひかり

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「人間関係」の領域に「（６）自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く」とある。園児は園生活の様々な場面で、言葉で自分の気持ちや考えを伝え合いながら友達との関わりを深めていくと考える。

本学級は、５歳児（３年保育）男児１１名、女児１０名、計２１名の活発で明るく、友達と関わって遊ぶことが好きな学級である。友達を誘って一緒に遊ぶことを楽しむ姿が多く見られる一方で、自分の思いを押し通そうとして強い口調になったり、相手の思いを聞こうとしなかったり等とトラブルが増えてきた。「嫌なことを言われた」、「話を聞いてくれない」等と保育教諭に訴える子も多い。また、園や学級での約束事を理解し、自分のできる事が増えたことで、友達の出来ていない部分を探し、注意をする声も多く聞こえるようになってきた。

このような実態を踏まえ、本研究では、言葉による伝え合いを通して、園児が互いのよさに気付き、認め合い、思いやりを持って友達と関わる為には、どのような環境構成と援助の工夫が必要か、研究を行いたいと考え本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①言葉について考えることができるような環境構成と援助の工夫

・遊びや生活の中で、子ども達が言葉について意識できるよう、絵本を基にした視覚的な環境を工夫する。また、保育教諭自身が思いやりのある言葉掛けの見本となったり、どのような言葉が嬉しいか、傷つくかを考える場を設けたりし、思いやりのある言葉について考えることができるように援助する。

②友達のよさに気付き、伝え合えるような環境構成と援助の工夫

・園生活の中で、友達と一緒に様々な出来事を共有し、友達のよさに気付けるように、互いのよさを伝え合う場を設ける。また、保育教諭が園児のよさや思いやりのある言葉、行動を見逃さずに学級全体に伝え、互いに認められるような環境構成と援助を工夫する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践１】

≪園児の実態≫

・友達と一緒に遊ぶ中で、自分の思いを押し通そうとしたり、トラブルになると相手を傷つけるような言葉を言ってしまったりする姿が見られる。

・『ちくちくとふわふわ』の絵本の読み聞かせを行い、相手を思いやる言葉について考える場を設けたが、まだちくちく言葉を使ってしまい、相手を傷つける姿も見られる。

≪保育教諭の願い≫

・どのような言葉、態度が相手を傷つけるかを考え、遊びや生活の中で意識できるようになってほしい。

・ちくちく言葉をふわふわ言葉に言い換えて、ふわふわ言葉を使って伝えられるようになってほしい。

≪保育教諭の環境構成★と援助●≫

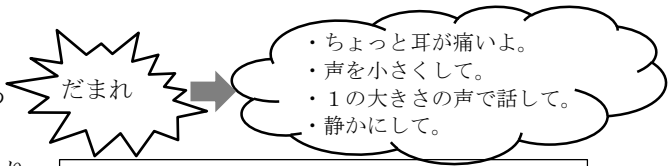
★園児が言葉について、いつでも意識し振り返ることができるよう、集まりの場で出たちくちく言葉をふわふわ言葉に言い換える方法をロッカー上の掲示スペースに貼り、園児が見やすいようにした。

★園児が言い換えを考えることができるように、園児自身が言葉を書いて掲示できるように環境を整えた。

★園児が言葉に興味を持てるように、絵本にあった、ふわふわ言葉だけを通ってゴールする迷路や、言い換えを考えることができるページを出入口に掲示した。

★集まりの場で読み聞かせをした本をロッカーの上に置き、いつでも手に取って読むことが出来るようにした。

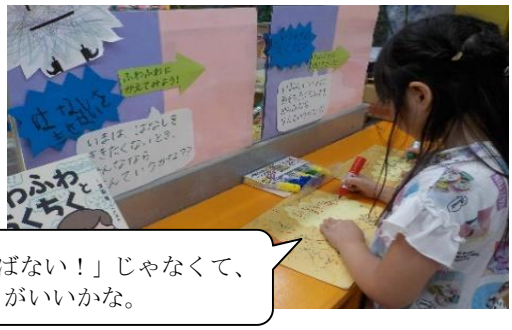
●学級でふわふわ、ちくちく言葉を考えた際に、子ども達が書いた「だまれ」や「うるさい」等の言葉を例として、ちくちく言葉から相手を思いやるふわふわ言葉に言い換える方法を園児と共に考えた。



集まりの時に子ども達から出た、ちくちく言葉（左）を、相手を思いやるふわふわ言葉（右）に言い換える方法

●遊びや生活の中で、相手を思いやる言葉を使っていたり、トラブルになった時にも、自分の考えを相手が傷つかない言葉で伝えようとしたりする姿を認め、継続して相手を思いやる言葉を使うことが出来るように援助を行う。

ふわふわ言葉だけを通ってゴールする迷路に取り組む園児の様子



“今遊びたくない時”は、「遊ばない！」じゃなくて、「この遊びが終わったらね。」がいいかな。

≪園児の変容≫

・トラブルの際には、「それはちくちく言葉だから、嫌な気持ちになったよ」等と“ちくちく言葉”という言葉を用いて自分の気持ちを表現し、話し合う姿も見られるようになった。
・「うるさい」等を、同じ内容であっても、「１の声の大きさでしゃべって。」や「今は静かにする時間だよ。」等と相手が傷つかないような伝え方をする姿が見られるようになった。一方で、相手が傷つかないような言葉を使っているが、強い口調になってしまい、そこからトラブルになる姿も見られるようになった。

【実践２】

≪園児の実態≫

・友達の出来ていない部分ばかりに目を向けて注意する声が多く聞こえ、友達を褒めたり、認めたりする内容の声はあまり聞こえない。

≪保育教諭の願い≫

・友達の出来ていない部分だけでなく、頑張っているところや良いところにも目を向けることができるようになってほしい。
・自分にも、友達にも、それぞれ良いところがあることに気付いてほしい。

≪保育教諭の環境構成★と援助●≫

★『しあわせのばけつ』の絵本や絵本を基にした視覚的な教材を活用したり、友達のよさを書くことができるコーナーを設置したり等、友達のよさに気付くことや気付いてもらう嬉しさを感じられるような環境構成を行った。
★友達のよさや頑張っている姿に気付くことが出来るように、できるようになった遊びを学級全体で紹介する場を設けた。
★自分も友達も、それぞれに良さがあることや認めてもらった嬉しさを感じることができるように、生活や遊びを通して気付いた、友達の良さを伝え合う場を設けた。
●友達の良さに気付き、認め合えるように、保育教諭が園児の良さや思いやりのある言葉、行動を見逃さずに、本人や学級全体に伝える。園児が書いた友達のよさについても集まりの場で共有する。
●互いのよさを伝え合う場において、友達によさを認めてもらったり、友達によさを伝えたりするとどのような気持ちになるかを園児に尋ね、互いに認め合う喜びを感じられるような援助を行った。

今日、○○さんが手伝ってくれたこと書きたい！

○○さんに書いてもらったから、この前見つけた○○さんの素敵なところ書きたい！

なんて書いたの～？

ハートでいっぱいになっている！

こすもす組のバケツいっぱいになった！いいところたくさんだ！

≪園児の変容≫

・「〇〇しちゃだめだよ」等と友達の行動を否定するような言い方から、「〇〇するんだよ」と優しい伝え方をする姿が見られるようになった。
・「〇〇さん、運動遊び頑張っているよね」と友達の頑張りを認める声や応援する声が多く聞こえるようになった。また、友達が頑張ってきた事ができた時には、友達と一緒に喜ぶ姿も見られた。
・学級で話し合って物事を決める場面では、「違うよ」等と否定する声より、「それいいね！」と言って拍手を送ったり、「〇〇もいいんじゃない？」と友達に提案したりする声が聞こえるようになった。
・友達と互いに気付いた、互いの良さについて「一緒に書こう。」と話をしながら、書いたものを見せ合っている姿も見られた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・相手を思いやる言葉を用いたり、優しく伝えたりする姿が見られるようになった。
・友達の頑張りや良さを認め合い、遊びや生活の中で、友達と一緒に頑張ったり喜び合ったりする姿が増えた。
・友達が出来ていないことに気付いた時には、応援したり、「こうやるんだよ。」と教えたりする姿が見られるようになった。
・トラブルになった時にも、すぐに保育教諭に訴えるのではなく、「どうして〇〇って言ったの？」や「〇〇だと思ったんだよ」等と、自分達で思いを伝え合う姿が見られるようになった。
・遊びや生活の中で、共通の目的に向かって取り組む中際、友達の考えに「それいいね！」と賛成したり、「同じこと思ってた！」と思いに共感したりする姿が見られるようになった。
・友達の素敵なところを直接伝えることが恥ずかしい子は、文字で書いて見せたり、「書いたから後で見てね。」と伝えたりして、様々な方法で良さを伝え合う姿が見られた。

②課題

・相手を思いやる言葉でも、強い口調で伝えてしまい、そこから「言い方が嫌だった。」等とトラブルになる場面もあった。相手を思いやる言葉や内容だけでなく、口調についても伝える必要性を感じた。
・学級で友達の良さを伝え合う場として、「〇〇さんの素敵なところを見つけました。」と発表形式で行ったが、友達の中から名前が挙がらなかったり、注目されるのが苦手な子もいた。
　友達の良さを伝え合う場の設け方を考慮する必要がある。

③実践を通した自身の気づき、考えなどを書いてください

　相手を思いやる言葉、傷つける言葉について、具体的な例を出して子ども達と一緒に考えたり、言われた時の気持ちを考えたりしたことで、トラブル時に、自分の気持ちを言葉で伝えたり、自分達で思いを伝え合う姿につながったと考える。また、互いの良さを伝え合ったことで、「〇〇ってほめられた」と嬉しそうにする姿や、「さっき、〇〇さんがトイレのスリッパ並べていたよ」と保育教諭に伝える姿が見られるようになった。このような姿から、普段、大人に褒められることはあっても、友達から褒められたり、友達の良さを伝えたりする経験が少ないのではないかと考え、友達同士で良さを伝え合う場の必要性を感じた。しかし、使う言葉や伝え方、口調は、これまでの経験で身に付いているもので、なかなかすぐには、変容が見られるものではない為、繰り返し伝えたり、日々、子ども達が見て振り返ることができるように掲示したり、考えることができるように関わったりすることが大切だと考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなどを書いてください

・言ってはいけない言葉とわかっていても、相手が傷つくような言葉をふざけて言う姿が見られた事から、言った側は遊びのつもりでも、言われた側は傷つくということも繰り返し伝えていきたい。
・相手を思いやる言葉や内容だけでなく、口調についても“どのように伝えると良いか”等と考えられるような環境構成や援助の工夫に努めていきたい。
・互いの良さを伝え合う場を発表形式ではなく、ペアやグループで伝え合ったり、今日の当番ごとに伝えたりする等して、注目されるのが苦手な子でも参加しやすく、どの子も友達に良さを認めてもらう経験が出来るようにしていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省 2018 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 平成 30 年 3 月』
日本図書センター　2023 年 7 月 25 日『ふわふわとちくちく　ことばえらびえほん』
TO ブックス　2021 年 1 月 5 日『しあわせのばけつ』

様式３「課題研究レポート」

友達と一緒に活動する楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫
―保育教諭や友達との関わりを通して―

那覇市立城南こども園　保育教諭　氏名　山入端　悠香

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第２章第４節「人間関係」の内容の取扱いに、「人と関わる力の基礎は、自分が保護者や周囲の人々に温かく見守られているという安心感から生まれる人に対する信頼感をもつこと、さらに、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって培われる。」とある。また、「園児一人一人が十分に自己発揮しながら、他の園児と多様な関わりをもつことができるように援助し、園児が遊ぶ中で、共通の願いや目的が生まれ、工夫したり、協力したりする楽しさを十分に味わうことができるようにすることが大切である。」とある。

本学級の実態としては、５歳児（２年保育）男児１２名、女児１２名、計２４名（進級児１４名）が在籍し、集団生活の経験がある子がほとんどである。自ら進んで友達や環境に関わり、思いを伝え合いながら遊びを進めようとする子がいる一方で、不安や自信のなさから自分の思いを伝えられず保育教諭の側で過ごす子や、友達との遊びが継続せず途絶えてしまうことがある。

そこでこのような実態を踏まえ、一人一人の幼児理解に努めることを基本に、保育教諭や友達との関わりを通して、友達と一緒に活動する楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫について研究したく本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　幼児が安心して活動できる環境構成や援助の工夫

・幼児の内面に寄り添いながら、幼児理解を深め個に応じた援助の工夫を図る。

②　幼児が自己発揮しながら友達と一緒に遊びが展開できる環境構成や援助の工夫

・幼児が思わずやってみたいと思える遊びや活動の環境構成の工夫を行う。また、保育教諭や友達と様々な関わりの中で、遊びが展開していく充実感や満足感を味わうことができるような援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例（１）

【幼児の実態】
- 初めての集団生活の中で“どんなことをするのかな？”とワクワクした表情を見せつつも、どのように過ごしたらいいのか分からずに戸惑う姿が見られる。
- やりたい気持ちや自分の思いを言葉で表現できずに困っている姿も見られるが、進級児が友達を誘い合って遊ぶ姿を輪の外から笑顔で見ている様子である。

【保育教諭の願い】

・こども園で安心して過ごし、友達と関わって遊ぶ楽しさを感じてほしい。

【保育教諭の援助（〇）　環境構成の工夫（☆）】

〇表情や仕草などから幼児がどのような思いなのか内面を推し量り、温かく関わっていく。

〇新しい環境で不安な気持ちを受け止めつつ、本児が好きな遊びを保育教諭も側で一緒に楽しむことで、安心して過ごせるようにする。

☆クラスの集会の前には友達と触れ合って遊ぶ歌やゲームを通して、友達と関わりみんなで遊ぶ楽しさが感じられるようにする。
（あさのうた・まわせまわせ・イスとりゲーム・貨物列車など）

☆本児が興味関心を示す遊びや歌を取り入れ、自ら進んで遊びたくなるような環境や雰囲気づくりをする。

【A 児の変容】

・友達との直接的な関わりはなくても、友達が遊んでいる場の近くで笑ったり、友達と同じような動きをしてみたりと本児なりに遊びに参加し楽しさを味わっている様子が見られた。
・本児なりの楽しみ方で過ごすうちにクラスの場所が安心する場所となり“こども園で過ごすことが楽しい”と感じ、本児から声を掛けたり、友達の遊びに対して興味をもって保育教諭に話をしたりしている。
・本児の気持ちに共感するような言葉掛けや本児の好きな遊びを保育教諭も一緒に楽しむようにしたことで安心感を抱いていき、少しずつ自分の思いを話していくようになっていった。
・全体での集団遊びを通して友達と関わっていけるようにしたことで、みんなで遊ぶ楽しさを感じ、クラス全体での活動にも喜んで参加するようになっていった。

【考察】

・本児の思いに寄り添い、本児なりの過ごし方を認めていくことで安心してこども園で過ごすことが出来るようになったと考える。また保育教諭との信頼関係を基盤に、友達との関わりへと繋げていくことで園生活に慣れ、様々な遊びに自ら参加していくことができるようになったと考える。

実践事例（２）

【幼児の実態】

・夏休みに地域の祭りに参加し、楽しかったことを園でも保育教諭や友達と会話したりする姿が見られる。
・夏祭りで見たことなどを絵に描いて表現する子、廃材など身近な素材を使って再現しようとする子の姿が見られるが、個々で取り組んでおり、イメージを共有したり一緒に取り組んだりする姿は見られない。

【保育教諭の願い】

・友達との関わりの中で、祭りのイメージを共有しながら考えを出し合い、工夫したり協力したりする楽しさを味わってほしい。

【保育教諭の援助（〇）と環境構成の工夫（☆）】

☆幼児が自分のイメージを実現していけるよう、様々な材料や用具を用意しておく。また遊びの中でイメージを引き出しながら、必要な素材等を一緒に考え、遊びが広がるようにしていく。**→《関わりたくなる環境》**
☆幼児がイメージを共有できるよう、祭りにちなんだ環境を室内の一角に用意し、雰囲気を感じていけるようにする。**→《雰囲気づくり》**
☆作ったものを使って遊ぶことができる場所を用意しておく。
☆幼児の遊びの姿に応じてごっこ遊びの環境を再構成し、クラス全体で楽しめるようにする。
〇幼児の祭りでの出来事を聞き、アイディアを認めたり共感したりしながら地域の祭りでの経験を描いたり作ったりして園での遊びに取り入れていけるようにする。**→《受容》《共感》**
〇幼児が形にしていこうとする姿を見守りつつ、必要に応じて一緒に考えを出したりして遊びが広がるようにしていく。**→《共同作業者》**
〇保育教諭も仲間となり一緒に遊びに参加しながら友達の姿に気付けるように言葉掛けをしたり、友達の考えと繋げられるようにし、やり取りをしながら遊べるようにしていく。**→《橋渡し役》**
〇友達と一緒に作った祭りに関する物を帰りの会など遊びの振り返りの場で紹介し、おまつりごっこへ向けてクラス全体で遊びを進めていけるようにする。**→《遊びを深める》**
〇遊びを進めていく中で困ったことや幼児の中から出た考えをクラス全体で話し合い、イメージを共有し目的をもって遊べるようにしていく。

【幼児の変容】

・ごっこ遊びを楽しむ子が増えていき、友達と思いや考えを出し合いながら遊びを進めていく姿が見られる。作ったものを使って遊ぶことでさらにイメージが広がり「あれも作ろうよ」と遊びが発展していった。
・一度遊んだことで満足している子や、おまつりごっこに興味を示さない子の姿も見られたが、おまつりごっこの環境を再構成したことで、ごっこ遊びが広がり、これまではあまり参加していなかった子もごっこ遊びの様子に興味をもち参加するようになっていった。また自分なりにレジやお金など必要なものに気付きアイディアを出しながらクラス全体でのおまつりごっこへと発展していった。

【考察】

・幼児の遊びの姿から内面を理解し、遊びを繋げる役割や一緒に考えを出したりと援助の工夫をしたことで共通の目的に向かって遊びを進めていこうとするようになっていったと考える。また、幼児の遊びの様子に応じて環境を再構成したことで、クラス全体でのごっこ遊びに発展し、友達と一緒に活動を楽しむ姿が見られるようになったと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・幼児の内面に寄り添い、幼児の姿を肯定的に受け止め温かく関わり個に応じた援助の工夫をすることで安心して園生活を過ごし、身近な環境に関わるようになった。

・幼児が取り組んでみたいと思える遊びや環境構成の工夫を行うことで、友達と一緒に活動する楽しさを味わうことができるようになった。

②課題

・遊びを進めていく中で試行錯誤し、互いを認め合いながら遊びを進めていけるような援助の工夫が必要であると感じた。

・保育教諭自身が幼児教育についての見方、考え方をさらに深め、幼児の遊びや生活が豊かに展開されるように幼児と共によりよい教育及び保育を創造するように努める。

③実践を通した自身の気づき、考え

・保育教諭との信頼関係を基盤に、幼児理解に基づいた環境構成や援助の工夫が大切であると改めて感じた。幼児が友達と一緒に活動する楽しさを味わうためには幼児が主体的に活動を進めていけるように幼児の実態を捉え、夢中になって遊べるような環境構成や援助の工夫を大切にしたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・幼児が互いの良さに気付き、関わりを深め、協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるようにするとともに、他の園児と試行錯誤しながら活動を展開していけるように環境構成や援助の工夫に努めていきたい。

〈主な参考文献〉

○内閣府・文部科学省・厚生労働省　2018 年　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館
○文部科学省　2019 年　『幼児理解に基づいた評価』　チャイルド本社

言葉での関わりを深め、認め合い育ち合う学級作り

―互いの思いに気付き、共感し合える経験を通して―

那覇市立小禄南こども園　保育教諭　根間　浩美

Ⅰ　テーマ設定の理由

本学級は、5歳児（2年保育）男児14名、女児8名の計22名クラスである。好奇心旺盛で活発、園児の発言も多い賑やかなクラスであるが、その中で、「○○さんに嫌なことを言われた」「○○さんが決まりを守っていない」等の、友達との関わりの中で起きた困ったことを、相手の友達にではなく保育教諭に訴える姿が多く見られる。また、帰りの会の中で、その日１日を振り返り楽しかったこと等を発表する場面では、自分の話したいことを話し終えると満足してしまい、友達の話に興味を示さずに話を聞こうとしないような姿も見られる。

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」の第２章第４節「人間関係」の領域には、「(5)友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う。」「(6)自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。」「(10)友達との関わりを深め、思いやりをもつ。」とある。これは、本学級のもつ課題に、深くつながる項目ではないかと考える。そこで、「友達と思いを言葉で伝え合う関わり方を知る」「相手の思いに気付き思いやりの心を育む」ためには、どのように援助や環境構成の工夫をすれば良いのかを探るべく、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

1　友達と思いを言葉で伝え合う関わり方を知るための環境構成と援助の工夫

(1) 友達との関わりの中でトラブルになる場面では、双方の思いの言語化を援助しながら、自分の気持ちを言葉で相手に伝える方法を具体的に知らせていく。

(2) 視聴覚教材等を用いて、関わり方のシミュレーションを示す。

2　相手の思いに気付き、思いやりの心を育むための環境構成と援助の工夫

(1) 保育教諭が園児一人一人の良さを見つけて共有し、友達の良さを知ることができるようにする。

(2) 掲示物等で、友達の良いところを知ることができるような環境を構成する。

(3) 帰りの会等で、自分の良いところを認められたり、友達の良いところに気付いて伝えたりできるような場面を設ける。

Ⅲ　保育計画

月	研　究　計　画
４月～５月	幼児の実態把握・課題の検討
６月	研究テーマの検討
７月～１１月	理論研究・保育実践
１２月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取り組み（実践）

【実践事例 1】

《園児の実態》
- 友達との関わりの中で、「ばか」や「きらい」等の否定的な言葉を使ってしまいトラブルになってしまったり、送迎時に友達の保護者に対して「おばさん」等と言ってしまったりする姿がある。
- 「○○さんに嫌なことを言われた」等、友達の言葉で感じた不快感を、相手の友達にではなく保育教諭に訴える姿がある。
- 友達からの遊びの誘いに、「いや」「だめ」等の否定的な単語のみで応え、トラブルになってしまう場面が多々ある。

《保育教諭の願い》
- 「言われて嬉しい言葉」「言われると嫌な気持ちになる言葉」について知り、場面に応じたふさわしい言葉での関わりをもてるようになってほしいな。
- 自分の気持ちを、自分の言葉で相手に伝えられるようになっていってほしいな。

《保育教諭の関わりと援助》
- 園児との温かな関わりを通して信頼関係を育み、安心して気持ちを表現できるようにする。
- 友達との関わりの中でトラブルになった場合は、仲介して双方の気持ちを聞き取り、代弁することで、自分の気持ちを言語化する援助をしたり、相手の気持ちを知らせたり、どう言えば良かったのかを考えたりできるような言葉かけをする。
- 園児の状況に合った内容の絵本や紙芝居を選び、その読み聞かせ時や、１日を振り返る帰りの会等で、「みんなならどうする？」と問いかけ、自分に照らし合わせて考えたり、友達の考えを聞いたりすることができるようにする。
- クラス全体で「言われて嬉しい言葉」と「言われると嫌な気持ちになる言葉」について話し合い、その中で園児から具体的に挙げてもらった言葉の数々を「ふわふわことば」「ちくちくことば」とわかりやすく分類し、書き出して教室に掲示する。

〔ことばの表の掲示〕

～エピソード～　「Y 児・R 児とのやりとり」

強い口調で言い合いになったＹ児とＲ児。保育教諭と３人でトラブルの原因を振り返り、話をした。

保育教諭「じゃあ、Y さんが最初に『○○』って言ったから、R さんが『○○』って言い返したの？」
Y 児・R 児「うん」
保育教諭「Y さんの言った言葉は“ちくちく”かな、“ふわふわ”かな。」
Y 児「･･･ちくちく」
保育教諭「“ちくちく”って、『うつる』んだよ。お友達に“ちくちくことば”言われたら、“ちくちくことば”言いたくならない？」
R 児「なる！」
保育教諭「ね？“ちくちく”って痛いから、言われた人の心も“ちくちく”になっちゃうんだよ。」
Y 児「あっ！Y のおばあちゃんも、まえバイキンうつって風邪ひいてた！」
保育教諭「そうなんだね、じゃあどうしたら“ちくちく”うつらないと思う？」
Y 児「“ちくちく”言わない！」
保育教諭「そうだね、“ふわふわ”がうつったほうが気持ちいいね。」
Y 児・R 児「うん！」

《園児の変容》
・友達同士で、「それちくちくだよ、ほら！」と掲示物の中の言葉を指さして相手から言われた言葉の不快感を訴えたり、自分の発した言葉について考えたりする姿が見られるようになった。
・友達とのやりとりの中で、「いやだ」「だめ」という言葉ではなく、「あとでね」「ちょっと待ってね」等の言葉を多く使えるようになってきた。
・自分達でトラブルを解決できない際は保育教諭に介入を求めるが、友達に対して自分の気持ちを伝えられるようになってきている。

【結果と考察】
・目に見えない「言葉」を見える形で掲示したことにより、視覚的にわかりやすくなり、園児自身で繰り返し確認したり、友達同士で共有したりすることができた。
・言葉の意味は同じでも、自分の発する言葉によって友達が嫌な気持ちになったり、ならなかったりすることを経験し、友達との関わりの中で使う相応しい言葉を実体験から覚えることができた。
・自分の気持ちを言葉で表現し、友達と関わる方法を身につけることができつつある。

【実践事例 2】

《幼児の実態》
・朝の会や帰りの会等、クラス全体で静かに話を聞くような場面で、頭に浮かんだことをすぐに口に出して話を遮ってしまったり、近くの友達とおしゃべりを始めてしまったりする。
・一斉に絵本や紙芝居等の読み聞かせをしている場面で、「これ見たことある」「次は○○がでてくるよ」等と先の展開を言ってしまい、物語を楽しんでいる友達の集中を妨げてしまう。

《保育教諭の願い》
・状況に合わせて、「話す」「話を聞く」ことができるようになってほしいな。
・一緒にいる周りの人の気持ちも想像しながら、話したくても我慢できるようになってほしいな。

《保育教諭の関わりと援助》
・「先生がみんなに話をしている時は、先生と二人でできる話は言わないで後で話す」ことをクラス全体で約束する。
・集会等の場面で保育教諭の話を遮って話し出す園児には「後で聞いてもいい？」と応え、集会後に話を聞き、話を聞いてもらえた満足感を味わえるようにする。
・話を聞く集中力が弱くなってきた時には、「お話の主役はだーれ？」と声をかけ、集中を取り戻せるようにする。
・「話の続きを先に言ってしまうことは話を聞いている周りの人の楽しい気持ちを邪魔してしまうこと」と、友達の気持ちを考えられるような声かけをする。
・帰りの会等で、一人一人が前に出て自分の気持ちや考えたことを話し、友達に聞いてもらう機会を設ける。

～エピソード～　「K さんのために」

おたのしみ会翌日の朝の会。前日にサンタさんからもらったプレゼントの話で盛り上がりそうになった時、一人の子が、おたのしみ会に欠席してまだプレゼントの内容を知らない K 児の存在に気付いた。
「あっ！K さんがまだプレゼント開けていないから、中身を言っちゃダメ！」「ネタバレ！」と、その場にいる子ども達全員が、K さんのために自分達のもらったプレゼントの内容を言わないようにする姿が見られた。

《園児の変容》
・保育教諭がクラス全体に向けて話をしている場面で、話を遮って話し出す園児の姿は少なくなっている。
・集中が途切れてきた場面で「主役はだーれ？」と問いかけると、「○○さん！」と応え、話している友達に意識を向け直す姿がある。

・読み聞かせ時に話の続きを言ってしまう園児に対して、「ネタバレしないで！」と友達同士で声をかけ合う姿が見られるようになった。
・帰りの会で友達が前に出て発表する場面でおしゃべりの声が聞こえると、発表者のために「静かにして」と声をかける姿が見られる。

【結果と考察】

・みんなで話を聞く場面での具体的な約束事を全体で共有したり、周囲の友達の気持ちを考えられるような声かけをしたりすることによって、自分以外のことも考えて自らの行動を調整できるようになってきたのではないかと考える。
・実際に自分が話す立場に立ち、話を聞いてもらう喜びや、きちんと聞いてもらえない寂しさ等を経験することが、相手の気持ちを想像する（思いやる）ことにつながったのではないかと考える。

Ⅴ　実践のまとめと考察

「友達と思いを言葉で伝え合う関わり方を知る」ためには、自分の気持ちを言葉にする方法や関わりに必要な具体的な言葉を知ること、また、相手の表情や反応から実体験を通して学ぶこと等が必要であると感じた。そして、「相手の思いに気付き思いやりの心を育む」ためには、保育教諭との信頼関係のもとで園児が安心して自己表現できるようになることを基盤とし、自分の気持ちを受け入れてもらうことで、相手の話や気持ちを受け入れられるようになるのだと考える。園での友達との関わりを通しての実体験、そして、保育教諭の適切な援助や環境設定が、園児同士の温かな心のやりとりを育んでいくのだと感じた。

今後は、帰りの会の内容やもち方などに更なる工夫を重ね、より園児の主体性を生かせるものへとステップアップさせていけるよう、その方法を模索していきたいと考えている。そのために、今後も引き続き、幼児理解を深めながら、園児同士の心の結びつきを適切にサポートできるような保育を目指して精進していきたいと思う。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　株式会社フレーベル館

思わずやってみたくなるような環境構成と援助の工夫

―製作遊びやお話作りにおける表現活動を通して―

那覇市立天妃こども園　保育教諭　伊良波　芽依

Ⅰ　テーマ設定の理由

現代の幼児教育の課題として、急速な少子化の進行や情報化の進展等による子ども達を取り巻く状況の変化により、幼児の生活体験が不足していることがあげられる。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第１節　１　幼保幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本（２）①「環境を通して行う教育及び保育の意義」には、「園児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければならない。」とある。このことから、園児が自ら興味や関心を持って環境に関わり、試行錯誤を繰り返しながら、遊びを深めていくことが、幼児の発達には大切だと考える。

本学級は５歳児（３年保育）、男児１２名、女児１５名、計２７名が在籍している。様々な遊びに意欲的に取り組み、絵本や紙芝居、製作物を作り、クラスでの集まりの際に発表したりすることを楽しむ子がいる一方で、同じ遊びを好み、新しい遊びや活動に躊躇してしまう子、自分の思いを伝えることが難しく保育教諭の援助が必要な子の姿が見られる。

そこで、一人一人の幼児理解に努めることを基本に、園児が自ら環境に関わり、友達と一緒に様々な表現遊びを楽しみ、思わずやってみたくなるような心動かされる体験を積み重ねていくにはどのような環境構成や援助の工夫が必要であるのか研究したいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　園児自ら関わりたくなる環境構成の工夫について

園児の興味・関心に沿った環境構成を行い、「やってみたい」と園児自ら遊びや活動を選択し、取り組んでいく中で、試行錯誤を繰り返し、深めていけるような環境構成を行う。

２　表現活動を通して、充実感や満足感を味わうための援助の工夫について

友達がやっている遊びを紹介したり、楽しさや面白さを共有したりしていく。また、園児一人一人の幼児理解に努め、一人一人の表現する姿を認めていき、表現する楽しさを味わえるような援助の工夫を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例１　　「夏祭りでそら組のお店を出店したい！」

≪幼児の姿≫

７月上旬、廃材を使った製作遊びを楽しむ子が増え、食べ物や飲み物を作り、お店屋さんを楽しむ姿が多く見られるようになった。遊びが深まる中で、７月末にこども園の行事として予定されている夏祭りに「そら組のお店を出店したい！」との声もあがる。また、レゴやラキューなど好きな遊びをすることで安定して過ごし、お祭りごっこには興味や関心が薄い子の姿も見られる。

≪保育教諭の願い≫
・様々な遊びに興味関心を広げ、経験する楽しさを味わって欲しい。
・友達とイメージを共有し、思いや考えを伝え合いながら、遊びを進める楽しさを味わって欲しい。
・様々な素材に触れ、工夫して遊ぶ楽しさを味わって欲しい。

≪保育教諭の援助（〇）と環境構成の工夫（☆）≫

〇お祭りごっこを楽しんでいる子ども達を帰り会で紹介し、クラス全体で共有する時間を設ける。

〇子ども達一人一人の良さを把握し、得意なことや好きなことを通してお祭りごっこへ参加出来るよう援助や言葉掛けを工夫する。

〇子ども達が思いや考えを伝え合える時間（こども会議）を設け、一人一人の言葉に共感したり、認めたりと、自信を持って取り組めるよう援助を行う。

☆お祭りのイメージが少ない子もいることを考慮し、イメージが持ちやすいよう絵本や掲示物を準備する。

☆イメージしていることを実現出来るよう、様々な素材を準備し、子ども達が必要なものを自分で選び、工夫しながら製作遊びを楽しめるよう環境構成を行う。

≪幼児の変容≫

・絵本や掲示物でお祭りのイメージを持つことが出来た子が増え、「かき氷とぜんざいを作ってみたい！」とお祭りごっこに興味を示すようになり、自ら遊びに参加する姿が見られるようになった。

・「いいね！」「それ面白そう！」と、友達の思いや考えに共感したり、受け入れたりしながら遊びを進める姿が多く見られるようになった。また、「〇〇さんは、絵が描くのが上手だから看板の絵を描いてくれる？」など、友達の得意なことや良さに気付き、認め合ったりする言葉が多く聞こえるようになった。

・看板作りや商品作りなど自分達で担当を決め、グループごとに協力してお店作りを楽しむ姿が見られた。

・様々な素材に触れる中でイメージを膨らませ、試したり工夫したりしながら製作する楽しさを味わう姿が見られるようになった。

≪結果と考察≫

・お祭りに関する絵本や掲示物を準備し環境構成を行ったことで、夏祭りへのイメージが膨らみ、イメージを共有しながら楽しんでお店作りを進めることが出来たと考える。

・子ども達一人一人の良さを把握し、その子に合ったお店作りの参加の仕方を提案し、認めていくことで、それぞれが楽しみながら、自信を持って参加することが出来たのではないかと考える。

・子ども達が自分の思いや考えを伝え合える時間を設けたことで、互いにアイディアを出し合い、共感したり受け入れたりしながら、遊びを進める楽しさを味わうことが出来たと考える。

・様々な素材を準備したことで素材から商品を連想し、イメージを膨らませて、試行錯誤しながら商品作りを楽しむ姿が見られた。

事例実践２　　「劇団そら（人形劇）をみんなに披露したい！」

≪幼児の姿≫

１２月上旬、折り紙で人形を作り、友達と一緒に物語を作り、役になりきってペープサートを楽しんでいる子の姿がある。また、帰りの会で発表するなど、お話作りだけではなく皆の前で披露することを楽しんでいる子ども達の姿が多く見られる。

≪保育教諭の願い≫

・絵本や物語などに親しみ、イメージを豊かにしたり、自分なりに表現する楽しさを味わって欲しい。

・感じたことや考えたことを自由にかいたり、つくったりして様々な表現方法を楽しんで欲しい。

・自分のイメージを動きや言葉、音などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わって欲しい。

≪保育教諭の援助（〇）と環境構成の工夫（☆）≫

〇読み聞かせを通して子ども達と物語の世界を楽しみ、お話作りの楽しさや面白さを味わえるよう援助する。

〇友達同士で思いや考えを伝え合う姿を認め、主体的に遊びを進めている場面では見守る援助を意識する。

〇活動と遊びの時間を工夫し、劇団そらの人形劇を思い切り遊び込める時間を設ける。

☆子ども達の考えを取り入れながら、劇団そらのコーナー作りを子ども達と一緒に行う。また、楽器やラジカセを準備し、子ども達が自由に触れて、人形劇に取り入れられるよう環境構成を行う。

≪幼児の変容≫

・様々な昔話やグリム童話への興味関心が高まり、絵本に出てくる登場人物を折り紙で作り、絵本の世界をペープサートで表現して遊ぶ姿が多く見られるようになった。

・自分のイメージを言葉で伝え合い、遊びに必要な物を絵や製作物で表現したり、遊びに取り入れたりして楽しむ姿が見られるようになった。また、園生活で経験したことを物語として再現し、表現して楽しんでいる。

・人前に出ることに苦手意識が強かった子も、友達と一緒に人形劇を楽しみ自信を持って発表する姿が増えた。

・劇団そらのチラシを作って配り、様々な保育教諭や友達に披露して楽しむ姿が多く見られるようになった。

≪結果と考察≫

・子ども達が遊びを主体的に進めている姿を見守る援助を心掛けたことで、友達同士で思いや考えを伝え合い、イメージを広げたり、深めたりして遊びを十分に楽しめたと考える。

・遊びの中で子ども達が様々なものを介して表現しようとしている気持ちを捉え、認めたり、自信に繋がるよう援助や言葉掛けを行い、子ども達と一緒に環境構成を行うなど工夫したことで、表現意欲が高まり、表現する楽しさや面白さを味わうことが出来たのではないか。

Ⅳ　実践の振り返り

本研究を通して、子ども達が心動かされる体験を積み重ねていくには、子ども達が遊びや活動に興味関心を抱き、主体的に関わることができるような環境構成や援助が大切であるということを改めて学ぶことが出来た。保育教諭は、子ども達の興味関心が遊びの中でどのように表現されているかを理解しながら、思いや考えを表現するための道具や用具、素材を準備し、子ども達と共に環境を構成していくことが重要であると感じた。子ども達の興味関心が、日常的に触れられたり、探究できる環境を構成していくことが「やってみたい。」と心動かされる経験となり、意欲を高め、主体的に遊びや活動に関わる楽しさに繋がっていくのだと考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

今後の課題としては、子ども達の生活経験や発達に応じて、一人一人の表現方法が様々な形で表現されていることを理解し、丁寧に関わっていくことが大切だと考える。それぞれの表現方法で遊びを楽しんでいる姿を認め、友達と一緒に深めていける環境構成や援助の工夫を努めていきたい。また、これまでの表現活動を十分に生かし、今後の遊びや活動の発展へと繋げていけるよう、継続した環境構成や援助の工夫を行っていく。

〈主な参考文献〉内閣府 文部科学省 厚生労働省 平成３０年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

友達の良さに気づき、一緒に活動する楽しさを味わうための援助の工夫
―お店屋さんごっこを通して―

那覇市立　真嘉比こども園 保育教諭　氏名　﨑枝　華鈴

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章「人間関係」において、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。」と示されており、内容の取扱いの一つに、「人と関わる力を育む上では、幼保連携型認定こども園で安心して自分のやりたいことに取り組むことにより、友達と過ごす楽しさを味わったり、自分の存在を感じたりして、友達と様々な感情の交流をすることが大切である」とある。さらに近年、核家族化や地域近隣の乳幼児と関わる機会が減少していることを踏まえると、幼保連携型認定こども園において、同年代や異年齢の園児同士が相互に関わり合い、生活することの意義は大きいと考える。

本学級の幼児の実態としては、５歳児男児が 12 名、女児が 12 名、計 24 名が在籍し、全員集団保育を経験している。入園・進級当初から自分から好きな遊びを見つけて遊ぶ姿や、友達や保育教諭を誘って遊ぶ姿が見られる。一方で遊びでの意見の食い違いによって強い口調になったり、「〇〇がダメなことをしている」「玩具をかしてくれない」など保育教諭に訴えたりする子が多い。また特定の友達との関わりが多く、広がりが見られない。このような姿から、園児がお互いの良さに気づき、認め合い、一緒に活動する楽しさを味わえることができるような環境構成や援助の工夫について研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１ 保育教諭や友達と関わる楽しさを味わい、園児が安心して自己発揮できるような援助の工夫

園児一人一人の思いを受け止め、活動の充実感や満足感を味わえるようにしたり、友達とのかかわりを重ね、お互いの思いが伝わるようにしたりして、相手の気持ちが伝わるような援助の工夫をする。

２ お互いを認め合い、友達の関わりを深め、一緒に活動する楽しさを味わうための工夫

遊びや活動の中で、友達と様々な心を動かす出来事を経験し、お互いの感じ方や考え方、友達の良さに気づき、より生活が豊かになっていく体験を味わえるような環境構成や援助の工夫をする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例１　「沢山作るぞ！」

＜園児の姿＞

・製作に興味があり、食べ物や自分の作りたいものを表現して楽しんでいる。

・思いが通らないと一方的に主張したり、遊びの場や物を独占してしまったりとトラブルがある。

＜保育教諭の願い＞

・作りたいものを思い切り表現してほしい。

・友達と思いや考えを出し合いながら一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい。

＜◎保育教諭の援助　☆環境構成の工夫＞

◎子ども達の“やりたい！やってみたい！”に応答的に関わっていく。

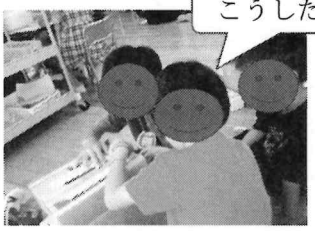
◎自分の思いを一方的に通そうとしてしまう園児に、相手の思いに気づけるように援助したり、自分たちで解決策を見出せるように促したりする。

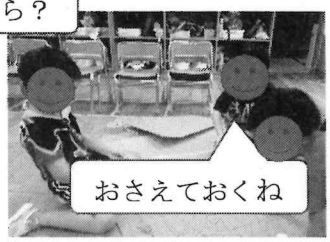
◎帰りの会などで作ったものを全体に共有し、一人一人の良さを発揮できるようにする。

☆作りたいものがすぐに表現できるように、予想される材料や素材を用意しておく。

☆絵本の読み聞かせでイメージを膨らませたり、製作遊びの見本となる視覚教材を取り出しやすいように用意したりする。

〖活動の様子〗





・園児同士でレストランのイメージが広がり、思い思いに食べ物を描いたり製作で作ったりする姿が見られた。
・始めは保育教諭に頼る姿が多かったがレジの作り方が分かり、友達にも作り方を教え合う姿や、手伝う姿が見られた。

実践事例２　「おみせやさんをひらこう」

＜園児の姿＞

・気の合う園児同士で作ったものでごっこ遊びを楽しんでおり、「お客さんを沢山よんでお店やさんを開きたい」とイメージを膨らませている。

・1学期に比べ、特定以外の友達と遊ぶことも増えてきているが、遊びの中のトラブルで強い口調になってしまう子や、反対に自分の思いを伝えられない子も見られる。

＜保育教諭の願い＞

・クラス全体で話し合いなどを重ねながらみんなで楽しくお店やさんを楽しんでほしい。

・目的をもって進める中で、友達と協力する楽しさや喜びを感じてほしい。

・自分の思いを表現し相手に思いが伝わる経験や、認められる経験をして自信をつけてほしい。

＜◎保育教諭の援助　☆環境構成の工夫＞

◎クラスみんなで話し合ったり、決めたりする時には、子ども達からの案で出た「にじぐみ会議」という話し合いの場を、活動の前や帰りの会に時間を設け、一緒に取り組んでいけるようにする。

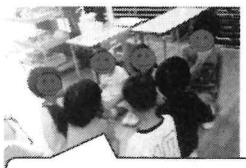
◎子ども達がお互いの意見に耳を傾けたり、折り合いをつけたりしながら活動を進めている姿を見守り、必要に応じて話し合いの仲立ちをする。

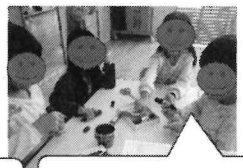
◎お店屋さんの会場ができていく過程で活動がよりよくなっていくことに共感したり、友達のアイディアを周りに伝えたりしながら、一緒に活動する充実感を味わえるようにする。

☆イメージしたものをすぐに実現できるよう、園児と相談して材料を準備し、環境を構成する。

☆お店屋さんごっこ当日の日には、会場の準備や、レジ交代の時間の確保を行い、十分に友達と関わって取り組めるようにする。

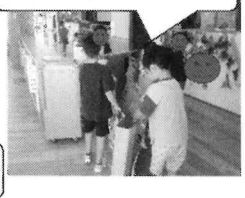
〖活動の様子〗準備～お店屋さん当日





レジは交代にする？

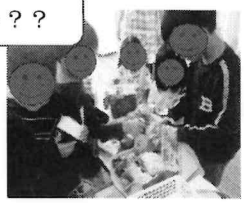
看板も必要だね



みんなで運ぶぞ！

ステージも作って
踊るのはどう？？

いいね！私も踊る！



・にじぐみ会議では、自分の役割を決め、お客さんは誰を呼ぶか、場所など話し合う姿が見られた。
・自分達で必要な物を考えて作り、友達と協力して準備を進める姿が見られた。

Ⅳ　実践の振り返り

1　成果

・製作で表現したいものが作れるようになったことで自信がつき、周りの園児にも作り方を教えてあげる姿や、友達の得意なことに気づき一緒に協力して取り組む姿が見られるようになった。

・にじぐみ会議での話し合いや製作物の準備をする中で、友達と意見がぶつかることもあったが自分達で話し合って解決しようとする姿が増えた。また、友達の思いや考えを受け入れる姿や、自分の気づきを取り入れてくれる友達と楽しみながら準備を進める姿が見られた。

・お店屋さんごっこの後、「〇〇さんとお寿司を売って完売できた！」「(〇〇さんと一緒なら)ダンスやってみる！」など、友達と一緒に活動を通しての満足感を味わう様子が感じられた。

2　課題

個人差もあるため、全園児に変容が見られることは難しかった。また製作活動が好きな園児が多く興味を寄せていたため、お店屋さんごっこまでの活動の展開をしてきたが、他にも表現活動なども好きな園児も多くいたためさらに環境構成や援助の工夫を考えていきたい。

3　実践を通した自身の気づき、考え

保育教諭が園児の思いに寄り添いながら、活動を共にしたことで、様々な製作を試行錯誤しながら諦めずにやり遂げ、自分の力で行う達成感や充実感を味わうことができた。保育教諭との信頼関係の下、自己発揮できるようになったことで、他の園児と積極的にかかわれるようになったと考える。また友達の良さに気づき、一緒に活動する楽しさを味わうためには、お互いの違いに気づく援助を取り入れることや、お互いが認め合うことでより生活が豊かになっていく体験を重ねることが重要であると考える。イメージを共有したり、共通の目的に向かって取り組む中で、葛藤体験やつまづきも大切な学びの機会であり、その気持ちが他者の思いに気付いたり、友達と遊ぶ楽しさに繋がると考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなど

一人一人の発達を捉えて個人差に合わせた援助や環境づくりを行いながら、園児の育ちを長期的に捉え、園児の今体験していることの意味を捉えて環境を構成し活動を展開していき、園児の発達に必要な経験に繋げていけるようにしていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成30年「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館

友達の良さに気付き、協力して活動する楽しさを味わうための援助の工夫
―学級活動や遊びの場を通して―

那覇市立真和志こども園　保育教諭　新垣　遥

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節２（２）「人間関係」内容の取扱い（３）に「園児が互いに関わりを深め、共に活動する中で、皆でやってみたい目的が生まれ、工夫したり、協力したりするようになっていく。この過程の中で、園児は、自分の思いを伝え合い、話し合い、新しいアイデアを生み出したり、自分の役割を考えて行動したりするなど、力を合わせて協力するようになる。」とあり、幼児期に友達との関わりの中で様々なやりとりを楽しみながら協同して活動を進める経験の重要性が記されている。

本学級の幼児の実態としては、５歳児（２年保育）男児１０名、女児８名、計１８名在籍し、好きな遊びを通して保育教諭や友達と一緒に遊ぶことを楽しみ、遊びや生活を意欲的に進めていこうとする姿が見られる。しかし、その中で、遊びが同じ目的に向かっていても、その過程の中で自分のやりたいことと友達のやりたいことが異なると、トラブルが起きる場面が見られる。また、自分の思いを伝えることなく、言われた通りに遊びを進めていたり、友達の思いを聞かずに、自分勝手に遊びを進めようとしたりする場面も見られた。そこで、個々の活動する姿を十分に認めながら、園児が友達の良さや思いに気付いていけるようにし、友達との関わりにおいて心と心を交わす経験を重ね、友達の存在を感じ合い、繋がりを深めてほしいと考える。

そして、集団の中で園児一人一人の良さが発揮され影響し合って、協力して活動する楽しさを味わってほしいと願い、テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　友達と心を動かす出来事を共有し、思いを伝え合える工夫

園児の実態を捉えて幼児理解を深めながら、主体的に周りの環境に関われるような環境構成の工夫を行い、興味関心が広げられるようにする。友達との関わりを楽しむ中で、自分なりの表現の仕方で感じたことや思ったことを相手に伝えて、思いが伝わる嬉しさを感じられるように援助する。

２　友達と一緒に活動を進める中で、友達の良さに気付ける工夫

イメージを出し合いながら友達と一緒に遊びや生活を進める楽しさを味わえるようにし、園児が互いの感じ方や考え方、行動の仕方などに関心を寄せ、それらが行き交うことを通して、それぞれの違いや多様性に気付いていけるよう援助する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例１】「ごっこ遊びを楽しむ（５月～９月）」

園児の実態

・進級児は、人形劇を楽しんだり、自分の好きな曲に合わせて踊ったりと、友達と一緒に遊んでいる。一方で、新入園児は、ままごとや砂遊び等、保育教諭と一緒に環境に関わって遊ぶ子が多い。
・友達との関わりの中で、自分の思いを通そうとする子や自分の思いはあるものの上手く伝えられずにいる子など、学級全体的に言葉でのやり取りが苦手な様子が見られる。

保育教諭の願い

・好きな遊びを通して、気の合う友達を見つけ、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい。
・友達と好きな遊びを進める体験を通して、思ったことや感じたことを相手に伝え、思いが伝わる嬉しさを味わってほしい。

☆環境構成　○保育教諭の援助

☆お店屋さんや人形劇を楽しむグループ、躍りながら歌うグループに分かれて好きな遊びを楽しんでいる為、それぞれの遊びを披露する場所と時間を設けたり、遊びを共有したりと、学級で遊びをこれからどうしていきたいか話し合う時間をつくる。

☆子ども達が遊びのイメージを共有することができるよう、子どもが描いた絵や思い、遊びの写真等を子どもと一緒に貼っていき、遊びを可視化する。→ドキュメンテーションとなる。

☆相手の気持ちを理解しやすいよう絵本を活用し、自分の行動を振り返りながら、友達の良いところに目を向けられるようにする。

○園児同士が話し合う中で、必要に応じて、言葉を補足したり、分かりやすい言葉で伝えたりなど、園児同士の話が伝わり合うよう援助をする。

○友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができるよう、保育教諭も一緒に遊びの中に入り、友達のやっていることを言葉にして伝えていく。また、自分のやっていることや表現しづらい思いを保育教諭が言葉にして伝え、園児が自分の行動を振り返りながら、遊びを深めることができるよう援助する。

園児の変容

・新入園児のＡさん。友達との関わりが少なく、保育教諭と一緒に遊ぶことが多かったが、保育教諭が仲介に入りながら、自分の気持ちを言葉にして相手に伝える経験を積み重ねる中で、気の合う友達を見つけ、自分から遊びに誘う姿が見られるようになった。

・初めて自分たちの活動を他の学級や職員に見てもらい、「すごい。」「かっこいい。」等の言葉をもらい、学級全体が自信をもつ経験となった。その後、自分の力でやってみようとする意欲的な姿が見られるようになった。また、振り返りの場では、「またみんなでやりたい。」「次は何ごっこにする？」等、友達と対話しながら、継続して遊びを楽しむ姿が見られ、遊びが深まっていった。

・初めは一方的な関わりが見られた園児も、互いの思いを伝え合いながら様々な解決法を知ることで、次第に相手の思いに気付くようになっていった。さらに、友達との関係が深まる中で、思いやりの言葉をかけたり、自分達で納得のいく解決策を見いだせるようになったりと、関わりが深まっていった。

【実践事例２】「互いを認め合って楽しんだ運動遊び（10 月～12 月）」

園児の実態

・運動遊びに積極的に挑戦し、できるようになることが増え、自信を持つ姿が見られる。一方で、友達や保育教諭に誘われ運動遊びを始めても、すぐに諦めて好きな遊びを楽しむ姿も見られる。

・振り返りの場面で嬉しかったことを話す際、一人の園児が「〇〇さんに縄跳びの跳び方を教えてもらったことが嬉しかったです。」と発表したことをきっかけに、友達同士で教え合う姿が見られるようになった。

保育教諭の願い

・目標に向かって粘り強く取り組むことで、遊びの面白さを感じるとともに、達成感や充実感を味わい、自信につなげて欲しい。

・友達の良いところや行動に気付き、それを言葉にして相手に伝え合い、互いの良さを認め合って欲しい。

☆環境構成　〇保育教諭の援助

☆運動遊びで自分のできるようになったことや、できるようになりたいこと（目標）を記入できる『目標図鑑』を作り、自分の目標に向かって取り組めるようにする。

☆学級で運動遊びをする時間を設け、友達と励まし合ったり、教え合ったりと互いに刺激し合いながら、友達と一緒だからこそ味わえる楽しさを感じられるようにする。

☆振り返りの場で、友達の良いところや良い行動を発表する時間を設ける。また、ハート形の画用紙に友達の良さを書き、みんなが見える場所に掲示することで、友達の良さに気付けるようにする。

○それぞれの運動遊びでの頑張りをクラス全体に伝え、互いに認め合うことで、友達の良さに気付き、刺激を受けられるようにする。

○運動遊びの楽しさを味わう姿や自分なりの目標を持ち、繰り返し挑戦する姿を認めていく。運動遊びに苦手意識がある子には、コツを伝えたり、気持ちに寄り添ったりしながら、楽しさが味わえるようにする。

○得意な運動遊びをみんなの前で披露する場を設け、友達の良さや頑張っている姿に気付ける機会をつくり、自信につながるよう援助する。

園児の変容

・『目標図鑑』を作ったことで、縄跳びの回数やできるようになったことを書き入れ、自ら運動遊びに挑戦しようとする姿が増えた。また、友達と一緒に挑戦する中で、友達同士で「〇回できたよ。」「この技できるよ。」「〇〇さん、すごいね。」と『目標図鑑』を見せ合いながら、互いに認め合う姿が見られるようになった。
・みんなが見つけた友達の良いところや友達の良い行動を文字にして可視化したことで、周りの子も友達の良さに気付き、声をかける姿が見られるようになった。また、友達に優しい言葉をかけたり、友達が困っている時に助けてあげたりする行動が多く見られるようになった。
・今まで頑張った運動遊びをみんなの前で披露し、保育教諭や友達から認められたことで、自分の頑張りを他者に受け止めてもらった喜びや達成感を味わうことができ、自己肯定感が高まったと思われる。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・園児の発意による遊びを学級活動に取り入れることで、学級の関わりが深まり、大きな集団で遊ぶ楽しさも味わえるようになった。その中で、楽しかったことや気付いたことを伝え合い、感じたことを共有する場を設けたことで、友達の良さに気付き始め、園児同士の関わりが深まった。
・保育教諭の言葉のみで伝えるのではなく、相手の気持ちを理解しやすいような絵本等も活用したことで、自分の行動を振り返ったり、友達の良いところに目を向けたりするようになった。また、身の回りにある良いことや悪いことに気付き、互いに教え合ったり、認め合ったりすることが増えてきた。
・普段の生活や遊びの中で、気付いたことを主体的に取り組んでいる姿やみんなのために努力している姿を園児同士で認めることができ、良い行動が広がり、様々な場面で支え合う姿が見られるようになった。

②課題

・継続して遊びを楽しめるような時間の確保、活動に関心を示すタイミングが異なる子に対する関わり方や保護者への伝え方に難しさを感じた。
・援助の仕方について、保育教諭が全て手助けをした方がよいのか、ヒントを与えるだけでよいのか、また、いつまで援助するべきなのか、園児一人一人の発達に応じた援助の仕方やタイミングに難しさを感じた。

③実践を通した自身の気づき、考え

・協同性が育まれるためには、他の園児と一緒に活動できることを優先するのではなく、他の園児と一緒に活動しながら、それぞれの持ち味が発揮されることで、互いの良さを認め合う関係をつくることが大切だと学んだ。
・保育教諭が園児一人一人の良いところを十分に認めることで、園児が互いの良さに気付くと感じた。さらに、個々が自分らしさを発揮しながら遊びや学級活動に参加することで、集団の育ちにつながると感じた。
・子どもの声や興味関心のあることを遊びや学級活動に取り入れたりする中で、保育教諭が遊びのねらいや園児との関わり方を意識することで、遊びや友達との関わりが深まり、園児の主体的な姿につながると学んだ。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・園児一人一人の発達や特性に合わせた援助ができるよう、園児の行動や心の動きを温かく受け止め、理解しようとする姿勢を持ち、「今、どうしたいのか。」を園児と共に考えたり、解決策を探ったりしながら、園児の気持ちに寄り添った援助をしていきたい。
・園児との対話や日々の保育の振り返りを通して、一人一人の特性や発達の課題を把握し、目前に起こった出来事から、園児にとってどのような意味をもつのかを捉えながら、援助をしていきたい。
・園児一人一人が集団の中で自己を発揮できるよう援助をし、その良さや特徴が生かされ、相互に影響し合って育ち合う学級づくりや集団の育て方について学び続けていきたい。また、今後も園児が友達と思いを伝え合いながら、工夫したり協力したりする楽しさや充実感が味わえるような環境構成や援助の工夫に努めていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　株式会社　フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

楽しく意欲的に基本的生活習慣を身に付けるための環境と援助の工夫

― 一人一人の興味関心や発達段階に合わせた環境構成や援助を通して ―

那覇市立久場川みらいこども園　保育教諭　新垣　菜美

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「健康」のねらいに、「身の回りを清潔にし、衣類の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする。」とある。園生活において、健康に伸び伸びと過ごすことが、園児一人一人が健やかに成長していくための土台となると考える。そのためには、着替えや排泄、食事等の基本的生活習慣の形成を幼児期から育む中で、自分でやり遂げた喜びや満足感、自分でやろうとする意欲へとつなげ、自立心を育むことが大切である。

本学級は３歳児(５年保育)、男児12名、女児７名、計19名が在籍しており、内５名が新入園児である。２歳児からの進級児が多く在籍しているが、クラスの半数以上が登園時に紙おむつを履いている実態がある。また、紙おむつで排泄しても着替えずに遊びを優先してしまう子や、遊びを止めきれずぎりぎりまで我慢して漏らしてしまう子、一人でトイレへ向かうことに不安を感じている子等、トイレで排泄することの心地よさや必要性をあまり感じていない様子が見られる。そこで、一人一人の興味関心や発達段階に合わせた環境構成や援助を通して、自分でやってみたらできたという喜びを味わう中で、基本的生活習慣(本研究では主に排泄について)の必要性に気付き、意欲的に取り組もうとする気持ちや自立心が育ってほしいと願い、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

(1)綿パンツを履くことやトイレで排泄することの心地よさを味わえるような声かけをしたり、トイレで安心して排泄できるようトイレの環境を工夫したりして、安心してトイレへ向かうことができるようにする。
(2)活動の合間や尿意を感じた時にトイレへ行くことで次の活動へスムーズに移ることができる良さを知り、トイレで排泄することの必要性に気付けるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例１　「お兄ちゃん(お姉ちゃん)パンツと紙おむつどっちがいいかな？」

【幼児の姿】
・紙パンツで登園してそのまま過ごしたり、綿パンツに履き替えたがるのを嫌がったりして、綿パンツで過ごすことに慣れていない子が多い。
・一人でトイレに行くことを怖がり、なかなか進んでトイレでの排泄ができない子がいる。

【保育教諭の願い】
・綿パンツで過ごすことによる心地よさを味わい、トイレで排泄をすることが気持ち良いことを知ってほしい。
・一人でも安心してトイレへ入り、排泄できるようになってほしい。

保育教諭の関わりと援助	環境構成の工夫
○紙パンツを履いて登園した子とのやりとり 「 お兄ちゃん(お姉ちゃん)パンツにする？それとも紙パンツにする？」 「先生見て、かっこいい(柄の)パンツあるんだよ」と嬉しそう綿パンツを見せてくれるが、なかなか綿パンツを履こうとしない。 「かっこいいパンツを履いているところも見てみたいな。おむつの上から、履いてみる？」 →自分が綿パンツを履いている姿をイメージしやすくする。また、似合っていて素敵だということを褒めて、綿パンツを履いてみたいと思えるように関わる。 ○綿パンツに履き替えた子とのやりとり 「お姉ちゃん(お兄ちゃん)パンツ履いていてすごいね。もしかしたらトイレでおしっこできるかも！一緒に行ってみる？」 →綿パンツを履いている姿を褒めながら、個々のタイミングを見計らってさりげなく便器での排泄に誘ってみる。排泄に成功したら、一緒に喜ぶ。	☆トイレの前で着替えながら綿パンツと紙パンツの両方を用意してどちらかを選択してもらう。 今日はお兄ちゃんパンツ履きたい！ ☆「お姉ちゃん(お兄ちゃん)パンツ履けたね！今日お姉ちゃん(お兄ちゃん)パンツを頑張って履いたから、特別にスタンプ押してみる？」とスタンプカードを提示し、綿パンツを履けた時やトイレで排泄できた時にスタンプを押していく。 先生、トイレでウンチ出来たらハート♡も描いて！
○トイレが怖くて一人で入れない子とのやりとり 「一緒に行く？ドアの前で待っているから大丈夫だよ」 「ミッキーのトイレ空いていますよ！どうぞ」 「先生、ミッキーもミニーもいるよ！見ててね、おしっこできるから」 →保育教諭等やミッキーなどのキャラクターが見守ってくれているという安心感を得られるようにする。	☆トイレの中(ドアの内側)にキャラクターのイラストを貼り付け、一人でも安心してトイレへ入れるような環境の工夫や声かけをしていく ミッキー見ててね！おしっこ一人でできるんだよ！ ☆排泄に失敗したときは、シャワーをしながら「おしっこしたかったんだね、今度は一緒にトイレに行ってみようね」と温かな声かけを心がける。

【幼児の変容】

・綿パンツを履いたらスタンプが増えていくことを喜んだり、トイレでの排泄の成功体験を重ねたりすることで、自ら綿パンツに履き替えてトイレで排泄する姿が増えていった。また自らトイレに向かう姿を大いに褒めて認めていくうちに、スタンプを押さなくてもトイレで排泄する姿へと繋がった。

・トイレ内が安心して排泄できる場所ということを知ったことで、排尿感を感じたら自分からトイレへ向かって安心して排泄する姿が見られるようになった。

【結果と考察】

・紙パンツから綿パンツへの移行には、綿パンツを履くことに慣れるだけではなく、トイレでの排泄の成功体験を重ねて、達成感や満足感を繰り返し味わうことが大切であることがわかった。

実践事例２　「トイレに行ってから○○しよう」

【幼児の姿】

・全員が綿パンツへ移行できたが、遊びに夢中になるとトイレへ誘っても行かずにぎりぎりまで我慢して漏らしてしまうことがある。

・漏らしてシャワーに行っている間に片付けの時間になったり次の活動が始まったりして「もっと遊びたかった」「みんなと一緒にやりたかった」と泣いたり怒ったりすることがある。

【保育教諭の願い】
・排尿感を感じた時にトイレで排泄することで遊びを中断せずに楽しむことができることや、スムーズに次の活動へ参加できることに気づき、自らトイレへ行って排泄ができるようになってほしい。

【保育教諭の関わりと援助】
○活動の前後にトイレに行く時間を設け、みんなでトイレへ行く時間を作ることで、活動前後にトイレへ行く習慣を身に付けられるようにしていく。貨物列車の替え歌のおトイレ列車で列を作って出発することで、楽しみながらトイレへ向かえるようにしていく。
○「トイレに行ったから園庭でたくさん遊べるね」「今トイレに行ったら、帰りの会の絵本の読み聞かせに間に合うよ」等、活動前にトイレに行くことの必要性を繰り返し伝え、トイレで排泄することでこれからの活動がどうなるか見通しを持てるような声かけをする。
○遊びの途中でトイレへ行くことに気持ちが向かない子には、「先生がおもちゃを見守っておくから、今のうちに行ってきていいよ」と安心してトイレへ行けるよう遊びの時間や遊んでいる状態を保障していく。
○遊びに夢中で漏らしてしまった場合は、遊びたかった気持ちを受け止めつつ、シャワーをしながら「次おしっこしたくなったら一緒にトイレに行こうね」と温かな声かけを心がけ、一人一人の排尿間隔を把握して漏らす前にトイレへ誘って、排泄の成功体験を重ねられるようにする。

【幼児の変容】
・遊びの途中でもトイレに行きたいときに行って大丈夫という安心感を味わう経験を重ねることで、自分のタイミングでトイレへ向かう姿が増えていった。
・「先生、トイレ行ってくるね。」と活動の合間や遊びの途中でも自らトイレへ向かう姿が増えた。また、遊びや活動の途中で漏らしてしまって着替えたりシャワーを浴びたりする時間が減り、次の活動へスムーズに気持ちよく参加できる良さを味わっている。

【結果と考察】
・遊びの途中でトイレへ行きたくない背景として「おもちゃがとられるから」「まだ遊びたいから」という子どもの思いがあった。その思いを受け止め、遊びの時間と遊んでいる状態を保障しつつ、遊びの途中でトイレへ行っても楽しく遊べる環境を整え、一人一人の排尿間隔に合わせてトイレへの誘導の声かけをしたことで、排尿感を感じた時に安心して自分のタイミングでトイレへ向かう姿へと繋がった。

Ⅳ　実践の振り返り

今回は、基本的生活習慣の「トイレでの排泄」に着目して、研究を行なった。3歳児にとって、基本的生活習慣の大切さを言葉だけで伝えることは難しいが、成功体験を重ねて達成感や満足感を味わい、身をもってその大切さや必要性に気付いたことで、自ら取り組もうとする意欲に繋がっていったと考える。一人ひとりの興味関心や発達段階を踏まえた上で、今目の前の子どもにとって必要な援助や環境は何かを常に考えながら実践していくことが、子どもたちの意欲や自立心を育む上でとても大切だと気付くことができた。

また、保護者へ園での排泄の様子を伝えて連携を図ることで「家でも自分で綿パンツに履き替えたりトイレへ行きたいと言ってくれたりするようになった」という声が聞かれるようになった。しかし一方で、まだ家庭では遊びの途中にトイレへ行くことを嫌がったり排便時に紙おむつに履き替えたり等、園と家庭での姿が異なる実態がある。家庭での紙パンツ使用について保護者と連携を図り、排便に関しての援助と環境構成の工夫を深めていく必要性が課題として見えてきた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

今後は基本的生活習慣のトイレでの排泄面、特に排便に関して、絵本や声かけを通してトイレで排便する心地よさや、トイレで排便しても大丈夫という安心感を味わえるような援助と環境構成について実践し、保護者との連携も図りながら排便面に関しても自立心を育めるようにしていきたい。また、本研究を通して育まれた意欲や自信、自立心をきっかけに、「衣服の着脱」や「食事」等の基本的生活習慣についても意欲的に取り組めるよう、一人一人の実態に即した援助を考えていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成30年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』

友達と活動する楽しさを味わうための援助と環境構成の工夫

～身近な生き物に興味や関心をもって関わる体験を通して～

那覇市天久みらいこども園　保育教諭　瑞慶山　翔子

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、情報化の進行により、スマートフォンやテレビゲームなど間接情報を提供する様々な機器に取り込まれて生活をする中で、幼児が室内で一人遊びに没頭する姿が増加傾向にある。

幼保連携型認定こども園要領解説書第２章第４節領域「人間関係（８）」内容に「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見出し、工夫したり、協力したりするなど」とある。幼児が友達と遊びや生活を共にし、様々な問題にも協力したり、思いを伝え合ったりする経験を通して、自分も他者も生き生きするような関係性を築いていくことが重要であるとされている。

本学級の実態としては、４歳児、男児１５名、女児１３名が在籍しており、そのほとんどが進級児や集団保育を経験している。進級・入園当初から、生き物への興味や関心が強く、自分の知っていることを保育教諭に伝える子が多い。一方で、興味はありながらも生き物に対しての関わり方が分からずにその場から離れようとする子や、友達の遊びに興味や関心をもっているが、輪の中に入ることに消極的な園児もいる。このことから、友達と一緒に楽しさを共有したり協力したりしながら遊ぶ経験が不足しているのではないかと考える。

幼児期において、園児が生き物と関わることは、「いたわりの心や思いやりの心」「気づいたことや不思議に思ったことを言葉や絵で表現する楽しさ」「直接体験の中で、探究心や自ら考える力」など様々な力を育むことができる。そこで本研究では、身近な生き物に繰り返し関わる経験を通して、友達や保育教諭と一緒に活動する楽しさを味わって欲しいと願い本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

（１）一人一人が安心して観察したりお世話を楽しんだりしたくなる援助の工夫

保育教諭が園児の興味や関心を温かく受け止め、一緒に考えてみるなど、園児が安心して関わりたくなるような援助を工夫する。

（２）友達とやりとりをしたり、協力したりしながら活動を進めていく為の環境の工夫

生き物と関わる中で、疑問に思ったことや自分自身が感じたことを友達同士でやり取りしたくなるように、環境の工夫を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例（１）園児が安心して興味関心を深めることができるような援助の工夫

～生き物との関わりを通して友達と繋がったＡ児の変容～

【A 児の姿】

・生き物に興味や関心は高いものの、関わり方が分からず直接的に関わる機会が少ない。
・保育教諭と一対一の関りを好んでおり、保育教諭との会話の中では、楽しくおどけてみせるなど、安心して本児らしさを発揮する姿が見られる。
・じっくりと一人で遊ぶことを好み、友達や集団の中で過ごす事に消極的な姿が見られる。

保育教諭の願い

○興味や関心のある遊びや生き物との関りを通して、友達と関わる楽しさを感じてほしい。
○集団生活の中でで、安心して自分自身を表現できる喜びを感じてほしい。

園児の姿　　保育教諭の捉え　　♥援助　★環境構成

・オオゴマダラの幼虫を観察し、色の不思議さや虫の種類など不思議に思ったことを保育教諭に質問する姿が見られる。

・生き物への興味や関心が芽生えている。

♥A 児の行動や心の動きを温かく受け止め、不思議さや面白さなどに共感する言葉かけを行う。
→「わあ！本当だ。一生懸命食べてかわいいね」
★教室に図鑑や虫かごを準備し、思わず調べてみたくなるような環境を準備する。

・幼虫のことを図鑑で調べてみたり、意欲的に関わったりする姿が見られる。また、「B さんみたいな幼虫のお家を作りたい」と、保育教諭に伝える姿が見られる。

・生き物と直接的に関わる経験から、発言が増えている。また、友達が生き物と関わる姿に興味や関心をもっている。

♥友達の関り方に興味をもつ姿を受け止め、本児と友達を繋ぐことができるような言葉かけを行った。
→「B さんのおうち素敵だよね。一緒におうちに必要なものを聞きにいってみる？」

・友達に、幼虫の好きな草花や、お世話に必要なものを教えてもらいながら、幼虫のおうちづくりを楽しむ姿が見られた。その後、発見したことや面白いことがあると、B 児を探し、伝えようとする姿が見られた。

↑友達とやりとりをする A 児

実践事例（２）　友達との繋がりを感じ、やりとりする楽しさを味わうための環境構成

～友達と一緒に遊びを広げる園児の姿～

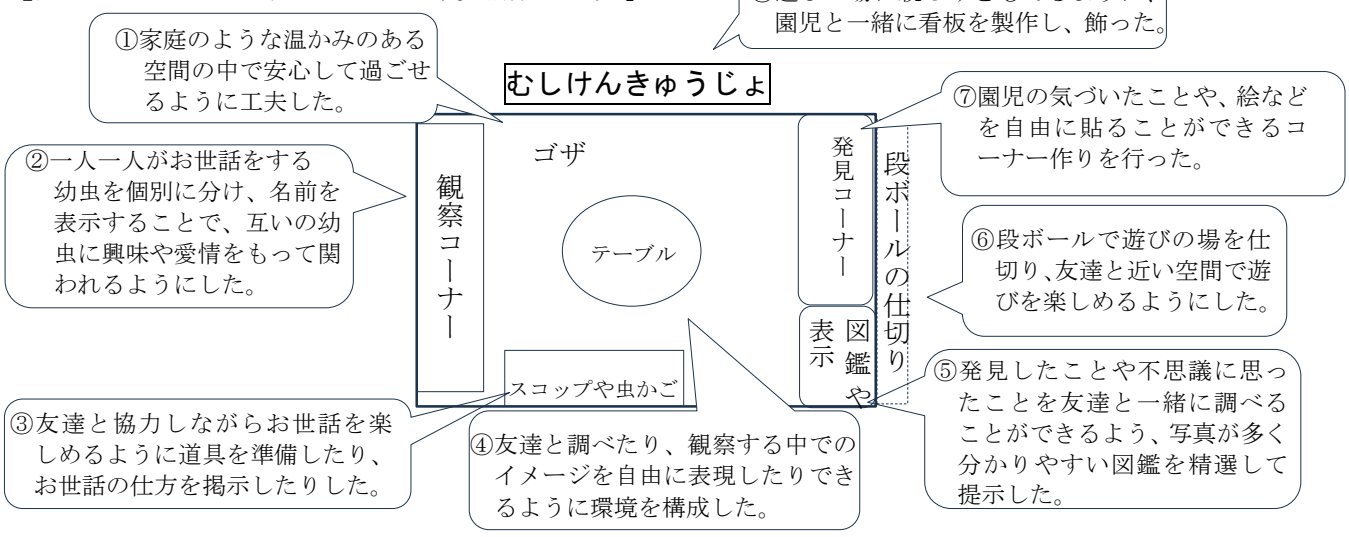
【学級の実態】

カブトムシの幼虫に興味関心をもっている園児が多い。また、実際にカブトムシを世話する経験や疑問に思ったことを図鑑などで調べたりする機会を通して、さらに探究する気持ちが深まっている。

保育教諭の願い

○友達とやりとりをしながら世話をしたり、じっくり観察したりして、楽しさや面白さを共有してほしい。
○遊びや生活の中で自分の思いや考えを自由に表現すると共に、相手に受け入れてもらう嬉しさを感じてほしい。

【友達とやりとりを楽しむための環境構成の工夫】



①家庭のような温かみのある空間の中で安心して過ごせるように工夫した。

②一人一人がお世話をする幼虫を個別に分け、名前を表示することで、互いの幼虫に興味や愛情をもって関われるようにした。

③友達と協力しながらお世話を楽しめるように道具を準備したり、お世話の仕方を掲示したりした。

④友達と調べたり、観察する中でのイメージを自由に表現したりできるように環境を構成した。

⑤発見したことや不思議に思ったことを友達と一緒に調べることができるよう、写真が多く分かりやすい図鑑を精選して提示した。

⑥段ボールで遊びの場を仕切り、友達と近い空間で遊びを楽しめるようにした。

⑦園児の気づいたことや、絵などを自由に貼ることができるコーナー作りを行った。

⑧遊びの場に親しみをもてるように、園児と一緒に看板を製作し、飾った。

【「むしけんきゅうじょ」で過ごす園児の様子】※前ページの環境図の番号に関連して園児の姿を記していく。

①⑧近くに友達がいることに安心し、互いに誘い合ったりやりとりを楽しんだりしながら遊ぶ姿が見られた。

②自分の幼虫と友達の幼虫の大きさや色を比べながらやりとりをする姿が見られた。

③友達とお世話の仕方を教え合いながら意欲的に生き物と関わる姿が見られた。

④　観察したことを言葉だけでなく、絵に描いたり、折り紙を折ったりして表現する姿が見られた。

⑤写真や掲示を見ながら、大きくなった姿を友達と予想し合う姿が見られた。

⑤⑦友達と一緒に図鑑で調べたり、新たな発見を共有したりする姿が見られた。

④⑧むしのことを何でも答える「むしなんでもやさんをつくりたい！」と、次の遊びのイメージをもったり、友達いや保育教諭に伝えてみたりなど、さらに遊びを発展させて楽しむ姿が見られた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

○実践事例（１）を通して

友達とやりとりしたり気づいたことを伝え合ったりする姿が見られたことから、友達に親しみや信頼をもち、安心して園生活を過ごす事に繋がった。

○実践事例（２）を通して～

友達との繋がりを深めながらやりとりしたり、生き物の世話を楽しんだりできるように環境を工夫したことで、友達と一緒に活動したり、協力したりしながらさらに遊びを発展させていく姿に繋がった。

②課題

経験の差から一人一人のイメージや表現に個人差があり、遊びが思うように発展せずに困惑する姿が見られた。

③実践を通した自身の気づき、考えなどを書いてください

・本研究を通して、園児は友達や保育教諭と信頼関係を育む中で安心・安定して園生活を過ごすことができると実感した。その為、保育教諭は、園児一人一人の気持ちに寄り添ったり、友達との繋がりを感じることができるような環境構成を行ったりなど、園児が自分らしさを発揮できるように援助していくことが大切であると考える。

・園生活の中で、友達と活動したり協力したりすることを通して、互いの良さや特性に気づき、人間関係が広がり深まっていくことの重要性を再確認した。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなどを書いてください。

一人一人の興味やイメージを丁寧に受け止め、「好きなことや得意なこと」がさらに輝くようなクラスの雰囲気づくりを行うことが大切であると感じた。また、他者と関わる中で生まれる葛藤も、大切な学びへと繋がるように、一人一人の思いを受け止め、園児と一緒に友達への思いの伝え方を考えてみるなど、援助を工夫していく。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　２０１８年「幼保連携認定こども園教育・保育要領解説」　フレーベル館

・文部科学省ホームページ

様式３「課題研究レポート」

主体的に取り組める環境の構成や援助の工夫

～身近な自然と触れ合う遊びを通して～

糸満市立糸満南こども園　教諭　長嶺　美希

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、スマートフォンやゲーム、インターネットに触れる機会が増え、園児との会話もそれらに関する話題が多いように感じる。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の第２章第４節「環境」の領域には「自然と出会い、感動するような体験は、自然に対する畏敬の念、親しみ、愛情を育てるばかりではなく、科学的な見方や考え方の芽生えを培う上での基礎となるものである」と記されている。園児にとって自然の美しさ、不思議さなどを全身で感じ取る体験はとても重要であると考える。本学級には、4 歳児男児７名、女児５名、計１２名が在籍している。園児の実態として活発で意欲的な子が多く、身近な虫や植物に興味をもって関わり、虫探しや栽培物の世話などに楽しみながら取り組んでいる。しかし、遊びや環境に興味をもちながらも活動の幅を広げられずにいる姿や自分の思いを言葉でうまく伝えられない子の姿も見られる。 そこで、自然と触れ合う遊びを通して、「楽しい」「面白い」と心で感じ、豊かな感性、好奇心、思考力を培うとともに、気づきや発見を言葉で伝え合い、自分の気持ちが伝わる喜びや相手の思い、考えを知ることができるようになってほしいと願い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 自然と触れ合う遊びに興味、関心をもって関わることができるよう環境の構成を工夫する。
② 自然物との関わりの中で好奇心や探求心を育むことができるよう園児に寄り添った援助を行う。
③ 身近な自然との触れ合いを通して自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを聞いたりする場面を見逃さずに記録し、友達同士の会話や関わりが広がるような援助につなげる。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

《園児の実態》
・「太陽があるから野菜が大きくなるんだよ」「（虫取り網を使って）風を捕まえた！」など太陽や風などいろいろな事象に興味、関心をもっている。
・初めての活動に関して「やりたくない」「楽しくない」とマイナスな言葉を発してしまう園児の姿がある。
・自分の思いや考えを言葉にして伝えようとする姿が見られる。しかし、相手の話を聞いたり、思いを受けとめることが難しい時がある。

《保育教諭の願い》

・よりいろいろな事象に興味、関心をもって欲しい。
・五感で感じたことを友達や保育教諭と伝えあう中で、友達と過ごす充実感や喜びを味わって欲しい。
・友達や保育教諭とイメージを共有し、形にすることを楽しんでほしい。

《保育教諭の援助・環境の構成》　★援助　〇環境の構成

〇季節や事象に興味関心をもつことができるような絵本・図鑑を用意する。

★園児が感じたことや気づいたこと、言葉での伝え合いを記録し、ドキュメンテーションを作成する。

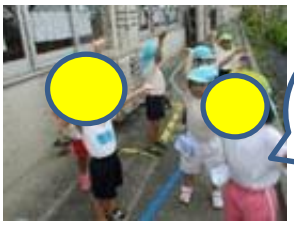
★振り返りの中で気づいたことや発見したことを共有・共感できる場を作る。

〇イメージしたものを形にできるようにクレヨンや絵具等、様々な用具を取り出しやすい場所に用意する。

《活動の様子》

「雨だからお外いけない」「つまんない」と話す子、「ザーッって音がする」「ピチピチじゃない？」と雨に興味、関心をもち窓から眺めたり、音など気づいたことを話し合う姿が見られる。雨に、より興味、関心をもってもらおうと『しずくのぼうけん』の絵本を読み聞かせする。絵本を読んだ後「しずくはどこにいったのかな？」「葉っぱの上じゃない？」「違うよ。土の上だよ」と子ども同士話し合う姿があり、「皆でしずくはどこにいるか探してみない？」と言葉をかけ、しずく探しに出かける。雨の日に外に出ていいの？とびっくりした表情をしていたが「しずくたくさん見つけたい」「どこにいるかな？」とどの園児もわくわくした表情で園庭へでかけた。

　廊下から園庭へ向かう途中、窓にたくさんのしずくを発見しては「いたー」「たくさんいる～！」と見つけては大喜び。園庭にでると鉄棒についたしずくを見て「しずくがぶらさがっている」「どうして落ちてこないんだろう？」じっくりと眺めては気づいたことや感じたことを話す姿も見られた。また、「しずくってこんな形してる」と両手指先をくっつけてしずくのポーズをしたり、「しずくの足跡だ」と帽子についたしずくの跡を見て話す姿も見られた。



しずく手に捕まるかな？

しずくがぶらさがっている！

しずくはこんなかたちだよ

《幼児の変容》

・事前に雨に関する絵本を用意したことで雨の興味、関心が深まり、雨散歩を通して雨のしずくの形や音など友達同士伝え合う姿が見られる。

・園児のつぶやきを見逃さずに雨に興味関心を持つ姿から雨散歩に出かけたことで、ただ雨を眺めるだけでなく「みんなで雨見よう」「静かにして」と子ども同士声を掛け合う姿や音をじっくりと聞いたり「しずくここにも発見！」としずくを探したり、見つけて伝え合う姿が見られた。

《活動の様子》

　しずく探しの振り返りの中で、ドキュメンテーションを作成し振り返ることで雨の音や匂い、発見した場所など様々な声があがった。その姿から、雨のイメージを形にできるよう大きな画用紙や筆、いろいろな色の絵の具、クレヨンを用意し、自由に描くことができるような環境を整える。「しずくは白いよ」「違うよ！水色だよ」「どっちもあるんじゃない？」としずくの色を思い浮かべては絵の具を用意し、友達を誘って描くことを楽しむ。黄色の絵の具で描いている子もいたが「黄色の雨もいいね」と友達の表現を認める姿も見られた。初めて行う遊びをやりたがらない園児も「なにこれ？」「楽しそう」と意欲的に遊びに加わり、友達と一緒に雨を作って楽しんでいる。時には「ぽつぽつ」「ざーっ」など雨の音を真似しながら描いたり、紙を壁に貼って用意したことで、絵の具が流れ落ち、「本物の雨みたい」「おもしろい」とたらし絵の技法で描いてみたりとイメージしたものを表現することを楽しむ姿が見られた。

雨は上から真っすぐ落ちるよ

一緒にやろう！

雨も太陽に当たったら黄色いよ

《幼児の変容》
・雨について気づきや発見を友達と共有したことで、雨やしずくのイメージが膨らみ、よりイメージしながら表現することを楽しむことができた。
・大きな画用紙や筆、いろいろな色の絵の具、クレヨンなど素材や用具を用意したことで、園児の好奇心をくすぐり、初めての活動や遊びになかなか取り組めない子も意欲的に取り組むことができた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・雨＝外にでられない、楽しめないではなく、雨の日だからこそ楽しめるような遊びの工夫をすることで「雨の日もいいな」と感じることができ、友達と言葉でイメージしたことを伝え合う姿につながった。
・ドキュメンテーションを用いて園児一人一人のつぶやきを読み取り、いろいろな用具などイメージを形にできるような環境の構成をしたことで、積極的に遊びに関わったり、友達と一緒に遊びを進める楽しさや嬉しさを感じることができた。
・園児の気づきや発見をみんなで共有することで「自分も発見したい！友達にも知ってもらいたい！」という気持ちが生まれ、雨散歩後も友達同士声を掛け合い雨音をじっくりと聞いたり、「先生、しずくここにもあるよ」と見つけたことを報告したりする姿が見られた。

②　課題

・絵の具を使った雨の表現製作はどの園児も意欲的に取り組んでいたが、画用紙をしずくの形に切って貼る等、はさみやのりを使った製作は、コーナーを整えても取り組もうとする子の姿があまり見られなかった。
・保育教諭は今後の展開として、部屋全体を雨にしてもおもしろいのでは？と考えていたが、園児からは「雨もいいけど晴れがいい」と声があり、展開がうまくできずにいた。

③実践を通した自身の気づき、考え

・雨散歩を通して、園児一人一人の感性の違いや驚きや発見を共有することで他児の興味関心に繋がることの大切さを改めて感じた。園児のつぶやきや声を見逃さずに捉え、遊びの環境を整えていくと園児の瞳が輝き、より主体的に活動を進めたり、自分の思いや気持ちを友達と伝え合い、遊びこむということを実感した。
・今回の研究では身近な自然に焦点を当て雨時期の遊びを実践に取り入れてきたが、雨だから遊べないではなく、どのようにしたら楽しめるのか、できる仕方や方法を考えることの大切さも学ぶことができた。しかし、もっと遊びが充実したり、展開もできたのではと振り返ることで反省点にも気づくことができた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・はさみやのりを使った製作はコーナーを整えても取り組もうとする園児の姿があまり見られなかった。絵の具など好きな用具を取り入れたり、保育教諭も作り方を丁寧に伝えながら、はさみやのりを使って作る楽しさやおもしろさを感じられたらと思う。
・「晴れがいい」の園児の声に柔軟に対応し、晴れにするにはどうしたらいいか話し合う機会を作ったり、園児の声からてるてる坊主や虹を作ったりするともっと遊びが広がったのではないかと気づくことができ、園児の主体性と保育教諭の意図がバランスよく絡み合うことでよい教育・保育ができることを改めて実感した。今後も友達と遊ぶ楽しさを感じられるよう園児の興味、関心を把握し、園児の思いや考えを取り入れ、尊重しながら発達や実態に応じた主体的な遊びが展開できるように本研究を活かしながら教育・保育の質の向上に努めていく。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成３０年３月「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」フレーベル館

様式３　【課題研究レポート】

園児が意欲的に活動できる環境構成や援助の工夫

―身近な自然環境や活動を通して―

糸満市立喜屋武こども園　保育教諭　松田　由野

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の第２章第４節「環境」の領域に「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」と記されている。また、内容の取扱いにおいても「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、園児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、園児が自然との関わりを深めることができるよう工夫すること」と表記されている。

本学級の実態として４歳児１５名である。学級のほとんどが進級児ということもあり、気の合う友達と好きな遊びを見つけて遊び、何事にも積極的に取り組み、活発な子が多い。学級で育てている栽培物に興味を示し、生長の過程を楽しんでおり、葉っぱの大きさや感触の違いに気付き友達に伝えあっている姿も見られる。また、園庭にいる生き物を探して捕まえては飼育ケースに入れ世話をしている。ずっと触ってしまい弱ってしまったり、餌を入れ忘れてしまったりを繰り返している。このような実態から、園児が自ら身近な自然環境に興味・関心をもって関わってみたくなるような活動が展開できるように、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 生き物との関わりを通して友達と一緒に見たり、触れたりする中で、不思議さや命の尊さに触れるような環境構成と援助の工夫
   (1)　身近な生き物に興味をもち、友達と一緒に虫捕りを存分に楽しめるような体験ができるようにする。
   (2)　園児一人一人の気付きを大切にし、気付いたことや発見したことをクラス全体で共有できる場を設ける。

② 園児の好奇心や探求心を育んでいくための援助の工夫
   (1)　栽培物を園児と一緒に保育室近くに植え、世話をしやすい環境を作る。
   (2)　身近な自然環境の中で自ら関わって遊ぶ楽しさや満足感が味わえるようにし、自分で見つけたり、気付けたりするための環境構成の工夫や援助の方法を考えていく。
   (3)　園児が「楽しい」「またやりたい」と自ら様々な活動に取り組めるような環境構成を工夫する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例１　　「また捕まえたいな」

【園児の姿】
・体を動かして遊ぶことや戸外遊びが大好きで、蝶やバッタ、てんとうむしなど園庭で見つけては捕まえて楽しむ姿が見られる反面、捕まえる事に満足し飼育ケースの中に入れっぱなしで次の日まで忘れていることも多い。
・友達と一緒に好きな遊びを楽しむ姿が見られるが、中には保育教諭の側から離れられない園児や、様々な遊びに目移りし、遊びに夢中になれない姿もある。

【保育教諭の願い】
・身近な生き物との触れ合いを通して興味をもち、発見や気づきを楽しんでほしいな。

・生き物と主体的に関わり、生き物への愛着を感じる中で、命の大切さや尊さに気付いてほしい。

【環境構成と保育教諭の援助】
・保護者と一緒に自分専用の虫捕り網を作ったことをきっかけに、地域の公園へ出かけ虫捕りを存分に楽しめるように園外散歩の計画をする。
・園児一人一人の気付いたことや感じたことに耳を傾け、興味・関心が広がるようにしていく。また、遊びの中で振り返りを行いクラスで相談したり、共有したりするなどの機会を設ける。

【園児の変容】
・思う存分虫捕りを楽しむことができたことで「このバッタは小さいから赤ちゃんだよ」「捕まえたらかわいそうだよ」と友達と見せ合いながら逃がす姿も見られた。
・虫かごいっぱいのバッタを見て「こんなに虫かごに入れたら狭そう」「すぐ死んじゃうよ」と言う気持ちと「育てたい」「お世話できる」と自分で捕まえた生き物をクラスで育てたいという気持ちに分かれた。相談をする場を設け「園庭に逃がせばきっとバッタがお友達を呼んで、園庭にもバッタが沢山きてくれるかも」という意見にたどりつき、逃がすことに反対をしていた園児も、「また捕まえるから」と納得する姿が見られた。園庭に放しに行くと「たくさん友達連れてきてね～」「また遊びにきてね」と声をかけながら逃がす園児達の姿が見られた。

Ⅳ　実践の振り返り

【成果】・散歩に出かけ、園とは違う生き物や自然に触れる機会が増えたことで、生き物への興味・関心が高まり、命の大切さを学ぶきっかけになった。
・散歩や虫捕りを通して会話がうまれ友達の輪が広がり気の合う友達に親しみ、関わり合うがようになった。今後も自然や友達と関わる楽しさを感じられる機会を作っていく。
【課題】・園庭に食草が少なく、蝶や幼虫が限られているので、保育教諭も知識を広げ時期に合わせて植えたり、増やしたりしていきながら、園庭遊びが充実できる環境を整えていく必要があると感じた。
【実践を通した自身の気づき、考え】
・園児の探求心を育むための援助の工夫は、保育教諭が日々の行動や言葉を読み取り園児理解をし、言葉かけをしていくことが大切であると感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・命の大切さに触れ、大切に扱おうという気持ちが芽生えてはいるが、「命」や「死」についてまだはっきりと理解できていない。今後の発達に応じて、体験を通して生き物を飼育したり絵本を活用したりしながら引き続き生命の尊さを伝えていきたい。

実践事例２　　「早く園庭行こう」

【園児の姿】
・保育室近くに栽培物が少なく、畑の水やりは習慣づいているが、あまり興味がない。
・草花を集めて砂遊びやままごとをしていても、興味が別に移ると手から離し、雑に扱う姿が見られる。

【保育教諭の願い】
・身近な栽培物に興味をもって関わってほしいな。
・自然物を遊びに取り入れて不思議さや面白さに気付いてほしいな。

【環境構成と保育教諭の援助】
・園児と一緒にアサガオやゴーヤ、きゅうりの苗を植え、日々の生活の中で生長の変化に気付きやすい場所で育てていく。その中で園児の気付きに耳を傾け、共に生長する喜びを共感・共有していく。
・様々な道具を使って繰り返し色水遊びが楽しめるように、遊びの同線に配慮しながら環境を整える。
・絵本を用意し、本物と見比べてみたり、調べてみたりできるようにする。

【園児の変容】
・登園してすぐに「早く園庭行こう」と園庭遊びを楽しみにする様子がみられ、テラスからゴーヤーやきゅうりのツルが日に日に伸びていくことに不思議さを感じ「また大きくなってる」と手を伸ばして長さ比べを楽しむようになった。
・育てている花は“色水に使ったら可哀そう”と自分達で世話しているアサガオを大切にしようとする優しい気持ちが見られるようになった。
・きゅうりの葉を触り「フワフワだ」「サクサクって言っているよ」と面白さに気付いたことを言葉で伝え、共有し合う姿が見られるようになった。
・どの花を使うと何色になるのかと花の形や色の違い、特徴に気付き夢中になってお気に入りの花や、色を混ぜて繰り返し色水を試すようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

【成果】・栽培をきっかけに植物への興味・関心が高まり、遊びの幅が広がって、夢中になって遊ぶ姿へと繋がったのではないか。
・自然に触れる経験の中で、たくさんの喜びや感動、不思議さや面白さを味わい、言葉で伝え合う姿が多く見られた。またクラスの中で共有していくことで、友達の思いにも気付いて遊びを楽しむことに繋がったと思われる。
【課題】・色々な感覚や気付きを大切にし、園生活の中で心動かす体験できる環境作りに努めたい。
【実践を通した自身の気づき、考え】
・日々の振り返りを行い、園児一人一人に寄り沿った援助と、環境構成の見直しの大切さに

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・環境を見直し、園児の興味や活動に合わせて再構成をしていくことが園児の好奇心や探求心も育まれていくための、保育教諭の大切な援助の工夫であるということが分かった。
・季節を感じられるような室内環境を工夫したり、日々の天気の移り変わりや風の冷たさなどの自然環境にも目を向けられるような保育を実践していきたい。

〈主な参考文献〉
内閣府　文部科学省　厚生労働省　２０１８年　『幼保連携認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

食べる喜びや楽しさを味わうための環境構成や援助の工夫

～様々な活動や栽培活動を通して～

糸満市立兼城こども園　保育教諭　金城　夏美

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章「健康」の領域内容（５）の中で「保育教諭等や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。」とあり、内容の取扱いの（４）では、「健康な心と体を育てるためには、食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、園児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で保育教諭等や他の園児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、食の大切さに気付き、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること」と記されている。

本学級の実態としては、４歳児（３年保育）男児１０名、女児７名、計１７名が在籍している。進級して、活動量も増えるため食事量も増えてくる時期であるが、完食できる子は、２，３名程度で、ほとんどの子は、野菜が出ると「たべたくない」と食べたがらなかったり、「へらしてちょうだい」と訴える子もおり、食事を残すことが多い現状があった。そこで、意欲的に食事に向かうためにはどうしたらいいかを考え、クラスの課題を踏まえた上で、遊びや栽培活動を通して食への興味関心を持ち、食べてみようとする意欲や食べる喜び、楽しさを感じられるような環境構成や援助を研究したいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 絵本や遊びを通して野菜や食べ物に興味、関心を持てるようにする。
② 栽培、収穫を通して食物の生長を喜び、調理し食べる喜びが味わえるようにする。
③ 食事に向けて食欲が湧くように活動バランスを配慮する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

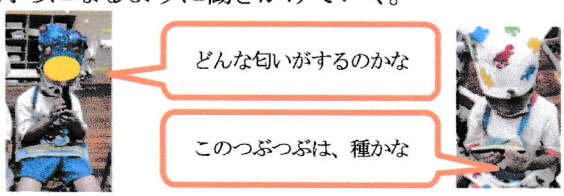
（園児の姿）

・野菜が苦手な子が多く、給食の野菜をほとんど残したり、全く食べようとしない子が多かった。
・食事量も増えてくる時期であるが、食事を残す子がほとんどである。
・食に対する興味関心が感じられず、意欲的に食事に向かう子が少ない。
・製作遊びや粘土、ブロック、パズルなど座って遊ぶ姿が多く、戸外に出ても運動遊びを好む子が少ない。

（保育教諭の願い）

・苦手な野菜も食べてみようという意欲を持ってほしい。
・空腹感を感じ、食べる喜びや楽しさを感じてほしい。
・食に興味関心を持ってほしい。
・自ら進んで運動遊びに取り組めるようになってほしい。

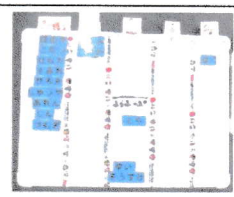
（1）実践事例「食への興味関心を引き出す」　【環境構成(○)援助(★)園児の変容◎】

○環境構成　★援助	◎園児の変容
～野菜シールの取り組み～ ○食事に対しての意欲が感じられなかったので、まずは野菜に興味を示し、食べる意欲に繋がるよう、野菜が食べられたら自分の名前が書かれたシールを野菜の形をした絵に貼れるようにする。 ★一口でも頑張って食べられた姿を褒め、クラスのお集まりでも、シールを貼れた喜び、嬉しさを共有することで次の意欲に繋げるようにする。 **～野菜の栽培を通して、興味関心を持ってほしい～** ★自分の知っている野菜の名前を出し合って、その中からなす、ピーマン、ゴーヤ、スイカ、オクラを育てることを決め、グループで協力して育てられるようにする。 ★毎日の水やりの中で、子どもの気づきや発見に耳を傾け共感したり、お集まりの中で発表したり、生長を掲示して興味関心を引き出すようにする。 **～収穫からクッキング～** ★頑張って育てた野菜を収穫できる喜び、嬉しさに共感し、収穫をクラス全体で共有できるように部屋に収穫した野菜を展示したり、お集まりの中で収穫した時の気づき、感想を発表する。また、どんな料理を作りたいかを決め、クッキングへ繋げていく。 ○自分達で育てた野菜を使ってサラダ作りをする。クッキングでは、野菜の断面を見せたり、匂いを嗅いだりと五感を使って楽しめるようにする。 ★自分達で育てた野菜を使ってサラダ作りをする喜びや嬉しさを共感し、苦手な野菜でも食べてみようの気持ちになるように働きかけていく。 	◎シール貼りがやりたくて苦手な野菜を一口でも食べてみようと挑戦する姿が見られた。 ◎自分が頑張ったことが目に見えて分かるため、食べられた喜びが自信となり、子ども達から「にんじん入ってるからシール貼れるね」「みてーピーマンたべたよ」等、意欲的に食事に向かう子が増えていった。 ◎野菜の生長、変化に気づいて保育教諭や友達に伝える姿や水やりをしてない子がいると、「みずかけしないとかれちゃうよ」と教え合う姿など言葉のやり取りも見られるようになった。 ◎野菜に興味、関心が出てきて、食事に野菜が出ると「ピーマンはいってるよ」「ごーやもあるよ」等、育てている野菜を見つけて自ら食べようとする姿も見られるようになった。 ◎切った野菜の中をじっくりと観察しながら、種がある事、また、野菜によって種の大きさなどが違う事に気付いたりしていた。匂いをしながら「～の匂いに似てるね」と自分の言葉で表現していた。 ◎自分で育てた野菜を使ってサラダを作ったという嬉しさから、苦手な野菜でもまずは食べてみようという姿が見られた。「おいしいね」と友達と嬉しそうに会話をしながら食べていた。

（2）実践事例「活動バランスを考える」　【○環境構成　★援助　◎園児の変容】

○環境構成　★援助	◎園児の変容
○室内では、お集まりの中で体操やダンスを取り入れたり、ケンケンパができるスペースを作ったり、段ボールでバスケットリングを作ったりと体を動かして遊びたくなるようにする。	◎運動遊びにも興味を示し、体を動かすことを楽しめるようになってきた。

○戸外では、運動遊びの興味関心を引き出すために、挑戦カードと名前を付けて、園庭に出る前に挑戦してみたい運動遊びを選び、目的をもって園庭に出て遊べるように働きかけ、体を動かす時間を意図的に取り入れていく。



★健康診断や身体測定の時は、自分の体を大切にすることに気づかせ、食事をしっかり摂ることが健康に繋がることを伝えるようにする。

★「鉄棒で逆上がりできたのは、野菜が食べられるようになったからだね。すごいね」など、食事を摂る事は、体を強くする大切なことであるということを伝え食事と関連付けて声かけをしていく。

◎鉄棒や大縄跳び、縄跳び、リレーなど色々な運動遊びに挑戦し、沢山体を動かすことで「おなかすいた」「お食事何かな？」などお腹を空かせて食事を楽しみにする姿が見られた。

◎「ごはん、沢山食べたから鉄棒ができたよ」「○○ができるようになりたいから野菜食べる」と体を強くするためには食事をしっかり摂らないといけないことが分かり、自ら野菜を食べたり、完食しようと頑張る姿が見られるようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

・野菜シールを始めた事で、苦手な野菜も食べてみようのきっかけづくりができた。また、自分の名前シールを貼る事で、自分の頑張りが目に見て分かり、次の意欲に繋り、「たべられた」が積み重なりその喜びが自信へと繋がっていった。

・話し合いからの自分達で決めた野菜作り、自分達で決めた事で自発的に水やりや観察する姿に繋がったと思う。また、グループで協力して育てる中で、「みずかけしないと」と友達に伝えたりする姿や「おおきくなってるよ」等変化に気付きて会話している姿が見られ大切に育てる気持ちが育まれたと感じる。

・クッキングを通して自分で育てた野菜を食べられるという期待感や嬉しさをもつことができ、苦手な野菜でもまずは食べてみようという気持ちに繋がったと感じた。

・室内での遊びの環境を工夫するなど、運動遊びを意図的に取り入れた中で、お腹を空かせて食事の時間を迎えたことが食欲にも繋がり、完食できた喜びを味わうことができた。

② 課題

食事量も増え、完食できる子や苦手なものでも食べてみようの姿に変わってきたが、まだまだ偏食の子がいたり、食べ方、座り方など基本的な食習慣が身についていない子もいると感じた。園だけでの取り組みだけでは継続していかないので、家庭と連携を図っていきたい。

③ 実践を通した気づき、まとめ

初めの頃は、食事に対して意欲が感じられず保育教諭に促されたり励まされたりしながら食事をする子が多かったが、野菜シールの取り組みや栽培、クッキングを通して、野菜への興味関心がでてきたことと、食事を食べられた喜びを保育教諭や友達と共有する中で、食事する楽しさに繋がっていったように感じた。また、室内や園庭などの活動でも意図的に動の活動を取り入れて、空腹感を感じ食事の時間を迎えるように活動バランスを考えたことで、食事量も増え食べる意欲に繋がったと考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

健康な生活は、十分な睡眠、良い食事、全身を使った活動と休息などの生活の流れの中で営まれていくとある。園と家庭が連携をしていき、園児の健康な体づくりを築きながら充実した生活が送れるように、これからも学び、取り組んでいきたい。

〈主な参考文献〉

平成３０年３月　内閣府　文部科学省　厚生労働省　『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』フレーベル館

様式3「課題研究レポート」

小学校教育へと繋がる園児の発達と学びの連続性を目指して
―園児の主体的・対話的な深い学びに繋がる環境づくりと援助を通して―

糸満市立真壁こども園　保育教諭　氏名　安里　まき子

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第１章第２節１(５)には、「幼保連携型認定こども園においては、その教育及び保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに考慮し、乳幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにするものとする。」と示されている。

本学級の園児の実態としては、５歳児（５年保育）男児２名、女児１１名の計１３名が在籍している。園児の殆どが進級児ということもあり、入園・進級当初から年長児になったことを喜び、身の回りのことを自分で行ったり、好きな遊びを見つけて友達や保育教諭と遊んだりする姿が見られた。また、隣接する小学校にきょうだいが通っていることから、小学校に親しみを持っている子が多い。一方で、遊びや生活の中で保育教諭との関わりを求める子が多く、自信のなさなどから困ったことがあるとすぐに助けを求めたりする姿がある。

そこで、園児一人一人の発達に応じた様々な体験活動を通して、園児自ら「やってみたい」と主体的・対話的に関わることができるようになるためにはどのような環境の構成や援助が必要なのか、遊びや生活を通して園児の育ちや学びの連続性が小学校以降の教育へどう繋がっていくのか理解を深めていきたいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　幼児教育から小学校教育へと繋がる園児の発達や学びの連続性を読み解き、理解を深める

・日々の保育記録や職員間での保育の情報交換などから、園児一人一人の実態を把握する。
・「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」を手掛かりに、遊びの中での園児の育ちや学びが小学校以降の教育へどう繋がっていくのかを丁寧に読み解き、共通理解を図る。

②　園児の主体的・対話的な深い学びに繋がる環境づくりと援助の工夫

・遊びや生活の中で園児一人一人の姿から興味や関心(心の動き)を探り、園児が「やってみたい」と自分から主体的に活動できるような環境づくりをする。
・園児同士の思いや考えを出し合いながらウェビングマップを作成し、遊びや生活をより楽しめる方法を探る。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

１　実践事例(1)　「どんな色になるのかな？」

《　園児の実態　》
・友達と一緒に身近な植物の世話をしながら、見たり、触れたりして生長を楽しみにしている。
・気の合う友達や保育教諭と一緒に好きな遊びを楽しむ中で自分の思いを伝えようとする姿が見られる。
・4歳児の経験から色水遊びなどに興味を示し、花を摘んだり飾ったりする姿が見られる。

《　保育教諭の願い　》
・自然物を遊びに取り入れて楽しむ中で試行錯誤したり、友達の楽しんでいる姿に目を向け、面白さに気付き、遊びの楽しさを共有したりして、より興味や関心が広がってほしい。

《　保育教諭の援助　》
・アサガオなどの花を園児と一緒に育て色水遊びに使って楽しめるようにしたり、必要な用具や道具を用意し、取り出しやすいように種類ごとに分けたりする。
・遊びのなかでの園児の思いや考えを受け止め、遊びのイメージに合わせて使いたい物を一緒に考え、実現できるようにする。
・園児の気付きや発見の言葉を受け止め、自分なりに試したり、工夫したりして遊ぶ姿に共感していく。

・周りの友達にも共有することで、友達の考えや良さに気付いて自分の遊びに取り入れてみたり、イメージを膨らませてよりその面白さや楽しさが広がったりしていくようにする。

《　園児の変容　》
・４歳児の経験から、色水遊びや石けん遊びに必要な道具を考えたり、使い方を友達と相談しながら遊んだりする姿が見られた。
・友達の楽しむ姿から「どうやったの？」と作り方を聞いたり、「あっちにお花があるよ！」「石けんを小さくして水と混ぜてみて！」と友達同士で教え合ったりと思いや考えを伝え合いながら色水遊びや石けん遊びを楽しむ姿に繋がっていた。
・「緑のお茶を作りたい」「何色がいいかな」と自分のイメージしたものややりたいことを実現しようと様々な色の葉っぱや花、道具などを使って試したり、工夫したりして楽しんでいた。

～　幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を手掛かりに、園児の学びや育ちを読み解く　～
・花の種類の違いによる色の変化や特性に気付き、繰り返し試したり工夫したりしている。
（豊かな感性と表現）　（数量や文字などへの関心・感覚）
・自分の作りたい色水のイメージを表現しようと、園庭に咲いている様々な色の花から選んで使っている。**（思考力の芽生え）　（自然との関わり・生命尊重）**
・石けんを削るための道具を考え、様々な道具を使って試してみたり、石けんと水の量を調整したり、花などを混ぜたりすることで泡の変化や感触の面白さを感じている。
（思考力の芽生え（数量や文字などへの関心・感覚）　（豊かな感性と表現）
・友達が楽しむ姿から自分もやってみようと自分の遊びに取り入れて試してみたり、友達に作り方を聞いて、教え合ったりしている。**（言葉での伝え合い）　（協働性）**
・遊びの中で気付いたことや考えたことを友達と伝え合ったり、遊び方を一緒に考えたりしながら遊びを進めていこうとする。**（道徳性・規範意識の芽生え）**

《　結果と考察　》
・身近な自然物を育てたりする経験から遊びに取り入れ、自分なりに試したり、工夫したりすることで花による変化の違いや泡の感触の面白さ、不思議さを感じて遊びを楽しむ姿に繋がっていた。
・一緒に遊ぶ友達の楽しそうな姿から自分なりに遊びに取り入れ、気付いたことや考えたことを伝え合いながら遊びを進めていくことで色水遊びや石けん遊びの興味や関心が広がっていったと思われる。

２　実践事例(2)　「エイサーを見に行こう！」

《　園児の実態　》
・プール交流等を通して小学校のお兄さん・お姉さんに親しみを持っている。また、小学校の休み時間になると運動場で遊ぶきょうだい児や顔見知りの小学生に自分から話しかけて関わろうとする姿や小学校の体育館や運動場から聞こえてくる太鼓の音を聞いて「何をしているのかな？」と気にかけている。

《　保育教諭の願い　》
・小学生のお兄さん・お姉さんが運動会の練習を頑張る姿を身近で見学することで小学校への期待や憧れの気持ちに繋がってほしい。
・興味をもっているエイサーの練習を友達と一緒に見た経験から、「やってみたい」と自分たちの遊びに取り入れて楽しんでほしい。

《　保育教諭の援助　》
・戸外遊びの際に園児と一緒に小学校まで散歩に出掛けたり、運動場などから小学校の運動会の様子を側で見学したりする機会をつくる。
・園児と一緒にウェビングマップを作成し、振り返りの時間に活用することで小学校への興味や関心が広がるきっかけになるようにする。
・エイサーの練習を見学して動きを真似たりする姿から、エイサーの曲やパーランクーを用意してみる。
・小学生への憧れから園児一人一人の「やってみたい」思いに共感し、なりきって楽しむ姿を認めていく。

《　園児の変容　》
・小学校へエイサーを見に、散歩に出掛けたりすることで「小学校って楽しい」と喜ぶ姿が見られた。
・小学生のお兄さん・お姉さんが頑張る姿を間近で見ることで踊りの動きを真似したり、「〇〇のお姉ちゃんがいるよ。頑張れ！」と応援したりして憧れや親しみを持つ姿が見られた。
・エイサーを見た経験から、友達と一緒にクラスでも「音楽を流して！」とエイサーの振りを真似して踊ってみたり、教え合ったりして楽しむ姿に繋がった。
・振り返りでウェビングマップを作成する中で、今日楽しかったことや自分の思いや考えを積極的に発表したり、文字や絵で表現したりして明日の遊びや活動に期待を持つようになった。

《　結果と考察　》
・園児の興味や関心を見逃さず、小学校へ出掛ける機会をつくることで小学生だけでなく小学校の先生とも関わる機会が増え、「小学校って楽しいね」と小学校により親しみを持てるようになったと考える。
・ウェビングマップを活用し、クラスの振り返りの場で園児の思いや考えを園児と一緒に文字や絵などで書き込み、視覚的に共有していくことで明日の遊びや活動への意欲がより高まっていったのではないか。
・小学生への憧れの気持ちからエイサーに興味を持っている姿を捉え、遊びに必要な環境を構成することで「今日もエイサーやりたい！」と自分たちで音楽の準備をしたり、友達と一緒に振りを教え合いながら踊ったりと主体的に遊ぶ姿に繋がっていったのではないか。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果
・ウェビングマップを作成することで、遊びの中での一人一人の興味や関心、園児の思いや考えなどを共有することができ、「明日もやりたい」と園児が主体的に遊びを楽しむ姿に繋がっていた。
・園児の思いや「やってみたい」気持ちを認め、遊びの興味や関心に添った環境の構成を工夫していくことで、一人一人の興味や関心が広がり、遊びや活動に対する意欲が高まっていった。
・幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿を手掛かりに、遊びの中での園児の姿が小学校以降への学びにどう繋がっていくかを職員間で読み解くことで､様々な視点から学びや育ちについて知ることができた。

②　課題
・ウェビングマップの活用の仕方をさらに工夫していくことで､園児の姿から興味や関心がどこにあるのかその内面を捉え、主体的に遊び込める環境の構成や援助の工夫をしていきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて
・今回の研究を通して学んだことを基に、園児が「やってみたい」と主体的に遊び込める環境構成の工夫を行いながら、遊びや活動を通して見られた園児の姿から、何に興味や関心を寄せているのか、どういう育ちに繋がっているかを読み解き、小学校以降の教育へと円滑に繋がる園児の発達や学びの連続性について、自身の学びを深めていきたい。

〈主な参考文献〉
平成 30 年　内閣府　文部科学省　厚生労働省『幼保連携型認定こども園・保育要領解説』フレーベル館

様式３【課題研究報告書】

遊びが豊かに展開される環境構成と援助の工夫
―様々な感触に直接触れ、心動かされる体験を通して―

宮古島市立上野こども園　保育教諭　友利　美菜

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」の領域「環境」のねらい(2)「様々なものに関わる中で、発見を楽しんだり、考えたりしようとする。」とある。この時期の園児は、好奇心を持って周囲の環境に関わり、自分なりにいろいろな方法や視点から探求して、生活や遊びに取り入れ自分のものとしていく力へとつながるものとされている。

本学級の実態としては、２歳児クラス（６年保育）男児４名、女児４名、計８名在籍し、少人数で家庭的な環境の中で、ままごとやブロック、固定遊具等、それぞれでやりたい遊びを十分に楽しんでいる。初めての遊びには慎重な園児が多く、保育教諭に誘われても、見ているだけや泣き出す姿があり、遊び慣れるまでに時間を要し、遊び出してもすぐにいつもの玩具に移ってしまう姿が見られる。

このような実態を踏まえ、園児が期待をもって環境に関わり、試行錯誤しながら生活や遊びに取り入れていこうとする力を育んでいくためにはどのような環境構成や援助の工夫が必要なのかを研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１ 期待をもって環境に関わり、直接的体験ができる環境構成や援助の工夫

期待をもって環境に関わり、様々な感触を味わう中で、発見を楽しみ、直接的な経験を通してじっくりと興味の対象に関わることのできる環境や援助の工夫を行う。

２ 自分の思いを表現として伝えようとする援助の工夫

様々な感覚を十分に働かせることができるような環境構成をし、自分の思いを表現として伝えることへの意欲を高めるような援助の工夫をする。

Ⅲ　保育計画

月	研　究　計　画
4 月～5 月	幼児の実態把握・課題の検討
6 月	研究テーマの検討
7 月～11 月	理論研究、保育実践
10 月	中間検討
12 月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例１】戸外での活動を広げよう

《幼児の実態》

・戸外へ出ると保育教諭の側から離れようとしない園児、固定遊具やコンビカーなどの決まった遊びを楽しむ園児が多い。

・保育教諭や年長児が砂遊びをしていると、興味は持つものの、汚れるとお部屋に戻ろうとしたり、別の遊びへ移っている。

《保育教諭の願い》

・保育教諭と安定した関わりの中で、お友だちやお兄さん、お姉さんの姿にも興味を持ち、「やってみたい」の気持ちを持って遊びの幅を広げてほしい。
・固定遊具だけでなく、戸外での発見を楽しみながら、ダイナミックに遊びを展開させてほしい。

《保育教諭の関わりと援助》

・園児が安心できる遊びを通して一緒に遊びつつ、お友だち、異年齢の存在を感じ、互いに関わりを楽しめるように援助した。
・砂遊びに水を使ったり、雨天時や雨天後にも傘や雨靴を用意して積極的に戸外へ誘い、個々のつぶやきや表情などを大切に思いを受け止めながら、それぞれの遊び方を見守った。
・園児の発見に共感しながら、他児へも伝わるような声かけを行い、遊びを繰り返しながら展開できるように工夫した。
・季節の歌に親しみながら遊びへのイメージがつながるように働きかけた。

《幼児の変容》

・戸外へ出ると、お友だちやお兄さん、お姉さんの遊ぶ姿に興味を持って真似たり、関わりながら、自ら好きな遊びに夢中になる姿が見られるようになってきた。
・砂遊び、雨樋から水を流す、雨の日の散歩、雨天後の水たまり遊び、と段階的に遊びを繰り返すことが出来る環境を用意したことで、雨天時でも「お外に行こう」という声が聞こえるようになり、汚れを気にせずダイナミックに遊ぶようになった。
・Y 児が水たまりに手をついて濡れた為、壁に手をペタッとすると手形がつくことに気づき、お友だちも真似をして楽しんでいるうちに、手形から足形アートにまで遊びが発展し、直接触れて感覚や感性を豊かにしながら、面白さを共有していた。
・直接触れる体験を繰り返すことで、汚れを気にせずにダイナミックに水たまりに入ったり、水がはねる音や水の流れを不思議がる姿など興味、関心の幅が広がり、遊びながらも自然と雨降りの歌を口ずさみながら楽しむ姿が見られた。

《結果と考察》

個々の素直な思いを受け止め、園児が安心できる遊びを保育教諭が一緒に楽しみ、発見や感動に保育教諭が共感することで遊びを発展させていく姿が見られるようになった。なかなか体験できないダイナミックな水たまり遊びを経験したことで、汚れを気にせず遊んだり、遊び終えて着替えをすることで綺麗になる心地よさを感じるなど、園児にとって心動かされる体験となったのではないかと考える。まずは自分のペースでじっくりと楽しめる環境を整え、少しずつアプローチをしながらしかけていくことで、期待を持って様々な感覚を十分

に働かせ、経験を重ねていくことが、諸感覚の発達を促し、園児の世界を広げていくことにつながるのだと感じた。

【実践事例２】　ごっこ遊びを楽しもう

《幼児の実態》

・見立て遊びをする中で、友だちとのやりとりが生まれ、遊びを共有しながらままごと遊びを楽しんでいる。
・ままごとの玩具だけでなく、平均台をベンチやバスに見立てたり、ソフトブロックでお店屋さんをするなど自分達で遊びを考え、発展させている。
・遊びたい気持ちが表現できずに、お友だちの様子を観察するＨさんの姿がある。
・絵本のストーリーを再現し、役になりきって遊ぶ姿が見られる。

《保育教論の願い》

・絵本の物語をイメージしたり、体験したことを遊びや生活に取り入れ、思ったことや感じたことを自分なりの方法で素直に表現してほしい。
・身近な素材や用具に触れ、作った物を遊びに取り入れるなどして遊びを工夫しながら展開させてほしい。

《保育教論の関わりと援助》

・保育室内にあった平均台を園児がイメージしているバスとして、段ボールに絵の具で色塗りを行い、バスを作ったり、絵本や異年齢児の姿で作りたいと興味をもっている園児と共にイメージを具体化させながら表現する楽しさを味わえるようにした。
・園児が興味を持っている絵本を遊びにも取り入れ、じっくりと楽しむ経験をした後に異年齢児との交流の機会も設け、遊びがより発展していくような環境を工夫した。
・保育教論の側にいることが多いＨさんに対して、気持ちを聞き出しながらどうしたいのかを問い、思いを一緒に言葉で伝え、安心できる環境を整えるようにした。

《幼児の変容》

・みんなでバス作りをしたことで、”みんなのバス‘’というイメージができ、「一緒に乗ろう」とプラスな言葉も増え、友だちとの関わりも深まってきた。
・絵本のストーリーから興味を持った‘’せんたくあそび‘’からできた泡で泡遊び、泡に色を付けてカキ氷屋さん等を体験したことで、ごっこ遊びがより豊かになり、生活の中ではタオル絞りに挑戦しようとする姿が出てきた。
・保育教論の側で見ているだけだったＨさんだが、保育教論と一緒に思いを伝える経験を積んだことで、伝わる嬉しさを感じ、安心して素直に表現できるようになってきた。
・年上の真似をして、身近な素材で作った物を取り入れながらごっこ遊びを展開する姿が見られるようになった。

《結果と考察》

絵本の物語を遊びに取り入れたり、異年齢児との交流をしていく中で「やってみたい」という気持ちが芽生え、遊びをじっくりと楽しむ中で、更に身近な素材を活用しながら作る楽しさ、作った物で遊ぶ楽しさを感じることができたと思う。遊びで体験したことを生活の中に取り入れてみたり、「自分でやってみる」、「できた」の失敗、成功体験を繰り返していくことで生活や遊びがより豊かになっていったように感じる。どうしたいのかを問い、園児がイメージしていることを言葉にして具体化さたり、ヒントを与えたりして保育教諭も共に楽しむことで、自分なりにいろいろな視点から探求して新しい遊び方を発見するおもしろさを感じ、充実感や満足感に繋がっていた。

Ⅴ　実践のまとめと考察

・保育教諭の側から離れなかったり、自分の思いを表現できない、泣いて伝える姿がよく見られていたが、まずは安心できる環境を大切にし、個々のありのままの姿を受け止めた。園児が興味を持っていることを捉え、保育教諭も“共に楽しむ“ことを心がけていくことで、園児が自分なりの方法で安心して表現できるようになり、周囲の様々な環境に関わって遊びを広げていくことにつながったと思う。

・様々な感触に自らの体で直接触れることで、驚きや喜びが生まれ、それを保育教諭が共感することで遊びが展開されて更に試行錯誤しながら遊びを進めていく姿があった。すぐに声掛けをしたり、応えたりするのではなく、園児の姿を捉えてまずは見守り、気づきを促していくことの大切さを改めて感じることが出来た。

・発見や感動を受け止めながら、保育教諭がその姿に共感していくことが自信をもって遊びを発展させ、試行錯誤してみようとする姿につながったことから、驚きや喜びを共有することの大切さを改めて実感した。

Ⅵ　今後の課題

・感覚とイメージを結ぶ言葉を添えながら豊かな感性を育み、共感をもって園児の気付きを受け止めていくことを今後も大切にしていきたい。

・心を動かす豊かな体験こそが伝えたくなる、表現につながっていくと考え、やってみたくなるような、ワクワクするような環境の工夫に引き続き取り組んでいく。

・活動に対するねらいを明確にしながら、どのような育ちを期待して、援助したら良いのか、集団と個の関係を捉えていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携認定こども園　教育・保育要領解説」　（フレーベル館）

園児が安心感を持って園生活を送るための保育の工夫

― 人との温かい関わりの中でアタッチメントの形成を目指す ―

宮古島市立伊良部こども園　教諭　下地　智菜

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」第２章、第３節「人間関係」では「園児は自分を温かく受け入れてくれる保育教諭等との信頼関係に支えられて自分の居場所を確保し、安心感をもってやりたいことに取り組むようになる」とある。このことから保育教諭は園児の内面理解に努め、園児一人ひとりの思いに寄り添い、信頼関係の構築をしていくことが大切であると感じる。

本学級は、１歳児クラス（６年保育）男児５名、女児３名、計８名が在籍している。進級園児３名、新入園児５名という構成で新年度がスタートした。

園児の実態としては、「抱っこしてほしい」「手をつないでほしい」などの思いから、特に新入園児は泣いて落ち着かないといった姿がまだまだ見られる。初めての集団生活で、言葉が主体にならない１歳児は言葉の指し示す意味の理解ができず、不安や心配から泣いてしまうなど心の不安定さも見られる。

このような園児の実態を踏まえ、保育教諭は日々保育の工夫を行い、アタッチメントの形成を目指していくことで、一人ひとりの園児が安心感を持って園生活を過ごすことができるのではないかと考え、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　研究内容

１　「自分は守られている」「自分は愛されている」ということを園児が実感できるような保育の工夫

園児、保育教諭、保護者まで保育を広げて捉え、共通認識を図りながら「チーム保育」を行い、園児を中心とした心のつながりを形成し、心理的安全性が保たれた環境の中で安心して自己発揮ができるようにしていく。

２　周囲の人との安定した関係性の中で、安心して遊べるような保育環境の工夫

園児の動きに合わせて室内・外の環境を変化させ、危険のない範囲で意欲の尊重を心がけながら保育を行うようにしていく。

Ⅲ　保育計画

月	研　究　計　画
4 月～5 月	幼児の実態把握・課題の検討
6 月	研究テーマの検討（テーマ設定理由、研究内容、研究計画の検討含む）
7 月～11 月	理論研究・保育実践
9 月	中間検討
12 月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題研究に向けた取組（実践）

【実践事例①】　気持ちをしっかり受け止めてくれる大人がいる

《園児の実態》

・初めて保護者から離れて過ごす新入園児は登園時、活動中も泣いていることが多く、保育教諭に抱っこを求める姿が見られる一方で、信頼関係が構築されていないこの時期は、保育教諭の抱っこを不安がって嫌がる園児もいる。

・抱っこをされてしばらくすると、自ら遊び出す園児もいる。

・進級園児も、新しい環境に落ち着かない姿が見られたり、新入園児が泣いている姿を見て不安を感じて入室を嫌がる園児もいる。

《保育教諭の願い》
・保育教諭の抱っこやスキンシップで安心してほしい。
・こども園は安心できる場所であると感じてほしい。

《保育教諭の関わりと援助》
・泣いている園児にはすぐに対応するようにし、「ママがいいよね」「お家がいいよね」と、園児の思いを受け止め、代弁し、気持ちを共感するようにしている。
・いち早く安心させたいと願っていても、園児の気持ちを無視した保育教諭側の一方的な関わりにならないよう、今何をしたいと思っているのか、抱っこしてほしいのか、してほしくないのか、園児自身が選択できるような関わり方を心がけている。
・泣いている園児に対して１対１での対応ができるようにし、対応しているときにはできるだけ笑顔で接するよう心がけている。

《担任以外の保育教諭との連携》
・「アタッチメント形成」という共通意識を持って、共に保育を進めていく。
・送迎時、担任と保護者ができるだけコミュニケーションを取れるよう、保育に入ってもらう。
・担任と一緒に、園児の心の拠り所となれるような関わりを一貫して行っていく。

《保護者との連携》
・「アタッチメント形成」という共通意識を持って、共に子育てを楽しんでいく。
・送迎時に今日の出来事を話したり、日々の保育記録を共有していく。
・慌ただしくならないよう、時間にゆとりを持って送迎できるよう話をしていった。
・新入園児は、段階を踏んだ慣らし保育を行っていく。（保護者の仕事の都合などと擦り合わせて、臨機応変に調整しながら進めていく）
〈慣らし保育の内容〉すべて必要に応じて。
① 登園後、保護者と一緒に３０分ほど過ごす。
② １時間後迎えに来てもらう。
③ 午前中で迎えに来きてもらう。
④ 給食後迎えに来てもらう。
⑤ 午睡あけ迎えに来てもらう。
⑥ おやつ後迎えに来てもらう。

お迎えの時には、笑顔で抱きしめたりなどの対応ができるように保護者に相談した

できることを見せたい園児の気持ちに寄り添う送迎時の保護者

《園児の変容》
・周りの人との触れ合いやスキンシップで気持ちが満たされると、次第に泣くことも減って落ち着いてきた。
・登園後、保育教諭の声かけに自ら近づいてきたり、特定の保育教諭にスキンシップを求めたりするようになっている。
・したいことや、してほしいことを身振り手振りで一生懸命伝えるようになってきた。
・泣いていても、保育教諭に抱っこされたり、好きな玩具を持ったり、お気に入りの場所で過ごすことで泣き止むことができるようになっている。

《結果と考察》
・不安な気持ちを当たり前として受け止め、さらに不安を安心に変えてあげることが大切であると考え抱っこやスキンシップを多くすることを心がけることで、落ち着いて過ごすことができるようになった。

・保護者が時間にゆとりを持って送迎してくれたことで、園児の心が落ち着くようになったり、降園時に、園児の遊んでいる姿を保護者に見てもらえたり、遊んだ玩具などをゆっくりと楽しみながら片付けたりできることで、次の日への期待へとつながった。
・「チーム保育」を行うことで、たくさんの視点から園児を見守ることができた。「そばにいるからね」と感じさせながら、実態を踏まえた援助を行うことができた。

【実践事例②】　「せんせーい！ (泣)」が、「せんせーい！ (笑)」に変わる環境構成

《園児の実態》
・周りの人との触れ合いやスキンシップで気持ちが満たされると、次第に泣くことも減って落ち着いてきた。
・興味関心が広がり、様々な場面で「友達が持っているものが欲しい」「友達がやっていることを自分もやってみたい」という気持ちの変化や成長が見られるようになった。
・一人でじっくりと好きな玩具で遊ぶことを好む園児が多く、遊びたい気持ちが友達と重なってしまうと玩具を奪ったり奪われたり、言葉による表現が上手くいかない時などに、噛んだり噛まれたりして、「せんせーい（泣)」と悲しさを表現することが多く見られる。
・０歳児クラスと同じ保育室で同じ遊びを楽しむ際、年下の園児の玩具を奪ったりする姿が見られる。
・「あの先生と眠りたい」「あの先生に絵本を読んでほしい」「この先生と一緒に遊びたい」という、独占や要求が見られる。

《保育教諭の関わりと援助》
・園児が安心して登園し、心地良い雰囲気の中で遊ぶことができるよう、活動中も積極的にスキンシップを取るようにし、楽しい気持ちで１日がスタートできるよう関わっていく。
・つぶやきや表情を受け止め、一緒に言葉のやりとりを楽しむなどして、園児が安心して自分のやりたいことができるようにしていく。
・遊びの中で「一緒だね」と嬉しさを感じたり、わくわくした気持ちを大切にできるよう園児の動きに合わせて保育を行っていく。
・異年齢児（年下）に興味が持てるよう、園児に対してこれまで以上にスキンシップを多くとるようにしたり、異年齢児（年上）との関わりの中で、優しくされる体験や嬉しくなる気持ちを多く体験できるような機会を計画していく。

《環境構成の工夫》
・友達が遊ぶ姿を見て自分もやってみたいという園児の思いを酌めるように、玩具の数を揃えておくようにした。
・一人遊びにじっくりと取り組めるよう、玩具やテーブル・椅子の配置を工夫した。
・身の回りのことをやってみようとする姿から、「じぶんで」の気持ちを大切にしたいと思い、積極的に取り組めるよう環境を工夫した。
・園児の保育教諭への独占や要求になるべく寄り添うことができるよう、保育教諭の人数や活動中の配置に気をつけるようにした。

《園児の変容》
・十分な数の玩具や、一人でじっくり遊べるような空間を作ることで、周りを気にせず自分の遊びを楽しむ姿が増えた。
・遊びを邪魔されることもなく、好きな遊びにじっくり取り組めることで、「せんせーい見てー」「できたー」と、喜びや嬉しさを表現することが多くなった。
・「抱っこしてー」「やってー」等、甘えたい気持ちを我慢しないで素直に表現する姿が増え、その気持ちが満たされることで、次の活動へ楽しそうに向かう姿がある。
・園や家庭で自分がされて嬉しい生活場面が、友達や異年齢児（年下）との関わりの中で見られるようになっている。
・異年齢児（年上）と関わり、模倣して遊ぶことで遊びの幅も広がり、笑顔も多く見られるようになった。

・一人遊びが見られる一方で、平行遊びも見られるようになったが、友達に真似されたくないなどという思いからトラブルも見られる。

見てほしい！やってみたい！という気持ちが増える

《結果と考察》

・園児が不安を感じたときにその気持ちに寄り添い関わり、保育教諭が「安全な避難所」になり、そして「安心の基地」になるよう心がけることで、再び保育教諭のそばを離れて遊びや探索に向かう姿が見られた。
・保育の振り返りをすることで、保育の見直しや情報共有ができ、次の日の保育へつながったことから保育の振り返りの重要性も感じた。
・１対１で関わっている時や、少人数でいる時には穏やかに過ごせているが、集団に入ると落ち着かずに注目行動が増える園児がいる。まだまだ甘えたい気持ちや、かまってほしい気持ちが強いことを感じる。

Ⅳ　実践のまとめと考察

１　実践のまとめと考察

入園当初からしばらく泣く姿や、泣いてパニックになりどうしたらいいのかわからないといったような姿を見たときに、アタッチメント形成を目指した保育の必要性を感じた。周りの大人への要求の仕方がわからずに泣いている園児たちが、毎日の園生活を安心して送るためにはどうしたらいいのか研究を進めることにした。

そこで、初めて保護者から離れたり、１年間過ごした保育室や保育教諭と離れたりした不安やストレスを、言葉では伝えられずに泣くという手段を使って一生懸命伝えようとする園児の内面を、まずは理解し受け止めた。さらに抱っこやスキンシップで不安を安心に変えてあげることが、アタッチメントを形成し周囲の人を好きと思える「基本的信頼感」と、自分は周囲から愛されている、また自分のことを無条件に好きと思える「自己肯定感」を高めていくということを再認識できた。

園児にとって安心できる大人であること、一番の味方・理解者であろうとすることが保育教諭がもっとも大切にするべきことだとこの研究を通して感じた。園児が興味や関心の幅を広げ、言葉を獲得し、表現する喜びを味わっていけるよう、これからも園児の行動を温かく見守り、適切な援助が行えるよう努めていきたい。

２　今後の課題

園児が安心感を持って園生活を送るための「チーム保育」を充実させるに、

① １歳児クラス以外の保育教諭との情報共有や話し合いを行うことが難しいので、短時間でも話し合う機会を設け、しっかりとコミュニケーションを図りながら、日々の保育に取り組んでいきたい。
② これまで同様に、保育教諭と保護者がしっかりとコミュニケーションを図り、フリー保育教諭とも連携しながら日々の保育を充実させていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館
早稲田大学人間科学学術院　佐藤将之　令和２年　『心を育てる保育環境』　小学館

様式３【課題研究報告書】

言葉が伝わる楽しさ、話す面白さを育む環境の工夫

―保育教諭や友だちと安定した環境の中で、月齢に応じた生活や遊びを通して―

宮古島市立下地こども園　保育教諭　糸数　七海

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」の第２章「言葉」の領域の中に、「言葉を使うためには、他者との感情や物事を分かち合える温かな環境を基盤として、指し示す対象と言葉との対応に気づき、理解することと、それを相手に伝えようとする気持ちが育つこと」とある。この時期の園児は、言葉の持つ響きやリズムの面白さ、言葉を交わすことの楽しさなどを感じとったり、保育教諭の温かい語りかけに心地よさや、嬉しさを感じる経験を通して、模倣したり、耳にした言葉を遊びの中に取り込み、自分で言葉を使うことを楽しんでいくとされている。

学級の実態としては、１歳児　男児５名、女児１名、計６名在籍している。クラスにも慣れ、友達に興味を持ち、側にいる友達に手を伸ばしたり、まねしてみたり、顔をのぞき込む姿、一語文や喃語を話し、思いを伝えようとする姿が見えるなど、簡単なやりとりを楽しんでいる。しかし、まだうまく気持ちを表すことが難しく、友達の玩具を取ったり、押す、噛む、引っかくなど手が出てしまう。園児が自分の気持ちを表すためには、私たち保育教諭が、園児の発する言葉に耳を傾け受けとめつつ、思いを汲み取りながら、応答的なやりとりを重ねていくことが必要だと感じ、言葉が伝わる楽しさ、話す面白さを育む環境を研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　園児が興味関心を持って、言葉に親しむことができる環境の工夫

日常の挨拶、手あそびのうた、絵本を始め、遊びの中で丁寧に温かく言葉をかけながら関わる。

２　身近な人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする声かけ、環境の工夫

ままごと遊びなどごっこ遊びの素材や環境を整え、言葉のやりとりを経験できるようにする。また、遊びに必要な言葉を伝えていくことで発見や思いを受け止め、共有していくことで言葉で伝え合うことの喜び、面白さを感じられるよう援助する。

Ⅲ　研究計画

月	研　究　計　画
4 月～5 月	幼児の実態把握・課題の検討
6 月	研究テーマの検討（テーマ設定の理由、研究内容、研究計画の検討を含む）
7 月～11 月	理論研究・保育実践
9 月	中間検討
12 月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取組（実践）

【 実践事例１】「ことばって楽しい」～手遊び、絵本、あいさつを通して言葉に触れる～

《幼児の実態》
・新しい環境に慣れ、保育教諭に見守られる中で、安心して探索活動を楽しんでいる。
・発達の個人差があるものの、一語文、指さし、大きな声を上げるなど思いを伝えようとする姿が見られる。

《保育教諭の願い》
・安心した環境の中で、言葉を発する楽しさを知ってほしい。
・手遊び歌、絵本、あいさつを通して様々な言葉に触れてほしい。

《 保育教諭の関わりと援助の工夫 》
・園児の興味を惹きそうな絵本や手遊び歌を用意し、簡単なあいさつを楽しめるようにする。
・遊びや日々の生活で生まれる発見、園児が伝えようとしていることにじっくり耳を傾けたり、一緒に共感・思いを共有しながら気持ちを言語化して伝え、様々な言葉に触れられるように関わっていく。
・保育室だけでなく、園庭やテラス、ホールなどいろんな場所に出かけ、発見や心を動かす体験ができるようにする。
・１対１、または少人数でお膝に座らせたり、園児の目線に合わせゆったりと安定した関わりができるよう意識してく。
・思いがうまく言葉にできず大声を上げるときは、園児の気持ちを汲み取って「〇〇なんだね」「～があるね」など丁寧に言葉にして伝え、伝わる喜びが感じられるよう繰り返し関わっていく。

ブーブー！

♪バスに乗ってごーごー

車あったね。大きいね、かっこいいね（保）

とんとんとんとんひげじいさん♪
はじまるよ、はじまるよ♪

はっぱあった！

《 幼児の変容 》
・発見や思い、欲求を言葉にして伝えていったことで、言葉を発したい（思いを伝えたい）気持ちが芽生え、あいさつをまねたり、保育教諭と一緒に手遊びに楽しんで参加するようになってきた。
・自ら絵本を手に取って「ブーブー(車)」「ワンワン（犬）」と知っている言葉を発したり、手遊び歌の好きな曲を鳴らして歌ったり体を動かして積極的に言葉に関わる姿が見られる。
・自分の知っている言葉で思いや発見を保育教諭に伝えようとする姿が増え、やりとりを楽しんでいる。

・おもちゃの貸し借り「ちょうだい」「どうぞ」「だめ」とやりとりをしたり、友だちの名前を呼び合うなど友だちとの関わりも広がってきた。

【 結果と考察 】
・安心した環境の中で、園児の気持ちや発見を言葉にして伝えたり、生活に必要な言葉を繰り返し伝えていったことで、言葉の意味するものや、話されたことを徐々に理解してきた。それにより、相手に“伝えたい”との気持ちが芽生え、指さし、手を引いて目的の場所まで連れて行く、「先生！〇〇！」「はっぱある」など“伝えよう”とする気持ちが育ってきていると感じる。
・保育教諭に見守られ安心して生活する中で、自分の思いを分かってほしい、共有したいと願う姿から発語が増え、言葉を用いて他者と伝え合う力が培われつつある。

【 実践事例２ 】ごっこ遊びや生活を通して、友だちとのやりとりを楽しむ

《幼児の実態》
・一語文、二語文と言葉数が増え、思いを伝える、伝えようとする姿がある。
・友だちに興味を持ち、まねしたり、そばに駆け寄ったり、触れ合って関わりを楽しんでいる。また、経験したことを遊びに取り入れごっこ遊びを楽しむ姿が見られ、園児同士で笑い合う姿も増える。
・言葉数が増えたことで、やりとりをする姿も見られるようになったが、まだ、難しい部分もあるため、手が出てしまうことがある。

《 保育教諭の願い 》
・ごっこ遊びや生活を通して、友だちとの関わりを楽しんでほしい
・遊び、生活に必要な言葉を知り、欲求や思いを伝えられるようになってほしい

《 保育教諭の関わりと援助の工夫 》
・園児が積極的に関わりたくなるような様々な素材、道具を用意し、環境を整える。
・園児の気持ちや、思いに寄りそう声かけや、足りない言葉を補い、思いを言語化して伝え、伝わる喜びを感じられるようにする。
・保育教諭もごっこ遊びに一緒に加わり、楽しさ、喜びを共有し楽しく過ごしていく。また、やりとりが広がるような声かけをし、園児同士の関わりを持てるよう意識していく。
・物の取り合いなどのトラブル時は、お互いの思いを受容しつつ、「まだ使いたいみたいだよ」と相手の気持ちに気づく関わりや、「ちょうだい」「いいよ」「順番こ」などと遊びに必要な言葉を伝えていく関わりをする。

ジュースいれまーす♪
りんごジュースだよ。

ここはおうち。ご飯作ってるの。

しゅっしゅー！
バス乗ってどこ行くの？（保）
おみせ！

《 幼児の変容 》
・ままごとコーナー、ブロックコーナーと落ち着いて遊び込める環境を作り、様々な素材道具を準備していったことで、喜んで遊びに参加するようになった。「おなかすいたな」「〇〇食べたいな」「〇〇ありますか」と遊びが広がるような声かけをしたことで、「はーい〇〇です」「〇〇もあるよ」「いただきます」「おいしいね」などと経験したことを遊びに取り入れ、友だちとの関わりを楽しむ姿が見られるようになった。「こっちはおうちだよ」などとど遊びの中でイメージを共有する姿も少しずつ増えてきた。
・トラブル時は「欲しかったね」「あとでかしてね」と必要に応じて仲立ちし、気持ちを代弁したり、相手の思いを伝えていったことで、欲しいときは「貸して」「ちょうだい」まだ使いたいときは、「後でね」「じゅんばんこ」と言葉のやりとりも見られるようになってきた。欲しがるお友だちに違う玩具を渡したり、遊んで終わったら、おもちゃを譲るなど、相手の気持ちにも気づいて優しく関わる姿が見られるようになった。

【 結果と考察 】
・保育教諭が園児と関わる中で、気持ちや思い、出来事などを言葉にして伝えていく関わりを行っていった。その中で、自分の主張を受け止めてもらったことで安心して欲求を言葉にして伝える姿が増えた。相手にも思いがあることを受け止めていく経験を積み重ねていったことで、自我が育ってきた。繰り返し伝えていくことで、相手の思いに耳を傾けようとする姿も見られるようになり、言葉による気持ちの伝え合いが芽生えてきたと感じる。引き続き、園児との応答的な関わりを通して、言葉による伝え合いが楽しめるよう丁寧に関わっていきたい。

Ⅴ　実践のまとめと考察

・園児が表情や言葉で表した気持ちを丁寧に受け止め、応答的な関わりをしていったことで、簡単な挨拶を真似たり、自分の知っている言葉で思いを伝えようとする姿が増えてきた。園児の発する言葉に耳を傾け応答的なやりとりを重ねていったことで園児自身が気持ちを伝えようとする意欲が育まれたと感じた。日々の生活の中で、保育教諭の温かいまなざしや語りかけに心地よさやうれしさを感じる経験の大切さを改めて感じた。
・友だちに興味を持ち、自ら関わる姿も増え一緒に過ごす心地や良さを感じたり、「ちょうだい」「どうぞ」「ありがとう」とのやりとりもみられるようになった。保育教諭が園児の遊びに一緒に参加して気持ちを代弁したり、足りない言葉を補いながら伝えていくことで園児も真似したり、一緒に言ってみるなどの経験から今では言葉でのやりとりを楽しんでいる姿が見られる。
　今後の課題としては、まだまだ言葉で気持ちを表すことが難しい部分もあるため、楽しく言葉に触れる関わり、環境の工夫をして園児の言葉を豊かにしていきたい。また、遊びの中でイメージの共有をしながら遊びを楽しむ姿も見られるようになってきたので、保育教諭も一緒に遊びに参加しイメージを周りの園児にも共有できるように関わっていくとともに相手にも思いがあることを知らせ温かく見守っていきたい。

【主な参考文献】
・内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成 30 年３月　「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」フレーベル館

様式３【課題研究報告書】

園児の好奇心・探究心を育むための環境構成と援助の工夫

―身近な環境との関わりを通して―

石垣市立あらかわこども園　保育教諭　宮良　茜

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年の社会情勢の変化で、スマホやテレビからいろいろな情報を得ることができ、人と関わる体験や心を動かす体験など直接体験の場が少なくなってきている。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章「環境」の領域に、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」「園児は、遊具などの日々の遊びや生活に必要なものの環境に好奇心や探究心をもって主体的に関わり、自分の遊びや生活に取り入れていくことを通して発達していく。そのため、保育教諭等は、園児がこれらの環境に関わり、豊かな体験ができるよう、意図的、計画的に環境を構成していくことが大切である。」と記されている。

本学級の実態として、５歳児（３年保育）男児１６名、女児１１名の計２７名が在籍している。意欲的に体を動かし、固定遊具で遊んだり、虫捕りを楽しんだりする姿が見られる反面、遊びが長続きせず、遊びに広がりや深まりがないように思われる。また、動植物にあまり興味を示さない園児も見られる。

このような実態を踏まえ、園児が身近な環境と関わり、「なぜだろう」「やってみたい」と心動かす体験を通して、好奇心や探究心を育む環境の構成や援助の工夫について研究したいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　身近な環境に親しみ、興味や関心がもてるような環境構成の工夫

(1) 季節の草花や野菜を育てることを通して、成長の変化や発見を楽しめるような環境を構成する。

(2) 日々の遊びや活動を掲示し、意欲的に製作活動ができるような環境を整え、興味や関心につなげていく。

２　園児の好奇心や探究心を育んでいくための援助の工夫

(1) 「何だろう」「なぜだろう」等、園児の「知りたい」という気持ちを大切にする。

(2) 発見したり考えたり、自分なりに試してみたりしたことを生活に取り入れていけるようにする。

Ⅲ　保育計画

月	研　究　計　画
４・５月	園児の実態把握・課題の検討
６月	研究テーマの検討
７～１１月	保育実践、中間報告会及び中間検討会
１２月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例１】　「やさいをそだててみたいな」

≪園児の姿≫

・野菜クイズをきっかけに、興味を持った園児が「わたしたちも野菜を植えてみよう」と提案した。その後クラスで話し合い、野菜（ナス、オクラ、ゴーヤー、ピーマン）を植えることにした。

・野菜のネームプレートを友達と一緒に作って、表示する姿も見られた。

・毎日水やりを行い、生長を楽しみにしている姿が見られた。

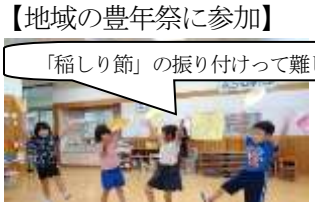
≪保育教諭の願い≫
・自分たちで野菜を育て、収穫する嬉しさや楽しさを味わうとともに、生長の変化に気づき、感動したり不思議に思ったりしたことをみんなで共有、共感してほしい。
・育てた野菜を収穫し、調理や遊びに活用する等、様々な取り組みを通して関心を深めてほしい。

園児の姿	○保育教諭の援助　★環境構成の工夫
【野菜の植え付け、水やり、世話や観察】 オクラの葉っぱってチクチクしているんだね！ オクラの花が咲いたよ！大きくてきれいだな。	★保育室から見える場所、近い場所に野菜を植えることで、部屋にいるときでも野菜の観察ができるようにする。 ○園児の気づきやつぶやきに共感し、一緒に観察したり水やりをしたりする。 ★園児と一緒に野菜の看板を作り、気付いたことや不思議に感じたことを発表できる場を工夫する。また、生長の変化や発見などを共感できるようにする。
【野菜の収穫】 ゴーヤーいくつ収穫できたかな？1，2、3・・・ オクラの実ができてる！ふわふわの毛があるね。 	★育てた野菜を収穫し、みんなで数を数えたり、大きさを比べたりする。また、見るだけでなく、触ったりにおいをかいだりして、新たな発見や気付きにつなげられるようにする。
【野菜の調理、遊び】 ゴーヤーの中はふかふかしているね。 いい匂い！ オクラのお星さまで天の川★ 	★みそ煮、おかか和え、甘酢付け等、簡単な調理を子どもたちと一緒に行い、試食する。 ★野菜のスケッチをしたり、野菜スタンプにしたりして、製作活動を楽しめるように材料を豊富に準備する。

≪園児の変容≫
・「ゴーヤーのツルが網にまいてる」「赤ちゃんゴーヤーがいっぱいできている！かわいいね」「オクラも、もうこんなに大きくなっている」等、発見や生長の変化を友達や保育教諭等に伝え合い、喜ぶ姿が見られた。また「今日はどのくらい大きくなっているかな」と、生長を楽しみにしたりする姿が見られた。
・野菜の収穫を喜び、友達同士で採れた野菜の大きさ比べをしたり、スケッチしたりして楽しむ姿があった。また、自分たちで野菜を洗ったり、切ったり、炒めたりして調理し、試食をしたことで、「おいしい！」「ゴーヤー苦い」「ピーマン嫌いだったけどこれなら食べられた」等、様々な感想があった。
【結果と考察】
・保育室からでも見える場所に野菜を植えたことで、栽培している野菜に関心を持ち、生長の過程や変化に気付くことができた。また、不思議に思ったことや発見したことを友達や保育教諭等に伝えることで、共感することができたと考える。
・普段、野菜にあまり興味がない園児でも、友達の気付きや不思議に思ったこと等を発表の場で聞くことで、刺激を受け、関心を持つようになり、観察を楽しむ姿が見られるようになった。
・収穫した野菜を触ったりにおいをかいだり、調理して味わったりする等、五感を使いながら野菜に親しむことができた。また、製作活動へ発展したり、表現を楽しんだりする姿が見られた。

【実践事例２】「ほうねんさい、じぶんたちでやってみよう！」
≪園児の姿≫
・今年から通常通りに行われた、地域の伝統行事である「豊年祭」。新川のオンプールに参加し、「稲しり節」「ほうねんのうた」などを披露した。
・保護者と一緒に豊年祭（ムラプール）を見に行き、旗頭や獅子舞を間近で見たり、迫力あるツナヌミンを見たり、綱引きに参加したことを友達や保育教諭等に得意げに話したりする園児がいる一方、まったく見たことがなく、経験不足の園児もいる。
≪保育教諭の願い≫
・地域の伝統行事に触れ、遊びの中に取り入れることで、関心を高めてほしい。

・自分たちの住む地域の伝統文化に触れ、興味・関心を持ってほしい。

園児の姿	○保育教諭の援助　★環境構成の工夫
【地域の豊年祭に参加】  	★豊年祭の映像をみんなで鑑賞したり、写真や新聞記事を掲示したりしてイメージがわくようにする。 ○豊年祭に参加して見たものや感じたことを発表できる場を工夫し、クラス全体で共有できるようにする。
【豊年祭で見たものの製作、ごっこ遊び】 	★普段の遊びの中で再現遊びができるよう、様々な廃材・素材を準備する。 ○イメージが再現できるように言葉かけしながら一緒に作る。
【豊年祭再現遊び】 	★園児の「やってみたい！」という気持ちを尊重し、誕生会や保育参観等、再現遊びを披露する場を作る。 ○獅子、旗頭、踊り、ツナヌミンの戦い等、それぞれの役割や再現遊びの構成をみんなで話し合って決めていけるようにする。

≪園児の変容≫

・「旗頭が倒れないか心配したよ」「獅子舞に頭かまれて怖かったよ」「大きい綱引きにお父さんと一緒に参加して楽しかったよ」等、感想や気付いたことを全体の場で発表する園児や、豊年祭の掲示物を見て友達同士感じたことを伝え合う園児もいた。

・廃材を使って獅子舞の頭や旗頭、ツナヌミンの道具を作り、自分たちで再現遊びを楽しむ姿が見られた。また、クラスだけではなく、年下の友達や保護者にも披露したいと、構成や役割を自分達で考え、誕生会や保育参観で豊年祭再現遊びを発表することができた。

【結果と考察】

・豊年祭に参加した園児だけでなく、今まで知らなかった園児も友達の話や実際の映像や写真を見ることで豊年祭について知ることができ、関心を高めることができたと考える。

・自分で旗頭や獅子舞等の豊年祭で見たものを試行錯誤しながら作ったことで、自分のイメージしたものを表現する楽しさを味わうことができた。また、友達と話し合いながら、再現遊びを作り上げていくことで、協同性が育まれるきっかけになったと考える。

Ⅴ　実践のまとめと考察

本研究を通して、園児の取り巻く環境の大切さを再確認することができた。また、園児のつぶやきや、今何に関心があるのか、保育教諭が常にアンテナを張り、園児が物事に主体的に関わることができるよう意図的に環境構成を工夫していくことの大切さを実感した。今回、野菜の栽培や収穫・調理・遊びに取り入れる活動や、地域の行事に参加したり再現遊びをしたりすることで、子どもの「不思議だな」「おもしろい！」「やってみたい」等様々な考えや気づきが生まれたのではないかと考える。それを、友達や保育教諭等に伝え合うことが大切な経験となり、その積み重ねが好奇心や探究心へとつながっていくことを学んだ。今後もこのような時間を大切にし、園児が主体的に関わり、好奇心や探究心を育んでいけるような環境構成や援助の工夫を意識して行うことが大切だと感じた。

今後の課題としては、栽培物の生長過程や、子どもの気付いたこと、不思議に思ったこと、発見したことを視覚的に伝えられるような掲示物等の環境構成の工夫や、活動に意欲的ではない園児に対しての言葉かけや援助の工夫を探究していきたい。

主な参考文献：

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年３月　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　フレーベル館

様式３【課題研究報告書】

食べる楽しさや喜びを味わうための環境構成と援助の工夫

～食への興味・関心を育むための活動を通して～

石垣市まきらこども園　保育教諭　古賀　知子

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、子どもの食をめぐっては、発育や発達の重要な時期にありながら、栄養素摂取の偏りや朝食の欠食、小児期における肥満の増加など、問題は多様化、深刻化し、健康への影響が懸念されている。健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切である。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』第２章「健康」の領域、内容（５）では「保育教諭等や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。」とある。本来、食べることは、人が生きていくために必要なことであり、幼児期には、食べる喜びや楽しさ、食べ物への興味や関心を通じて、自ら進んで食べようとする気持ちが育つようにすることが大切である。

本学級の幼児の実態としては、４歳児（３年保育）男児６名、女児９名、計１５名在籍している。本園は園庭が広く自然豊かな環境ということもあり、園庭で元気に走り虫探しに夢中になる子、草花で色水遊びを楽しむ子など自然との関りを楽しむ姿が見られる。しかし、食事の時間になると元気がなくなり、偏食の子が多く苦手な物があると食べようとしなかったり、食べ終えるのにとても時間かかったりと食への意欲が薄いように感じる。

そこで、様々な活動を通して食への興味や関心を育むことで、自ら食べようとする気持ちを引き出し、食事の楽しさや食べる喜びを感じてほしいと思い、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　食べる楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫について

・保育教諭や友達と一緒に食べる楽しさを味わうための環境構成や援助の工夫をする。

・栽培活動を通して、食べる楽しさや喜びを味わうことで食への意欲につなげていく。

２　食べ物への興味や関心を高めるための工夫について

・食に関する絵本や歌・劇遊びを通して、食べ物への興味や関心がもてるようにしていく。

Ⅲ　研究計画

月	研　究　計　画
4 月～5 月	幼児の実態把握・課題検討
6 月	研究テーマの検討（テーマ設定理由、研究内容、研究計画の検討含む）
7 月～11 月	理論研究・保育実践
(9 月)	（中間検討）
12 月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例１　「野菜を育てて食べてみよう！」

【園児の姿】（１学期）
・野菜が苦手な子が多く給食の食べ残しが多く見られる。中には、食への関心が薄く手をつけようとしない子もいる。

【保育教諭の願い】
・栽培物を通して、野菜への興味や関心をもってほしい。
・収穫する喜びを味わい、友達と一緒に食べる楽しさを感じてほしい。

園児の姿	★保育教諭の援助　◆環境構成
７月 **（種まき）** ・野菜の写真と種を掲示しておくことで、興味をもち自分が育てたい野菜の種を選ぶ姿が見られた。 ・「芽が出てきたよ！」「大きくなってる！」等、保育教諭や友達と栽培物の生長を共有し喜ぶ姿が見られるようになった。 **（野菜を育てる）** ・「お野菜がのど渇いたって言ってるからお水あげなくちゃ！」「熱中症になっちゃうからお水あげよう」等、自ら気に掛け水やりをしたり「雑草に栄養とられちゃう！」と雑草を抜いたりと意欲的に世話をするようになった。 ・収穫目前にトマトの実が落ちてしまったA児。「おどろきいっぱいトマト」の本を見て、トマトの実を割って植えると芽が出ること知り、「こうやってするとトマトができるって！」と、大事に育てようとしていた。 **９月** **（収穫）** ・野菜が苦手な子も「自分で育てた野菜だから！」「友達が育てた野菜だから！」と食べてみる姿が見られた。 **（みんなで食べよう！）** ・自分の育てた野菜を友達に「美味しい」と言って食べてもらえたことで「また大きくなったらみんなで食べようね！分けてあげるね」等、次への栽培活動への期待も膨らんでいた。	◆一人一人が育てたい野菜を選び、バケツ栽培をする。 ◆いつでも目に触れられるように、部屋の前で栽培することで、野菜の生長に興味や関心をもてるようにする。 ★子どもの気付きに共感することで喜びを感じられるようにしていく。 ★「野菜さんのど渇いてないかな」「野菜さん喜んでるね」「お腹いっぱいになったかな」等と声を掛けることで、栽培物への愛情がもてるようにしていく。 ◆野菜の絵本や図鑑を手に取りやすい場所に置いておくことで興味や関心をもてるようにしていく。 ◆収穫した喜びをクラスで共有することで、自分の栽培物への期待が膨らむようにする。 ◆収穫した野菜を友達と一緒に食べる楽しさを味わえるようにする。 ★「すごい！一口食べられたね！」等、食べてみようとしたことを認めたり、食べられたことの喜びを共感していく。

【園児の変容】
・「食べてみたら美味しい！」と感じ、家庭でリクエストしたり、給食で出る野菜も少しづつ食べてみようとしたりする子が出てきた。
・友達の栽培物にも興味をもち始め、観察を楽しんだり、「○○ちゃんのお野菜のど渇いたって言ってるからお水あげよう」と世話をする姿が見られるようになった。

【考察】
・個々でバケツ栽培をし「自分の野菜」という意識をもち世話をしたことで、栽培物への愛情が生まれ、より親しみをもつことができたと思われる。また、少しの変化にも気付くようになり、育てる喜びを感じられるようになったと考える。
・収穫した野菜を友達と一緒に食べる経験を重ねることで苦手だけど少し食べてみようとする思いが芽生えたと考える。
・五感を活かした直接体験をすることで、野菜への興味や関心が広がり食への意欲につながったと考える。

実践事例２　「はらぺこあおむし」～劇遊びを通して～

【園児の姿】（９月）
・栽培活動や食に関する手遊び、歌、絵本を保育に取り入れることで、色々な食べ物への興味や関心が広がってきた。また、給食の時に「お肉は力になるんだよね」「緑はばい菌をやっつけてくれるんだよね！」等、自ら意識して食べようとする姿も見られるようになってきた。

【保育教諭の願い】
・劇遊びを通して、食材への関心を深めてほしい。
・自分の思いを伝えたり、友達の思いや考えを聞いたりしながら、友達と一緒に取り組むことの楽しさを味わってほしい。

（１１月・１２月）

生活発表会で子ども達の大好きな絵本「はらぺこあおむし」の劇遊びをすることになり、物語に出てくる食べ物について「あおむしさんは何を食べると大きくなるかな」と、子ども達と相談する。すると「トマト！」「オクラ！」「カブ！」等自分たちが育てた野菜の名前が次々と出てきた。そこで、はらぺこあおむしの絵本を基に、オリジナル劇遊びを作ることにした。

＜★保育教諭の援助　◆環境構成＞
◆遊びや給食の時に使用している食材マグネットを活用し、子ども達が食材のイメージをもちやすいようにする。
★野菜を食べる場面では「どんな味がしたかな」と声を掛け、言葉を引き出していく。
★友達にも思いがあることを伝え、互いに納得して活動を進められるようにしていく。

【園児の変容】
・「あおむしさんみたいに何でも食べると大きくなるんだよね！」と意欲的に食べようとする姿が見られるようになった。
・自分が担当する食材が出てくると、喜んで食べる姿が見られるようになった。
・「生活発表会に友達と一緒に出たい！」という思いから、苦手な野菜も「風邪ばい菌やっつけてくれるから！」と、食べようとする姿がみられるようになった。

【考察】
・劇遊びを通して、体を作っている食べ物への興味や関心が更に深まった。
・友達と一緒に作っていくことで、一緒に活動する楽しさや喜びを味わうことができた。また、発表会を通して年長児や保護者に見てもらうことで充実感や達成感を味わい、一人一人の自信にもつながった。

Ⅴ　実践のまとめと考察

〈成果〉
・野菜の栽培や収穫、調理して食べるという体験を通して、保育教諭や友達と一緒に食べる喜びや楽しさにつながった。
・日々の保育の中で園児が主体的に食に関わる体験を積み重ねていける環境構成と援助の工夫をしたことで、食への興味や関心を高め、自ら「食べてみたい！」という意欲につなげることができた。
・生活や遊びを通して食に関わることで、興味・関心をもつようになり、生活発表会の劇遊びへとつなげることができた。

〈課題〉
・日々のコミュニケーションやクラスだより、ドキュメンテーション等を通して更に保護者と連携し、食に対する意識がより増していくような工夫していく。
・地域の食材に興味や関心をもてるような環境構成の工夫を探っていく。

〈主な参考文献〉
・幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　　内閣府
文部科学省
・「食」をとおして育つもの・そだてたいもの　　堤　ちはる　編著

自分の思いを言葉で伝える
―日々の会話や発表を通して―

金武町立杉の子幼児学園 保育教諭 渡久地　珠伊

Ⅰ テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第二章第四節の「言葉」の領域では、「経験した事や考えた事などを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」とされており、社会性が著しく発達していく幼児期においては、言葉を交わして友達と十分に関わることが重要だと考える。

本学級の実態としては、5 歳児、男児６名、女児９名、計１５名が在籍し、全員持ちあがりである。慣れ親しんだ友達と日々の遊びを楽しんでいるが、遊びの中で友達とトラブルになる場面が多々あり、上手く自分の気持ちや出来事を話すことができず、その度保育教諭に話の仲裁を求める姿が見られる。その都度保育教諭が話を聞き、解決方法や話を整理したりしている。小学校に上がった時に、園児達だけで解決できるかが心配なので、話すことの大切さや、他者の思いを考えたり、受け止めたりする気持ちを育てていきたいと思い、本テーマを設定し、研究することにした。

Ⅱ 課題に対する具体的な手立て

① 日頃の園児同士のトラブルや会話を聞いて、トラブルの原因を聞いて援助したり、言葉の付け加え、代弁をしていく。

② 園児同士で解決できるように、解決するための話の順序を繰り返し伝えていく。

③ 『やさしい言葉の木』というものを通して、優しい言葉、言われて嬉しい、嬉しい行動など幅広く設定し、園児が思う優しさを表現できるようにする。

Ⅲ 課題解決に向けた取組 （実践）

実践例①【幼児の実態】

友達と遊びの中でトラブルがあると、一方的に相手のせいにしてしまい、「やった」「やってない」と会話が一方通行で話が進まない場面が多く見られた。保育教諭が仲立ちになり、話を進めるが黙り込んでしまい話そうとしなかったり、時間がかかってしまう。周りで見ていた友達が状況やその時の会話を積極的に話す様子がある。

【保育教諭の願い】

就学して他のこども園、幼稚園の園児と一緒のクラスになった時に、トラブルが起きた際に今の状態では会話をして気持ちを伝えたり、仲直りができずに困ってしまう。解決方法や言葉の伝え方を伝えていきたい。相手の気持ちにも気づいて欲しい。

【保育教諭の援助】

遊びの中でトラブルが起こり、泣いて訴える園児がいる。

A さん・・・「〇〇が〇〇って言いよった。」

B さん・・・「言ってないよ。」

これから「言った」「言ってない」と大声で言い合いをする。

保育教諭が仲立ちになり、「この会話で解決できるかな？」と問いかけると、黙り込んでいる。

そこから一人ずつの意見や思いを聞き、同時に相手にも聞かせてあげる事で、相手の思いを自然と知らせていく。事実とお互いの気持ちを照らし合わせながら、言った事実や、なぜ言ってしまったのか等を順序良く話していくと、すぐに解決する。お互いの悪かった部分をお互いで謝り、解決している。

【幼児の変容】

それからも相変わらずトラブルは起こるが、少しずつ落ち着いて話せる場面も見られるようになってきた。しかし、相手の悪かった部分を強く主張してしまうので、繰り返し相手の気持ちを知らせている。

実践例②【発表】

七夕集会やお泊り保育などの行事や、帰りの会の時間に前に出てその日感じたことや、楽しかった出来事等を前に出て発表する機会を設けていった。全員が発表できる時には順番に発表するように名前を呼んでいくが、中には「前に出たくない」という園児もいた。

【保育教諭の援助】

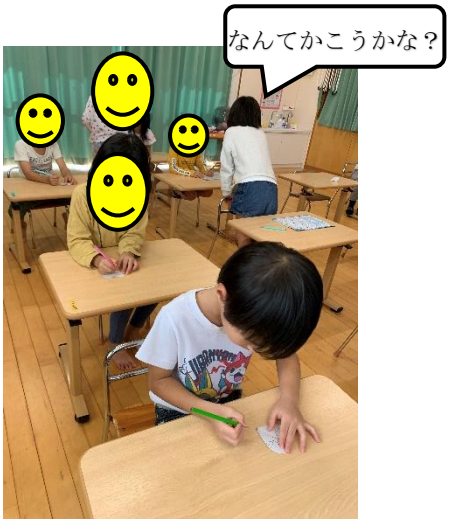
人前に出ての発表に抵抗がある様子が見られる園児もいて、始めは強制せず、本児の気持ちに寄り添っていったが、数回友達が前に出て発表するのを見せたところで、就学してからは授業での発表などが毎日のように行われることを話していった。それでも前に出れない園児には側に着き、小さな声でも言えた時には代弁してクラスの友達に知らせていった。

【幼児の変容】

前に出て発表を繰り返すことで、発表の姿勢が良くなったり、運動会や学芸会などの大きな行事でも、あいさつを大きな声で発表することが出来るようになった。発表する時だけでなく、友達の発表も静かに聞き、終えた時には拍手する習慣も身についている。

実践例③【やさしい言葉の木】

幼稚園児になり、良い言葉の他にも人を傷つけてしまう言葉を使う園児が増えてきた。悪い言葉だと自覚なく使う園児もいるので、その都度その言葉の意味を確認し、自分が言われたらどう感じるかを話している。男女問わず多いので、（特に兄姉がいる園児）チクチク言葉はかっこ悪い、ふわふわ言葉、優しい言葉を使っていこうとクラス全体で話せる機会を設けた。



【保育教諭の援助】

やさしい言葉の木を作り園児に見せながら取り組みの説明を行う。

大きな木に興味津々の園児の姿がある。優しい言葉や言われて

嬉しかったこと、されて嬉しかったことを書いて木に張り付ける。

字を書くのが難しい園児は平仮名表を見たり、友達や保育教諭に教えて

貰っている。内容も一人で黙々と書く園児や友達と相談し、楽しみながら

書いていた。その後帰りの会で自分が書いた優しい言葉を発表した。

『だいすき』と、『ありがとう』の言葉が多く聞こえた。

【幼児の変容】

話ことばだけでなく、実際に紙に書くことで、普段手紙遊びをしない園児も字に触れることができたので、なかには自由時間に自分で平仮名表を見て文字を書くようになった園児もでてきた。

また、自分に向けられていなくても、他の友達に向けられたチクチク言葉が聞こえたら、「こんなって言ったら嫌な気持ちするよ。」「ダメだよ。」と声をかける姿が見られるようになった。それでも言ってしまう園児は保育教諭と話をして確認し、言ってしまった本人に謝る事ができた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・人前で発表する事が苦手だった園児も、大きな声で発表する事ができ、自信が持てているように感じる。

・友達との間でトラブルがあると、まずは自分達で解決しようとする姿が見られるようになっている。しかしまだ中には、自分の気持ちが抑えられず一方的に相手を攻め、号泣する園児もいるので、その都度仲立ちし、繰り返し話の順序を知らせていく。

・優しい言葉を考える事で、友達や保護者、保育教諭への感謝の気持ちが聞けて、とても温かい雰囲気に包まれて良かった。紙に書いて張り付けせずに、帰りの会でその日の出来事だけでなく、誰かにありがとうを伝える日などを設けて、園児達の笑顔が引き出せる時間を設けていきたい。

②課題

・まだまだ言葉が未熟な部分があるので、語彙力を付けられるように、引き続き絵本の読み聞かせや、自分で絵本を読む時間を決めて設けていく。

③実践を通した自身の気づき、考え

今回に研究を通して、園児が思いや考えを表現しようとする為には、保育教諭との信頼関係も大きく関係してくると感じた。また、一人ひとりの性格や特徴を熟知し、その子に合わせた言葉かけが必要だと思った。子ども達が使う言葉は、その子を取り巻く環境の影響が大きいので、普段の言葉遣いを更に気を付けていきたい。また、友達とのトラブルを子ども達だけで解決するのはまだまだ難しいので、引き続き声掛けし、就学までに喧嘩と仲直りはセットということを繰り返し伝えていきたい。

V 今後の実践に向けて

今後は言葉の伝えあいの重要性、言葉にしないと伝わらないことや、相手の気持ちになって考える力を伸ばしていけるように、安心して話せる雰囲気作りを心掛けていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　2018 年　『幼保連携型こども園教育・保育要領解説』フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

食への関心を育てる援助の工夫
―ひとり一人がやってみたいと思う食育活動―

金武町　杉の子幼児学園　教諭　氏名　崎浜　未来

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要録解説の第２章第４節「健康」の内容において「（５）保育教諭や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心を持つ」とある。また、第３章食育の推進において「園児が生活と遊びの中で、意欲をもって食に関わる体験を積み重ね、食べることを楽しみ、食育を楽しみ合う園児に成長していくことを期待するものであること」と記されている。食は、子どもが豊かな人間性を育み、生きる力を身に付けていくために、また、子どもの健康増進のために重要なことであると考える。幼児においては園生活での様々な機会を通して食べ物への興味や関心を高め、「皆で食べると美味しい」という体験を積み重ねることで進んで食べようとする気持ちが育つと考える。

本学級は男児６名・女児７名、計１３名の４歳児クラスである。学級の実態としてほとんどの子が持ち上がりということもあり、活発で子ども達同士でコミュニケーションを取って遊ぶことができる学級である給食時間はグループで座り、自分達で配膳まで行っている。配膳された量を完食できる子や苦手な食材はなかなか進まない子・半量にして食べる子などいるという現状がある。またスプーンの持ち方や食事中のマナー（座り方）などで声かけされる子が多く見られる。このような実態を踏まえ、幼児が食への興味関心を高め、食のありがたさなどが育つにはどのような援助・環境構成が必要であるのかを研究してみたいと思い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　食への興味関心を高めていくための環境構成

野菜の栽培活動を通して子ども達一人ひとりが食の大切さ、成長過程を観察することで感謝の気持ちを育てていけるようにする。また、栽培している野菜などをお便り帳や学級だよりなどを通して伝え、家庭でも食への興味を持てるようにしていく

②　食育に関する教材や工夫

・「ペロリ賞」給食を完食した子はペロリシールを貼ることで、完食した満足感を味わい、意欲に繋げていく

・子ども達の興味のある遊びの中で「食育」を交えてみる

・栄養士、調理員との連携を取り、調理過程を見たり、実際に調理時間を設けていく

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【事例１】野菜の栽培活動を通して…

〈幼児の姿〉　４月～１２月

野菜がなかなか進まない子が多く、嫌々ながら食べ進めている。特に、緑の野菜に苦手意識のある子が多い。

〈保育教諭の願い〉

身近な食べ物を栽培し、母の日に関連づけたり水やりや成長過程を観察し栽培活動に興味を持ってほしい

〇担任の援助・環境構成

・野菜を栽培するために、栽培の過程を室内に掲示して見通しを持った栽培ができるように環境構成を行っていった。野菜を栽培し、「母の日」にプレゼントとして栽培するなど家庭との連携も図れるようにしていった。季節の食べ物を子ども達も栽培し、分かりやすい野菜などの栽培を行っていった。

母の日のプレゼント（二十日ネギ栽培）

感触がいやだな～
手につかないでほしいな

毎日水やりをしてこんなに大きくなったよ

園での栽培活動

見てみて
芽がでてきているよ♪

↑毎日の当番活動の中で水やりを加え毎日の楽しみになっています

〈結果・考察〉

４月進級当初から、子ども達の食事の偏りが見られた。そこで、特に緑の野菜に興味を持てるように二十日ネギや葉野菜などの栽培を行った。台風後にニラが枯れてしまい、失敗もあったが土を変え、日当たりの良い場所を探しプランターで出来る栽培を行っていった。食事時間は食材に興味を持ち、「これ何かな？」などと友達同士で会話する姿も見られた。

【事例２】友達と食べる楽しさや調理実習を通して食への環境構成

〈幼児の姿〉

食事時間を楽しみにし、メニューを聞きにくる姿もあるが苦手な食事が進まない子や「あんまり好きじゃない」などと話す子も見られる。

〈保育教論の願い〉

調理実習を通して、食の大切さやありがたさを知り、食べてみようという気持ちをもってほしい調理の方との関わりを持ち作っている人がいることを知ってほしい

○担任の援助☆環境構成

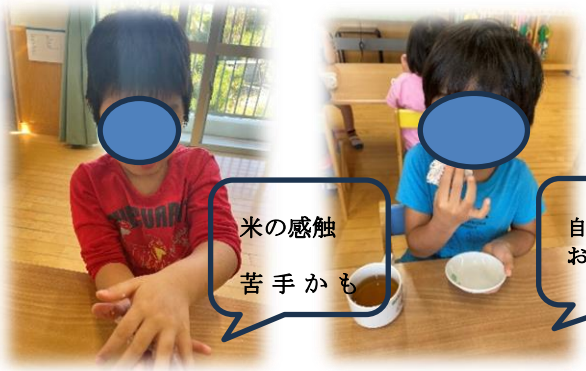
☆配膳された量を確認し、自分で食べられる量を選択できるようにした。

☆グループを定期的に変えていき、クラスの友達と会話を楽しんだり食への良い刺激となるようにした。

○自分で決めた量を完食できた際には、「食べきれたね」や「大きくなるね」など肯定的な言葉かけを行い、共感していき自信に繋げていった。

○子ども達とやってみたいこと、やりたいことを考え受け止めていき計画を立てていった。

↑グループ交代し、色々なお友達とたべています。



↑調理室見学をしに行きました

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

・いろいろな野菜栽培を通して、食べ物に興味を持つ子が増えてきた。毎日の当番活動の中で水かけを行い野菜の成長を喜ぶ子や食事時間に進んで食べる子も増えた。

・調理と連携を取り、おにぎり作りなどを行えたおかげで子ども達も積極的に調理の方と関わりを持つ姿が見られた。

② 課題

・最初に栽培した「ニラ」を使ってヒラヤーチー作りを計画していたが上手く育たず、それに代わる調理実習が出来なかった。

・咀嚼に時間がかかってしまい、進んで食べようとしない子がまだ数名いる。

③ 実践を通した自身の気づき、考えなどを書いてください

・食育を子ども達に上手く伝えるために、「三大栄養素」や栽培活動を多めに取り入れたが子ども達が楽しんで参加できており、前向きな言葉も増えていることに気付いた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなどを書いてください

・一人ひとりのやってみたい気持ちを汲み取りながら、水かけの分量を調整してみたりと子ども達が主体となる活動ができるようにしていく。

失敗をさせないような活動を組むのでは無く、色々な経験の中から学んでいけるようにしていきたいと思った。さらに、調理実習なども積極的に行い家庭にも伝え連携できる取り組みを行っていきたい。

〈主な参考文献〉文部科学省　平成３０年３月　「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」

様式３【課題研究報告書】

食を営む力の基礎を培い、楽しく食べる子どもに成長するために

―食事をすることは嬉しい！楽しい！大好き！―

うるま市天願こども園　保育教諭　金城　優衣

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領の第４節満３歳以上の園児の教育及び保育に関するねらい及び内容の「健康」の領域の内容に（５）「保育教諭等や友達と食べる事を楽しみ、食べ物への興味や関心を持つ」と（６）「健康な生活のリズムを身に付ける」記載されている。内容取扱いに（４）「健康な心と体を育てるためには、食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、園児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で保育教諭等や他の園児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、食の大切さに気付き、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること」と記載されている。

自園の幼児の実態としては、５歳児（６０名）・４歳児（４１名）・３歳児（３０名）、計１３１名在籍し、その日によって残食の量や、食べる量の違いが見られる。課題と職員の思いとして、「食事の時間が楽しいと思ってほしい」「食事のマナーを学んでほしい」「野菜類の残食が多いことから、食のありがたみや育てる大変さから感謝の気持ちを持ってほしい」という思いから、本テーマを設定することにした。

Ⅱ　研究内容

①体への働きや３つの栄養素について知る・・・環境や視覚的教材で知る
②菜園活動を通して、季節（旬）の野菜を知り、育てることの難しさ、生長の楽しみを味わう。また、実際見て、触れてクッキングをし、収穫する喜びや食べてもらう嬉しさ、自分で作った物を食べる体験、経験をする。
③食事のマナー・・・環境(掲示物)で知らせた、食事の時間にマナーを伝える時間を設け、子ども達と確認しながら行う。
④お腹空いた！と思える環境・・・午前の設定保育の活動内容や時間の工夫
⑤食事時間が楽しいと思える環境・・・異年齢での食事の時間やバイキング

Ⅲ　保育計画

月	研　究　計　画
４月	幼児の実態把握、課題の検討
６月	研究テーマの検討
７月	保育実践
１１月	中間報告及び、中間検討会
１２月	課題研究まとめ
	課題研究報告

Ⅳ　課題解決に向けた取組（実践）

≪幼児の実態≫

●好き嫌いせずなんでも食べる子もいるが野菜類の残食が多い。
　また、その日の活動内容により食べる量が変わる。
●食への興味・関心が薄い子もいる。
●食事のマナーや、スプーン・フォークなど正しく持てない子がいる
●菜園活動を行うが毎日、お世話をすることが難しい。

≪保育教諭の願い・・・≫

●色々な食材へ興味・関心を深め、色々な食材へ自ら一口チャレンジしてほしい！
●「お腹すいた！」と思った時に食事をしてほしい！
●菜園活動を通して、季節の野菜について興味・関心をもってほしい！
●菜園活動や栄養の歌、季節の野菜の身体への効果、栄養素の表を通して食事への関心を深めてほしい！
●異年齢で食事をすることで、刺激し合いながら楽しく食事をしてほしい！
●作ってくれた方への感謝の気持ちをもってほしい！

実践実例①

≪保育教諭の関わりと援助≫

●本児と食べられる量を確認しながら、自分で入れたり、本児に合わせて対応を行う。（トレーにおける→少し匂いをしたり、舐めてみたりする→一口食べてみる等）
●子ども達がいつでも見える場所（ランチルームの廊下）に季節の野菜の表示、また、野菜の身体への効果を文字とイラストで表示する。３つの栄養素を表示

≪幼児の変容≫

●自分の食べられる量を把握することで、苦手なものは少なくしてもらったり、ランチルームを活用し食事をすることで、食べられた達成感から、色々な食材へ少しづつチャレンジをする様子や、残食の量が少しづつ減ってきた。
●ランチルーム近くの子ども達がいつでも見える環境を使って季節の野菜や野菜の身体への効果、畑で植えている野菜の生長過程も掲示していることで、配膳待ちの間や廊下を通るたびに友だち同士で掲示物へ目を止める姿が増え、食事の際でも、会話の中から出てくる様子が見られる。
●栄養素を表示したり、身体への効果についての豆知識を表示することで、食事の時間の会話に栄養素について話をする様子や、一口チャレンジする子がいる。

食育環境掲示

今日のメニュー
栄養素掲示

バイキング
の様子

実践実例②

≪保育教諭の関わりと援助≫
●活動を十分に行い、満足させ空腹感を味わえるようにする。（登園してすぐ園庭や、小学校施設を借用し身体を十分に動かす）
●見える厨房を活用し、今日の給食でどんな食材を調理しているか子ども達に語り掛けながら見たり、匂いをしたり食事も待ち遠しく感じるような援助を行う。

≪幼児の変容≫
●朝登園してすぐ園庭で身体を動かし、設定活動へ移ることで、お昼には「お腹すいた～」と言ってくる子どもが増えた。
ガラス張りのランチルーム、厨房職員のごはんを作る姿、食材が見えることで興味、関心が深まり、「今日のお野菜、畑に植えている野菜と一緒だね」と友だち同士会話をしながら楽しみにしている姿が見られるようになる

朝の活動の様子

ガラス張りの厨房

実践実例③

≪保育教諭の関わりと援助≫
●ランチルームにて、異年齢で食事をし、年少クラスの友だちの食事を年中・年長児が給食当番として配膳をしたり、一緒に食事をすることで楽しく食事ができるように環境を整える。

≪幼児の変容≫
●異年齢で食事をする中で、「お兄ちゃん（お姉ちゃん）が食べているから自分も食べる！」と苦手な食材へチャレンジをしたり、楽しく食事をする姿や、年長児が年少児へスプーンの持ち方を教えたり、実際に野菜を年長児が先に食べ、「美味しいよ！」と味の感想を伝えることで年少・年中児が一口チャレンジする姿が見られるようになる。その姿を見た年長児が褒め合ったり、お互いに刺激し合いながら食事を楽しむ様子が見られる。

異年齢での食事の様子

実践実例④

≪保育教諭の関わりと援助≫
●再生野菜を行う。（フードロスについて知らせていきながら、いつも捨てている野菜を水につけると芽が出てまた食べることができることを子ども達へ知らせる）

≪幼児の変容≫
●フードロスについていつも捨てている根っこの部分や、頭の部分を水につけると芽が出て畑へ植えたり収穫することで、野菜には捨てるところがないと知った子ども達。
家庭でも、園での経験や体験を自ら話す様子が見られたりと家庭での会話の一つになる。

再生野菜の環境

毎日生長観察

再生野菜を収穫中…

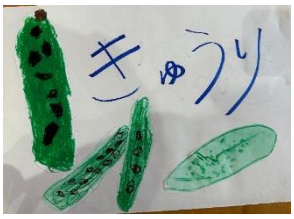
実践実例⑤

≪保育教諭の関わりと援助≫
・野菜の苗を植えてからの生長過程を写真と文字で表示する。
・看板作りでは実際の野菜を見たり、匂ったりして絵に表現し看板づくりを行う。
　その時に使った野菜を使ってすぐにクッキングし味見をすることで生長を楽しみにしてもらえるように活動を行う。
・野菜クイズを掲示し、畑に植えている野菜へ興味・関心をもってもらう。

≪幼児の変容≫
●自分達が育てた野菜を使ってクッキングすることで、苦手な食材へチャレンジする様子が見れた。
また、沖縄ならではの野菜を使ってカンダバージューシーづくりを年長児が行い、おやつで提供。
第２弾として年少・年中児がカンダバーを収穫、細かくちぎり、年長児が調理を行うことで沖縄ならではの食事について知ることができ、「家でもやりたい！」と実際家庭で作る子もいた。
●菜園活動では、１から一緒に行い、畑の草抜き、また土の栄養を子ども達と一緒に混ぜたり、季節の野菜についてクラスの環境に取り入れたりと、植えたい野菜を子ども達と決めることで、植えた後に生長を気にしている様子や雨で苗の周りが水たまりになると、「先生野菜大丈夫かな？水がいっぱいで苦しいよってしていないかな？」と気にかけている様子が多くみられるようになった。

菜園活動の様子

看板作り



カンダバージューシー作りの様子

実際見て、収穫、匂って、食する経験、体験

Ⅴ　実践のまとめと考察

・環境の中で、食育コーナーで掲示をすることで、季節の野菜や、畑に植えた野菜の生長過程を写真やクイズで掲示することで友達同士、クイズを出し合ったり廊下を通りながら見る子が増えた。栄養素についても興味・関心が深まってきたように感じる。また、環境の中で、再生野菜を設置することで生長過程を毎日観察したり、年長クラスでは発見したことを文字にして掲示する姿が見られるようになる。
・育てた野菜を使ってクッキングし、食することで、「自分が育てた野菜だから少し食べる！」と言い、苦手な食材へも少しずつチャレンジしようとする姿が増えた。苦手な野菜を食べることができた経験や達成感から完食する子も増えてきた。
・日中の活動を満足感が味わえるように環境を整え、「お腹すいた！」と空腹感を感じ食事することで残

食が減ってきた。
また、その中で朝登園した際に異年齢で戸外にて思い切り身体を動かし一緒に過ごすことで、食事の時間を楽しみにする子が多く、食事の雰囲気を楽しんでいる。

〈主な参考文献〉

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

様式３ 【課題研究報告書】

触れ合いを通して育つ心の成長、豊かな感性を引き出すための援助の工夫

― 異年齢児交流を通して育む力 ―

うるま市天願こども園　保育教諭　天願　沙弥香

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　第２章「人間関係」の領域には、他の人々と親しみ、支えあって生活するために、自立心を育て、人との関りを養う。と記されている。

近年、少子化が進む中で核家族化、コロナ禍による他人との関わりの減少、遊びの時間や環境の減少、更にゲームやネット動画などでコミュニケーション機能の減少が問題視されている。また、コロナ禍の中で、行動自粛や感染症予防等で、幼児を取り巻く環境は園の中でもストレスが多い現状が続いていた。しかし、新型コロナウイルスが「5 類」に移行されたことで、人数や行動制限が無くなり、幼児期において人との触れ合いの大切さを再度見直していく必要があると考えた。

本園では、3 歳児３０名・４歳児４５名（２クラス）・５歳児６３名（２クラス）と３年保育の教育・保育を進める中で、初めて集団生活をする子がほとんどであり、異国の子も多々いるという環境である。
自由活動の中で兄弟同士を通しての異年齢児交流は見られるが、異年齢の関心が低く、また、他クラスでの遊びの展開が見られず自発性を育む経験の必要性を感じる。

このような実態を踏まえ、異年齢児保育を通して異なる子どもと交流できる機会を作り、年長児がお手本になろうと意識したり、お互いに関わり方を学び刺激を受けながら自発性を基盤とし一緒に成長していくことを期待していくには、保育教諭の援助や環境の工夫が大切だと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１，各クラスの状況・園児の実態を把握する。
・各クラスでの意見交換を行い、遊びが持続していくように環境構成の工夫や援助の仕方を探る。
・発達に応じた関わり方や援助の配慮をする。
・園児の関わりの中から見える思いやり、尊敬の姿を記録していく。
２，記録から園児を見つめる。
・園児の関わり方や環境構成について振り返り、遊びの連続性に配慮する。
・ドキュメンテーションを通して「可視化・見える化」し、子どもたちの様子を伝え対話を広げていく。

Ⅲ　保育計画

月	研　究　計　画
４月～５月	・幼児の実態把握・課題の検討
６月～７月	・研究テーマの検討（テーマ設定の理由、研究内容、研究計画の検討含む）
８月～９月	・理論研究、保育実践
（10 月）	（中間検討）
11 月～12 月	・課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取組（実践）

１，実践事例１　～　職員会議を行い、各クラス実態把握をした中から環境設定　～

【園児の実態】

・クラス内での友達の関わりは深まってきた。その反面、園内戸外での自由遊びの中で異年齢での遊びが見られず、興味、関心が持てずにいる。
・兄弟児は園内でも自分のクラスから離れて異年齢で関わりを持ち遊び込む姿が見られる。

【保育教諭の願い】
・異年齢の関わりを深め、思いやり、尊敬の想いを抱いてほしい。
・異年齢で遊ぶ楽しさを知り、遊びの展開を広げて様々な事に挑戦して欲しい。
・対話を広げ、年長児としての自覚を引き出していきたい。

【保育教諭の関わりと援助】

・夏休みに入り２号認定児しかいない環境の中、各クラスを３グループに編成し夏休みの１か月間異年齢児保育を行い異年齢で関わる環境を整える。
・不安感が出ないように各クラスの保育教諭をしっかりと配置し配慮する。また、保護者へ取り組みについて事前に報告をする。
・異年齢児に興味関心が持てるよう保育教諭が必要に応じて仲立ちし、想いや遊びを共有できる時間を設ける。
・ペアを作り、一緒に遊ぶ楽しさが持てるような機会を作る。

〇幼児の様子〇

・他児に関わろうとせず、個々でリトミックを楽しむ姿が見られた。
・ペアにすると、同年代と一緒に楽しみ、歩幅を合わせて取り組もうとせず保育教諭が楽しさを教え、配慮が必要だった。

どうやって作るの？

教える？一緒に作ろう！

皆で作ったら楽しそう。やってみたい！

・年長児が設計図を描き、一緒にお化け屋敷を作りたいと提案。３歳児、４歳児、５歳児と使える教具や作り上げれる物を保育教諭が一緒になって考え、年長児が皆の前で発表し、材料集めから子どもたち主体で動き“お化け屋敷つくり”を行う。
・年長児の「やってみたい！」が異年齢の挑戦心を引き出していく。

これはにじ組(３歳)でも出来る？

一緒に色塗りしたら大きいの作れるよ！！

お姉ちゃん手伝って！
難しい。

【幼児の変容】◇年少　〇年中　□年長

◇製作遊びの中で、折り目を作る時やハサミの使い方で難しい部分があると保育教諭に聞くのではなく、年中・年長児に積極的に聞く姿が見られる。

◇年中・年長児の遊んでいる姿に憧れを抱くが、「難しい」と逃げてしまう姿が見られた。保育教諭が仲立ちすることで、「教えて」「手伝って」と異年齢に声を掛け挑戦出来るようになってきた。

〇３クラスにしたことで、友だちと離れた不安からいつもの活発な姿が見られずにいた。

〇集団遊びや年下の子のお世話をする経験を通して、お姉ちゃん・お兄ちゃんの自覚が芽生え少しずつではあるが、積極的に関わろうとする姿が見られるようになってきた。

□恥ずかしさから年下の子と関わろうとはせず、同年代と一緒に遊びを展開していく姿が見られる。保育教諭が仲立ちし、関わり方を使えることで「一緒にやる？」と気にかける姿が見られるようになってきた。

□異年齢一緒のクラスにしたことで、少しずつ「大丈夫？」「手伝う？」と声を掛けて意識する姿が見られるようになってきた。思いやる気持ちが育まれている。

□皆で一緒に一つの物を作り上げたいという気持ちが表れ、年齢によって成長過程が違うことを知り、皆の前で遊びの提案を発表したいと意欲的になってきた。

【結果と考察】

・異年齢児クラスで編成したことで子どもたちの戸惑いも見られたが、体格や成長の違いに気づき思いやる姿が見られるようになってきた。

・ドキュメンテーションを部屋に視覚的教材として掲示し、子どもたちの対話を広げる事で「これやってみたい！」「〇〇もやっているからやる！」と恥じらいが無くなり、挑戦心や異年齢児への意識の高まりが芽生えたと感じる。

お化け屋敷作り大成功

・他クラスを招待して異年齢ペアで受付等係り決めをして進める事が出来た。

今後の課題・・・

・通常通りクラスが戻り一号認定児が登園してきても、異年齢での関りを深めていけるような活動を取り入れていく。

・その後の成長に関して他クラス職員と連携を図る。

２，実践事例２　～　記録の中から見えてくる子どもたちの育ち　～

【園児の実態】

・朝や夕方の自由時間を利用して、自ら声を掛けてみたりと異年齢の関りが増えた。

・保護者へ楽しかったことを共有し、ドキュメンテーションを意識しての対話が広がった。

・積極的にコミュニケーションを取り、言葉にして伝える姿が見えるようになり遊びの展開が各クラス見えるようになってきた。

【保育教諭の願い】

・言葉にして伝え合い、コミュニケーションを取る楽しさを学んで欲しい。

・異年齢の関わりを更に深め、思いやり、尊敬の想いを抱いてほしい。

・進級に向けて期待を高めて欲しい。

【保育教諭の関わりと援助】

・職員会議を行い、記録の中から子どもたちの成長を共有していく。

・異年齢での活動を設定し、歩幅を合わせたり異年齢での対話を広げていけるよう必要に応じて援助していく。

・職員会議を通して異年齢の援助の工夫を職員間で共有し、子どもたちが担任とは違う保育教諭との関りを持っていけるように共通理解していく。

【幼児の変容】◇年少　〇年中　□年長

◇自ら縄跳びをしてみたり、リズムジャンプをしたりと挑戦心が芽生えた。

〇「ほし組(5 歳)」になったら、「〇〇出来るの？」「やってみたい！」と進級することへの期待が高まってきた。

〇朝の母子分離時に泣いている年少児を見かけると、「大丈夫だよ。一緒に遊ぼう」と声を掛け年中児としての自覚が芽生えてきた。

□散歩時に、「歩くの速い？」「もう少しだよ、頑張れ」と歩幅を合わせて歩けるようになり、思いやる心が育まれてきた。

・担任以外の保育教諭の名前を覚え、他職員との関わりが更に深まってきた。

散歩

小さい子に合せてゆっくり歩くよ！

思いやり

お母さんみたいに髪型なおしてあげるね！

保育教諭との関り

先生一緒に遊ぼう！
“皆で鬼ごっこ”

【結果と考察】

・二号認定児のみ先に異年齢児保育を経験していたことで、一号認定児が刺激されスムーズに異年齢児交流を更に深めることが出来た。

・異年齢交流についての会議をすることで、発達に応じた環境構成の見直しを考え工夫し職員間での学びが深まったと感じる。

Ⅴ　実践のまとめと考察

・子どもたちの育ちを、ドキュメンテーションで記録していくことで共有しやすい部分が見えてきた。また、園での取り組みを可視化することで保護者への情報提供の手段として対話が広がり保護者支援へと繋がったと感じる。

・異年齢児交流を深める事で、問題視されているコミュニケーション能力を高めることが出来たと感じた。

・結果として、子どもたちの関係性の深まりや成長を感じると共に、担任以外の職員でクラスを持つことで職員間の仲が深まり、様々な保育を見て学びへと繋がった。

Ⅵ　今後の課題

1. ドキュメンテーションを保護者や職員向けでは無く、子どもたちの視覚的教材の一部としていつでも手に取り対話が広がるような環境を作っていく。
2. 引き続き、次年度も異年齢児活動を取り入れ幼児期に必要な体験・経験をさせて、心の成長を引き出していこうと思う。
3. 保護者へ対話する楽しさを伝え、園での出来事を共有し子どもたちの「今」を大切に出来るように連携をとっていく。

様式３「課題研究レポート」

相手の思いや気持ちに気づき、共同性が育ちあう学級づくりの環境構成と援助の工夫

―保育教諭や友だちとの関わりを通して―

勝連こども園　保育教諭　氏名　安谷屋　舞海

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年の幼児を取り巻く環境は、少子化、核家族化、また新型コロナウイルスによる社会現象やインターネットの普及など人間関係の希薄化がある。その背景から、他者との関わりが苦手な子、また自制心や忍耐力が十分に育っていない事など課題が指摘されている。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「人間関係」には「自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。」とある。幼児は自分と他者の気持ちの区別が出来ず、直ちに適切な行動をとることは困難である。相手の立場に立って考えられるようになるには、友だちとの関わり、感情的な行き違いや自他の欲求の対立というような経験が必要である。

本学級は男児 10 名、女児 15 名の計 25 名であり、保育経験がある子がほとんどで、明るく活発で活動にも意欲的に取り組もうとする子ども達である。しかし、自分の思いを相手に強要しようとしたり、相手の気持ちに気づく経験が必要だと感じた。そこで、保育教諭や他児との関わりを通して共同性が育ち合う姿を研究したいと思い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 園生活の中で、保育教諭や友だちと関わり様々な思いに気付けるようになる
② 絵本を通して、思いやる気持ちや言葉選びの力が身につく
③ 運動会に向けた取り組みから、共同性の育ち

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例(1)　「絵本を通して様々な言葉に触れる」

［幼児の姿］
友だちと関わる中で、自分の思いを通そうと乱暴な言葉になったり意見のぶつかり合いから手が出てしまう子もいる。また、その場を楽しませようと場にそぐわない言葉を使っている子がいる。

［保育教諭の願い］
・自分の気持ちは、言葉で表現し、相手の気持ちに気付けるようになってほしい
・その場に応じた言葉遣いが分かるようになってほしい

［環境構成の工夫］
〇身近な出来事を絵本やイラストを通して伝える
・相手の気持ちを考えていけるよう、絵本の読み聞かせを行い、また話し合いを学級で行う
・遊びを通して楽しんで身につける　（ふわふわ言葉選び迷路）

［保育教諭の援助］
〇場に応じた言葉の使い方を確認する
・ちくちく言葉を使ってしまったとき、相手の気持ちや思いを伝えながら、自然とふわふわ言葉に言い換えが出来るように一緒に考えていく。また、学級全体でも言葉の使い方を確認することで生活の中で活かせるようにしていった

［幼児の変容］
・保育室の壁などにふわふわ、ちくちく言葉の迷路のイラストを掲示し、遊びの中で文字を指でさし読むことを楽しんでいたり、友だちと一緒に言葉選びを考える姿があった
・友だちとのやり取りから「それ、ちくちくことばだよ」と気づき、相手に伝える子がいた
・玩具の貸し借りや、誘いの返答に「いやだ」ではなく、「ちょっと待ってね」など、相手を気づかう言葉の変化が出てきた

［結果と考察］
・言葉や文字理解の発達に個人差はあるが、身近な出来事を絵本や迷路を通し、分かりやすい言葉やイラスト等の視覚教材を使い工夫することで、少しずつ子ども達が言葉遣いを意識する様子や思いやる姿が身についてきたと感じた
・絵本の読み聞かせで意識する子もいるが、全員が意識するにはまだまだ不十分であるため、子ども達がやり取りをしている中で言葉の伝え方に困った場面を見かけた時や、学級で集まる際に繰り返し絵本を通して言葉の大切さを伝えていきたいと思う
・言葉で表現するようになるには、幼児が様々な言葉に触れ、相手の話をよく聞き、相手の気持ちや思いに気づき、自分が経験したことや考えを伝え合う経験が必要と考え、保育教諭や友だちとの信頼関係を築くことが大切だと改めて感じた

実践事例(2)　「運動会への取り組み」(10 月～11 月)

［幼児の姿］
・自分が一番！となんでも勝負をしようとしている子がいる
・かけっこやタッチリレーでも、競争ではなく友だちと一緒に仲良く走ることを楽しんでいる

［保育教諭の願い］
・活動を通し、友だちと思いを共有しながら協力して競技や運動会を楽しめるようになってほしい
・友だちの頑張る姿を応援し、友だちの良さに気づき仲良くなる

［環境構成の工夫］
〇運動会について学級全体で話し合いの場を設ける

・初めてのリレー取り組み

・リトミック

・サーキット、バルーン

［保育教諭の援助］
〇学級の集う場で、取り組みの振り返りをする
・一人ひとりの頑張りを認め、褒めていく。学級全体を成功体験へ導けるような声掛けを工夫する
・「足が早い、力が強いことが勝てる訳ではない」とチームで力を合わせることが大事だということを繰り返し伝えていく

［幼児の変容］
〇話し合いを重ねたことで
・友だちの応援をしたり、競技で各チームが一丸となり協力しながら頑張る姿が見られた
・相手の良さを知り、普段あまり関わらなかった友だちと積極的に関わるようになった
・運動会への取り組みから、集団で遊ぶことが増えた。また、ごっこ遊びの中でも話し合い協調しながら遊ぶ姿も見られるようになった

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

・幼児が友だちの良さに気付けるようになるには、それぞれの幼児が自己発揮できる環境が必要であると考える。保育教諭として、子ども同士が好きな遊びや活動の中で、自身のありのままの姿を認め、互いに思いや考えを伝え合うような環境作りを工夫した。それにより、少しずつ友だちの良さに気づき、関わり合いが増えてきたと考える

② 課題

・更に人間関係が広がり深まっていけるよう、仲の良い友達だけでなく、いろいろな友だちと一緒に活動する機会を増やし、学級全体で共同して遊ぶ活動を展開できるよう工夫していく必要がある

③ 実践を通した自身の気づき、考えなどを書いてください

・相手を思いやる心を育てるには友だちとの関わりを深め、認め合うことが必要だと感じた。話し合うことで、意見の違いに気づき、繰り返しの経験の中で折り合いをつけ相手を受け入れ、人間関係の育ちに繋がっていくのだと新ためて学ぶ事が出来た。他者との関わりの中で、言葉の使い方が身に付き、よりよい人間関係に繋がっていくのではないかと考える

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなどを書いてください

日々の保育を振り返り、子ども達の変化や遊びに注目し、子ども達の心を動かす様々な経験が出来るよう、園生活や活動が豊かになるよう努めていきたい。また、共同して遊ぶ楽しさを味わえる遊びの教材研究や、環境構成の工夫を行っていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年　幼保連携型認定こども園 教育・保育要領解説　フレーベル館
・ことばえらびえほん　ふわふわとちくちく　日本図書センター
・しあわせのバケツ　ＴＯブックス

＊2 ページから 3 ページにまとめること

様式３「課題研究レポート」

お友達の思いがある事に気づき一緒に関わる楽しさを味わう為の援助の工夫
―教師や友達との関わりを通して―

中城村　クリスチャン教育センター幼稚園　保育教諭　氏名　花城リミ

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」第２章人間関係（６）に自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気づく（７）には友達の良さに気づき、一緒に活動する楽しさを味わうとある。近年ゲームやインターネット等の普及から、家庭では室内あそびが増え、人と人が関わる機会が減ってきているように感じる。そんな中子ども達は、これからの社会で自立していく為には、人との関わりは避けて通れず、「人間関係」というものは最も重要だと考える。

本学級は男児１４名、女児１６名の合計３０名在籍していている。カリキュラムの中に英語を取り入れていることから、色々な国出身の子どもも少なくないため、クラスの中には日本語が上手く理解できない子どももいる。幼児の実態としては、活発で戸外活動や体育あそびを楽しんでいる様子が見られる。しかし、その中で友達と一緒に遊びを広げ楽しめる子どももいるが、自分の気持ちを上手く相手に伝えられず泣いて訴えたり、言葉よりも先に手が出たりとトラブルになる子どもがいる。

このような実態を踏まえ、遊びの中でお友達と一緒に活動する楽しさや、自分の気持ちを相手に伝えてお友達の思いに気づき、伝え合う認め合うことの喜びを実感して欲しいと願い本テーマを設定し、研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 他児と関わり一緒に活動する楽しさを味わうための工夫
　集団あそびの中で活動が始まる前にルールを指導し、ルールを守ってお友達との関わりをより深められるような環境構成をする。

② 自分の気持ちを伝え、お友達にも思いがあることに気づけるような工夫
　日常生活の中で自分の思いを発表する機会を設け、自分の気持ちを相手に伝え、そしてお友達のお話にも耳を傾けることができるような環境をつくる。

③ 言って良い事、悪い事の区別ができるような環境構成
　「ちくちく言葉」「ふわふわ言葉」を知り、お友達の気持ちを考えて発言することができるような取り組みをする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】「ヒーローになりきって絵本を紹介しよう」

【保育教諭の願い】
自分のお話だけではなく、お友達のお話にも耳を傾ける事ができるようになってほしい。そして、お友達のお話を聞いてお友達にも考えや思いがある事に気づいて欲しい。

《保育教諭の関わりと援助》

・一人ひとり好きな絵本の役に成りきって、その絵本をみんなの前で紹介し、自分の思っていることを発表する機会を設ける。

・自分の発表をするだけではなく、お友達の発表にも興味を示すことができるように発表をはじめる前に「次は何の絵本だろう、みんなで次のお友達に聞いてみよう」と声掛けをする。

《幼児の変容》

・一人ひとり服装や小道具を真似して、絵本の中の登場人物やヒーローに成りきることで、普段あまり発言しない子も積極的に自己表現することができた。

・お友達の発表を聞いて「すごい～」「その絵本見せて～」と子ども同士の関わりも多く見られた。

僕の好きな絵本は〇〇です

おともだちの絵本面白い～

私は〇〇の絵本が好きです

【実践事例２】お友達と一緒にやるって楽しいね

【保育教諭の願い】

初めての活動で、「楽しくない」「やりたくない」ではなく、楽しそう、やってみたいとワクワクしてほしい。文字に興味ができてきている中、カルタ遊びを通しお友達と一緒に活動する楽しさを味わってほしい。

≪保育教諭の関わりと援助》

・カルタを始めるまえに子ども達がルールを理解しやすいように分かりやすく説明をする。

・人数を少人数グループに分けたり、男の子、女の子チームに分けたりすることでお友達と一緒に活動する楽しさを味わえるような環境を構成する。

・ルールが分からなくてできない子や、少し困っている子にはチームのお友達同士助けあったり保育教諭が声かけをしたりする。

《幼児の変容》

・一人ずつカルタを行うのではなく、男の子、女の子等のグループに分けてチーム対決をすることでカルタをより楽しむことができるようになった。

・最初は「分からない～、楽しくない～」と言っている子も、お友達とペアになったり、グループに分かれたりしてカルタを行うことで、お友達に「がんばれ～」「次は絶対かるた取ろうね」と一緒に楽しんでいる様子がみられた。

やった～カルタ取れたよ✌

《結果と考察》

・子どもが自分の気持ちを表現できる環境を作ることで、「お話できた」という自信に繋がり、友だちのお話にも耳を傾けることができるようになった。

・活動の中で、環境構成を工夫することで、一緒に活動する楽しさを味わうことができた。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

お友達の話に耳を傾け、興味をもつことができるようになった。また、子どもが楽しめるように環境を工夫することで、お友達と一緒に活動をする楽しさを味わうことができた。

② 課題

日常生活の中でお友達と一緒に関わり、言葉での伝えあいを楽しむことができるようになる。

③ 実践を通した自身の気づき、考えなどを書いてください

子どもに育んでほしい部分を、保育教諭が環境構成して保育を設定することで少しずつ子どもが育っていく姿が見えてくると考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなどを書いてください

実践を通して、保育教諭が環境構成を工夫することで課題としてあげていた、お友達の声に耳を傾ける事や、一緒に活動する楽しさを味わってほしい部分が育んだように感じる。今後も自分の気持ちを表現でき、お友達の良さにも気づける環境づくり、そして共に活動する楽しさを充分に味わえるような環境を構成していきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　「幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説」（フレーベル館）

基本的な生活習慣を育むための援助の工夫

―日々の保育を通して―

中城村　学校法人平安学園　平安幼稚園　氏名　松堂　由莉亜

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領の「健康」の領域に「身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする」とある。生活に必要な活動を自ら進んでしようとする事、自立に向かって必要な力を育てる事が大切だと考える。
また、幼稚園型認定こども園教育・保育要領解説　第２章第４節 (5)「保育教諭等や友達と食べる事を楽しみ、食べ物への興味や関心を持つ」とある。クラス全体で会話を楽しみながら食事をする事、食に対して興味を持つことは大切だと考える。

本学級の幼児の実態としては、２歳児（4 年保育）男児 11 名、女児 7 名、計 18 名である。クラス実態として、身の回りの事を自ら進んでやる子は少なく、保育者の援助を必要としている子が多い。また、困った時に保育者に言葉で伝える事が出来ず、そのままにしている子や泣いて訴える子がいる。食事の面では、食への興味が薄く自ら進んで食べない、”食べさせられている”という姿が見られる。

これらの実態を踏まえ、様々な環境や経験を通して身の回りの事を自ら進んで取り組む事、言葉を通して伝えたい事を表現する事、食への興味・関心を深め、自ら食べようとする気持ちを引き出し、食事の楽しさや食べる喜びを感じて欲しいと思い、本テーマを設定する。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　自分でやろうとする環境の工夫
　身の回りの事（朝の身支度、着脱、排泄等）を自ら進んで取り組めるような環境作り

２　伝えたいことを言葉で表現できるような取り組み
　子どもの気持ちを代弁しながら、状況や場面に応じた言葉を発することが出来るように援助していく。

３　食への興味・関心を持ち自ら進んで食べようとする声掛けの工夫
　食材を実際に大切に育てたり、絵本や紙芝居を通して興味関心を持つような環境作り。
　また、進んで食べられたことへの自信と達成感を喜びに繋げられるように褒め、苦手なものに対しては様子を見守りながら必要に応じて援助していく。

Ⅲ　保育計画

月	研　究　計　画
４～５月	幼児の実態把握・課題の検討
６月	研究テーマ検討（テーマ設定理由、研究内容、研究計画の検討含む）
７～１１月	理論研究・保育実践
９月	中間検討
１２月	課題研究まとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取組（実践）

１　実践事例（１）「保育者に親しみを持ち、園生活に慣れる」

【幼児の姿】4 月

・クラス全員が新入園児だった為、保護者からなかなか離れられず泣いて登園する姿がみられる。

・保育者と一緒に支度をしていくにつれ、朝の身支度の流れがわかり、自ら進んでやろうと取り組む子がいる中で、遊びに夢中になり声掛けをしても遊び続ける子の姿も見られる。

【保育者の願い】
・園生活に慣れ、自ら進んで朝の身支度をして欲しい。
・進級に向けて、自ら進んで朝の身支度が出来るようになって欲しい。

【☆環境構成の工夫と♪援助】

☆保育者が手本となって身支度の流れを伝えていく。
♪タオル・水筒掛けを子どもの目線に合わせて設定し、子どもが率先して自分の名前を探し準備が出来る様な環境を作る。

名前あったよ

【幼児の変容】

・タオル・水筒掛けの段を１段下げて子どもの目線に合わせて見ると、名前を探そうとしなかった子も進んで自分の名前を探して掛けるようになった。
・保育者が手本となって見せることで保育者の真似をして身支度をする子が増えてきた。

【結果と考察】

・身支度を保育者が手本となり何度か見せたことにより、流れを覚え「先生一緒にやろう」と言葉で伝え進んで準備をするようになってきた。
・自分の名前を覚えると「お名前がかくれんぼしているから探してきて～」と声掛けをすると遊び続けていた子でも自らゲーム感覚で進んで身支度をするようになってきた。

２　実践事例（２）「排泄をすることへの意識づけ・環境づくり」

【幼児の姿】4 月～6 月

・クラス全員がオムツで登園しトイレに興味がなく　排泄へ促しても「いかない」と嫌がる姿がみられる。
・おもらしをする事を恐れ、綿パンツを履きたがらない姿がみられる。
・排泄へ行きたいのに伝えられず失敗をする。また、失敗をしても保育者に伝える事が出来ずそのままにしたり、目で訴え静かに待っている姿がみられる。
・活動に夢中になり排泄へ行く事を忘れ、何度も失敗をする姿がみられる。

【保育者の願い】
・進級に向けて、綿パンツに興味を持ち自ら進んで排泄へ行って欲しい。
・失敗をしても綿パンツに何度も挑戦して欲しい。また、失敗したら言葉で保育者に伝えられるようになって欲しい。

【☆環境構成の工夫と♪援助】

☆排泄に関する絵本を読んで排泄やパンツに興味を持つようにする。

☆7 月から昼寝時もクラス全員、綿パンツで過ごす。
♪排泄へ行きたがらない子には、無理にトイレへ行かせず行きたくなったタイミングで一緒に行く。
♪何度失敗をしても、絶対に叱らないで褒める。

【幼児の変容】

・初めは排泄に行かなかった子も自分の好きなキャラクターのパンツを「濡らしたくない」と遊んでいる時や活動している時でも進んで排泄に行くようになった。
・午睡時もパンツに変えて１ヶ月経った頃から、日中もおもらしをする事がなくなった。
・周りの子がパンツに移行しているのを見て「〇〇もパンツはきたい」と進んで綿パンツへ履き替える子が増えた。

【結果と考察】

・失敗を恐れてオムツを好んでいた子も、周りの友だちがパンツに移行している姿をみて、興味関心が湧き、失敗をしても何度もパンツに挑戦する姿が見られた。また、自分の好きなキャラクターのパンツをはくことにより「濡らしたくない」と進んで排泄にいくようになってきた。
・午睡時にパンツで寝るようになり、日中も子ども達が意識することによって排尿間隔が １ 時間半になってきた。
・失敗をしても保育者に伝えるようにその都度話をすると、「先生、濡れちゃった」と伝えられなかった子が段々と伝えられるようになってきた。

３　実践事例（３）「食材に興味を持ち食事の雰囲気を楽しんで、自ら進んで食事を食べる」

【幼児の姿】４月～９月

・偏食な子が多く苦手な食べ物があると全く口にしない。また、食材に興味がなく名前がわからない子がいる。
・自分で食べようとしない子が多く、食への意識が薄い。保育者からの介助を待っている子、介助を要求する子や姿勢が悪く食べこぼしが多い姿が見られる。
・食事中の離席も多く、食事を自ら進んで食べようとしない姿が見られる。また、介助をしようとすると食べたくないと嫌がる姿がみられる。

【保育者の願い】
・食材に興味を持ち、色々な食材の名前や給食のメニューを覚えて欲しい。
・苦手な食べ物も一口だけでも食べて欲しい。
・食事をする時の姿勢（席立ちや座り方等）を覚えて欲しい。
・食事の雰囲気を楽しみ、自ら進んで食べて欲しい。

【☆環境構成の工夫と♪援助】

☆野菜栽培を通して食材に対し、興味関心を湧き出させる。
☆食事をする際に、一緒に会話もしながら楽しい雰囲気をつくる。
♪苦手な食べ物を一口でも食べられたら、その都度褒めちぎる。
♪食事中の席立ちや座り方等は、保育者が見本となりその都度伝えていく。
**　また、姿勢が悪かったり席立ちをすることにより床や机にもご飯が落ちる事も伝えていく。**
♪全部食べたという、達成感を味わい、自信に繋げられるようにする。
♪フラッシュカードを用いて、朝の会等で果物や野菜の名称を楽しく教える。

皆で苗植え体験をし、野菜を育てる。

大きくな～れ♪

先生～！
これの中には、きゅうりとコーンが入っているんだよ～！
自分で食べるから見ててね♪

先生～！
これさっきご飯の時
食べたメロンだよね？
美味しかったよね！

先生～見て！
自分で全部
食べられたよ！！

【幼児の変容】
・食事をしながら野菜の名称や「これ何？」と興味関心を寄せる姿が見られるようになった。
・苗植え体験を通して、苦手な野菜にも挑戦する姿が見られた。
・一緒に食べて食事の雰囲気を楽しみ、友達同士で「〇〇さんこれおいしいから食べてみて！」と会話するようになってきた。
・「自分で食べるから見ててね！」と以前に比べ自分で食べようとする意欲がみられた。

【結果と考察】

・保育者の声掛けにより、スプーンやフォークを持つ姿が見られるようになった。
・友だちと「これおいしいね」「これなにかな？」など会話をし、食事を楽しむ姿が見られるようになった。
・「ご飯を自分で食べられるようになったらお箸を使って食べてみようね」と話をすると目標がお箸を使うことになり自ら進んで食べる様になったが目標を達成すると保育者の介助待ちになった。

いいな～
〇〇もお箸
使いたい！

上手にお箸
使えるよ！

先生
あ～んして～

Ⅴ　実践の振り返り

1　言葉で伝えられず目で訴えている子やそのまま活動していた子も、実践1.2.3を通して自ら保育者に伝えられるようになってきた。また、身支度や食事面でも自分でやることの達成感を味わい4月に比べて進んで取り組む子、色々なことに興味を持ち“挑戦”する子が増えてきた。
2　食材に興味がなかった子ども達だったが、フラッシュカードや栽培や絵本を通して様々な食材に興味を持ち始めた。
3　周りの子が頑張っているのを見て、他の子もパンツへの移行を頑張ったり、他の子が保育者に言葉で伝えるのを見て真似る子も増えてきた。

Ⅵ　今後の課題

まだ、自信がなく自ら進んで取り組めない子や挑戦出来ないでいる子も中にはいるので、少しずつ自信がつくように援助していきクラス全体が物事に興味関心を持ち、様々なことに挑戦していけるようにしていきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成30年「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」　フリーベル館

様式３「課題研究レポート」

思いや気持ちを伝え合う楽しさを育むための工夫
―言葉の面白さや仕草に着目した保育教諭の援助・環境構成を通して―

中城村　中城ひらやすこども園　保育教諭　氏名　山口　花生

Ⅰ　テーマ設定の理由

新型コロナウイルス感染症の流行の影響を経て、マスク着用が当たり前となった近年、子どもたちの言葉の発達の遅れが問題視されている。「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」第２章「言葉」の領域において、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」と記されている。また「人との関わりでは、見つめ合ったり、うなずいたり、微笑んだりなど、言葉以外のものも大切である。」とも記されている。言葉は人と人とがコミュニケーションをとる手段として大切なものであり、他者との関わりによって次第に身につけていくものだと考えられる。

本学級は、男児７名、女児10名、計17名の３歳児学級である。入園当初から友達に対して興味を持ち、関わろうとする姿が見られた。その反面友達との関わり方に戸惑い、玩具などを奪って驚かしてしまったり、噛みつきや悪い言葉を言ってしまったりと、保育教諭の援助が必要な場面が多くあった。

このような実態から、子ども達の思いを引き出すためにはどういった援助が必要なのか、また「人間関係」内容(11)「友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。」も関連付けながら、保育教諭や友達と関わる中で思いを伝え合える喜びや、思いやりを持って友達と関われるような援助や環境構成の工夫について研究を進めていきたい。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　自分の良さ、友達の良さを知る環境構成の工夫

(1) 幼児が安心して過ごせる環境を整え、保育教諭との信頼関係を深めるために、幼児の思いを随時受け止めながら関わる。

(2) 朝の会や帰りの会等で、頑張ったことや嬉しかったことを発表する場を設け、友達の良さに気づいたり、自信に繋げていく。

２　日常生活に必要な言葉が分かるようにするための援助の工夫

(1) 遊びや生活の中で必要な言葉を具体的に伝えたり、見本となって見せながら代弁していく。

(2) 絵本「カラーモンスター」等を通じて、幼児がどういった気持ちなのかを共に考えながら、気持ちに気付けるような援助を行う

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践実例１】気持ちが共有できると嬉しいね！

（A児の姿）

・これまで保育経験がなく、初めての集団の場であり、園では言葉を発さず緊張した面持ちである。

・体調を崩しやすく、休むことが多い。
・自分の思いを上手に表現することができず、友達の輪に入ることが難しい。
・一人遊びすることが多く、パズルや砂遊びが大好きである。

（保育教諭の願い）

・安心感を持って園生活過ごしてほしい。
・こども園に行くと楽しいことが沢山待っていると感じてほしい。
・友達と一緒に気持ちを共有できる経験をしてほしい。

（保育教諭の援助）

・A児の思いを受け止め、信頼関係を築きながら安心して過ごせるようにしていく。
・A児の様子を見ながら一緒に遊びに参加し、思いを汲み取りながら言葉かけを行う。

（家庭との連携）

・お迎えの時などに、家庭でのA児の様子を聞きながら、園ではどのように過ごしどんな思いだったかを伝える。また、家庭でもA児自身から園でどのように過ごしたのか話を聞く時間を設けてもらう。

エピソード「大きな石みーつけたっ！」

園庭遊びの際、友達の隣で砂遊びをしているA児。様子を見ながら一緒になって遊んでいると、少し大きな石を発見し興味を持つ。保育教諭が「大きな石みつけたね。」と声掛けすると嬉しそうな表情をし、大切そうに持つ。そこで保育教諭は、A児が砂場以外で遊んでいる姿を見たことがなかったため、「園庭を散歩しながら大きな石探してみる？」と聞くとA児は「うん。」と頷き、石探しが始まる。その様子を見ていた周りの友達も「何やってるの？」と集まり一緒に探し始める。それぞれ気に入った石を持ち、保育教諭やお友達に見せ合う。A児もお気に入りの石を持ちながら、その姿を楽しそうに眺める。するとB児がA児の石を見て、「おっきいね！もっと探そう！」と話し、一緒に石探しを再開する。

（A児の変容）

・B児と一緒に遊んだことで、友達と気持ちを共有する楽しさを知り、ブロック等で作ったものや、A児のお気に入りのものを、保育教諭に自分から見せて嬉しい気持ちを共有するようになった。
・友達の輪の中に入り、少しずつ会話も楽しみながら遊ぶようになった。
・活動にも自信を持ち、表情も明るくなり楽しく参加するようになった。

（結果と考察）

・自身が感じて嬉しかったことを認められたことで自信がつき、またその気持ちを共有することで充実感を味わい、友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じることができたのではないかと考える。
・お迎えの際、保護者に園での様子を伝えながら一緒に認め、褒めていくことで自信がつき、自己肯定感が育ってきたのではないかと考える。

【実践事例２】絵本『カラーモンスターを通して』

（幼児の姿）

・友達とのかかわりも増え一緒に遊ぶが、思いを伝えることができなかったり、思い通りにいかないことがあると、噛みついたり手を出したり等衝突することも増えた。
・悲しいことや嫌なことがあっても、その気持ちを理解できずにモヤモヤして泣くことがある。

（保育教諭の願い）

・自身の気持ちに気付き、それを言葉で伝えられるようになってほしい。

・相手にも気持ちがあることを知り、思いが伝わる楽しさや喜びを味わってほしい。

（保育教諭の援助）

・『カラーモンスター』の読み聞かせを行い、心（気持ち）には色があることを知ってもらい、日々の保育の中で、色を使って分かりやすく気持ちを表現したり、朝の会などで発表の場を設ける。

・子どもの気持ちに寄り添い、時には気持ちを代弁しながらかかわる。

（幼児の変容）

・「今ね黄色の気持ち！」などと自ら気持ちを伝えてくれることが多くなった。

・友達に心の色を聞き、自分だけでなく他者の思いにも興味を持ち、共感するようになった。

・友達に手を出してしまうことも減り、保育教諭も間に入りながら言葉で解決できることが増えてきた。

（結果と考察）

・自分でも分からなかった感情を色を通して知ることで、自分の思いに気付くことができた。また、それを共感してもらうことで、思いを伝える喜びを知り、安心して園生活を過ごすことができたと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

言葉は人と人とがコミュニケーションをとる手段として大切なものであり、他者との関わりによって次第に身につけていくものだと考えられる。今回の実践では、幼児の思いや心の動きを受け止めることで、信頼関係が形成され、心が安定し、話してみようという気持ちに繋がったと感じる。また、幼児の混ざり合った複雑な気持ちを、絵本を通して整理していくことで、自分の感情に気付き、言葉で伝えてくれることが増えた。そのため私自身も見えなかった幼児の思いに気付き、改めて言葉の大切さを感じた。

課題としては、友達の気持ちに興味を持ち、幼児同士で相手の気持ちを考える機会も増えたが、自分の思いをなかなか譲れずに衝突することが多くあった。時に感情的な言葉をぶつけ、相手を傷つけることもあり、言葉の持つ危険性を伝える必要性を感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

言葉でのやり取りができるようになってくる時期だからこそ、言葉には相手を傷つけてしまう負の面があることを伝えていき、幼児自身がそれを理解し、友達などに対する言葉を一つ一つよく考えて使おうとする姿勢が育つよう、丁寧に働きかけていきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成 30 年 3 月　『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』フレーベル館
近藤幹生 寶川雅子 源証香 小谷宜路 瀧口優　平成 31 年 2 月　『ことばと保育』　ひとなる書房

様式３「課題研究レポート」

環境構成基本的生活習慣を身に付けるための環境の構成と援助の工夫

―自立心を育むための環境の構成と援助の工夫を通して―

浦添市ハイジこども園　保育教諭　大城　玲香

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領の第２章第３節「健康」の領域には、「健康、安全な生活に必要な習慣に気付き、自分でしてみようとする気持ちが育つ。とある。生活で必要なことをやってみようとする意欲、自立に向けての力を培っていくことが大切であると考えた。

本学級の実態としては、２歳児クラス男児９名、女児９名、計１８名が在籍している。何にでも興味を示し、子どもたちが好きな遊びを取り入れると子ども同士で誘い合い、一緒に遊ぶ姿が見られる。「貸して」「これがいい」等、自分の思いも少しずつ言葉にして伝えられるようになっている。また、着脱に関してはズボンの脱ぎ穿きができるようになっているが、保育教諭の援助を待ったり、「やって」と保育教諭に甘える姿がある。この実態を踏まえ、どうしたら意欲的に楽しく生活できるのか。達成感を味わい、自信をもって取り組めるようにするにはどうしたらよいにか。その為にはどのような環境構成、援助の工夫が必要なのか。を研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　生活の仕方がわかるための環境の工夫

絵カードや写真を使い、子どもたちの視覚で分かるよう教材の工夫を行う。また、個々に応じた援助、指導を行う。

②　子どもたちが達成感やできた喜びを味わえるような環境構成の工夫

自ら進んで行えるようにご褒美シールを用意したり、保育教諭も一緒にできた喜びを共有して意欲や自立心を育む。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例１「子どもたちの実態に基づいた環境の工夫」

『保育教諭の願い』
楽しく着脱が出来るようになって欲しい。。。

【保育教諭の関わりと援助】

・本園では着脱時に子どもが着脱しやすいよう、子どもに合わせた高さのパンツチェアを用いているのですが、子どもたちが新しいことにとても興味を示しているので、新しいパンツチェアに変えてパンツやズボンの着脱に意欲を持てるようにした。

実践事例２「楽しみながら身支度をしよう」

『保育教諭の願い』
・簡単な身支度が身について欲しい。。。

【保育教諭の関わりと援助】

・楽しく身支度が出来るよう、動物や食べ物のシールを用いて、一人ひとりのロッカーの場所を決めた。

実践事例３「3 グループに分かれて活動しよう」

『保育教諭の願い』
・子ども同士で出来たことを共感して達成感を味わって欲しい。。。

【保育教諭の関わりと援助】

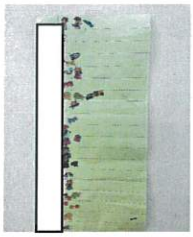
・６人３グループに分け、子どもたちが活動しやすいようにした。また、グループ名も子どもたちに聞き、バイキンマン、ピカチュウ、ドラえもんのグループにした。

実践事例４「ご褒美シールをもらおう」

『保育教諭の願い』
・出来た事を保育教諭や友だちと共有し、自信が持てるようになってほしい。

【保育教諭の関わりと援助】

・子どもたちが好んでいるキラキラシールなどを用意し、表を作り子どもの目の届く位置にセットした。



実践事例５「２グループに分かれて活動しよう」

『保育教諭の願い』
集団を意識して、達成感を味わい園での生活を楽しんで欲しい。。。

【保育教諭の関わりと援助】

・テーブルの配置や子ども一人ひとりに対する声かけを意識した。

Ⅳ　実践の振り返り

実践事例１

①興味を示す子がほとんどで「ここは、パンツとズボンを穿く場所だよ」と知らせると、「〇〇やりたい」と自ら進んで意欲的に着脱する子が増えた。

②パンツチェアに座ること事だけを楽しむ子もいた。
③新しいことをやると自分自身も楽しめるので、これからも新しいことを沢山取り入れていきたい。

実践事例２
①自分の好きなシールを選んで貼ることで自分のかごという認識をして、友だち同士シールを見せ合いお支度することを楽しんでいたり、保育教諭が「カニさんにタオル入れてきてね」と声かけをするとシールを探すことを楽しみながらタオルを入れる姿が見られた。
②シールに夢中になり、声かけしても身支度をしない子もいた。
③子どもたちの好きなシールを用いることで、朝の登園時シールの話をするとスムーズに部屋に入る子が増えてように感じた。

実践事例３
①少人数で行うことで周りの友だちの事を意識し、競争心が芽生え、何事にも意欲的に取り組む子が増えた。グループ内の友だちと接する事が多くなり、会話も増え、「〇〇と〇〇お支度できたよね」など友だちどうしてできた事を喜び合っている。
②職員が声かけすることはあったが、友だち同士での誘いかけがなかった。
③グループで活動することで少しずつ協調性が芽生えてきているように感じた。

実践事例４
①シールをもらうと、友だち同士で「〇〇のシールだったよ」と嬉しそうに話している。ご褒美がもらえると知ると、食事や着脱も意欲的に行う子が増え、「〇〇と〇〇シールもらったからすごいよね」と自信を持つことができた子もいた。
②早く終わってシールをもらいたいが強く、最後まできちんと片付けをせず、中途半端で終わる子がいた。
③子どもたちの好きなシールを用いて行うことで興味を示し、積極的に身支度などが増え、活動時間が長くなり、充実した活動が出来るようになった。

実践事例５
①集団で活動することで、より一層周りを意識する子が増えてきている。
みんなについていこうという気持ちが芽生えてきて、次何するかなど少しずつ活動の見通しが持てるようになった。グループの子全員が身の回りのことができると、「みんなが一番だね」「やったね」などの声も聞こえてきた。
②ついていけない子がいると置いてけぼりになってしまいがちなのでまだ、個別の対応をしていく必要がある。
③月齢差があるので、やり方や一人ひとりへの声かけの仕方を工夫すると、もっと集団で楽しいことが出来るのではないかと考えた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇子どもたちの好きな物を取り入れると、楽しみながら取り組めたり、意欲を持って取り組むことができるようになった。また、何事にも挑戦し、できることが増え、自信が持てるようになっている。グループや少人数で活動することで、友だち同士の会話ややり取りが増え、友だちと一緒に遊ぶことが多くなっている。次年度に向けて、トイレトレーニングなど身辺自立を楽しくできるように、環境構成や援助の仕方を再度見直していく。できたことを保育教諭や友だちだけではなく、保護者にも共有し、引き続き子ども達の意欲を高めていけるようにしていく。できることが増えてもまだ、難しいことがあることを頭に置き、できないことを怒るのではなく、できるようになるための声かけをしていく必要があると感じた。
保育教諭の声かけや援助の仕方で子どもたちの意欲を高めていけると改めて感じた。

〈主な参考文献〉
・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年　幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説　フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

物や命を大切にしようとする姿勢や意欲を生み出し育むための工夫

―身近な環境と生き物との共存を通して―

浦添市 ハイジこども園　保育教諭　玉寄　久奈

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、少子高齢化が進み、家庭においても地域においても人間関係が希薄化し、人と人との繋がりや関わりを持つ機会が減少している。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「人間関係」の領域には「集団生活を通して、園児が人との関わりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、決まりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力が育つ」とある。また、園生活においては、何よりも保育教諭との信頼関係を築くことが必要であり、幼児期は特に人格の基礎となる心情や意欲、態度が養われるとても重要な時期である。自分自身の心情や態度などを育むためには、友達や家族、先生との深い関わりを通して自分の気持ちを相手に伝えることや、他人と協同して遊ぶ楽しさを味わいながら社会生活上のきまりを守ろうとしたりする道徳性の芽生えの育成が必要である。

本学級の実態として『「5歳児（6年保育）」男児１８名、女児11名、計２９名』在籍し、比較的男女の仲は良く、積極的な子が多い。クラスでは、カブトムシやオタマジャクシを飼育し、園庭にはオクラやナスなどを栽培し、子どもたちも成長を喜んでお世話をしている。しかし、クラス全体的に整理整頓が苦手で、自分の荷物をはじめクラスの教具や玩具を元の場所に戻さずにいること、スリッパや上履き等の履物を揃えることが苦手な子がほとんどであることが課題として挙げられる。

そこで、友達や保育教諭と楽しく遊ぶだけでなく、他人の思いを感じて生活することで、豊かな感情を抱いて、自立心、自律性を育てるとともに、社会生活上のきまりを守ろうとしたりする道徳性を身に付けてほしいと願い、テーマを設定し研究をすることにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　幼児自ら整理整頓ができ、物の管理ができる環境の工夫について

室内の間取りやロッカーなど個人の物の管理がしやすい環境を構成し、クラスの教具や玩具を管理・片付けがしやすいような援助を行う。

②　友達や生き物と関わりを通して、生命の大切さに気付いて道徳性を育むための援助の工夫について

身近な人物との関わりを通して、自分の思いだけでなく相手の思いを聞くことで、自分の思いを整理し相手と協同して生活をしていくことが楽しいと思えるような援助を行う。また、保育教諭が個々の特性を把握し、興味・関心を引き出すことで他人との関わりの幅が広がるよう援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】

《幼児の実態》

・１人１人にカバンを入れるロッカーと家庭で準備してもらったお道具箱を保管するロッカーを準備したが、「○○の物がなくなっている」「どこに片づけたか分からない」とほぼ毎日話す姿が見られる。
・保護者からも「片づけができずに困っています」と多く相談を受けるようになった。
・塗り絵やお絵描きなどの一人遊びを好むが遊びが持続せず、友だちや保育教諭と遊ぶ姿もあまり見られずにいた。

《保育教諭の願い》

・自分の持ち物の場所を把握し、自分の持ち物は自分で管理ができるようになってほしい。

・“友達と一緒に遊ぶ”経験を通して自分の持ち物だけでなくクラスの教具・玩具に触れ、遊びの種類を増やしてほしい。

《保育教諭の援助と環境構成の工夫》

・整理整頓や身の回りのことを積極的に取り組めるよう「いいことめがね」を取り組んでいく。
・友達との遊びが充実するよう、様々なクラスの教具・玩具を用意し、写真や文字で種類を知らせていく。
・保育教諭も一緒に遊びこみ、子ども達と同じ目線から使いやすさなどを肌で感じてみる。

・トイレのスリッパならべ
・お部屋の整理整頓
・挨拶（おはようございます、さようなら、ありがとう）

すすんでできたらご褒美シールをもらおう！

みんなでお店屋さんごっこしよう♪

クラス玩具の片付け場所の掲示

【実践事例２】

・家庭でもカブトムシやクワガタなどの生き物をお世話している子が多い。
・「お父さんと一緒にクワガタ探しに行ったことがある！」など実際の出来事を子ども同士でやり取りしている。

《保育教諭の願い》

・生き物の飼育を通して様々な生き物に対する興味関心が生まれてほしい。
・自然や身近な動植物に親しむ事を通して生命の大切さや豊かな心情が育ってほしい。

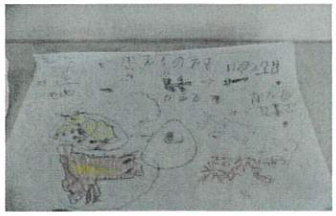
《保育教諭の援助と環境構成の工夫》

・クラスでカブトムシの飼育を始めるために、話し合いを行う。ほとんどの子が「カブトムシ」という言葉は分かるものの、幼虫は見たことがなく、初めて見る「カブトムシの幼虫」に興味津々で、登園すると観察を楽しめるように環境を準備した。
・カブトムシが成虫へと成長した後、子どもたちは喜ぶが、７月末に死んでしまった。その後、子どもたちには「カブトムシの死」を通してもっと命を大切に扱う経験をしてほしいと感じた。その後、クラスで再度生き物の命について考える場を設けた。
・子どもたちから「違う生き物を育ててみたい」と声が上がり、オタマジャクシを飼育することになった。

今日は皆で虫かごの掃除をしよう！

今日の大きさは…

カエルの観察日記
・日付
・体の大きさ
・今日のカエルの様子（絵）



Ⅳ　実践の振り返り

【実践事例１】

①成果

・自分の持ち物に対しても興味・関心が薄く、誰かが管理するから、きれいにするからいいや。と話していた子も、保育教諭と繰り返し確認を行ってきた整理整頓を自ら行うようになり、どこに何が片付けてあると把握もできるようになった。

・１人遊びが多かった中で、保育教諭が同じ目線で過ごし教具・玩具の写真を掲示したことで、どこに何があるか目で見えるようになり、友達同士の遊びに取り入れる姿が増えた。遊びこむ経験が楽しさに変わり、1つの遊びも集中して遊べるようになっていた。

②課題

・保護者にも情報共有を行ったが、園と家庭での子どもたちの意欲の変化などから整理整頓が見についた子もいれば、改善が見られない子もいた。その為、家庭では保護者との関わりの時間の設け方も重要だと気づかされた。

③実践を通した自身の気づき、考えなどを書いてください

・クラス全体の課題を把握し見直す中で、個人個人の課題や現状も把握することができ、保育教諭と一緒に苦手なことにも挑戦する姿に繋がったと考える。

・夢中になって遊ぶ経験を積み重ねたことで、気づいたことや経験したことを言葉で表現しようとする意欲が引き出せるようになった。

【実践事例２】

①成果

・保育教諭をはじめ、友達と生き物へのイメージを共有し、自分の思いや考えを表現してカブトムシ・オタマジャクシを飼育楽しんでいた。普段自分から関わりが持てない子も、初めて経験する「カブトムシの死」を通して生き物に興味・関心が出てきて、友達や保育教諭と一緒に生き物と関わりを持つことを楽しんでいる表情が読み取れた。

②課題

・子どもたちが生き物を飼育するうえでどうしてこうなっているのだろうと疑問を抱くことに対して、援助の方法や環境構成を再構成する必要があったと考える。

③実践を通した自身の気づき、考えなどを書いてください

・生き物を育てるうえで触れ合いやすい環境や用具などを準備したり、人間と同じ命をもって生きていることが実感できるような環境構成を行うことで、生き物の飼育に必要な物を保育教諭や友達と一緒に考えながら、自分の意見を出そうとする姿に繋がった。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなどを書いてください

進級時のクラスは、「先生、今何準備するの？」「お母さんがカバンに○○入れていなかった」などと自分自身のことも他人を理由にして向き合うことが苦手だった。しかし、子どもと毎日過ごす中で、「信頼関係」と「夢中になって遊ぶ体験」が今のクラスに必要だと感じた。このような経験の中で、ぶつかりや葛藤が起こり、自分の意見だけを主張するのではなく、相手の思いや考えに気付き、きまりの大切さを守ろうとする姿に繋がったと考える。また、生命の大切さに気付き道徳性を育むためには「基本的生活習慣の形成」「葛藤やつまずきを体験」も必要で、相手を尊重するような気持ちをもって行動すること、自然や身近な動植物に親しむことを通して豊かな心情が育つようにすることも重要だと考えた。

このような経験が無駄にならないように、今後は引き続き一人一人が思いや考えを伝え合う中で、生活に必要なルールや、きまりに子ども自身が気付いたり、新たなルールを作り出したりする「規範意識の芽生え」の育ちを育むことができる環境構成と援助を行っていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成30年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　フレーベル館

様式２　【課題研究報告書】

「できた！」と喜びを感じられる環境構成と援助の工夫
―身体を使った遊びや保育教諭の関わりを通して―

浦添市　あおいこども園　保育教諭　下地　涼香

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第二章「表現」の内容取り扱い(2)では、「園児が試行錯誤しながら様々な表現を楽しむことや、自分の力でやり遂げる充実感などに気付くよう、温かく見守るとともに、適切に援助を行うようにすること」とある。自分でやろうとする気持ちを損なわないよう、難しいことにはさりげなく手助けして「できた！」という「満足感」を味合わせることが大切だと考える。また、できたときには、それが喜びになるような言葉かけをすることも重要なことだと考える。

学級の実態としては、男児１３名、女児１５名、計２８名の２歳児クラス。友だちとの関わりも見られるようになり、「〇〇一緒に遊ぼう」と友達を誘い、友だちと自由に走り回ったり、ジャンプをしたりと身体を動かす遊びを楽しんでいる姿が見られる。また、自我が芽生えることから「やりたい」「これは嫌だ」などの自己主張をするようになり、思い通りにいかない時には、泣いて癇癪を起す子もいる。一人ひとりの気持ちを受け止め、代弁したり、見守ったり、できたら褒めてあげたりと、子どもが納得できるような関わり方や声かけをすることが大切だと感じた。

このような実態から、身体を使った遊びを通して楽しみながら物事に取り組む姿勢や、保育教諭や友だちと一緒に楽しみながら、できた達成感を感じられるような環境構成と援助の工夫を研究したいと思い、このテーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　楽しんで取り組めるような環境構成の工夫

・安全面に注意しながら、無理のないよう子ども自身のやってみたいという気持ちを優先していく。

２　保育教諭の援助の工夫

・うまくできない時には、保育教諭が手を添えたり、手本となり知らせていく。

・保育教諭が一緒に遊びながら、できた満足感を味わえるような活動を計画していく。

Ⅲ　保育計画

月	研　究　計　画
４月～５月	幼児の実態把握・課題の検討
６月	研究テーマの検討(テーマ設定理由、研究内容、研究計画の検討)
７月～１１月	理論研究、保育実践
(９月～１０月)	(中間検討会)
１２月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例 1】　　運動あそび

〈幼児の実態〉
・体を動かすことが好きな子が多く、進んで活動に参加している。いろいろな競技にも挑戦しようと取り組む子がいれば、初めて見る運動遊具物に消極的な子も見られる。

☆保育教諭の願い☆
・保育教諭や友達と一緒に体を動かす楽しさを味わってほしい。
・できた時の喜びを味わい、様々なものに挑戦してほしい。

〈環境構成と援助の工夫〉
・グループ分けを行い、保育教諭と一緒に広いスペースで体を動かすことを楽しめるようにする。
・子どもたちがやり遂げ、出来た喜びを感じることができるようにする
・一人ひとりのペースに合わせて取り組めるようにしていく

【幼児の変容】
・平均台を渡ったり、鉄棒に１０秒ぶら下がったり、跳び箱、フープのジャンプに挑戦した。始めは、平均台を保育教諭の手を握りながら渡っていたが、徐々に手を離して、一人で渡ることができるようになっている。鉄棒にぶら下がれる時間も長くなり、足を高く上げてみる姿も見られた。フープジャンプでは、両足で飛びや、グーパーで飛ぶことができていた。跳び箱(２段)に登りジャンプをしたり、身体を動かして楽しむ姿が見られた。

10 秒数えてね！！

先生見てできるよ！！

【結果】
・週一回運動あそびを取り入れることで、出来るようになるまで挑戦したりと楽しんで取り組むことができた。また、苦手意識がある子も、保育教諭が手を添えたり、側につくことで安心感を持って体を動かすことができたと感じた。
・できるようになることで、「これやってもいい？」と様々なことに挑戦し、友達を誘いながら、運動あそびを楽しむ姿が見られた。

【考察】
・時間が経つと走り回ったり、ほかの遊びをする子もいたので、子ども達の興味が続くよう、成長に合わせて難易度を変えたり、満足感が味わえるような環境づくりをしていきたい。

【実践事例 2】　　ルールあそび（フープ取りゲーム）

〈幼児の実態〉
・友だちとの関わりも広がり一緒に遊ぶ姿が見られるが、玩具の貸し借りでは、言葉で「貸して」が言えずトラブルが多くみられる。
・活動前に約束事を知らせると、順番を守り遊ぶことができているが、前にいる子を追い越したり、順番を待てずに前の子を押す姿が見られる。

☆保育教諭の願い☆
・友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい。
・簡単なルールのあるゲームに参加し、達成感を味わう。

〈環境構成と援助の工夫〉
・グループごとに分かれ、約束事を事前に伝え、子ども達が理解しやすいよう声掛けを繰り返し行う。
・楽しい雰囲気で遊び込めるよう、音楽を流し、保育教諭が手本となり一緒に参加しながら、フープに入るタイミングを笛で知らせていく。

【幼児の変容】
・笛の合図でフープに入ることから始め、フープの回りを歩いてみたり、フープの数を減らしてみるなどでルールあそびを行った。ルールを理解している子は、笛が鳴るとすぐにフープに入ることができていたが、ルールがわからず周りを見ながらフープ取に参加する子や、音楽が流れると走り回る子もいた。最後まで勝ち進むと喜ぶ姿が見られた。

笛の音で入るよ！

やったー！

【結果】
・負けて泣いたり、最後まで残り勝つ喜びを味わい、「やったー」と喜び、一番を目指す姿が見られたが、ルールが理解できていない子やフープの中に入ろうとしない子もいる。
・友だちとかかわる中で譲り合ったり、保育教諭が仲立ちをすることで自分の気持ちを表現し、伝えようとする姿が見られた。

【考察】
・月齢の高い子など特定の子が多く残ることがあったので、月齢順でグループを分けてみるのも良いと感じた。
・体を動かすことが苦手な子も「やってみたい」「面白そう」と進んで参加できるような環境構成と援助の工夫の仕方を広げる。

Ⅴ　実践のまとめと考察

・発達に合わせて運動あそびを楽しむ中で、保育教諭が見守り、援助することで自分で「やってみよう」と意欲的に取り組む姿が見られ、出来た時の満足感に繋がったと感じた。また、運動遊具を取り入れることで、一つの器具をみんなで楽しみ、一緒に「できた！」という感情をを共有し、喜ぶ体験も満足感を味わうことに大切なことだと感じた。

・友だちに玩具を「どうぞ」と貸したり、「一緒に遊ぼう」など関わる姿も多くみられるようになった。保育教諭が仲立ちとなりながら関わることで、自分の思いを伝える安心感につながったと感じた。

・後期には、ゲーム遊び等を取り入れることで、ルールを知り遊びの発展も見られ、マラカス作りでは友だち同士で関わりを持ち製作を楽しむ姿が見られた。普段は、あまり身体を動かさない子もマラカス作りを通して、達成感を感じ、表現することの楽しさにつながったと感じた。

Ⅵ　今後の課題と取り組み

・子どもたちの成長に合わせて、少しずつ難易度をあげてみたり、　子ども達が「もっとやりたい」と思えるような、楽しんで取り組める環境づくりをしていきたい。

・遊びの面だけでなく、生活面においても出来た時には、満足感を味わえるようにシールなどのご褒美を用意した方が、子ども達の意欲に繋がっていけるのではないかと感じた。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年　幼保連携型認定こども園・保育要領解説　株式会社フル―ベル館

・山本　秀人　編著　2018 年　「0.1.2 歳児　発達をおさえた運動あそび」　学研プラス

幼児期に言葉豊かに表現するための環境構成と援助の工夫

―身近な人や友達に伝え合う楽しさを通して―

浦添市　あおいこども園　保育教諭　　城間　果南

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の第２章第４節２(４)言葉の獲得に関する領域「言葉」に関する、内容(１)「保育教諭や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり、話したりする。」とある。また、「人間関係」の領域、内容(１０)「友達との関わりを深め、思いやりをもつ。」と示されている。言葉は、身近な人との関わりの中から吸収されるものであり、伝えたいとい思う気持ちが大切である。また、友達と生活や遊びを通して互いに影響し合い、思いやりの気持ちが育まれていく。この時期の友達との関わりや経験で得た力が今後の育ちへと繋がっていくと考えると、幼児期のうちに思いやりの気持ちを育むことの重要性を感じている。

学級の実態として男児１８名、女児１１名、計２９名の３歳児クラス。その内新入園児は５名である。絵本や紙芝居の読み聞かせを好み、集中して聞く姿が見られる。また、気の合う友達と一緒に好きな遊びを楽しむ姿が見られるが、遊びの中でトラブルになると上手く言葉にできず、友だちに嫌な思いをさせる言葉を使ってしまう子がいたり、乱暴な言葉を使う子もいる。

このような実態をふまえ、幼児の心に寄り添い、一人一人との関わりを大切にしながら、自分の気持ちや思いを言葉にして伝える力を育む環境構成や援助の工夫を研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　子どもの発達に合わせた遊びや環境構成の工夫

・「ちくちく」と「ふわふわ」等、言葉の絵本の読み聞かせを通して、そのことばを使うとどのような気持ちになるか考えたり、また気持ちを絵カードで示したり、気持ちのいい言葉（ふわふわ）、良くない言葉（ちくちく）への興味・関心を持てるような工夫を行う。

２　自分の思いや経験した事を表現しながら、思いを楽しく伝えられるような援助の工夫

・生活や遊びの中で自ら気持ちを伝えたり、表現できる環境や援助の仕方を考える。

Ⅲ　保育計画

月	研　究　計　画
４月～５月	幼児の実態把握・課題の検討
６月	研究テーマの検討(テーマ設定理由、研究内容、研究計画の検討)
７月～１１月	理論研究、保育実践
(９月～１０月)	(中間検討会)
１２月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例①　　【絵本の読み聞かせ】

《幼児の姿》
・絵本の読み聞かせが好きで集中して聞く姿が見られた。1冊読み終えると「もっと読んで～」など子ども達からリクエストする姿も見られた。

《保育教諭の願い》
子ども達は読み聞かせが好きなので絵本を通して
ふわふわ言葉、ちくちく言葉があることを知らせたい。

《環境構成と援助の工夫》
○保育教諭は、後方に座っている子まで見えやすいように高めの椅子に座る。
○絵本は、子ども達が理解しやすいようなイラストや内容の物を選ぶ。
○絵本を読む時は、朝の会や 帰りの会、 活動の前後などみんなが落ち着いている時に読み、集中して聞くことができるようにする。

《幼児の変容》
・ちくちく言葉、ふわふわ言葉を知ることができた。良くない言葉を使った子に保育教諭がちくちく言葉だと伝えると理解しているように感じられ、ちくちく言葉を使わないようにする姿が見られた。

《結果と考察》
・言葉には、「ちくちく言葉」「ふわふわ言葉」というものがある事を知ることができた
・絵本が好きなのですぐに興味を示し、集中して聞く子や保育教諭の質問にも積極的に応えてくれようとする姿が見られた。
・絵本を理解して見ているような子もいれば、読み聞かせの中で保育教諭が質問をしても困ってしまう子など内容理解が難しい子も見られた。

実践事例②　　【○×ゲーム】

《幼児の姿》
・個々の遊びから集団での遊びの楽しさに気付き、イス取りゲームやオセロゲームなどクラス全体でゲームを楽しそうに参加する姿が見られる。

《保育教諭の願い》
・何が良い言葉（ふわふわ言葉）、何が良くない言葉
（ちくちく言葉）かを○×ゲームを通して知って欲しい。

《環境構成と援助の工夫》
○絵本ではちくちく言葉、ふわふわ言葉が難しいと思っている子でも実際に身体を動かしてゲーム感覚で楽しみながら理解出来るようにしていった。
○「嬉しいかな～」「嫌な気持ちするかな～」など保育教諭も一緒考えながら楽しんだ。
○危険がないように部屋を大きく使い移動してもぶつかったり、しないように環境構成を工夫した。

《内容》
・部屋を２つに分けて、左が○、右が×に分ける
・ゲームのルールは、
保育教諭が使った言葉が嬉しいなと思ったら○
嫌だなと思ったら×に移動する

《幼児の変容》
・ゲームのルールを理解していた子は生活の中で実際に友だちに嫌な言葉を言われたりすると、友だち同士で「ちくちく言葉」だよと教え合う姿が見られた。

《結果と考察》
○初めての○×ゲームだったこともあり理解が難しかったのか、何度も○に移動したり、友達についていくだけの子も見られた。ルールを理解している子は考えながら移動したり言葉の意味も分かっているように感じられた。
○ゲームの後から、ふわふわ言葉、ちくちく言葉を意識する子も出てきて、生活の中で子どもたち同士で「これちくちく言葉だよ」と伝え合う姿が見られた。

実践事例②　　【気持ちを知ろう】

《幼児の姿》
・子ども達の会話の中で良くない言葉の意味も分からずおもしろがって使ってしまう場面が見られる。また、それを真似して使ってしまう子もいる。

《保育教諭の願い》
・その言葉を使うことで、友だちがどんな気持ちになるか知ってほしい。

《環境構成と援助の工夫》
○気持ちを絵で表し、見て分かるように工夫した。
○表情をホワイトボードで確認したことが生活の中でも子ども達が意識していけるように、ホワイトボードとは別にリングカードも作りいつでも使えるようにし、保育教諭も一緒に遊びに参加しながら、思いを言葉で表現する楽しさを味わえるようにした。

表情ボード

表情カード

《内容》
・子ども達と一緒に表情のカードを○・×に分けて、「ありがとうはどんな気持ち？」「一緒に遊ばないはどんな気持ち？」など言葉と気持ちを組み合わせていく。
・表情のカードをリングにして、子ども達が手に届く所に置いて子どもたち同士で使っていけるようにする。

《幼児の変容》
・トラブルになると自らカードを持ってきて、「悲しい気持ち」と友達にカードを見せながら伝えている姿が見られるようになってきた。

《結果と考察》
○実際に絵で見て分かるカードを取り入れたので、○×ゲームより子ども達の理解度が高まったように思えた。絵カードにすることで「何か楽しいことが始まりそう」という期待感があり子ども達も意欲的
に参加している様子が見られた。
○ボードに興味を示し、友達と会話しながら振り返ってみたり、トラブルがあると、自らカードを使いながら友達に気持ちを伝えようとする姿が見られた。

Ⅴ実践のまとめと考察

・実践をくり返す中で実際、3 歳児クラスに言葉で気持ちを表現させることは子ども達にとって理解が難しかったと感じることもあったが試行錯誤しながら取り組み、最終的には子ども達の発達段階に応じた環境構成と援助が出来、幼児理解がさらに深まったと感じた。
・言葉と気持ちを繋げて伝えていくことでその言葉で友達はどんな気持ちになるのだろうと気付く事ができたと思う。
・ふわふわ言葉、ちくちく言葉など様々な言葉を知ったことで生活のなかで、それをどう伝えたら良いのか、身につけた言葉を取り入れ、生活の中で自分の気持ちを伝えたり表現する姿が見られた。

Ⅵ今後の課題

・今後は本研究で得られた学びを活かし子ども達が思いや考えを伝え合いながら、共通の目的を持って協力することが出来るよう、経験で得た力が成長につながるよう、環境構成と援助の工夫を行っていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年　幼保連携型認定こども園・保育要領解説　株式会社フル―ベル館
・カモ　2018 年　富永靖弘　カモさんのイラストまるごと BOOK　新星出版社

遊びを通して身近な人や物への興味関心を広げる

―様々な遊びの中で、やってみようとする気持ちを育む環境構成と援助の工夫を通して―

浦添市　あおいこども園　保育教諭　平安山　りのあ

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の第２章第３節の（５）「表現」(6)の内容では「生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する。」とある。また、第２章第３節（１）「健康」(6)の内容では「保育教諭等の助けを借りながら、衣類の着脱を自分でしようとする。」とある。保育教諭等が場に応じた援助や一人一人の発達に合った援助を行い園児の表現する世界を一緒に楽しみ展開していく。さらに、園児同士の世界を繋げていくことで、身近な人や物への興味や関心を広げることに繋がると考える。

学級の実態として男児15名、女児15名、計30名の１歳児クラス。その内、新入園児が13名である。少しずつ園生活にも慣れ、読み聞かせやペープサートを好み、やってほしいことを保育教諭に指さしで伝え、保育教諭と一緒に音楽に合わせて、身体を揺らしたりと表現することを楽しんでいる。また、指先を使った製作遊びが好きで、他児が製作をしていると興味を示す姿も見られる。生活面では、トイレに興味を持ち、座りたがる子や、自分で着脱しようとする子など、身の回りのことに意欲的な姿も見られるようになってきた。

このような実態を踏まえ、１歳児の発達の理解を深めるとともに、子どもたちの発達の特性と発達の過程を十分に理解し、一人ひとりの発達に見通しを持って関わっていきたいと感じた。その一つとして、発達を促す遊びや環境を工夫することで１歳児の生活及び遊びが充実できるように、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　子どもの発達に合わせた遊びや環境構成の工夫

・個々の発達過程や興味に合わせた玩具等を用意し、子どもの意欲や興味が広がる環境構成を工夫する。

２　保育教諭の関わり方や援助の工夫

・保育教諭が手本を見せたり、一緒に手を添えながら遊び方を知らせていく。

・安全面に注意し、子ども自らが興味をもってやってみたいと思えるような気持ちを育んでいく。

Ⅲ　保育計画

月	研　究　計　画
４月～５月	幼児の実態把握・課題の検討
６月	研究テーマの検討（テーマ設定理由、研究内容、研究計画の検討）
７月～１１月	理論研究、保育実践
（９月～１０月）	（中間検討会）
１２月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取組（実践）　【実践事例１】製作遊び　ビー玉転がし

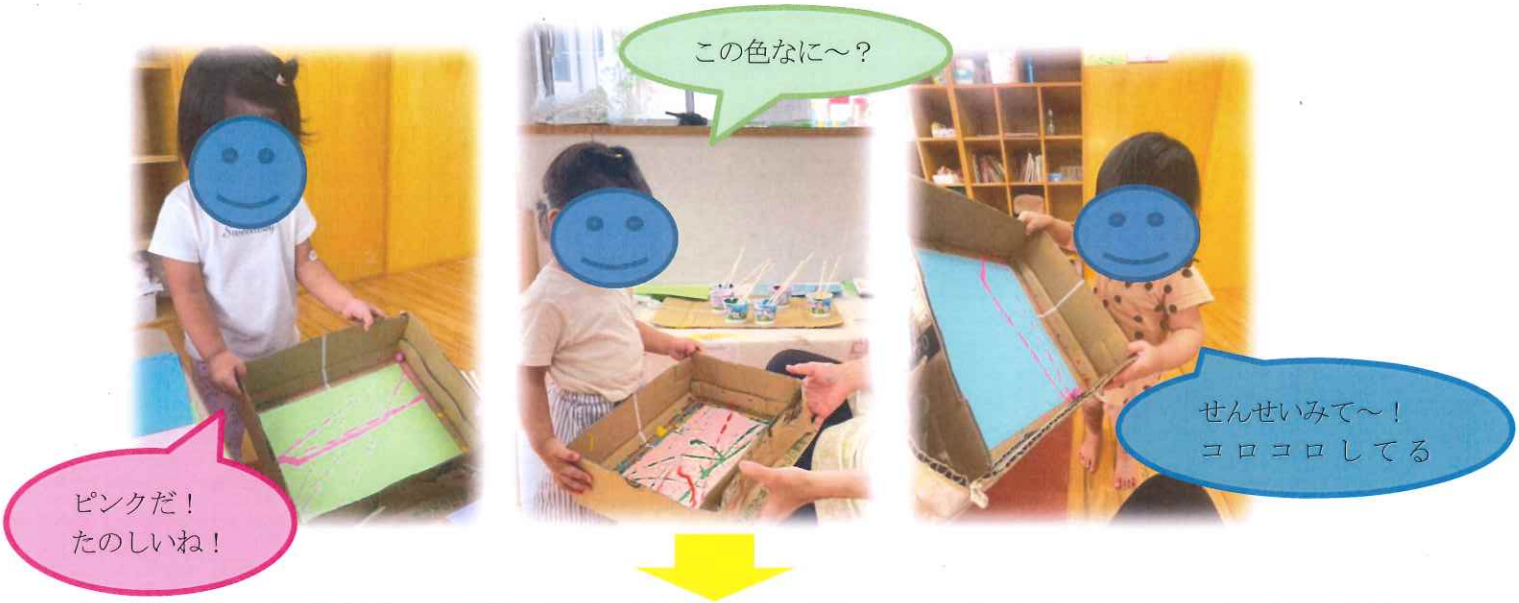
<幼児の姿>

・製作活動に意欲的で、保育教諭に「やりたい」と興味を示し楽しむ子もいるが、興味を示さない子もいる。

≪保育教諭の願い≫
◎自分なりに表現することを楽しみ、「できた」という嬉しさを感じてほしい。
◎色や形など、様々な素材に興味や親しみを持ってほしい。

<環境構成と援助の工夫>
★たくさんの色を用意し、自分の好きな色を見つけられるようにする。
★保育教諭が一緒にやってみたり、手本を見せ楽しめるようにする。

<幼児の変容>
・沢山の種類の絵の具を用意し、保育教諭と一緒に転がしたりできる子は自分で転がしてみることに挑戦した。初めは、保育教諭と一緒に転がしていたが、徐々に「自分でやってみる」と自ら転がし楽しむ姿が見られた。また、他児にやり方を教えようとする姿も見られた。初めてのことに敏感で泣いてしまう子も、他児がやっている様子を見て、少しずつ挑戦し、最後には自分で箱を持ち楽しむことができた。



〖結果と考察〗
・「これなに？」など、ビー玉が転がる音や動きに合わせて色がつくことに興味を持って何度も繰り返し楽しむ姿が見られた。
・普段あまり製作活動に興味を示さない子も、やっている様子を見に来て「○○も～」「せんせい、楽しいね」「赤がいい！」などと興味を示して楽しんで活動することができた。
・好きな色をそれぞれ自分で選んだことで、その後の遊びの中でもブロックを持ってきて「なにいろ？」と聞いたりと、色への興味に繋がった。
・最初に手本を見せ、やり方を伝えることで、スムーズに製作活動ができた。

【実践事例２】感触あそび

<幼児の姿>
初めての遊びに積極的に楽しむ子も居れば、やったことのないもの絵の具やシール等の触れたことがない素材には、感触などに泣いて嫌がる子もいる。

≪保育教諭の願い≫
◎感触遊びを通して「色々な物を触れてみたい」という好奇心が育ってほしい。
◎友達が作っているものや触れているものに興味を示してほしい。
<環境構成と援助の工夫>
★口に入れたりしないよう安全面に気を付けた環境構成をする。
★他児や周りが見えるような位置を心がける。

＜幼児の変容＞
・全員が沢山触れるように多めに用意し、保育教諭が見本を見せることで、初めての物に興味を示していたが触ろうとしなかったり、人差し指で触っていた。保育教諭がこねたり丸を作って見せると、少しずつ触る姿が見られた。何度か繰り返すうちに慣れてきて、感触を嫌がって泣いていた子も、笑顔で触ることができている。

①もち粉粘土

②寒天遊び

【結果と考察】
・「冷たい」「プルプル」等の感触に喜び、興味を示して楽しんでいた。
・保育教諭が丸めて「おにぎり～」と言うと真似したり、月齢の高い子は「おべんとう作った！」と嬉しそうに見せていた。
・嫌がって泣く子もいたが、一緒に触ることで安心して触ることができていた。
・「○○は何つくっているかな～」など声をかけることで子どもたちの興味や関心を引き出すことができた。
・色を付けたことで、青、赤などの発語に繋げることができた。

【実践事例３】　運動遊び

<幼児の姿>
○身体を動かして遊ぶことを好み、意欲的に取り組む姿が見られる。体操や運動遊びを嫌がったり、怖がってやりたがらない子もいる。

≪保育教諭の願い≫
◎運動遊びを通じて、身体を動かす楽しさを味わってほしい。
◎みんなで一緒に身体を動かし、友だちや保育教諭と関わる楽しさを感じてほしい。
<環境構成と援助の工夫>
★ケガや事故を防ぐため、必ず事前に安全点検を行う。
★1歳児に理解できるわかりやすいルールを設け、順番や遊び方を伝える。

<幼児の変容>
・鉄棒にぶら下がったり、平均台に挑戦した。鉄棒では、掴んですぐに離してしまっていたが、何度か繰り返したりみんなで数えてみたことで10秒以上ぶら下がる事ができる子が増えていた。平均台では怖がって渡りたがらない子もいたが、保育教諭と手を繋いで何度も渡ったことで、少しずつ手を添えなくても渡ることができるようになった。

【結果と考察】
・最初に見本を見せたことで、楽しみながら参加することができた。保育教諭と一緒に「ガンバレ～！」と応援したり、「いーち、にーい、さーん」とみんなで秒数を数えたりと待っている子も参加することができた。
・運動遊びに意欲的でない子も、保育教諭と一緒にやってみたり、他児の様子を見せたことで、自分もやってみたいと近づいていく姿も見られた。
・怖がっている子への声かけ、またお友だちと一緒に誘ってみたり、保育教諭と手をつないで参加することで「やってみよう」と意欲的な姿も見られる様になった。

Ⅴ　実践のまとめと考察

・自分の興味のあるものや、好きな物だけでなく、周りの環境や人への興味関心に繋がった。
・片付けや洋服の着脱などで「自分でやりたい」と意欲的な姿が見られるようになった。

Ⅵ　今後の課題

・引き続き「やってみたい」と思えるような環境構成を工夫して、子どもの挑戦する姿を見守り援助できるようにし、経験をくり返しながら達成感を味わわせながら、自信に繋げていけるようにしていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成30年　幼保連携型認定こども園・保育要領解説　株式会社フルーベル館
・長瀬　美子　編著　2014　「乳児期の発達と生活・あそび」　ちいさいなかま社

様式３「課題研究レポート」

１人ひとりの個性や想像力を育む
―身近なものから楽しさを感じて―

浦添市牧港ひまわり幼稚園　教諭　氏名　比嘉　詩織

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼稚園教育要領解説第２章「表現」の内容（４）に「感じたこと考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする」とあり、「人間関係」内容（５）には「友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う」と記載されている。

本学級は、男児 13 名・女児 13 名（3 年保育）計 25 名の 3 歳児クラスである。クラスの半数程度が初めての集団生活の中、座って遊ぶ、活動することが難しい子がいる。みんなが興味・関心を持ち、意欲的に活動に取り組めるよう、お絵かきや身近なもので作る制作遊びなどで、１人ひとりの個性や想像力などを引き出していきたい。また、子ども同士でコミュニケーションを取り、楽しいと思えるような雰囲気の中で活動をすすめて、お絵かきの楽しさや完成した時の達成感を大切に研究をすすめていきたい。

Ⅱ　研究内容

１子どもの個性が出るような活動の取り組み

１人ひとりの想像力や発想力が伸び伸びと活かせるようなお絵かきのテーマを考え、必要な環境や援助方法を準備し、行えるようにする。

２達成感を得られるための援助や指導の工夫

教師が出来上がった制作物の見本を提示し、一緒に制作をすすめていくことで完成に近づいていく喜びやそれぞれの気持ちを大切にすすめていくように心掛ける。

Ⅲ　保育計画

月	研究計画
４月～５月	幼児の実態把握・課題の検討
６月～７月	研究テーマの検討
７月～１２月	理論研究、保育実践、環境の構成
（９月）	（中間検討）
１２月	研究のまとめ

Ⅳ課題解決に向けた取り組み（実践）

【実践事例１】「楽しくお絵かきをするためには・・・」

≪幼児の姿≫

・画用紙に○△□を描いて、おにぎりや車などを描いてみてねと伝えても、なかなか絵にならず、画用紙にぐるぐるを描いたり、色を塗ったりしている子がいる。途中で飽きて、長くお絵かきが続かない子もいて、楽しくお絵かきをすすめられていない様子も見られた。（ひとつだけ何かを描き、余白がたくさんあり、

他に何を描いていいのかわからないような状態である）

≪教師の願い≫

・お絵かきを楽しいと思って取り組んでほしい。

・お絵かきが苦手な子もあきらめずに、最後まで描くことを続けてほしい。

・〇△□の形でたくさんのものが描けることに気付いてほしい。

≪教師の関わりと環境構成≫

・教師が前に立ち、〇△□を描き、子どもたちが描きやすいように見本を描く。その際、子どもたちが分かるような車やおにぎり、アイスクリームなどの描きやすいものを選び、描き方を教えながらすすめていく。

・クレヨンと絵具を用意し、線を描くと何の絵ができるのかを知り、楽しみにお絵かきに取り組めるようにする。

・子ども同士でもコミュニケーションを取りながら、楽しい雰囲気の中で描きすすめられるように「お友達とお話ししながら描いてね～」と声かけなどをしながらすすめる。

① 〇△□の形でいろいろなものを描いてみよう！

教師が見本を描き、子どもたちが好きなようにお絵かきをする。〇△□の形で描けるものはなんでも描いていいということを伝える。

≪幼児の変容≫

・お絵かきをするだけでは、手が止まったり、途中で飽きてしまう子もいたが、お題を決めて取り込むことで、楽しそうにお絵かきをする姿が見られた。

・お絵かきが苦手な子には、黒板で描き方をゆっくり教えながら、すすめることで、また描き始めることができた。

・「〇〇かいてもいいの？」と聞いてくる子もいて、次々と色々なものを描いて、「見て～、大きい車を描いたよ！」などの楽しい声も聞こえてきた。

【結果と考察】

・お手本を提示することで、真似して描こうとする子や、自分で考えて描こうとする姿が見られた。

・手が止まっている子は、描き方をゆっくり教えることで手がすすみ、自分で描こうとする姿も見られた。

・お絵かきをすすめていくなかで、色塗りを始めたり、お友達と「何を描いたの～見せて」などのコミュニ

ケーションを取りながらお絵かきに取り組む姿が見られ、楽しい雰囲気の中ですすめられるように声かけや環境構成などの工夫も必要だと感じた。

② 絵の具を使用したお絵かき

クレヨンで花火の形になるよう線を描き、上から黒の絵の具で色塗りをする。

最終的には、夜に上がっている花火に仕上がる。

≪幼児の変容≫

・色々な色で線を描き、丸い形になるように描いている子や少しだけ描いて終わる子もいた。

・１色だけを使って描いている子がいて、自分の好んでいる色だけを使用しているようだった。

・絵具での色塗りは、集中して取り組む姿が見られ、「花火だ～キレイ」などの声も聞こえ、楽しく色塗りをして仕上げている様子が見られた。

・同じところを塗る子に対しては、「ここも塗ったらいいよ」と塗る場所を教える姿も見られた。

【結果と考察】

・お絵かきがあまり好きではない子でも、線をたくさんかいてできる花火は楽しくお絵かきに取り組めていたようだった。

・「好きな色を使って描いてね」という指示を聞き、一色だけの子、いろいろな色を使う子がいて、絵からそれぞれの個性や花火のイメージを感じ取ることができた。

・絵の具を使うと聞き、筆の質感や黒い色の絵の具を塗ることで、花火がよりきれいに仕上がることを知り、「きれい～、すごい！花火ができたね！」と喜びの声が聞こえてきた。

・お絵かきと色塗りのどちらも取り入れることで，ひとりひとりの個性や想像力などを育むことができると感じたので、環境構成と声かけなどの工夫が大切だと思った。

【実践事例２】「空飛ぶとんぼを作ってみよう」

≪幼児の姿≫

・とんぼに☆や♡などの模様を描いている姿が見られる。

・何を描いていいのかわからず、手が止まる子や「どうやって♡を描くの？」と聞いてくる子もいる。

・自分から何も聞けずに黙っていて、仕上げるのが遅くなってしまう。

〈教師の願い〉

・お友達のとんぼを見て、アイデアを広げ，制作に取り組んでほしい。

・自ら教師やお友達に聞いて、率先してお絵かきを楽しんでほしい。

・作り終えるだけで終わらず、最後にとんぼを飛ばす楽しみがあることを知ってほしい

〈教師の関わりと環境構成〉

・教師が♡や☆など、模様の見本を描き、子どもたちが描きやすいように提示する。

・〇や△、□など自分が描ける模様でいいということを伝え、子どもたちが描きやすいような雰囲気づくり

をする。

・手が止まっている子には、描きたい模様はある？と聞いたりして、描き方を教えながらすすめていき、楽しく制作活動をしていくよう工夫する。

・とんぼを飛ばして遊べるように、園庭に出て広い環境を用意して、とんぼを飛ばして遊ぶ。

〈幼児の変容〉

・〇と△だけでなく、ぐるぐるも描いていい？と色々な模様のアイデアを生み出し、楽しそうに制作に取り組む姿が見られる。

・たくさんの〇を描き、嬉しそうに教師に知らせてくる子もいて、お友達とコミュニケーションを取りながらお絵かきをする子もいた。

・とんぼを飛ばすのに、はじめは苦戦する子も、飛ばし方を教えると「今とんだよ、見ててね！」と喜んで教師やお友達と飛ばして遊んでいる姿が見られた。

【結果と考察】

・とんぼに模様を描き、出来上がったとんぼを飛ばして遊ぶことで、達成感やとんぼの模様はひとりの個性がでていた。

・広い園庭を利用し、飛ばして遊ぶことでお友達とコミュニケーションを取りながら楽しんでいたので、時間があるときには制作活動を取り入れていきたいと感じた。

Ⅴ実践のまとめと考察

お絵かきの活動を取り入れて行うことで、お絵かきをする際には何を描くかお題（テーマ）を決めてから、取り組むと子どもたちも楽しく集中してお絵かきに取り掛かることができていた。また、手が止まってしまう子やお絵かきが苦手だという子に関しては、教師が描き方を教えたり、声かけを行うことで描きすすめることができていたので、声かけやお絵かきは楽しいと思えるような教師の環境構成の工夫や配慮が大切だと感じた。お絵かきをして終わりではなく、色塗りや制作が終えると遊べるそのあとの楽しみがあるとより楽しく取り組めると感じた。

子ども１人ひとりの個性を大切にし、アイデアや考えを認めて、今後も想像力や個性が活かせるようなお絵かきや制作活動などを取り入れていきたいと思う。

〈主な参考文献〉

幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説

様式３「課題研究レポート」

１歳児の簡単な日常への言葉の獲得と他児との関わりの工夫
―身近な人的環境との関わりを通して―

社会福祉法人　へいあん福祉会　ほるとのきこども園　保育士　氏名　又吉　未来

Ⅰ　テーマ設定の理由

本学級の実態として、男児８名、女児１０名、計１８名の１歳児クラス（６年保育）。そのうち、新入園児は４名である。低月齢、高月齢の比率に差はないが、玩具の貸し借りやその他の関わりの中でやり取りが上手くいかず遊びをトラブルで終えてしまう事が時々ある。また、言葉で伝えられず、噛みつきや手が出る事が多くなり、怪我が絶えない子どもがいる。友達同士の関わり方も上手くいかず、強く抱き着いて転んでしまい、危険な場面が多く見られる。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第３節「言葉」の獲得に関する領域のねらいに「（１）言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる。」「（２）人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする。」「（３）絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる」と記されている。また、言葉を使う為には、他者と感情や物事を分かち合える温かな関係を基盤として、指し示す対象と言葉との対応に気付き、理解する事と、それを相手に伝えようとする気持ちが育つ事が必要である。意思を持つ主体として自我の育ちと、自分の思いを分かってほしい、共有したいと願う身近な大人との関係の育ちを土台に、言葉を用いて他者と伝え合う力が培われていくと記されている。

そこで、友達と関わる中で簡単な言葉でのやり取りができ、玩具等の貸し借りを楽しみながら、長く遊びに集中し、また、保育士や友達と関わる事で、日常の会話に親しみを持って園生活を充実させてほしいと願い、このテーマを設定し、研究する事にした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 言葉の真似をしたり、言葉で表現する意欲が高まる工夫について

・絵本を通して沢山の言葉を聞き、言葉への関心を持てるよう環境構成や声掛けを行う。

② 身近な人的環境により、他児との距離感や関わり方が得られる環境の工夫について

・遊びの中で、他児との適切な距離感を丁寧に伝えながら怪我をしないような関わり方を保育士が実践しながら行っていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

≪幼児の実態①≫

・絵本の読み聞かせの際に後ろを向いていたり、他児とのトラブルにより話に集中できていない。
・歌絵本だとほぼ全員が前を向いて集中して聞いている姿がある。

《保育者の関わりと援助》

・絵本の読み聞かせの時には、物語に集中できるように読み聞かせをしている保育士とは別の保育士が子ども達を絵本の方へ向かせられるよう促した。

・子ども達の興味のある絵本をテンポよく言葉や音の繰り返しが楽しいもの選ぶ事により、自ら進んで前を向き、集中して見られるように環境を整えた。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果…○絵本の読み聞かせの際には、他児との会話が減り集中する事が出来、次の活動がスムーズに行えるようになった。

○興味のある絵本の時には自ら保育士と一緒に歌ったり、相槌をうつ姿が見られた。

② 課題…○保育士に声を掛けられると、自分のやりたいことが中断されると、癇癪を起す事がある。

③ 実践を通した自身の気づき、考えなどを書いてください

○子ども達に掛ける声掛けによって楽しみながら見る子もいるが、ただ言われたから絵本の方を向くだけの姿の子も見られ声掛けの工夫を考えさせられた。

○子ども達が日頃から読んでいる絵本での相槌や曲を口ずさむ姿が多く見られた。絵本から学ぶ言葉もあると気づいた。

一人ひとり声掛けをしながら、切り替えが難しい子に寄り添う。

声掛けをした後には、全員が前を向き保育士の話を聞いている。

《幼児の実態②》

・玩具の取り合いの際に手を出す子が増えてきてトラブルが増える。

・使いたい玩具を借りる事が出来ないと、泣いてしまい、奪ってでも使おうとする姿がある。

《保育者の関わりと援助》

・玩具遊びの際には、保育士が輪に入って一緒に遊ぶ中でお手本となって「貸して」「どうぞ」を言い、子ども達が真似できるような環境を作る。

・数が少ない玩具に対しては、「使っているから」で終わらせるのではなく、他の玩具に興味を持てるような声掛けを行い、子ども達が納得して遊べる環境を作る。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果…○玩具遊び等の時に、「貸して」と動作を付けながら借りようとする姿が見えた。

○「どうぞ」はまだいう事が少ないが、「あとで」と返事をすることが出来る子が増えた。

○保育士の真似をして月齢が高い子は動作を付けて「使っているよ」と返事をする姿が見られた。

② 課題…○「貸して」と言った後に借りられないと分かったら、手が出てしまったり、泣いたりして受け入られない子が多い。

○他の玩具での遊びに興味を持って遊ぶことが出来ず、切り替えが難しい時がある。

③ 実践を通した自信の気づき、考えなどを書いてください。

○玩具の貸し借りの際に、横で見守りながら援助する時には保育士の真似をして話がスムーズにできる

○使いたい玩具が使えない時には、他の玩具に興味が持てるように声掛けをした所、自ら遊び方を見つける事が出来ている子もいたが、難しい子もいたため、声掛けの仕方に課題ができた。

子ども達の輪に入り、順番を決めたり、子ども達同士の貸し借りを援助している

おままごと遊びの際に、他の玩具で何が作れるのか、保育士と話し合う姿がある。

V　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなどを書いてください

・絵本の読み聞かせの際には、子ども達が興味、関心のある絵本を選ぶようにしていく。

・読みなれた絵本から学ぶ言葉を日頃から使っていき、子ども達の言葉の獲得に繋げていきたい。

・玩具の貸し借りの際に保育士も一緒に行う事で子どもたちも普段から使っていける事が実感できた為まだ、貸し借りの際に言葉より先に手が出てしまう子には、保育士が輪に入り一緒に伝えていく。

・玩具が使用できない時には他の玩具では何ができるかのレパートリーを増やしていき、子ども達の興味が他の玩具に向けられるようにしていきたい。

・会話が楽しくなるように保育士も一緒に輪に入り楽しめるように意識していく。

〈主な参考文献〉

・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」

＊2 ページから 3 ページにまとめること

協同性を育む援助の工夫

―「やってみたい」の気持ちが広がる保育環境―

浦添市勢理客こども園　保育教諭　知花　優海子

Ⅰ　テーマ設定の理由

本クラスの実態としては、5歳児21名(男児7名、女児14名)、0歳児から3歳児にかけて入園し、3歳児クラスからは持ち上がりのこども達なので園生活には慣れている。自分で好きな遊びを見つけて遊びに夢中になる子もいる一方、なかなか遊びを見つけられずにいる子や、苦手な遊びの輪の中には入ってこない子もいる。“製作においては得意不得意が見られ、意欲的にやりたがる子とそうでない子で取り組むまでに時間の差が出ている。友達とのかかわりの中で自分の気持ちを伝える姿は多く見られるが、一方的な言葉で相手の気持ちを受け止めてなかったり、言葉遣いが気になることもある。また、相手に伝えず保育者に伝えてくることもある。このような実態を受け、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の「人間関係」の領域、内容(7)友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。「表現」の領域、内容(5)色々な素材に親しみ、工夫して遊ぶことを意識し、こども達が主体的に環境にかかわることで展開する遊びを中心とする活動を通して、発達に必要な様々な経験が得られるためには、どのような支援や援助が重要であるか研究したいと思い、本テーマを設定した。

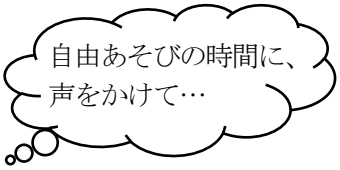
Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 個別の対応…一人ひとりの発達や個性に応じてアプローチを工夫する。
② 「やってみたい」の気持ちを引き出し、表現や創作意欲を高める援助の工夫…幼児が様々な教材や廃材に興味をもち、経験を生かして自ら考え、作り出す楽しさを感じられるような環境構成を行う。
③ 協同性を育む保育…友達と関わる中で互いの思いや考えなどを共有したり、工夫、協力する中で充実感をもってやり遂げたり、自分や友達の良さに気づく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例①　個別の対応

４月～６月では、こいのぼり、母の日、父の日の製作があったが、指先の不器用さがある子や集中が続かない子は進んで行うよりも、声かけをしてやっと制作に取り組むことが多かった。



・苦手意識をなくすためには？　・製作に興味をもってもらうためには？
→“課題”としてではなく、遊びの中で指先を使う楽しさを感じてもらおう！

★はさみの使い方がぎこちない子と一緒に

【ハサミを使って様々な厚さの紙を切ってみる】
・素材によって切りやすさが違うことに気づく
・自分の好きな形に切る楽しさを感じる

★指先を使った細かい作業が苦手な子と一緒に

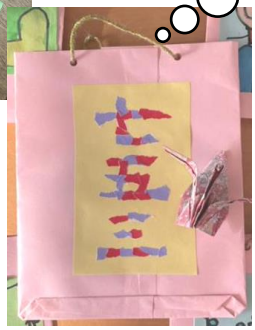
【点線の入った紙を指先を使ってちぎっていく】
・単純な作業だからこそ、やってみたくなる
・指先の力の調節ができるようになってきた！

実践事例②　個人の製作物と共同制作

七五三製作で「七五三」の文字をちぎり絵で作ると、ちぎり絵に興味を持ったこども達。

・ちぎり絵っておもしろい！もっとやってみたい！　→　こども達の意欲を共同制作で活かしてみよう

こども達の意欲が高まっているときに、違った形でちぎり絵の製作をしてみたらどうなるかな？



【七五三製作】
保育者が鉛筆で「七五三」と書いた上に、こども達が自分でちぎった２色のおりがみを貼った。ちぎり方、貼り方に個性が見られる仕上がりになった。

【勤労めぐりの製作①】
分担してみんなでちぎり絵をして一つの作品を仕上げる。

このくらいの大きさにちぎるんだよ

顔のところを貼るね

★共同製作の楽しさを感じたこども達。みんなで台紙に“紙を貼る”を違う素材でやってみたらどうなるかな？

【勤労めぐりの製作②】
細長く切った画用紙を指先を使ってくるくると巻き、それを並べて絵をつくる。

赤いくるくるは、りんごみたいだね！りんごの木にしよう

【台紙作り・段ボールにのりをつける作業】
ちぎり絵の細かい作業だと集中が続かなかったり、のりづけをするときに手にべったりとついてしまう子に声をかけ、大きな台紙にのびのびとのりづけをしながら、製作の楽しさを感じてもらい、指先を使ってのりを伸ばすことや、適量がわかるように丁寧にかかわった。

公園で見つけた葉っぱはトンボの羽になりました。

勤労めぐりの製作②は、３つのグループに分かれて３つの作品を仕上げた。くるくると紙を巻く楽しさ並べることで絵ができる面白さを感じたこども達から、「もっと作りたい！」の声があり、台紙を小さくして取り組みやすいようにしてみた。最初に作った３つの作品は大きな木だったが、小さい台紙の製作はこども達同士で何を作るかイメージを膨らませて、相談し合いながら様々な作品ができた。

お花畑と夕焼け

ちょうちょとへび

雨が好きなカエル

フラミンゴ

キリンと木

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・年度当初の製作の時には、あまり興味がなかったり、集中できなかった子が個別の対応をしていくうちに、少しずつ製作に積極的になっていった。

・個人の製作物だと取り組むまでに時間がかかる子が、共同製作になると、「やってみようかな」と興味を持ってきてくれる姿が見られた。

・共同制作では個人で作るのは時間がかかったり難しいものでも完成させることができ、製作に苦手意識のある子も参加し出来上がりを見て達成感を味わうことができた。

②　課題

・いつでも遊びの中で使えるように廃材を用意してみると、得意な子は工夫して自分なりに物づくりを楽しんでいるが、苦手な子は材料があっても使いこなせていなかった。一緒にやってみようと声をかけてみると、しぶしぶやりはじめるが、やってみたら楽しさを感じて、次の日に「またやりたい」と言ってくれる姿があったので、製作意欲が湧くような関わりが今後も必要だと感じた。

・共同制作を行う上で、こども同士の思いがぶつかる場面があった。自分の考えだけでなく、相手にも思いがあり、互いの気持ちを大切にすることを引き続き伝えていきたい。

③　実践を通した自身の気づき、考えなど

・やり方がわからなくて困ったときに、保育者がすぐに助けるのではなく友達に聞いてみるように促すと製作が得意な子が教えてくれて、こども同士のかかわりを大切にしたり、協調性を育むことができた。

・こども達の「もっとやりたい」に応えることができるよう、製作がその時だけの分ではなく余分に用意したり、大きい製作物だった場合はこども達が作りたくなった時のために小さいサイズのものを準備して短い時間でも作れるようにしておくと、こども達の豊かな発想や製作の広がりが見られて面白かった。特に勤労めぐりの製作②の後に、こどもたちが作った作品は、画用紙を丸めるだけでなく折ったり、大きな丸にしたり、色を重ねてみたりと色々な工夫が見られた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

こども達の発達段階や興味関心から製作の内容を決めて提案することが多かったが、年度の後半になり様々な製作を経験したこども達なので節分やひな祭りの製作では、こども達の作りたいものを聞いてみて相談し、どんなものにしていくか決めていきたい。また、製作だけでなく遊びや活動においても「やってみたい」の気持ちを受け止め、こどもに寄り添って実現できるようなゆとりある保育ができるような環境構成や援助の工夫、教材研究を行っていく。

〈主な参考文献〉　内閣府　文部科学省　厚生労働省　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

食に興味を持ち意欲的に食べられる環境作り
－安心感のある雰囲気で食べたいを引き出していく－

浦添市勢理客こども園　保育教諭　山﨑　織穂理

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、間食が多く三食しっかりご飯を食べられない子が増えているように感じる。本クラスでもそのような子がいてどうしたらしっかり食べてくれるかが課題になっている。

本クラスは男児１２名、女児１２名の合計２４名が在籍する一歳児クラスで、視野が広がり他児に興味を持って関わったり、保育者と言葉でのやり取りなどを楽しむ姿が増えた。食にも少しずつ興味をもち、自分から意欲的に食べる子や好きなものと交代で苦手なものを自分から口に運んだりする子も出てきているが反対に、食に興味がなく保育者がごはんの準備を始めると嫌だと泣いて拒んだり、好きなものにしか興味がなくそれ以外を口に入れると噛もうとせず長時間溜めてしまうなど試行錯誤して対応していく必要がある子もいる。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第２章第３節　健康（４）様々な食品や調理形態に慣れ、ゆったりとした雰囲気の中で食事や間食を楽しむとある。言葉のやり取りが出てきている今、保育者やお友達と穏やかでくつろいだ雰囲気の中一緒に食事を楽しむ経験を積み重ね、安心感を引き出していきたいと思い設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 食べ物に興味・関心を持てるような工夫

絵本や手あそび、おままごとやお散歩などの遊びを通してお友達や保育者と楽しみながら興味・関心を持てるようにしていく。

② その子に合わせて量や食べる時間などの工夫

おたより帳や登園時間、体調面などから園児のその日の状況把握をし、食べる量や時間の調整、場所を変えてみるなどの工夫を行いその子が食べることに対して負担にならないようにしていく。

③ くつろぎ、楽しい、安心した雰囲気作りの工夫

普段からお友達や保育者との関わりを深め、一緒に食べたいという気持ちを引き出していけるようにしていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】食べ物に興味・関心を持てるような工夫

〇こどもの姿

・おままごとで遊ぶ中でキッチンに立って何かを作ったりはしているが、
何も乗っていないお皿だけ持ってきて「どうぞ」と渡す子が多く、
「これなあに？」と聞くと答えられない子がほとんどだった。
・食べ物の絵本を置いておくと興味をもって見たり食べるフリをしていた。

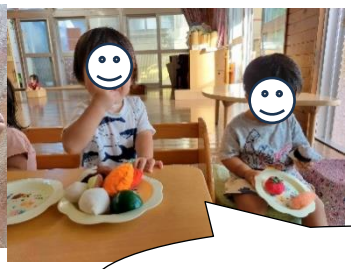
〇保育教諭の願い

・いろいろな食べ物を見る・触る・噛んで味わう経験やあそびを通して自分で進んで食べてほしい。
・あそびの中で保育者が仲立ちとなりお友達と一緒にご飯を作ったり食べたりと関わる楽しさを感じてほしい。

〇保育教諭の関わりと援助

・食べ物の絵本や手あそび、歌などこども達が楽しんで学んでいけるようにしていく。
・おままごとでは、机を用意したり布ブロックで仕切るなどしてお家に見立てて環境を作り、一緒に料理をしたり、お弁当を作ったりする中で食べ物の名称を覚えられるようにした。
・お散歩では様々な植物に触れ、アセロラやシークワーサーをお家の方から頂き食べる機会を増やした。

これがトマトだよ



自分で作ったごはんおいしいね☆

すっぱいけど
おいしい！

〇こどもの変容

・読み聞かせをした絵本をもってきて「いちごどうぞ」や「トマトがいい！」と野菜やくだものの名称を覚え、こども達だけで楽しむ姿が見られるようになった。
・「キャベツ食べたいな～」と声をかけるとキャベツを理解し自分で考えて選び、お皿に入れてもってくるようになったり
お友達同士で「バナナでーす」と食べさせてあげる姿もあった。

いちごたべて！

〇結果・考察

・野菜やくだものに興味を持つ子が少しずつ増え始め、絵本よんで～と持ってくることが多くなり、繰り返し読んでいるうちに食べ物の名称や特徴などを覚え、ご飯中も「これなに？」と聞くことが増えていった。なかなか興味を示さない子もいたがお友達のマネをして名称を言ってみたり絵本を持ってきたりして一緒に楽しむようになった。
・食への興味だけでなく、絵本やおままごとを楽しんでいる他児にも興味をもって自分たちから関わろうとするこども達の姿が見られた。

【実践事例 2】その子に合わせて量や食べる時間などの工夫

〇こどもの姿

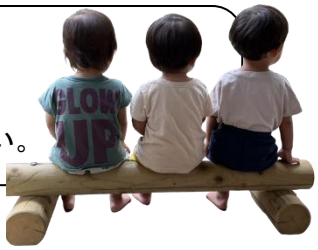
・苦手な食材を好きな食材と交代で食べられる子もいるが、嫌だと泣いて食べない子や口には入れるが飲み込めずに長時間ためてしまう子がいる。

・周りがご飯を食べていても興味を示さず、声をかけられてもお腹がすいていないのか遊び続ける子もいる。

〇保育教諭の願い

・好きな食材も苦手な食材も自分から意欲的に食べられるようになってほしい。

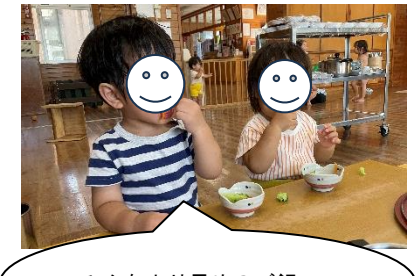
・好きな食材、食べられる食材がどんどん増え、食べることの楽しさを知ってほしい。



〇保育教諭の関わりと援助

・おたより帳や登園時間、体調面などからこどものその日の状況把握をし、食べる量や時間の調整、場所を変えるなどの工夫をしていった。

・食べたいという欲求を見逃さないように保育者間でも情報を共有し連携できるようにしていく。



みんなより早めのご飯！

縁側でごはん！おいしい！

〇こどもの変容

・量や時間を調節するなどの工夫をすることで完食できたことに喜びを感じ、少しずつ自分からおかわりを要求するようになり他の子と同じ量を安定して食べられるようになった。

・最初は嫌だと泣いていた子もタイミングなどを見てやり取りを重ねると自分から苦手な食材に手を伸ばし食べられるようになってきて楽しんで食事する姿が増えた。

〇結果・考察

・完食できたことの喜びから食への意欲が沸き、食べたいという気持ちを大切にできた。

・ご飯の準備をし始めると泣いて嫌だと言っていた子も保育者と信頼関係を深めていくうちに泣くことが減り自分から意欲的に食べられるようになった。

【実践事例 3】くつろぎ、楽しい、安心した雰囲気作りの工夫

〇こどもの姿

お友達に興味をもち「一緒に遊ぼう」と誘う姿や転んでいる子がいると大丈夫？と覗きにいく姿などこども達同士の関わりが増えている。

〇保育教諭の願い

・お友達や保育者と日々の生活の中で信頼関係を築き、安心した環境の中でご飯を楽しんでほしい。

・一緒にご飯が食べたいという気持ちを大切にしてほしい。

〇保育教諭の関わりと援助

・ゲームやあそびを通してこども達同士の関わりや、やり取りができる環境を作っていく。

・苦手な食材がなかなか進まない子に対してこども達に応援してもらってり、食べるお手伝いをしてもらったりしてクラス全体で一体感を感じられるようにしていった。

〇こどもの変容

・ご飯になかなか来ない子に「だれの隣で食べる？」と聞くとすぐに大好きな子の隣に椅子を運び食べ始めるなどの姿が見られるようになったり「おいしいね」とこども達同士での会話を楽しむ姿も増えた。

〇結果・考察

・お友達との関わりが増えたことでお友達が食べている姿を見て食べてみようとする子が増えた。

・食べていない子がいると「たべて～」とこども達同士で声を掛け合う姿も出てきた。

Ⅳ　実践の振り返り

始めの頃のおままごとは何も乗っていないお皿を机に並べて楽しんでいたこども達だったが食に興味を持ち始めるとお皿に食べものの名称を言いながら乗せて「どうぞ」と持ってくるようになった。さらに興味を深めると食べものの名称だったものが料理の名称に変わっていてこども達の成長を楽しんで感じることが出来た。それだけでなくこども達同士の関わりが増えたことで食に興味を示さなかった子がお友達の影響を受け食べてみようとする意欲につながったことにこのテーマにしてよかったと感じた。課題としては他児に興味を示さず食にもなかなか興味を示さなかった子への対応が上手くいかなかった事だ。園だけでなく家庭との連携も大切にしていかないといけないことを改めて知ることが出来、今後の保育の中で自分の納得のいく答えを見つけられるようにこの課題に向き合っていく。

Ⅴ　今後の実践に向けて

自分たちで土から耕して、野菜やくだものを植え、育てて収穫しその食材を使ってなにを作りたいかアイデアを出し合い調理して食べるまでの実践を取り入れていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」　フレーベル社

様式３「課題研究レポート」

主体性を育むための環境構成や援助の工夫

―自信を持って行動する心を育むために―

那覇市　ナザレ幼稚園　教諭　氏名　眞志取　都

Ⅰ　テーマ設定の理由

本学級の実態として、５歳児（３年または４年保育）計１２名が在籍している。クラス全員が進級児で担任も持ち上がりということもあり、安心して園生活を過ごす姿が見られる。文字や時計にも興味を持ち始め、教室にあるホワイトボードに今日の流れを書いておくと、子どもたち同士で教え合い、次の活動の準備をしたり、時計を見て「そろそろお片付けの時間だけど、みんなに何て声を掛けたらいい？」と尋ねにきたり、自主的に行動する場面が増えている。

「幼稚園教育要領」第２章「健康」の領域には、「(1)先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する」「(8)幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する」と記されている。来年の小学校就学に向けて、子どもたち一人ひとりが自分で考え、自信を持って行動できるよう主体性を育むためには、環境構成や援助の工夫が大切であると考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　クラス全員と関わりを深く持てるような工夫

遊びを通して、クラス全員が関わりを持てるような配慮をしていく。

②　自信を持って主体的に行動する為の工夫

教師の声掛けではなく、子どもたちが時計を見て自ら考え、行動できるように配慮をしていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】　クラスの「みんな」で遊んでみよう！～積み木遊びを通して～

【子どもの姿】

横割クラスが１クラスということもあり、付き合いが長い分、気の合う同じ友達と一緒に行動する場面が多く見られる。

【教師の願い】

気の合う同じ友達だけではなく、クラス全員と関わりを深く持って欲しい。

【環境構成及び、教師の関わりと援助】

・日頃から子どもたちが必要だと感じた物(材料等)は、自分たちで考え探しに行ける環境を作る。

・みんなで遊ぶことの楽しさを伝えるため、教師自ら、今日は「みんな」で何か作ってみたらどうか？と提案してみる。

・子どもたちが自由な発想で作品をつくれるように、教師は必要以上に助言をせずに見守る。

【子どもの変容】

・はじめは、積み木を使い、仲の良い友達同士の少人数での遊びだったが、その内に、他の友達とも相談したり、連携したりする等、集団での積み木遊びへと広がっていく様子が見られた。

・教室にある分の積み木だけでは自分たちの理想とする作品が作れないと考え、他のフロアにある積み木を持ってきても良いか、教師に確認し、自ら考えて行動する姿が見られた。

・クラス全員で積み木を使って遊んだ後に「『みんな』で庭に行って、お弁当を食べたい」と言う等、子どもたちから一体感がうまれた。

【実践事例２】　<u>自分たちで時間の配分を考えて、体操教室に間に合うように準備をしてみよう！</u>

【子どもの姿】

自信がない、注意されたくないという気持ちから、教師に確認してから行動する様子が見られる。

【教師の願い】

子どもたち一人ひとりが自分で考え、自信を持って行動できるようになって欲しい。

【環境構成及び、教師の関わりと援助】

・教室のどこにいても見やすい位置に時計を配置している。

・普段から、時計や時間を意識するような声掛けを行っている。

・間違えても、失敗しても大丈夫だからまずは考えてやってみる、ということを常に伝えている。

【子どもの変容】

・体操教室の時間に間に合わなかった子が数名おり、落ち込んでいる様子が見られた。

・教師が「どうすればみんなが体操教室に間に合ったか」を問うと「片付けを始める時間が遅かった」「先生が教えた時にやれば良かった」「次から、もう少し早く準備をした方がいい」などと、子どもたちから様々な意見がでた。

・体操教室に間に合うように子どもたち自身で時間を設定し、過ごすようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

実践事例１では、みんなが一つの作品に向かって完成させようと夢中になっているうちに、クラス全体で連携が取れていた。また、その後の昼食時間では、仲の良い友達同士で座る子もいたが、普段よりも友達の輪を広げて交流を楽しんでいた。実践事例２では、自分たちで考え、行動することが出来た。その後、どうしたら次の活動に遅れないようにできるか？ということも子どもたちから意見を出すことが出来た。

②　課題

実践事例１では、その場限りのイベントにしてしまうと意味がない為、日頃から教師がさまざまな友達と関われるように提案や配慮をしていく必要がある。実践事例２では、子どもたち一人ひとりが、集団として行動する上で必要な時間（時間配分等）を設定し、行動することは高度であった。もっと、子どもたちに合ったレベルを見極めていくことが必要である。

③　実践を通した自身の気づき、考えなどを書いてください

どちらの実践事例も、日頃の保育の積み重ねが大切であり、その日だけでは決して良し悪しを決められるものではない。保育を行う中で大切なことは、子どもたちが安心して活動できる場を教師が常に整えていくことだと改めて感じた。間違いや失敗をしても何度でも挑戦できる環境構成を今後も作っていきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなどを書いてください

・日々の隙間時間や、週１回はクラス全体で遊べるような設定を考え、実践していく。

・常に安心して試行錯誤が出来る場を多く作っていきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成３０年　「幼稚園教育要領解説」　フレーベル館

安心できる環境の中で、意欲と達成感を育み楽しさを味わえる援助の工夫

-友達や保育教諭と一緒に生活や活動を通して-

社会福祉法人郵住協福祉会立　安謝こども園　保育教諭　下地　奈津衣

Ⅰ　テーマ設定理由

近年、新型コロナウイルス感染拡大による行動自粛や感染症対策により、コロナ発生前に行われていた保育活動をそのまま実践することが難しく、活動の工夫が必要になり、活動や行事が、軽減されることがあった。また、昨今核家族化、情報化社会によるコミュニケーションの希薄化が感じられ、子ども達を取り巻く社会が著しく変化している。そのような時代背景を理解した上で、どの子にもその時に必要な発達が、保障されるべきであると感じる。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の第２章第４節（２）人との関りに関する領域「人間関係」の中で、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」とあり、内容の中に「保育教諭と一緒にじっくり考える時間を過ごすという体験が、自分で考え行動しようとする気持ちをもつための基盤となっていく」とある。

また、安心できる人的環境である保育教諭や友達と一緒に、生活や活動を通して物的環境も整え、年齢に合った援助の工夫が必要と考えられる。

本学級は、３歳児男児９名、女児３名計１２名で、クラスの半数が初めての集団生活である。活発で色々なことへ意欲的に取り組む姿がある反面、朝の身支度や活動中困ったことが起きた場合上手く伝えられない子や遊びに集中せず、転々とする姿も見られる。このような実態を踏まえ、園児が自信をもち見通しを持って行動し、さまざまな活動を通し、諦めず取り組む力が育めるようにするためには、どのような援助や環境構成の工夫が必要なのか研究していきたいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　遊び込むことができる環境の工夫

幼児理解に努め、主体的に活動に取り組めるよう興味・関心が持てる環境構成の工夫を行い、「やりたい」「できたよ」と自発的に取り組める工夫を行う。

２　基本的生活習慣を身に付けていくための環境構成の工夫

園児自身が進んで取り組めるよう視覚的に分かりやすい環境を整えながら、個々に合わせた声かけや配慮の仕方を工夫し関わる。

３　家庭との連携により、園児の発達向上へ繋げる

家庭での様子を確認していきながら、園での取り組みや発達に応じた関わり方を情報共有し、一貫性のある関わりを行っていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取り組み（実践）

【実践事例１遊び込むことができる環境の工夫】

子どもの姿	環境・構成	援助・配慮・保育教諭の願い
４月 ・絵本の読み聞かせの時は、集中が続かない。 ・１つの遊びに集中せず遊びを転々とする。 ・食への意欲があまり見られない。	・言葉の短い絵本を選び、集中して絵本に向かえるよう関わる。 ・遊びを選択して集中し取り組めるようコーナーを設置する。	・絵本に興味を持ってほしい。 ・絵本の読み聞かせを多く取り入れる。 ・遊びを展開して遊んで欲しい ・食に繋がる絵本を取り入れる。

5月 ・徐々に絵本への興味が見られる。 6月 ・コーナーに設置していた『スイミー』の絵本に興味を示すようになる。その後、『スイミー』から会話が広がり、海を作るまでになった。 ・「海には、魚が沢山泳いでいるから、魚釣りをしたい」と話す子がいる。 ・自分の思いを伝えられる子と、伝えられない子がいる。 7月 ・絵本に興味関心を持つ子が増えてきた。 8月 ・虫捕りに興味を示すようになり、図鑑を持ち、虫捕りに行く姿や、採った虫を友達と確認し、特徴を友達と伝え合う姿がある。 9月 ・ピーマンに関する絵本や野菜に関する絵本に興味を示す。 ・ピーマン植えを体験することで、ピーマンの生長に興味を示すようになる。 １０月 ・『グリーンマントのピーマンマン』の読み聞かせ後、新聞紙あそびでピーマンマントや、剣を作りピーマンマンごっこをしている。 ・「ごはんをたくさん食べたら、ピーマンマンになれるよね。」と関連付ける子がる。 １２月 ・生活発表会にて「グリーンマントのピーマンマン」を思い切り表現する。	・短い文の絵本を中心にクラスに設置して絵本に興味が持てるよう関わる。 ・『スイミー』の絵本を設置する。 ・クラスで「海を作りたい」と話す子や、その後「釣りをしたい」と話す子がいたので、どうやったら作れるのか？何で海を作ろうか子どもと相談しながら材料(廃材等)を準備する。 ・絵本への興味関心が深まるように絵本の数を増やす。 ・クラスに飼育ケースを置き、採った虫を観察できるコーナーを作る。 9月 ・『グリーンマントのピーマンマン』の読み聞かせをする。 ・『グリーンマントのピーマンマン』の絵本がすぐ手に取れるようクラス内に設置する。 ・ピーマンマン遊びの続きができるようにする。 ・描いたり作ったり歌ったり、表現することができるように、新聞紙や廃材などの教材を準備する。 ・発表会に繋げる。 ・子ども達が発した言葉をセリフに入れていく。	・短い絵本は、集中して見るので多めに取り入れる。 ・夏にちなんだ、絵本を取り入れる。 ・『スイミー』のストーリーを子ども達なりに作り上げて楽しんで欲しい。 ・自分の思いを伝えられない子には、思いが伝えられるよう代弁したりしながら個別に関わる ・帰りの会で、振り返りをし、こども達の虫の採り方や、発見などを共通理解できる場や発表できる場を設ける。 ・自分達で採った虫のファイリング「はなぐみ図鑑」を作り興味を伸ばせるよう関わる。 ・ピーマンを栽培し実際のピーマンに興味を持てるようにする ・「ピーマンマン」の歌を生活の中で取り入れる。(畑の水やり時、給食時間、お集りの前など) ・作りたいものをイメージしやすいよう子どもの声を拾いながら道具を準備し、一緒に制作をしていく。 ・あそびの展開がこま切れにならないように関わる。 ・食への興味も伸ばしたい。 ・子ども達の遊ぶ姿から、生活発表会に繋げる。 ・オリジナル劇を作った。

【変容】・絵本を読み込めるようになり、９月頃からは、読み聞かせ中おしゃべりをしている友達へ注意する姿も見られるようになる。
・平行遊び、一人遊びから友達と一緒に、思いを出し合いながら遊ぶ姿へと変容し、協調性の育ちが見られるようになる。
・１つの遊びを自分達で展開して楽しむようになった。
・体験から絵本への興味、そして遊びへと繋がり生活発表会へと展開することができた。

【結果・考察】・絵本コーナーを設置することで、絵本に触れる機会が増え、結果興味を示すようになり、クラスでの絵本の読み聞かせにも集中できるようになってきた。
・環境を整えることで、絵本に集中する姿が見られると同時に、日々の遊びもじっくりと取り組めるように繋がった。

【実践事例２　基本的生活習慣を身に付けていくための環境構成の工夫】

【４月子どもの姿】
・衣服の着脱や片付け等保育教諭の手伝いを必要とする子が多い。
・挨拶が身に付いていない子がいる。
・手洗い方法、トイレのスリッパの片付けが身に付いていていない。

【保育教諭の願い】
・脱いだ衣服をたたんで片付けることを身に付けて自分で出来る喜びを味わって欲しい。
・挨拶が習慣づいて挨拶する喜びを味わって欲しい。
・手洗い、トイレのスリッパを並べることが習慣づき、生活の場を整える経験をして欲しい。

【環境構成と援助】
・衣服のたたみ方が、理解出来るようゆっくり提示して関わり、自分でできるようにする。
・保育教諭がお手本になり、挨拶を行う。
・手洗い方法やスリッパの並べ方など分かりやすく掲示し、保育教諭が提示し習慣づけていく。
・楽しく気持ちよく生活できる場を整える。

【変容】
・ゆっくり丁寧にたたむことができる子、保育教諭が見えないと適当にする子もいるが、ほとんどの子が、脱いだ衣服を畳めるようになってきている。
・元気よく挨拶をするようになり、挨拶を忘れている友達がいると「挨拶して～」と伝えるまでになった。
・手を洗うポイントや水の出し過ぎを意識し、トイレのスリッパは並べることで、次の人が気持ちよく使えることを次第に感じる子が増えてきた。

【実践事例３　家庭との連携により、園児の発達向上へ繋げる】

【４月子どもの姿】
・おもらしの多い子がいる。
・食に対して興味が低い子がいる。
・自分の持ち物を（カバン・水筒等）持たず、親に持ってもらう子がいる。

【保育教諭の願い】
・綿パンツへ移行し、お兄ちゃん、お姉ちゃんになったと自信に繋げて欲しい。
・色々な食材へ興味を持てるようになって欲しい。
・自分の持ち物を把握できるようになって欲しい。
・自分のことは、自分でできるようになって欲しい。

【環境構成と援助】
・尿間隔を考慮し、声掛けをする。
・綿パンツの絵を見ながらはけるよう関わる。
・園だよりや登降園時に園児の取り組んでいる様子やクラスの取組み、年齢の発達目安が分かるよう保護者に伝え、家庭でも一貫して取り組めるように関わる。

Ⅳ　実践の振り返り

・今回絵本を環境の１つとして設ける事で、落ち着いて見ることができなかった子が、自ら進んで絵本を見るようになり、絵本のストーリーを遊びへと繋げる姿が見られた。
また、「やってみよう」「こうゆうふうにできたよ」と子ども達が話してきたので、遊び込むきっかけ作りになったと思う。
・視覚的掲示物や声かけを工夫し、やり方を一緒に行う事で出来ることが増え、子ども達の意欲に繋げられた。
・園での子どもの姿を家庭に伝える事で、連携して関わることができ、子どもの成長を伸ばすことへ繋げられたと思う。
・子ども一人一人の発達に寄り添いながら、援助の工夫をこれからも行っていきたい。

v　今後の実践に向けて　【今後の課題】

・絵本を通して制作物、歌、食育などの活動へと総合的に繋げることができたので、今後も引き続き取り組んでいきたい。
・基本的生活習慣では、子ども達の家庭環境も大きく影響していることもあり、指導が届かない面もあった。個別で関わることや、掲示物などを通し分かりやすい環境を作ることで徐々に身に付いてきて、子ども同士教え合う姿も見られてきた。今後も、子ども達の育った背景なども考慮しながら環境を整えていきたい。
・今後は、保育参観などを実施し、ポートフォリオを活かすなど保育の振り返りの時間を充実させ、保育の工夫へと活かしていきたい。
・子ども達が意欲的に活動に取り組むようになるためには、保育教諭が幼児理解に努めながら発達に合った環境構成を工夫することが大切であると再確認できた。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生省　平成 30 年　幼保連携認定こども園教育・保育要領解説
株式会社フレーベル館
・幼保連携型認定こども園教育・保育要領ハンドブック　学研

様式３「課題研究レポート」

「もったいない」の気持ちを育む環境構成や援助の工夫
―保育教諭や友達とともに遊びや活動を通して―

那覇市（立）　城岳こども園　保育教諭　砂川　妃

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節の「環境」の領域に「園児は物に愛着を持つことから、次第にそれを大切にする気持ちが育つため、一つ一つの物に愛着を抱くことができるように援助することが大切である。」とある。保育教諭は、園児が愛着のある玩具を繰り返し使って遊べるように、園児が身近なものを大切にし、無駄なことをしないようにする気持ちを育みながら、またその遊びが十分に楽しめるように環境構成の工夫をすることが重要だと考える。

本学級の実態としては、４歳児（２年保育）男児１４名、女児６名、計２０名が在籍し、全員が新入園児でありほとんどの子が集団生活の経験がある。発達は様々であるが、好きな遊びを通して保育教諭や友達との関わりを深めて楽しむ姿が見られる。一方で、使った玩具の後片付けをしないまま次の活動に移ろうとしたり、作ってもらった折り紙を放置したり上手く作れなかったものを丸めて捨てる等の姿も見られる。この幼児の実態を踏まえ、保育教諭や友達と様々な遊びや経験を通して、「まだ使える」「これを使ってもっと遊びたい」という期待感・愛着を持ち、物を大切にする心を育むためにはどのような環境構成や保育教諭の援助が必要であるかを研究したく、本テーマを設定した。

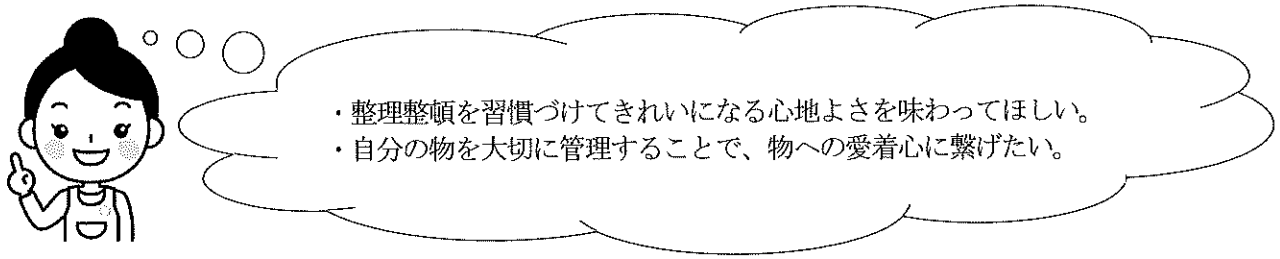
Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 遊びや生活の中で物を繰り返し使う、壊れても直せるものは直す、元の場所に片づける、など子どもたちがすぐにできることの援助や環境構成を見直す。

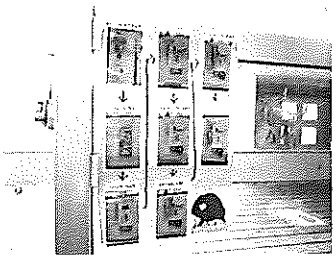
② 一つの玩具から遊びを展開することが出来ると気付けるような工夫を行う

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

≪幼児の姿≫
- 粘土やクレヨンの私物が出しっぱなしや、落し物が多い。また、落ちてる物にも無関心で拾う姿が少ない。
- 個人のロッカーの整理整頓がされていない子の姿が多い。

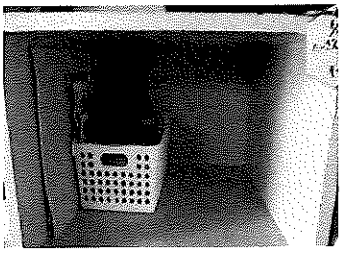


≪環境構成の工夫・保育教諭の援助≫
- 片付け場所や、収納の仕方が分かりやすいように、写真掲示を行い、子ども自身で片付けが行いやすいようにする。
- お道具箱を１日に１回整理整頓する時間を設け、綺麗になる心地良さを味わえるようにする。



お道具箱の整理整頓手順を
示した掲示物

掲示物を見ながら整理整頓をする
子ども



片付いたお道具箱

≪幼児の変容≫
- 写真掲示で片付け場所を明確にすることで、「それそっちじゃないよ、ここに片づけるんだよ」と子ども達同士で声掛けをするようになった。
- 片付け、整理整頓をしながら「きれいにしたら気持ちいいよね」「心もピカピカになるってママが言ってた」等、心地よさを感じながら意欲的に片付ける子の姿が見られるようになった。

≪結果と考察≫

片付けを習慣化していくことで、自分の持ち物の認識が高まる。その為、自分の物、他人の物の区別がはっきりし、自分の持ち物への愛着が持てるようになると考える。写真や絵を使用し、片付けしやすい工夫をすることで、合同保育等で他クラスの子、年少児等もスムーズに行う事ができる為、視覚的掲示が大事だと感じた。

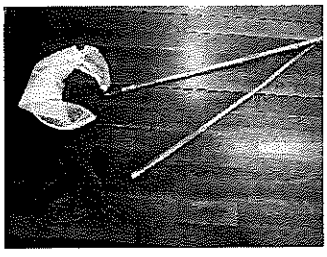
2　実践事例（2）

≪幼児の姿≫
- 製作遊びや粘土遊びで使ったものを片づけないまま次の遊びへ移り、持ち主が分からない製作物が散乱する。
- 失敗した製作物や、折り紙をすぐに破棄してしまう。
- 紙飛行機を飛ばして楽しむも飛ばしたまま回収せずに放置することが多い。

≪保育教諭の願い≫
- 作ったものは、愛着を持って管理しながら楽しんで欲しい。
- それぞれが遊びの続きを楽しめるようになってほしい。

≪環境構成の工夫・保育教諭の援助≫
- 遊びを続けることが出来るように“みてみてコーナー”を設置する。さらにネームプレートを置くことで誰の作品なのかを把握できるようにする。
- 自分のものが分かるように、名前を記入（保育教諭に描いてもらう等）して管理できるよう声掛けをその都度行う。
- 壊れた虫網を使って飛んでくる紙飛行機をキャッチできるようにし、物を再利用する遊び方を知らせていきながら、遊びを展開させる楽しさを味わう。

管理ができずに放置された
紙飛行機



壊れてしまった虫網を
修繕していく

紙飛行機と壊れた虫網を使って
新たな遊び方へ

≪幼児の変容≫
・製作物に名前を記入することで、拾い物として子ども同士で届けられるようになった。
・紙飛行機の形を工夫したり、キャッチしやすいよう考えたり、紙飛行機を放置せず遊びを展開するようになった。
・“みてみてコーナー”を設けることで、次の遊びに移る際に遊びを継続できるようになり、作品を見合えるコーナーにも繋がった。

≪結果と考察≫
物を使って遊ぶことで、体験を通して物への関わり方を知り、楽しく遊べるようになる。遊びの状況を見ながら、保育教諭が何かを作って見せたり、廃品や不要としていたものも活用することで工夫しながら遊びが展開していける援助が大切だと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

・廃品から遊びを作り出したり展開していける物の作り方が広がった
・友達同士で気づき合い声を掛け合う姿が見られ物への関心が高まった

② 課題

子ども達が物を大切にする意識が持てるような物の扱い方、指導の仕方など、子ども・家庭・園全体で共通認識を持って行う。

③ 実践を通した自身の気づき、考え

集団遊びの中で友達との関わりを深めながら、自分の大切な物だけでなく、友達が大切にしている物も大切にしようという気持ちを持てるよう、遊びの状況に合わせた保育教諭の様々な関わりが大切だと気付いた。物に興味を持って繰り返し関わる中で、気づいたり使いこなしていきながら、子ども達も自分で考える力を持つようになると考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

生活の中で、様々なものに触れその性質や仕組みに興味や関心を持てるよう、子どもと一緒に遊びを通して考えていけるようにする。子どもの状況に応じて写真の掲示等環境構成の見直し、工夫を行いながら、子どもや園全体だけでなく家庭も一緒になって物を大切にする心を育んでいきたい。その為に、日頃の子どもの工夫した遊び方や園での取り組み方などを共有していく。

≪主な参考文献≫
内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成30年度『保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

互いのよさを知り、一緒に活動をする楽しさを味わうための援助の工夫

ー園生活の中で自分の思いを伝え、友達の思いに気付く経験を通してー

那覇市認定こども園小禄こども園　保育教諭　大津　美咲

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」第２章・人間関係の内容の取扱い（５）に、集団の生活を通して、園児が人との関わりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、園児が保育教諭等の信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気づけ、自分の気持ちを調整する力が育つようにすることと示されている。園生活において様々な遊びや活動を通して、自分や相手を大切にし言葉を交わしながらお互いを励まし合おうとする気持ちが育つようにする事が大事だと考える。

本学級は、５歳児（２年保育）の男児７名、女児８名、計１５名が在籍し全員が集団生活を経験している。気の合う友達を誘い好きな遊びを見つけて楽しむ姿が見られる一方、気持ちが高揚してくると悪気はないが友達を叩いたり、友達に強い口調で思いを伝えたりするなどの姿が多く見られる。このような実態を踏まえ、園児が互いのよさを知り、認め合うことが出来るようになるためには、どのような援助や環境の工夫が必要か、具体的な方法を考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　自分のよさ、友達のよさを知る環境構成の工夫について

（１）『しあわせのバケツ』『カラーモンスター』等の絵本を活用し、自分の気持ちや友達との関わり方について考えられるようにし、互いのよさを感じられるようにしていく。

（２）朝の会や帰りの会の場にて、行事等で園児が頑張ったことや嬉しかったこと、楽しかったこと等を知らせる機会を設け、園児が皆の前で発表したりする場を作ることで、自信に繋げていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

（実践事例１）　ほし組のしあわせのバケツ

【園児の姿】

・気の合う友達を誘い遊んでいるが、意見の食い違いや気持ちが高揚してくると友達に対してチクチク言葉を使ってしまう。

・友達の出来ていない所に目を向け、強い口調で注意したり、保育教諭に告げに来る子がいる。

【保育教諭の願い】

・ふわふわ言葉で自分の気持ちを伝えられるようになってほしい。

・互いの意見を受け入れながら、遊びをもっと発展させてほしい。

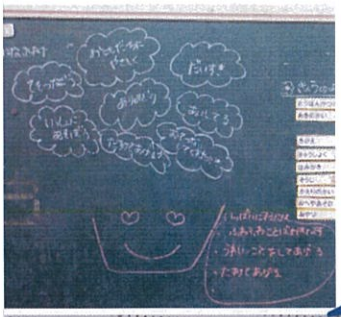
【環境構成（●）や援助の工夫（★）】

●「ほしぐみのしあわせのバケツ」を掲示し、クラスで自由に書いて貼れるようにすることで、しあわせのバケツにハートが増えていく様子を楽しみながら友達のいいところに気付いていけるようにする。

●帰りの会や園行事に向けての話し合いで、友達や保育教諭に言われて嬉しかった言葉ややりたいこと等を発表し、全体で共有しながら認められる場を設け、自信をもてるようにする。

★絵本「しあわせのバケツ」「ちくちくとふわふわ」の読み聞かせを通し、どんな言葉や行動をされたら嬉しい気持ちになるのかを考えられるようにする。

★自分の気持ちを表現することが苦手な子どもも積極的に発表できるような雰囲気を作る。



・○○さんありがとう！
・一緒に遊んでくれてありがとう！
・○○さん、優しいね♪

・ハートがバケツから溢れてきたね♪
・一緒に書こう～～♪
・「優しいね」って書いてくれて嬉しいな😊

・今日楽しかったことは、○○さんとレゴしたことが楽しかったです！
・今日は、お当番を頑張りました！
・誕生会の司会を頑張る事が楽しかったです。

・みんなでジャンケンして決めたらいいんじゃない？
・やりたいものに順番に手をあげるのは？
・ぼくは、くいずをやりたいな～

Ⅳ　実践の振り返り

・しあわせのバケツに興味を持ち、「何色のハートに書く？」「○○さんのいいところ見つけたよ！」と、友達同士で会話を弾ませながら友達のいいところや嬉しかったことを自由に書いていた。また帰りの会では、その日のグループリーダーが嬉しかったことや楽しかったこと等を発表することで、自分の気持ちを受け入れてもらい、認められる経験を通し自信をもって色々な活動に参加できるようになってきたと感じる。

・悪気はなくチクチク言葉を伝えてしまう場面も見られるが、自分で気付き友達に優しい言葉をかけたり友達や保育教諭のお手伝いを意欲的にしようとする姿が多く見られるようになってきている。
・園行事に向けての話し合いを通して、一人ひとりが自分の意見を伝えたり、友達の意見に共感し遊びを進めることが上手になってきたと感じる。大きな行事を友達と協力してやり遂げたことが自信となり、クラスのまとまりもでてきたように感じる。
・様々な経験の中でつまづきや葛藤体験も大切な学びの機会であり、その経験が友達の気持ちに気づいたり、思いやりの気持ちへと繋がっていくのだと考える。子ども達がその子らしく園生活を送れるよう、園児の姿に沿った環境構成や援助の工夫が必要であり、保育教諭の意図した言葉かけや援助、環境構成が園児の成長に大きく影響することを、研究を通して再確認できた。また、研究を進める中で見えてきた「もっと認められたい」という気持ちを他児と比較することで表現する子どもの姿に対して、一人ひとりの姿に応じた内容や方法で援助できるよう、今後も何気ない子どもの言動や思い、姿を丁寧に読み取り幼児理解に努め、ありのままの姿を受け止める姿勢を意識し自己肯定感を高めるようにしたい。

Ⅴ　今後の課題

・個人差もあるため、全員に変容が見られることは難しかった。一人ひとりに合わせた援助配慮や経験、環境作りを行いながら園児の育ちを長期的に捉え、お互いを認め合い、育ちあうクラス作りを引き続き実践していく。また子ども達が生き生き過ごせるような教育・保育を目指したい。

＜主な参考文献＞

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』

認め合い、育ち合いにつながる学級づくりの工夫

幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿の視点を通して

那覇市高良こども園　保育教諭　上地　なつみ

Ⅰ　テーマの設定の理由

近年、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、密を避けるためのソーシャルディスタンスや登園自粛要請等が続き、感染症対策をとりながら子ども同士の関わりの場への最大限の保障のもと、保育を行ってきた。

本学級の幼児実態としては、５歳児（１年保育）男児１４名、女児１２名、計２６名在籍し、全員保育経験があることから、園生活の流れの定着がスムーズであった。賑やかで活発なクラスだが、意見の主張が強い子が多く、相手の話を聞き、良さに気づくことの難しさや、話し合って物事を決めたり、共感や思いやりが求められる場面で課題がみられる。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第２章「人間関係」の内容の取扱い（２）では「園児が集団の中で自信をもって行動できるようになるためには、園児一人一人が集団の中で認められ、そのよさや特徴が生かされる学級集団の在り方を考えることが必要である。」とある。また、（３）では「園児一人一人のよさを生かしながら協同して遊ぶようになるためには、集団の中のコミュニケーションを通じて共通の目的が生まれてくる過程や、園児が試行錯誤しながらも一緒に実現に向かおうとする過程、いざこざなどの葛藤体験を乗り越えていく過程を大切に受け止めていくことが重要である。」とされている。協同的な遊びや活動を取り入れる中で友達との関わりを深め、思いやりをもった関わりができるようになるための学級づくりを行い、課題改善に向けて研究したいと思い、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究内容

１　自分や友達の良いところや得意なことに気づける環境作り

遊びや活動が充実するよう配慮し、一人ひとりが自己の力を発揮できる場を設けて、認め合いができるような援助を行う。

２　友達と遊びや集団活動を楽しむための援助や工夫

一人では得ることのできない経験を集団なら得られるということへの気づきや、目標に向かって取り組む過程を重視した活動の展開を実態に応じて援助していく。

Ⅲ　保育計画

月	研究計画
４月～５月	幼児の実態の把握・課題の検討
６月	研究テーマの検討（テーマ設定理由、研究内容、研究計画の検討含む）
７月～１１月	理論研究・教材研究・保育実践・環境の構成
１２月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取り組み（実践）

【実践事例１】製作活動を通して（７月～１０月）

幼児の実態

・自分の主張はしっかりできる子が多いが、自分本位な発言をしたり、相手の意見や考えを聞くことに課題がみられる子が多い。

・緊張や不安が強く、気の合う子との関わりだけになりがちになってしまい、遊びや関係性がなかなか広がらない子もいる。

実際に行った製作活動

	７月～９月	１０月
遊びの姿	・自分なりの表現を楽しむ子が多い一方、友達と同じ色、絵を描くことで安心する子もいる。 ・共通の遊びを通してイメージを共有し合いながら遊ぶ様子が見られつつある。	・運動会や遠足を経て、子ども達同士の関係性に深まりが見られる。 ・行事を通した経験からクラス一団となることの難しさや楽しさに気づく。
製作 (製作技法/実施方法)	うみの１００かいだてのいえ (折り紙、バブルアート、染め紙、ハンドペインティング、描画/個人、各グループ、全体)	遠足後、思い出の動物の絵を描く (クレヨン描画/３グループに分けて実施)
保育教諭の願い	・気の合う子以外との関わりをもち、他の友達の良いところにも気づいてほしい。 ・自分の作品だけでなく、友達の作品と一緒に並べることで会話が生まれ、イメージから生まれる会話を楽しんでほしい。 ・クラスで連続的に取り組んだ作品作りを通して一体感を味わってほしい。	・楽しかった思い出を振り返り、意見をすり合わせながら自分たちなりに表現してほしい。 ・考えや気づきを言葉で伝え合い、活動が共有されていく満足感を味わってほしい。
＊援助と関わり ★環境構成	★さまざまな種類の貝殻を教室内に展示し、手に取って海へのイメージにつながるようにする。 ＊園庭遊びで楽しんでいる石鹸泡遊びを製作とつなげ、活動が連動するようにはたらきかけを工夫。 ＊クラス会議で意見しやすい雰囲気の中で進め、多様な考えに気づけるように配慮する。 ★海の深さを表現できる長いロール状の模造紙を用意。	＊心配や不安から描き進められず、言い合いになっているグループにはあえて“消しゴム使わない作戦”を取り入れ、保育教諭が肯定的な言葉かけを手本として示す。 ★遠足で見た動物の写真をまとめた“どうぶつずかん”を用意。 ★各グループに模造紙を１枚ずつ用意。 ＊グループのメンバーによって対応の工夫を行う。
幼児の変容	・「泡の色がほんとの海の色みたいだね」「クラゲが手をつないでいるみたい！」等、つなぎ合わせていくことで豊かな発想からの会話が生まれる。⇒【言葉による伝え合い】【豊かな感性と表現】 ・友達の作品を見て認め合ったり褒め合うきっかけとなり、会話が弾むことでそれぞれの自信へとつながる。 ・長いロール状の模造紙を使い切るほど大きな作品ができたことに対し、驚きつつ満足感や充足感を味わうことができた。⇒【協同性】 	・絵を描き進めながら思い出を振り返り、話が盛り上がる姿見られる。 ・「(動物の絵を)大きく描いたから遠くから見ても何の動物かわかるね」と達成感を感じる。 ⇒【自立心】【協同性】【豊かな感性と表現】 ・“消しゴム使わない作戦”を取り入れたグループは、他児の絵を否定する子がいなくなり、子ども達からも肯定的な言葉が出るようになる。 ⇒【言葉による伝え合い】【思考力の芽生え】 ・役割分担を自分たちで行おうとする姿が見られたり、自分の役割を全うするために一生懸命な姿が見られる。 ⇒【協同性】【道徳性・規範意識の芽生え】【自立心】

結果と考察

・夏に園庭遊びで楽しんだ石鹸泡遊びを発展させてバブルアートへとつなげ、それを製作に生かしたため、子ども達の中でも外と中の活動のつながりが生まれ、いろんなかたちで自分たちの手で作り上げている実感を得られていたのではないかと考える。

・個人製作だけでなく、グループ活動として作った作品も取り入れたことで、自分のイメージで表現することが好きな子はよりのびのびとした表現が見られ、逆に絵が苦手な子は安心しながら取り組み、それらを一つの大きな作品へと反映することができ、自己肯定感や充足感へとつながったのではないかと感じる。

・遠足後の振り返り活動としてグループ単位での描画を行ったが、共通の体験を基に動物の絵を描くことで共有できていることへの楽しさや一団とした雰囲気につながった。

【実践事例２】運動遊びを通して（１０月～１２月）

幼児の実態	保育教諭の願い
・運動会のご褒美プレゼントとして縄跳びを貰ったことをきっかけに縄跳びに興味を示し、挑戦する子が増えている。 ・積極的に取り組む子の姿を見てチャレンジする子もいるが、レゴブロックや虫捕りなど、同じ遊びばかり好む子もいて運動遊びに個人差がみられる。	・いろんなことに挑戦する楽しさや意欲の大切さに気づいてほしい。 ・得手不得手に気づく中でさまざまな葛藤を経験しながらも、自分の目標に向かって粘り強く取り組んでほしい。

保育教諭の関わりと援助、環境構成 （＊…関わりと援助／★…環境構成）	幼児の変容
★運動遊びのチャレンジカードを用意。 ★縄跳びを教室の入り口付近に置き場所を設置。取り出しやすいよう牛乳パックに個別に収納。 ★教室前のスペースを活用し、室内でも運動遊びができるよう開放。（図２参照） ＊チャレンジカードに跳べた回数を毎回記録し、回数が増えていることや挑戦し続けていることの視覚化。（図３参照） ＊子どもが挑戦する姿を応援し、跳べた回数をカウントする。回数を数えられるカウンターの使用や１００までの目盛りを紙に書き、到達した回数に印を記入し、目標と現時点の状況を紙に書いて視覚化。（図３参照） ＊全体集会の場にて、出来るようになった運動遊びを披露する“ミニ発表会”を設け、チャレンジカードで達成した種目のミニ表彰式を行う。（図４参照） ＊“チャレンジデー”を週１回設け、園全体で楽しい雰囲気の中、運動遊びに取り組む時間を作る。 ＊保育教諭も子ども達と一緒に挑戦することで、やってみたいと思える雰囲気作りを工夫する。	・興味を示した子から挑戦し始め、その姿に影響を受けた子も挑戦するようになる。⇒【思考力の芽生え】 ・うまくできずに困っている子にコツを教えたり、励まし合う姿が次第に見られるようになる。 ⇒【言葉による伝え合い】【思考力の芽生え】 ・前跳び１００回跳べた子が現れ、その姿にさらに意欲を高めて、その子を目指して挑戦し続ける子、その姿を応援する子が現れる。（図１参照） ⇒【数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚】 ・目標達成できたことの喜びや楽しさを充分に味わい、友達の目標達成も喜ぶ姿が見られる。 ⇒【協同性】 ・できるようになった種目や技が増え、友達と技を考えたり、工夫を凝らして挑戦してみるようになる。（図５参照）⇒【協同性】【思考力の芽生え】 ・１２月の発表会にできるようになった種目を披露。 ⇒一環して【健康な心と体】へとつながる

図１．何度も諦めずに挑戦する子を見守る子たち

図２．「皆で勝負しよう！」

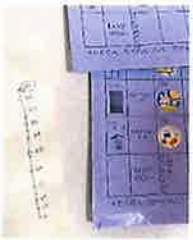


図３．100 までの目盛りとその頑張りを記録したチャレンジカード

図４．表彰式でメダルを授与し、喜びを分かち合う

図５．「二人跳びもできるようになったよー！」

結果と考察

・運動遊びに大半の子が興味を示していたため、自然な流れでチャレンジカードを導入することができた。また、縄跳びだけでなく、フラフープや竹馬、やっとこへとそれぞれが興味を示したものから挑戦し始められたことが苦手意識がある子にもきっかけ作りとして取り組みやすかったのではないかと感じる。
・保育教諭も粘り強く一人ひとりの挑戦する姿に向き合うことで、援助の仕方に工夫を凝らすことができ、できたときの喜びを分かち合う姿がもっとやってみたいという意欲へとつながったと考える。
・チャレンジデーを設けたことで、他クラスの子の姿にも影響を受ける様子や自分なりの目標へとつながったのではないかと感じる。また、一人だけで挑戦するよりも、皆と挑戦しているという雰囲気が楽しく取り組めたのではないかと感じる。
・運動遊びをミニ発表会で披露することを行い、一人ひとりが輝ける場を設けることで少しずつ自信が得られるような配慮が最終的には１２月の発表会での披露、それぞれの成功体験へとつながったのではないかと感じる。

Ⅴ　実践のまとめと考察

テーマを意識した学級作りとなるよう、留意し、一人ひとりが自己発揮できるよう研究当初から意識し、取り組んできた。子ども達の自由な発想や姿に向き合いながらも実態から見えてくる課題解決に向けて、真摯に向き合い、育ちや変化を捉えることに努めてきた。実践事例１の製作活動では、主に言葉のよる伝え合いの育ちにつながる側面が多く、クラスの課題である部分に直結すると思い、経過を追いながら活動として取り入れてきた。その結果、主体的に活動を進めていくことの楽しさや難しさを経験しながら自信を持ってクラスで過ごすようになり、友達同士の関係性にも深まりが見られるようになってきた。実践事例２の運動遊びを通した活動では、それぞれが得手不得手を感じながらもさまざまなかたちで取り組み続ける姿が見られ、やがてクラス全体に広がりが見られた。子ども達一人ひとりの良さを伸ばしていくためにも保育教諭が真摯に向かい合い、一つひとつの育ちに気づくことができると感じた事例であった。集団の中でしか味わうことができない体験を積み重ね、子ども達が互いに育ち合い、認め合う姿がみられるようになってきたと感じる。

今後の課題としては、円滑に活動が連動していくために先を見越した活動の配分やその過程をクラスだけでなく保護者への発信も工夫し、より子ども達の成長を分かち合うことができるように努めたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　2018　『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』　フレーベル社

自ら進んで食べてみようとする気持ちを育むための工夫

―食べる喜びや楽しさ、食べ物への興味関心を持つためには―

社会福祉法人さくら会立神原こども園　教諭　伊波　友菜

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説第２章第４節２(１)「心身の健康に関する領域「健康」の内容(５)に、「保育教諭等や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。」と記されている。園児は、十分に体を動かして遊び、空腹感を感じるからこそ、食べ物を食べたときに、満足感を心と体で味わう。さらに、気持ちが安定し、活力が湧き、積極的にいろいろな活動をするようになる。このような体験を繰り返すことは、園児が、食べることの楽しさや喜びに気付き、充実した生活をつくり出す上で重要と考える。本学級の実態として、３歳児・男児４名、女児４名、４歳児・男児８名、女児１１名、計２７名が在籍している。食事面で、自ら進んで食べず保育者の介助が必要な子、食事中のおしゃべりに夢中になり時間内に食べ終える事ができない子や、少量しか食べれない子などの様々な姿が見られる。

このような実態を踏まえ、自ら進んで食べることや食べ物への興味関心をもつためには、どのような方法が良いかを研究し、本テーマを設定することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　空腹感を感じさせ、積極的にいろいろな活動するための保育の工夫

(1) 体を動かす環境設定や食事の時間の調整を行ってみる。

２　園児一人一人の実態と共通理解

(1) 園内で月１回、開催される給食会議で個々の状態を担任・調理師で共通理解を図り相談する。
(2) 個人面談の中で、給食状況を保護者に伝えると共に、家庭での食に対する関わりについて共通理解を図る。(登園時間が遅い子への家庭の協力など)

３　自分たちで植えた野菜を栽培・収穫し、クッキングをする

(1) ドキュメンテーション・週案等を活用し記録していく。
(2) 食べ物の絵本や紙芝居を通して、食に関する興味や関心を高める。
(3) 園の畑で季節の野菜を育て調理し、食す体験を通し食材に親しむ。(つるなしインゲン・ほうれん草)

Ⅲ　課題解決に向けた取組(実践)

【実践事例 1】「空腹感を実感するために」

《幼児の実態》
・活動や献立によって給食の残食量が見られる。
・戸外遊びでは、友達と様々な遊びの中で体を動かしたりするが、中には思い切り体を動かして遊べていない子も見られる。

《保育教諭の願い》
・十分に体を動かして遊び、食べ物を食べた時の空腹感が味わえるようになってほしい。
・食べる事の楽しさや喜びに気付き、食べ物への興味や関心にもってほしい。

《環境構成の工夫と援助》
・晴れた日は、戸外で思い切り走り回ったり、全身を使って伸び伸びと活動ができるように保育教諭が配慮し、体を動かす楽しさを実感できるようにする。
・活動を十分に行なって、満足し、空腹感を味わえるようにする。
食事の時間を調整して行なう。
・保育教諭や友達と会話を交わしながら、安心して食べられるような雰囲気作りをする。
・厨房前にある食品ボードを見ながら食べ物の名前や三色食品群などに親しみながら食べ物への興味や関心をもてるようにしていく。

《幼児の変容》
・かけっこやマラソン等の運動を取り入れたことで、「お腹空いた」と子ども達から声が上がった。
・友達を誘って鉄棒やサッカー、おにごっこ等の遊びを楽しんでいる姿が見られるようになった。
・「今日の給食なに～」と献立に興味を持ち、三色食品群の表を見て「このおかずに入っているよ」と食に関心を持つ姿が見られ、またおかわりしなかった子も「おかわりしたい！」という子が増えた。

《結果と考察》
・思い切り体を動かしたことで、食事の時間に近づくと「お腹空いた」「早く食べたい」と空腹感を感じられ食に対する意欲が出てきた。
・食に対する意欲が出てきたことにより、自ら積極的に当番活動に取り組もうとする姿が見られた。マラソンやかけっこの練習を行なったことで、体力づくりに繋がった。

【実践事例 2】　「実態と共通理解」

《幼児の実態》
・朝食を食べずに登園する子や生活習慣が崩れて登園が遅れてしまう子の姿が見られる。

《保育教諭の願い》
・健康的な生活リズムを身に付けるようになって欲しい。

《環境構成の工夫と援助》
・完食できる分量に個人差があるため、個別に配膳する量を調節する。
・給食会議を通して、担任と調理師と共通理解を図ったり、子ども達と調理室の様子を見学する機会をもつ。
・家庭での様子を聞いたり、園での様子を伝えたりしながら保護者一人一人と信頼関係を築いていく。
・登園時間が遅れた時は早めに登園するよう園児や保護者に声掛けをする。

《幼児の変容》
・保育者と一緒に食べきれる量を決めたことで、完食する子が増えた。
・朝早く登園することを意識付けられるようになり、「今日〇〇〇さん早く来てたよ」「〇番に来たよ」と会話が聞かれるようになった。

《結果と考察》
・月１回の給食会議で、個々の状態を担任・調理師で共通理解を図り相談したことで、クラスの残食も少なくなった。
・個別の声掛け(個人面談)や、おたよりで発信したことで、園児や保護者も意識付けられるようになった。
・生活リズムを沿いながら、活動と休息、静と動を図ることが出来た。

【実践事例 3】　「自分たちで植えた野菜を育てる」

《幼児の実態》
・野菜嫌いな子が多く、自ら進んで食べようとしない姿が見られる。

《保育教諭の願い》
・菜園活動を通して自分たちで育てた野菜に興味を示し、好き嫌いせずに食べられるようになって欲しい。

《環境構成の工夫と援助》
・絵本や紙芝居の読み聞かせを通して食材に興味・関心が持てるようにしていく。
・植え付けが出来るようスコップやジョウロの使い方を伝え、保育者と一緒に土づくりや種まき、苗植えを行なう。
・水やりや雑草抜きなど、世話をしながら野菜の生長の変化に気付くよう見守る。
・自分たちで育てた野菜を収穫し、クッキングを通して、興味・関心がもてるようにしむけていく。

《幼児の変容》
・種の色や大きさを比べたり、「お菓子のグミやチョコに似ている」等と友達同士で会話をしていた。
・保育教諭が「なぜ葉っぱが食べられるのか？」と子ども達に問いかけたことで、「虫に食べられるから」と声があがり、「カタツムリ取ろう！」「雑草抜こうよ！」と自分たちで気付いて世話する姿が見れた。

・「昨日より大きくなっているね」「もう少しで食べられるかな？」と野菜の生長の変化に気付き、野菜に興味を示す子が増えてきた。
・育てた野菜を収穫し、クッキングすると野菜が苦手な子も食べられるようになり、「自分たちの野菜だから美味しいね」「もっと食べたい！」と言って、食に興味関心を持つようになった。
・「野菜のパーティー」の絵本に興味を持ち、今日のメニューに「野菜のパーティーに出てきた、にんじんが入っているね」など友達同士の中で会話が聞かれるようになった。
・ジョウロの数が足りなく、座って待っている子に気付いて自ら交代して水やりを行なう姿が見られた。また、誰から借りたらいいか分からない子には「誰でもいいよ」と保育者が声掛けをしたことで、進んで友達に「貸して」と言えるようになった。

《結果と考察》
・野菜が苦手な子も菜園活動を通して、自分たちで育てた野菜を全員で完食することが出来た。
・野菜の色や形のおもしろさの知識が身に付いた。
・食べ物に親しみを感じ、興味や関心をもち、自ら苦手な物を進んで食べてみようとすることが出来た。
・「野菜のパーティー」の読み聞かせを通して、生活発表会では一人ひとり野菜の役になりきって表現することが出来た。

Ⅳ　実践の振り返り

1　成果
(1) 運動量が増えたことで、空腹感を感じれるようになり食への興味関心をもち食べる喜びや楽しさを感じられた。
(2) 自分達で菜園活動を体験したことにより、自発的に野菜の世話をし、日々生長する野菜に興味を示し毎日観察しながら、育てることの難しさなども感じ、好き嫌いせず残さず食べようとする意欲に繋げることが出来た。

2　課題
(1) 園児にとっては、家庭での生活リズムが大きく影響するため、保護者に健康的な生活リズムを身に付けることの大切さを伝え、家庭と十分な連携を図りながら家庭での生活の仕方についての理解を促していく必要がある。
(2) 食に関する掲示や環境構成が不十分だった為、子ども達が楽しみながら食べ物を進んで食べられるような環境作りを行う必要がある。

3　実践を通した気づき
(1) 子ども達が思い切り体を動かして遊べるような環境を設定したことで、体を動かす心地よさを味わいながら活動意欲を満足させ、空腹感を感じられるようにすることが大切だと改めて考えた。
(2) 菜園活動を通して、野菜の成長の変化にも気付きながら友達同士で率先して世話していた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

(1) 園児の活動への取組を見極めつつ、必要に応じて園児が取り組んでみたいと思えるような意欲を喚起する環境を構成していく。
(2) 今後も園児の生活リズムを把握し、遊ぶ時間や食事の時間などにきめ細かな指導を行なう。
(3) 育てた野菜について子ども達が興味関心を引き出すような工夫を凝らした環境構成を行なっていく。
(4) ドキュメンテーションの掲示やICTソフトを活用したおたよりなど、保護者への情報発信の仕方を工夫することで園児の様子を伝え、情報を共有していく。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　株式会社フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

互いに認め合いながら、自分の感情と相手の気持ちに気づく
―友だちと関わり合いながら育む―

南城市　あおぞらこども園　教諭　氏名　西里　菜々子

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章、人間関係の領域に「他の人々と親しみ、支えあって生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」とある。また、「園児は、園生活において多くのほかの園児や保育教諭等と触れ合う中で、自分の感情や意志を表現しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わい、ときには園児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通してお互いに理解し合う体験を重ねながらかかわりを深め、共感や思いやりなどを持つようになる」とある。このことから、子ども同士を含め人とかかわることは大切だと考える。

本学級の実態として４歳児の男児 13 名、女児８名の計 21 名のクラスである。作年度に続き、クラス全員が持ち上がりで長い子で４年保育、短い子で３歳児からの入園で１年保育である。全員が集団生活の経験があり、担任も０歳児から持ち上がりで生活の流れも身につき、のびのびと過ごしている姿がある。今まで、一人遊びが中心だった園児が、自ら仲間の輪に入る姿も見られ友だちとかかわる事が多くなっている一方で、自分の思いが大きく、互いに自分の思いを一方的に伝えている事から、いざこざになる事が多い。また、子ども同士で話し合いをせず、大人に助けを求める事が多い。このように、集団生活である園生活の中で様々な経験やかかわりを通して、自分の感情と共に相手の気持ちに気づき、互いに認め合って育ってほしいという思いから、本テーマを設定した。

Ⅱ　研修内容

１　自分の感情や意志を表現しながら、相手の気持ちに気づけるような援助

子ども一人ひとりに寄り添いながら、気持ちを受け止め共感できる環境を作る。上手く言葉にできない子どもの思いを代弁し言語化していく。

２　仲間と共に活動する中で楽しさや協力していくことを味わう環境作り

友だちと共にあそびや活動をする中で互いに認め合い充実感を味わえるよう関わる。

Ⅲ　保育計画

月	研　究　計　画
４月～５月	幼児の実態把握・課題の検討
６月	研究テーマの検討（テーマの設定理由、研究内容、研究計画の検討を含む）
７月～11 月	理論研究・保育実践
（９月）	（中間検討）
12 月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取り組み（実践）

実践事例（1）「リレーを通して、仲間と楽しむ」

《幼児の姿》
・今まで一人遊びが中心だった子も、仲間を意識するようになりかかわりが増えたことで自分の思いをうまく言葉で表現できなかったり、自分の思いが一方的になってしまいトラブルになる事が多くなった。
・子ども達との間でのいざこざですぐ大人に助けを求めることが多い。
・リレーの途中転んでしまいすぐ立ち上がれず暫く泣く子や、走る事が苦手な子に対して怒る子がいて、仲間と取り組む姿があまり見られない。

《保育教諭の願い》
・安心できる雰囲気で友だちと共に生活し、自分の感情をコントロールしながら、相手の気持ちにも気づいてほしい。
・ルールを守りながら友だちと遊ぶ楽しさを感じてほしい。
・うんどう会の種目であるリレーを通して、友だちと仲間にバトンを繋ぐ、転んでもすぐに立って走る事を目標にし、一つの目標として仲間と取り組んでほしい。

《保育士の関わりと援助》
・リレーで、折り返し地点に大人がついて『大人にタッチをして折り返す』と視覚的にわかりやすくすることや、バトンを用意する
・他園（あおぞら第２こども園）と対決する事で『仲間と共に』という意識を持てるようにする。
・足の速い年長さんにあこがれている子ども達へ「どのようにしたら早くなれるか聞いてみよう」と提案し子ども同士で「速く走るには〇〇するって」と会話に繋げていく。
・走る事が苦手な子が楽しんで行えるように、リレーだけでなく、おにごっこ、助けオニなどの集団遊びも取り入れていく。
・走る事が苦手な子に対して「〇〇のせいで負けたんだよ」という子に、リレーを通しての負けたくない気持ちを認めつつ、リレーは一人ひとりみんなの力が大切であることなどを伝えていく。

《幼児の変容》
・これまでの様々な経験を通して、子ども一人ひとりが一つの目標に対して「みんなで頑張ろうね！」などと声も上がるようになった。
・初め途中で転んでしまうとすぐに立ち上がれずリレーが終わるまで泣いていた子が、最後まで諦めずに走り切れるようになった。
・体全体を使って遊ぶ事で体の発達にも繋がり、走る事が早くなったり好きになったり、転ぶことが少なくなることで、自己肯定感を高める事にも繋がった。
・走る事が苦手な子に対して怒るのではなく、「〇〇もいっぱいの本気で走る！」と得意な子も最初で、２周差ひらいていても諦めない気持ちが育った。
・仲間意識がつき、作戦会議などを子どもたちで行う姿が見られた。

《結果と考察》
・クラス対抗で競争することで、友だちと力を合わせて目標に向かって競う中で自分の役割を知り、ルールを守りながら遊ぶことの大切さを学べて行くと感じた。
・活動を通して他児との関わり方を学んだり、協調性を育む。
・子ども達の間で問題解決をしようと取り組む姿や一人ひとりの成長にもつながった。

実践事例（2）「仲間と共に協力し一つの物を作る（大型スコップを使っての山づくり）」

《幼児の姿》
・一人遊びが中心だった子が友だちの輪に入って遊ぶ姿も多くなっている中、一人遊びがほとんどの子も数名いて、友だちと一緒に何かをする機会が少ない。

《保育教諭の願い》
・仲間と共に協力をしあって何かを作るという体験を通し、子ども達同士で意見を出し合ったり、話し合いをして問題解決を出来るようになってほしい。

《保育教諭の関わりと援助》
・表現活動で行った、「三枚のお札」で取り組んだ物語の中にも出てくるおばばが越えられないような山を作ろうと子どもたちと決めて取り組む。
・大型スコップを使って行うため、草履をはいて行い、使い方を改めて伝えて安全に気を付けて行う。
・「大きくするにはどうしたらいいのか」「やまが高くなって来た時どのように砂をかけるのか」「途中で終わって明日また行うときにそのまま残しておくにはどうしたらいいのか」など問いかけ子どもたち同士で考えられる機会を与える。

《幼児の変容》
・最初は 5 人から始まった山づくりだが、だんだんと「やりたい」と集まり 10 名で協力する姿が見られた。
・一人あそびが多い子も最初は隣に自分一人で作れる小さな山を作っていたが、自ら「いれて」と伝え、友だち共に自分の役割を見つけながら楽しむ姿が見られた。
・子ども達同士で「こうしてやろう！」と相談して行う姿が見られた。
《結果と考察》
・子どもたちで何かを作り上げるという体験の過程として子どもたちで話し合う機会も多くあり日々の生活でも「〇〇はこうしたいんだけどいい？」などの会話も出てくるようになり、様々な面で成長が見られた。
・砂を変化させて遊ぶ事により、手指や腕でスコップやシャベルなどの道具を使い、身体感覚をコントロールできる能力が育っていく。
・乳児期で土、水、泥などの自然素材を使い遊んできたからこそ、砂を水で固めながら山を作る、タイヤを重ねて高くしていくなど応用もできるようになっていく。

Ⅴ　実践のまとめと考察

(1)　友達とのかかわりが増えていく中で、うまく伝えきれずトラブルになったり、感情をコントロールできずに仲間の中から外れていってしまう子もいたが、関わりが増えたからこそのトラブルはチャンスと考える。

(2)　集団生活であそび、仲間の力を借りながら成長をする子どもたちの姿が見られ、大人がすべて指示を出すのではなく、集団遊びで友達と楽しむ経験をしたり、友達同士で意見を出し合い何か１つの物をつくることでやり遂げたという達成感を味わう中で子どもたちは仲間の中で育ち、成長をしていくと感じた。

(3)　全身を使って遊ぶ中で体の運動機能も発達すると共に、心の発達にも繋がっており気持ちの切り替えやコントロールすることができるようになったことにも繋がりがあったと考える。

(4)　『相手の気持ちに気づく』という土台は、まずその子自身の気持ちに共感し『受け止めてもらえた』という経験を通して、安心して自分を発揮できる場所が必要となる。

○今後の課題

(1)「保育教諭―子ども」の関係から、「子ども一子ども」の関係をどのように作っていくのかも重要となっていく４歳児。その出発点としてどの子も大切な仲間でありその仲間に認められ、その集団の中で安心感を持って楽しい生活を過ごせるような仲間づくり、集団作りを行っていきたい。

(2)　子どもたち一人ひとりに個性があるように、クラスの子どもの人数×保育者の関わりがあり、保育教諭や友だちも人的環境の１つであることを忘れず大切にしていく。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 27 年　『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』株式会社フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

自然や人との豊かな関わりを通し、主体的に遊びこむ幼児の育成
―心動かされる体験を通して言葉で伝え合う喜びを味わえるようになるための援助の工夫―

南城市　玉城こども園　保育教諭　氏名　金城　早希

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、地域社会において子どもが育つ環境が変化している。少子化、核家族化が進行し、子ども同士が集団で遊びに熱中し、時には葛藤しながら、互いに影響し合って活動する機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われている。また、情報化の進展によって子どもの生活空間の中に自然や広場などといった遊び場が少なくなる一方で、テレビゲームやインターネット等の室内遊びが増えるなど、偏った体験を余儀なくされている。（文部科学省）幼保連携型認定こども園教育・保育要領第２章「人間関係」の領域の中では「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」と述べられている。また「言葉」の領域では「言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意思などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、園児が保育教諭等やほかの園児と関わることにより心を動かされるような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。」と述べられている。

本学級の幼児の実態としては、５歳児（３年保育）男児１４名、女児１２名、計２６名（途中入退園児がいた為、現時点では２５名）在籍し、男女ともに好奇心旺盛で活発な子が多い反面、発達・生活面で幼い様子の子も多い。活動時には少し遊ぶと満足して他の遊びに興味が移ってしまったり、自分の思いが通らないとすぐに喧嘩になって言葉よりも先に手が出てしまう姿も見られる。

そこで、幼児の主体性を保証できる環境を整えていきながら、互いに意見を出し合い、思いを伝え、協力しやすい環境づくりや援助の工夫を行うことにより、それぞれの思いや考えに気付き、伝え合い、よりよい関係を築くことが出来ると考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　園児一人ひとりの実態や発達を把握する

・保育記録やドキュメンテーションを通して、園児の実態を把握し園児理解を図る。

②　主体的・対話的で深い学びの充実

・自発的な遊びの中で幼児一人ひとりの興味・関心に寄り添い、友だち同士が言葉でつながり、気づき、伝え合うことで、言葉を交わす喜びを味わえるような援助を行う。

③　人と関わる力の基礎の育ち

・遊びや思いを共有し、人と関わる力を育むことが出来るような環境構成と援助の工夫について

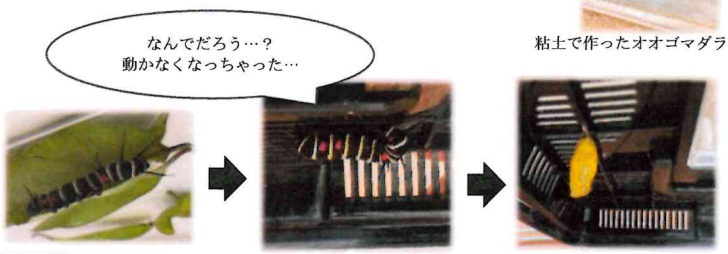
Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例（１）「オオゴマダラってどうなるの？」

《 幼児の実態 》
・園庭で虫捕りを楽しむが、捕まえたことに満足して飼育ケースに入れたまま放置してしまい、次に飼育ケースを使おうとした時に死んでいることに気づくことが多い。
・虫や飼育物に対しての興味関心が薄く、関わろうとせず遠くから見ている子も多い。
・虫捕り網や虫かごを自分で持ちたいと相手に言葉で伝えることが出来ず、取り合いになり喧嘩になる姿が多く見られる。

《 発達・内面理解の読み取り 》
・虫を捕まえることばかりに集中してしまい、その後のことまでは考えきれてない(気にしていない)のかな。“命”という概念がまだ子ども達にとって理解が難しいのかな。
・身近にある自然物や虫と触れ合う機会が少なくなっていることもあり、自然物に対しての興味関心の薄さや昆虫に対しての苦手意識に繋がっているのかな。
・自分の気持ちが相手に言葉で上手に伝えることが出来ず、自分の気持ちを理解してくれないことに対しての不満や怒りなどの感情が先に出てしまい、喧嘩になってしまうのかな。

《 保育者の思い・願い 》
・園児が自然物や昆虫などとの触れ合いを通して興味関心を持ち、観察することで捕まえた虫にも愛着をもって接してほしい。そしてお世話することで生命の尊さや不思議、お世話をする大切さや楽しさや虫の生態、食草、飼育方法などにも興味をもってほしい。
・自分の思いを相手に言葉で伝え、相手の言葉も聞くことで、自分や相手にも思っていることや気持ちがあることに気づき、言葉でのやりとりを楽しんでほしい。

	幼児の姿（○）・変容（◎）	環境構成（◆）・保育教諭の関わりと援助（☆）
4月後半月～7月「虫捕り楽しいね」	○戸外での虫捕り（バッタや蝶、カバマダラ、セミなど）を楽しんでいる。 ○虫を捕まえるがお世話をすることなく、虫が死んでしまっていても気にしていない様子が見られる。 ◎７月頃より数名の子が虫の入った虫かごに葉っぱを入れたり、お世話しようとする姿が見られ始める。 （しかしその虫が食べる食草ではないことが多く、虫が死んでしまう。）	◆戸外での虫捕りが盛んになってきたので、虫捕り網や虫かごを準備し、教室内に生き物コーナーを作る。 ☆園児が自然物や動植物に触れて遊ぶ中で感じたことや喜び、感動したことなどの気持ちや思い、言葉を受け止め、一緒に共感することで興味や関心を深めていけるような声掛けを行う。 ◆（５月）自分達で調べたり、観察出来るよう生き物コーナーに図鑑や虫眼鏡を準備する。 ☆動植物のお世話を一緒に行うことで、親しみを持ち、生命の尊さや大切さに気づいていけるよう工夫する。
8月～9月「オオゴマダラを育ててみよう」	○職員よりオオゴマダラの幼虫を貰い、初めて見る幼虫に触ってみたり遠くから観察している。 ◎自分達で食草である蓬莱カガミの葉を集めお世話するようになる。 ○幼虫を触れ合いの中で執拗に構ってしまったことで死なせてしまう。 ◎幼虫が死んでしまったことで、子ども達の中から「触りすぎると死んじゃうから見ているだけにしようよ」「優しく触ったら？」「死んじゃったら可哀そうだよ」と幼虫を気に掛ける様子が見られ始めた。 ○数週間後、幼虫が虫かごの天井にくっつき動かなくなったことに不思議そうにしている様子が見られる。 ○数日後、幼虫が蛹になっていることに気づいた子がみんなに知らせる。	☆オオゴマダラの幼虫の食草などを一緒に図鑑で調べたり、虫眼鏡で観察することで道具の使い方など実践を通して再確認する。 ◆高い所にある蓬莱カガミの葉を子ども達が自分で取れるように踏み台を用意した。 ☆幼虫の触り方や触る時の注意点などみんなで話し合い、クラスの中で共通理解していけるように工夫した。 粘土で作ったオオゴマダラ 

<table>
<tr>
<td>「オオゴマダラを育ててみよう」
8月～9月</td>
<td>◎最初は遠くから眺めていた子も黄色になった蛹に興味を示し、近くから観察するようになる。
◎蛹の色が「黄色」から「金色」、そして「黒色」になった変化に子どもたち同士で話し合う姿が見られた。
◎蛹が羽化した際、蝶が飛ばないことを不思議がり、羽化した蝶の羽が濡れていることから飛べないことに気づく子が出てきた。
○しばらく虫かごの中で観察した後、羽が乾くようにと日向に移動する。
◎その後、様々な虫を捕まえては観察し、図鑑で調べ、育てるようになる。</td>
<td>◆子ども達から出た意見や言葉、驚きや喜んでいる様子などをドキュメンテーションにまとめクラスに掲示した。
☆子ども達が意見を出し合い、話し合えるように日々の帰りの会の時間に発表の時間を設けた。そのことにより様々な発見や気づきを共有することが出来た。

</td>
</tr>
<tr>
<td>「オオゴマダラの生長を表現しよう」
10.月～12.月</td>
<td>○運動会で表現遊びとしてオオゴマダラの生長を発表することになり、グループ同士で話し合う。
◎友だち同士で試行錯誤しながら様々な素材や用具などを使って、オオゴマダラを表現する姿が見られた。
◎みんなの前で発表することが苦手だった子も、運動会の時に大きな声で発表することが出来た。</td>
<td>◆様々な素材や廃材などを子ども達の意見を聞きながら一緒に準備した。

子ども達同士で意見を出し合い、蛹や蝶の羽の色や模様、形などを試行錯誤、素材を工夫して作っている。

</td>
</tr>
</table>

《 結果と考察 》

Ⅳ　実践の振り返り

【実践事例１　「オオゴマダラってどうなるの？」】

① ・入園進級当初は虫を捕まえて満足していた子ども達だったが、オオゴマダラの飼育の経験を通して飼育する為に必要な知識（昆虫や食草の名前、飼育方法）を自分で調べようとする姿や身の回りにある自然に対しての好奇心や探求心、生命の尊さや大切さなどを学ぶことが出来た。
・初めは一方的な関わりで自分の思いが通らないとすぐに喧嘩になっていた子ども達も、お互いの意見や思いを伝え合い話し合うことや相手に自分の思いを受け止めてもらう喜びなどの経験を通じて、言葉でのやりとりが出来るようになったと考える。

② ・自然や人との関わりの中で、子ども達の気付きや発見、活動中の葛藤や言葉でのやりとりに対して的確な援助や環境構成等が不十分であったと考える。日々の子ども達の姿から幼児理解を深めると共に、子どもの思いや言葉に対して丁寧に耳を傾けていく。そして次の興味関心、意欲に繋がるよう環境構成等も意識して工夫していけるようにしていきたい。

③ ・今回の実践研究を通して、身近な自然環境での一人ひとりの気づきや発見をクラス内で発表したり、ドキュメンテーションとして掲示することにより遊びや活動を共有することが出来、クラス全体で自然環境への関わりや飼育活動に対しての学び、理解が深まったように感じた。そして遊びや活動を通しての人との関わりの中で自分の思いを相手に受け止めてもらえる喜び、相手の思いにも耳を傾ける大切さを知ることで子ども達同士の言葉のやりとりが増えてきた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいことなどを書いてください

・園児理解を深めると共に遊びや活動の中で出た子ども達の興味関心、言葉に丁寧に向き合いながら、子ども達自身が言葉でのやりとりを楽しめるような取り組みを増やしていく。そして、子ども達が主体的に遊びや活動を広げていけるような援助や環境の構成を工夫していきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成 30 年 3 月『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』
令和 2 年 6 月　「語り合い」で保育が変わる　子ども主体の保育をデザインする研修事例集
令和 2 年 3 月　4・5 歳児クラス編 遊びを広げて学びに変える 思いをつなぐ保育の環境構成

幼児が遊びこむための環境構成と援助の工夫
—遊びこめる環境づくりと援助を通して—

南城市　知念こども園　教諭　當眞　真依子

Ⅰ　テーマ設定の理由

本学級の実態として、男児10名、女児10名、計20名の好奇心旺盛で元気いっぱいの4歳児クラスである。活発で好奇心旺盛の子が多く、自由遊びの時でもほぼ全員が外遊びを選んで走り回る姿がある。

しかし、新しい環境になり興味・関心が広がり遊びが定まらず、遊びこめなかったり、次々に遊びが変わるので片付けもされてないことが多い。また、自分の思いがなかなか伝えられない子や自分の思いが通らないとすぐ手を出てしまう子、自信がない子などの姿がある。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』に、「興味や関心から発した直接的で具体的な体験は、幼児が発達する上で豊かな栄養となり、幼児はそこから自分の生きる世界や環境について多くのことを学び、様々な学ぶ力を獲得していく。」とあり、「幼児が興味や関心をもち、思わず、関わりたくなるような物や人、事柄があり、更に興味や関心が深まり意欲が引き出され、意味のある体験をすることができるように適切に構成された環境の下で、幼児の主体的な活動が生じる。」と記されている。そのことから保育教諭は、幼児の興味や関心のあることを捉え、幼児が自己発揮しながら、遊びに夢中になり、自ら考え、失敗しながらも友達と一緒に遊びこめる環境づくりと援助の工夫を考えていきたいと思い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　体験したこと言葉にしたくなるような環境構成や援助の工夫

・身近な環境から発見したことなどを発表する場を設け、クラスみんなで気持ちや思いを共感できるような工夫を行う。また、遊びの相談ができるような場を設ける。

・遊びの続きができるよう、子どものつぶやきに耳を傾けたり、子どもの姿に合わせた援助や「楽しそう！」「やってみたい！」など興味や関心がもてるような援助の工夫を考える

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【エピソード１】

＜幼児の実態＞

・個々の遊びや単発的な遊びが多く、活動がなかなか継続、展開できていない様子が見られる。

・オオゴマダラ飼育をきっかけに興味、関心が広がり、園庭のあらゆる場所を観察して楽しむ姿が見られるようになった。ある日、数名の園児がシークヮーサーの木の上にある鳥の巣を発見。クラスのみんなで鳥の巣の事について考えるようになった。

＜保育教諭の願い＞

・幼児理解を行うことで、幼児が夢中になって遊び込める姿へと繋げていきたい

・身近な自然の豊かさを友達と一緒に肌で感じながら楽しんでほしい。

・身近な動植物への興味、関心を広げ、生命の不思議さや尊さを感じてほしい。

＜環境構成＞

・こども達同士で、知っていることや、意見や考えが伝え合えるような話しやすい雰囲気をつくっていく。

・こども達のつぶやきや考えをクラスの友達と共有する機会をつくり、遊びの展開や友達の関係が深まっていくようにする。

＜保育教諭の援助＞

・こども達の考えを大切にしながら、遊びの展開は広がっていくように一緒に考えたり、一人一人の思いや気づきを大切にしていく。

・保育の振り返りで共有しながら、遊びがさらに面白くなって、あそびの発展へのきっかけにつなげていく。

木の上に鳥の巣があるんだよ！！

盾と剣を作ってカラスから守る。

折り紙で鳥を作ってわからなくしよう。

～みんなでカラスからひなを守ろう～

シークヮーサーの木に鳥の巣がある事知ったA君とB君。帰りのお集まりで他のお友だちに教える姿が。

A「シークヮーサーの木に鳥の巣があったよ」

教諭「あったね。でもこの前、ひながカラスに食べられそうになったの見たから心配だな」

C「カラスに食べないでって言ったらいいんじゃない？」

D「でもカラスと目が合ったら仕返しされるよ。」

教諭「じゃあみんな少し考えてみてね。」

次の日みんなで木を実際に見に行き、みんなで作戦会議をすることに。話し合いをするうちにカラスからひなを守ろうということになり、いろんなアイディアがでた。

《結果と考察》

・帰りのお集りの時に一日の振り返りをすることで、他児がどんな遊びしているかや考えなどを知り、「自分もやってみたい！」「明日やってみよう！」につながり、子どもたちの興味に繋げられた。

・クラスで共有することで「カラスからひなを守ろう」という共通の目的をもつことにつながった。

・友達と一緒に意見や考えを出し合いながら、自分達の知識、経験を行動につなげようとしている。

・次の日、「カラスのひなを守ろう」という共通の目的に向かってどうするか？を考え始めた子ども達。いろいろな考がでて次の行動に↓

【エピソード２】

〈幼児の実態〉

・普段、なかなか自分の意見を言わない子も、自分の持っている知識などを発表する姿があり、興味を示しているのが分かる。また、こうしたい！ああしたい！と考えがあるようで続きを考える姿があった。

・クラス全体で共有することにより、クラス全体にまとまりが出てきて、他の活動にもいい影響が出ていた。

〈保育教諭の願い〉

・自分たちで考えたり、作ったりしたもので遊ぶ楽しさを十分味わってほしい。

・友達と一緒に遊びを進めたり、広げたりする楽しさを知ってほしい。

〈環境構成〉

・子どもたちからでた意見を受け止め、子どもたちのアイデアを引き出していく。

～みんなで材料探しにいこう～

A「巣を守る家をつくろう」　B「巣に石をつけたら、カラスがぶつかって痛いっていって逃げるんじゃん」

C「鳥の巣って木と葉っぱでできていたからそれもくっつけよう」　教諭「じゃあどうしようか？」

D「散歩にいって木や葉っぱ、石を探しにいこう」　全員「いいねー。エイエイオー」

※その後散歩に行き、材料を集めカラスからひなを守るグッズが完成！

《結果と考察》

・散歩で楽しみながら身近にある自然の豊かさを友達と一緒に感じている。普段は気づかない発見をする事で、自然への興味、関心が広がっている

【エピソード３】

〈幼児の実態〉

・自分の思いが通らないと不貞腐れたり、泣いて思いを通そうとする姿がある。

・製作が苦手な子が他人任せにしてしまい、トラブルに発展することがある。

〈保育教諭の願い〉

・相手にも気持ちがあることを知り、相手の思っていることにも気づいてほしい

・自分の良さに気づいたり周りから認められることで自信を持ち、様々な活動に自信を持ってほしい

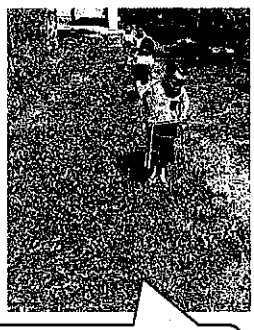
～木が高すぎて届かない！みんなで力を合わせよう～

A「高い場所につけたいけど届かない」　B「フェンスに登ればいいじゃん。でもやりにくい」

C「俺の背中に乗って。あ！ダメだ！届かない」　D「いいこと考えた。イス取ってこよう。でも届かない」

E「みんなで部屋にある大きいテーブル取ってこよう」　F「やばい！カラスが飛んでいる」

G、H. I「大丈夫！みずかけてから退治しとくから」　全員「ヤッター！うまく取りつけることができたぞー」



次の日、登園してきたこども達が「ひなどうなったかな？」「カラスに食べられてないかな？」と心配していた。さっそく木を見にいくことに・・・作戦成功？作戦失敗？

《結果と考察》

・高さのある木への仕掛けの取り付けををどうすればいいかと、友達同士で試行錯誤しながら協力し合い、状況に応じた役割分担もしながら、命ある物を大切にし、守ろうとしている姿があった。一つの遊びから、いろんな学びに繋がっているのを感じる。

〈エピソード４〉

〈幼児の実態〉

・いろんな意見が飛び交うが、子ども達同士で相手の気持ちを受け入れようとする姿がある。

・今まであまり関わりのなかった子同士が、協力して取り組む姿がある。

〈保育教諭の願い〉

・友達とイメージを共有し、お互いの思いや考えを聞いたり伝えたり、相談しながら遊びや活動を進める楽しさを味わってほしい。

～こども達の本当の気持ち～

A「しかけがこわれてるー！！」　B「作戦失敗だ！」

C「何で失敗なの？」　B「だって壊れてるのに」

A「壊れるってことはカラスがぶつかって壊れたんだよ」　B「じゃあ作戦成功だ」

A「でも、カラスがぶつかって壊れたってことはカラス怪我して血が出てるかも」

D「ひなは幸せになれたけど、カラスは幸せになれてない・・カラスも幸せになってほしい」

教諭「そっかー。じゃあどうする？」

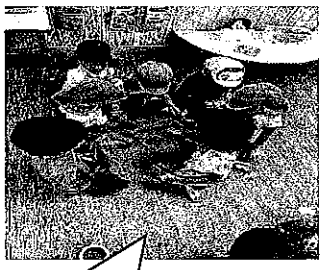
A「カラスに傷テープ貼ってあげたい」

D「でもカラスに貼る、傷テープってないさ」　A「・・・じゃあ作ろう！」

E「カラスのベッドもつくろう！」　F「カラスに塗る、薬もつくろう！」

※カラスのために傷テープやベッド、薬を作る事になりました。

傷テープこれぐらいの大きさかな？



葉っぱをいっぱい入れてふわふわベッドにしよう

薬は色がついてたほうが効くので花で色をつけました

《結果と考察》・

みんなで考えた作戦成功を喜び合いながらも、カラスにも命があるという事に気づき、みんなで考え合いながら命ある物を大切にしようとしている。

Ⅳ　実践の振り返り

・同じ共通の目的に向かいながら、試行錯誤したり、友達と協力し合いながら楽しむ事で相手の思いに気づいたり、新しいアイディアの共有したり、思いをお互いにだしあう経験につながった。

・こども達の言葉を大切にしながら、それぞれの思いを認め、繋げていった事で「もっとやりたい」の気持ちになり、主体的で豊かな遊びに繋げることができた。

・ひとりの発見が友達の中で広がり、共に喜び合ったり、驚きあったり楽しむ仲間がいることで、こども達はさらに環境に働きかけるようになり、探究心が深まっていると感じた。

・子ども一人一人の声に耳を傾け、幼児理解を深めたり、お集りの時に一日の振り返りを発表していくことで、「おもしろそう！」「自分もやってみたい！」に繋がり、子どもたちが主体的に遊びこむのかなと感じた。

○課題

・幼児の遊びが長期的に展開・発展していくように保育教諭が常日頃から幼児理解を深め、援助や環境構成など工夫していかないといけないなと感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・ドキュメンテーションの活用の仕方を工夫していき、子ども同士や家庭での会話につながり、翌日への期待感や遊びの続きへとつながっていけるようにしていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成30年度幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　株式会社フレーベル館

気持ちを伝えることができる子を育むための援助の工夫
―友達や保育教諭との関わり・遊びを通して―

南城市　知念こども園　教諭　氏名　宮平　希

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』に、自分の気持ちや思いを伝え、保育教諭等や友達が話を聞いてくれる中で、言葉のやり取りの楽しさを感じ、そのやり取りを通して相手の話を聞いて理解したり共感したりするようになっていくと記されている。また、第２章「言葉」の領域に「言葉を使って表現する意欲や、相手の言葉を聞こうとする態度を育てることが大切である」と記されている。

本学級は、３歳児(３年保育)、男児８名、女児８名、計１６名が在籍している。集団保育を経験している子がほとんどで、話すことは上手だが、嫌なことがあったり、友達とトラブルになると、すぐに泣く、相手をたたく、黙り込むなどの姿が見られ、気持ちを言葉で伝えることが苦手な子が多いと感じている。

そこで、幼児のこのような実態を踏まえ、保育教諭の援助の工夫や友達との関わりや遊びの中で、自分の気持ちを伝えたいと思うようになり、気持ちを言葉にすることができるようになるのではないかと考え、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 気持ちを言葉で伝えることができるようになる援助の工夫

気持ちを上手く言葉にすることができず、手が出たりしてしまう時は、表現の仕方を丁寧に伝えていく。

② 自分の気持ちを伝えたくなるような援助の工夫

言葉のやり取りをする時は、幼児一人ひとりと目線を合わせ、思いに耳を傾け、受け止め共感していくなどの援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１～おままごと遊び(S児の育ちを通して)～】

≪園児の姿≫

・自分の思いを言葉にすることが苦手

・友達が使用している玩具を、触ったり取ったりしてしまい、トラブルになる。

・嫌なことがあると、気持ちの消化が上手くできず、玩具を投げる、高いところにのぼる、近くの友達に手を出す、部屋から出ようとするなどの行動をしてしまう。

・友達と一緒に遊ぶことは大好き。

≪保育教諭の願い≫

・大好きなおままごと遊びの中で、友達と仲良く遊ぶ経験をたくさんしてほしい。

・自分の思いを言葉で伝えることができるようになってほしい。

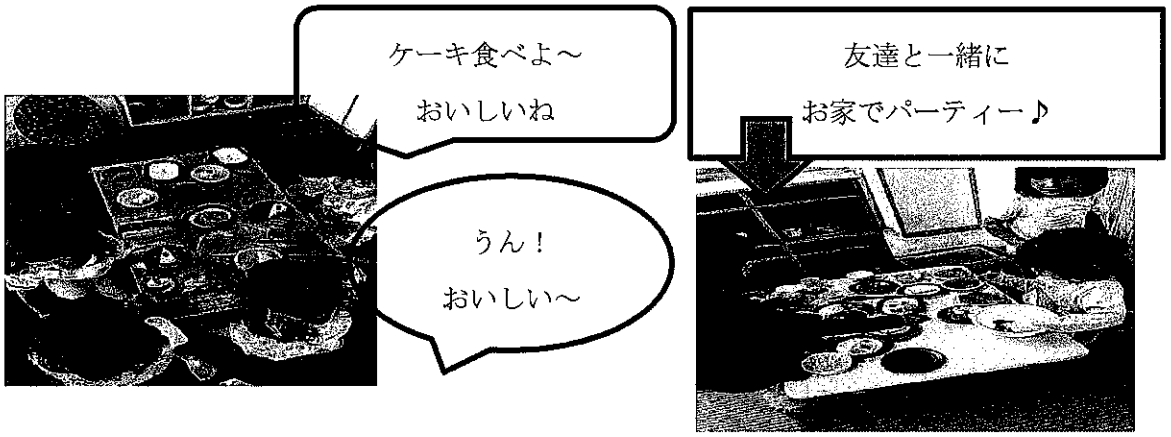
≪保育教諭の関わりと援助≫

・S児が楽しく友達と遊ぶことができるよう、一緒に遊びを楽しみすぐに対応できるようにしていく。

・自分の気持ちが上手く言葉にできない時は、表現方法を丁寧に伝えていく。

☆エピソード

・友達がおままごと遊びをしているところに入っていくS児。友達に「仲間に入れてって言わないとダメ」と言われたことに怒り、近くにあった玩具を投げようとしたので「一緒に遊びたいんだよね、仲間に入れてってお話したらいいんだよ」と側で伝えると「仲間に入れて！」と言うことができた。「お話できたね、それでいいんだよ」と褒めると、嬉しそうな表情を見せた。その後は、友達と仲良く遊ぶことができ、玩具の貸し借りもスムーズ、笑顔でおままごと遊びをしていた。



≪幼児の変容≫

・嫌なことがあったときに、理由を聞かれると自分の気持ちを話すことができるようになってきた。

・自分の気持ちを話せたときは、切り替えも早く落ち着いている。

・友達と一緒に、笑顔で遊ぶ姿が増えてきた。

≪考察≫

・保育教諭が気持ちを受け止め、理解することで、自分の思いを話そうとする。

・保育教諭が一緒に遊びに入り、友達と繋ぐことで楽しく遊ぶことができ、楽しい気持ちを味わうと友達にも優しくできたりする。

・

【実践事例２～おにごっこを通して～】

≪幼児の姿≫

・遊びの中で、自分の意見や思いが通らなかったり、友達とトラブルになると、大声で泣き叫んだり、叩いたり、物を投げたりする。

≪保育教諭の願い≫

・おにごっこをする中で、友達や保育教諭に自分の気持ちや考えを言葉で伝えたり、友達の話を聞いたりして、楽しみながら遊びを深めていけるようになってほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫

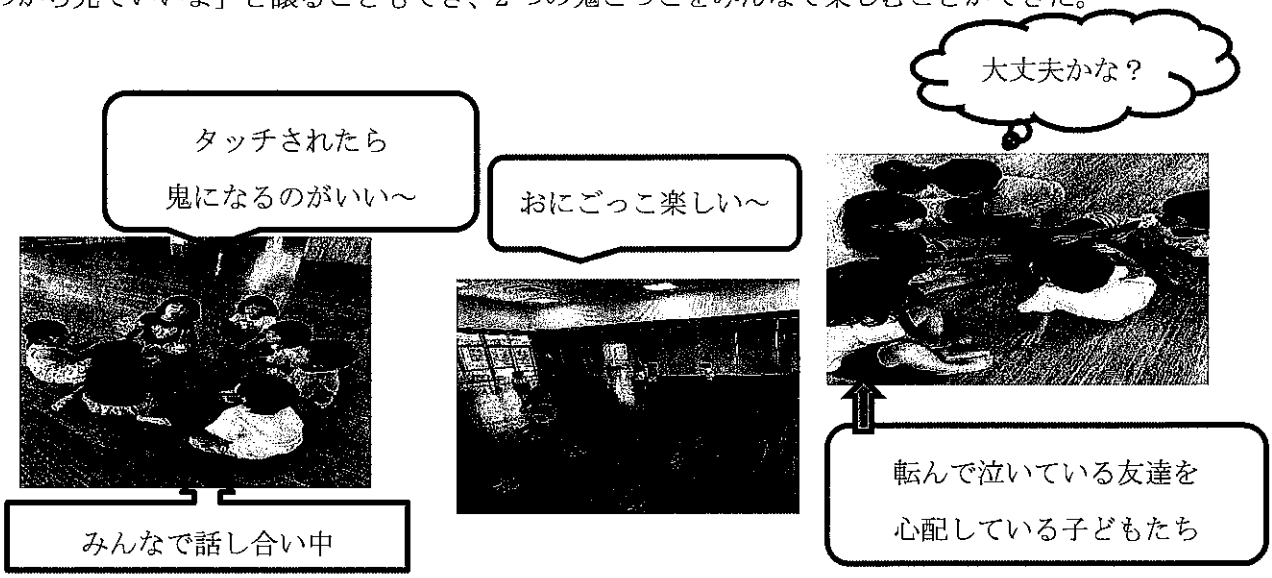
・子どもたちと一緒に遊び、楽しむことができるようにする。

・トラブルになった場合は、一人ひとりの話に耳を傾け最後まで聞く。

・必要な時は、みんなで話し合いをして、自分の思いや考えを話したり、友達の考えを聞く場を作る。

☆エピソード

・鬼ごっこをすることになったが、A児は「タッチされた人が鬼になる鬼ごっこがいい」、B児は「タッチされたら檻に入る鬼ごっこがいい」と、やりたい鬼ごっこが違い友達を叩いたりとトラブルになった。そこで、両者の気持ちを聞いた後、みんなにも「どうしたらいいと思う？」と聞くと、「じゃんけんしたらいいんじゃない？」との意見が出たが「嫌だ」と言いなかなか決まらない。すると、C児が「じゃあ、2つの鬼ごっこを交代ずつでどっちもやったら？」との意見が出て、2人納得しB児が「じゃあ、Aのから先でいいよ」と譲ることもでき、2つの鬼ごっこをみんなで楽しむことができた。



≪幼児の変容≫

・自分の思いが通らないと手が出てしまうこともあるが、「やらないで」「たたかないで」などの言葉でも伝えることができるようになっている。

≪考察≫

・トラブルになったときに、すぐに注意から入るのではなく、両者の話を最後まで聞き、気持ちに共感することで、気持ちを聞いてもらえた安心感で落ち着いて話ができるのではないかと考える。

・保育教諭が全部決めていくのではなく、子どもたちにも話を聞くことで、自分の気持ちや考えを話そうと思うことができるのではないかと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

・自分の気持ちを伝えることが苦手で、嫌なことがあるとすぐに泣く、叩く、玩具を投げるなどの行動が多かった子どもたちが、少しずつ自分の気持ちを言葉で伝えることができるようになってきた。友達や保育教諭と楽しく遊ぶことができたときは、友達にも優しく関わる姿が多く見られるようになってきた。

・気持ちを伝えることができる子を育むためには、保育教諭が一人ひとりの気持ちに耳を傾け、理解すること、表面の行動だけを見るのではなく、内面の見えない部分から気持ちを読み取り丁寧に関わっていくこと、できていることを認め褒めていくという関わりがとても大切だと学んだ。

・クラス全体としては、言葉で伝えることができるようになってきているが、一人ひとりの状態によって上手く伝えることができず、トラブルになることも多いので、その都度一人ひとりの様子に合わせた対応をしていく。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・今後も、幼児理解に努め、一人ひとりが安心して自分の気持ちを話すことができるような関わり、それぞれの環境や発達に応じて、一人ひとりに合った援助をしていく。

・子どもたちが自分の気持ちや考えを伝えたくなる、楽しい、ワクワクする遊びを取り入れていく。

・クラス担任だけでなく、園全体で園児の様子や関わり方などを共有していきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府　文部科学省　平成３０年「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

体を動かすことを楽しみ、健康な心と体を育む環境構成と援助の工夫
―日々の様々な活動を通して―

開邦幼稚園　教諭　氏名　佐久川　果奈子

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼稚園教育要領解説の第２章、「健康」の領域の内容で、（２）いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。（４）様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。と記載されている。

本学級は、男児１１名、女児10名、計２１名の３歳児クラスである。活発で体を動かすことが大好きな子ども達。しかし、取り組みの中で、壁逆立ちや跳び箱等チャレンジしても出来ないことがあるとすぐに諦め、活動に消極的になり自信が持てない姿がある。これらの実態を踏まえ、さまざまな活動を通して、体を動かす楽しさを感じ、積極的に挑戦できるようになってほしい。また、幼児が自信を持って、自ら挑戦し体を動かしたいと思えるような援助は何かと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①興味・関心・意欲を引き出す環境構成の工夫と援助

（1）物的環境を用いた指導。→平均台、跳び箱、タイヤ等

②体を動かす楽しさや自ら進んで挑戦しようとする環境の工夫

（1）体を動かすことの気持ちよさを感じ、自ら体を十分に動かそうとする意欲やできたという喜びと達成感を感じることができるように環境を整える。

（2）友だちと一緒に目標に向かって、さまざまな取り組みにチャレンジする。
シール表を掲示し、達成できたらシールを貼っていくというチャレンジの実施を行う。

③ラインテープやシールを用いての工夫

（1）見てすぐ手の位置や目線がわかるよう、ラインを引いたりシールを貼ったりする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例（１）体を動かすことの楽しさを感じ、健康な心と体を育む

【幼児の姿】

・体力がなく、すぐに休憩する姿が見られる。

【保育教諭の願い】

・体を動かすことの楽しさを感じてほしい。

・基礎的な運動能力を身に付け、健康的に育っていってほしい。

【環境構成・援助】

☆幼児が安全に運動できるようスペースを設ける。

☆保育教諭が一緒に楽しむ姿を見せて、運動する楽しさを共感する。

実践事例（２）意欲的に取り組み、積極的に挑戦することの出来る環境構成の工夫

【幼児の姿】

・できないことがあるとすぐに諦めてしまい、消極的で自信が持てない。

・できることだけに参加しようとする子がいる。

【保育教諭の願い】

・いろんなことに挑戦していってほしい。

・苦手なことにも頑張って粘り強く取り組んでほしい。

【環境構成・援助】

☆シールやスタンプ表を作り、挑戦してみようという意欲を高めた。

☆目標を持ち、できた喜びを味わえる声掛け。「すごい！できたね！」「みんなに見てもらおう！」など。

～活動の様子～

☆体操（アザラシ・ブリッジ等）

☆壁逆立ち

☆リレー

☆シール・スタンプ表

☆跳び箱の練習（平均台・タイヤ・跳び箱）

Ⅳ　実践の振り返り　≪結果と考察≫

・すぐに休憩しがちだった子も、「楽しいからまだやりたい！」「次はいつする？」と言い活動的になった。

・運動が得意な子をお手本として見せ、手足をどう使っているか、姿勢はどうか、など体の動きを意識して取り組むようになった。

・テープやシールで、目を向ける場所や手を置く位置に印をつけることで体が定まって姿勢よく動けるようになった。

・何秒行うか決めて、みんなで数えたあげることで、「もう少しだよ」「上手だね」「こんなすると出来るよ」「頑張れ！」、と励ましや教え合いの言葉で積極的にやってみたいという姿が見られるようになった。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○今後取り組んでいきたいことなどを書いてください

・幼児が意欲的に活動へ参加したり、積極的に何事にも挑戦したいと思えるような環境を整えていきたい。

・幼児個々の発達や特性についての理解を深め、一人ひとりに合った教育を行っていきたい。

・発達に応じた運動遊びをたくさん取り入れていきたい。

〈主な参考文献〉

平成２０年１０月　文部科学省『幼稚園教育要領解説』

様式３「課題研究レポート」

伝え合う力と思いやりのある幼児の育成を目指して

―言葉や人と関わりあう環境つくりを通して―

開邦幼稚園　教諭　氏名　平田　彩夏

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼稚園教育要領解説２章第２節「人間関係」の領域には、「幼児は幼稚園生活において多くの他の幼児や教師と触れ合う中で、自分の感情や意志を表現しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わい、時には、幼児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して互いに理解し、考えを出し合って良いものになる工夫をしたり、一緒に活動する楽しさを味わう体験を重ね関りを深め、共感したり思いやりを持つようになる。」と記されている。

本学級は、男児１１名、女児１１名の４歳児３年保育である。気の合う友達を誘って、遊んだり、お互い好きな物の興味でつながったり、共感をもとめて、友達を誘って遊んだりする姿見られる。

しかし、自分の思い通りにならなかったり、気持ちに折り合いがつかなくなると、友達に対して、乱暴な言葉を投げたり、意見がうまく伝わらなかったりすると手がでてしまう子もいる。一方で、保育者に確認しないと遊びをみつけられなかったり、友達の輪の中に自分から入ることが出来ず、戸惑ったり、一人で遊ぼうとするも見られる。

このような、実践を踏まえ、幼児同士が互いに楽しさを味わいながら遊びを楽しむ中で、幼児一人一人が集団の中で認められたり、認めたりして、個々の良さや気持ちが生かせる集団生活の在り方を研究したいと思い本テーマに設定しました。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 幼児が興味・関心を持って関われるような保育計画の工夫

・遊びのイメージが共有できるような幼児のつぶやきをひろい、声掛けしたりし、遊びを広げていけるようにする。

②友達や仲間の良さに気づき、思いやりの気持ちが持てるような援助の工夫

・他の友だちの良い所や、得意、不得意に気づき、幼児同士が認め合い、互いを思いやることの心地よさを感じられるような環境作りや声掛けの援助

③先生や仲間と共に過ごす中で喜びや悲しみを感じられる援助の工夫

・クラスで楽しかったことや、悲しかった事、つらかったこと等、仲間との関わりの中で感じたことを伝えあったりして話したりして、共有できる場を作り自分の思いを相手に伝えられるような環境作りの工夫を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

月	研　究　計　画
４月～５月	幼児実践把握・課題検討
６月	研究テーマの検討（研究内容）
７月～８月	夏休み期間
７月～１１月	理論研究・保育実践
１２月	課題研究のまとめ等

Ⅳ　課題解決に向けた取り組み（実践）

１、　実践事例（１）「～当番活動を通して～」

【幼児の姿　４月～６月】

・自分の当番の曜日が分からず、声掛けを待っている子がいる。

・自分のやりたいことだけを、やろうとする子がいる。

☆環境構成と●保育者の援助	幼児の姿
（4月～5月） ☆当番活動について内容をお話する。 ☆当番の曜日と名前を書いて皆が見えるように提示する。 ●「お当番の日だ！」と張り切ったり楽しめるような言葉かけをしていく。	**（4月～5月）** ・当番表を見て、自分が当番の日を確認して行動しようとする子が増えた。 ・わかない子に声掛けする子が増えた。 ・お休みの人がいる曜日があったら「お手伝いしていい？」と自分たちから保育士に確認し、進んで取り組むようになった。

【結果と考察】

・１日の流れや、当番の内容を確認し、提示することで見通しを持って、安心して当番活動が出来るようになった。

・子ども達同士、で教え合ったり確認する場面が良く見られるようになったことで仲間意識が高まった。

２，実践事例（２）「いいこと考えた！！」

【幼児の姿　１１月～】

・気の合う友達と遊ぶが、同じあそびばかりですぐに諦めてしまう子がいる。

・ブロックやドミノで一生懸命作るが途中、諦めてしまったり、仲間と協力する姿があまり見られない。

☆環境構成と●保育者の援助	幼児の姿
（11月～） ☆複数の玩具ばかり出すのではなく、玩具を１つ～２つにしてみる。 ●保育者は、すぐに遊びの輪に入らず、様子を見守る。 ●意見がぶつかったりしたときは、話を聞いてあげ遊びを展開できるような声掛けをしていく。	**（11月～）** ＭちゃんとＫちゃんがドミノを作り始めた。その様子をＨ君が見ていて、「一緒にやりたいな」と声をかけ、３人でドミノを作っていた。その隣で、積み木遊びをしていたＳ君とＹ君が「ドミノ楽しそうだね。僕たちもドミノ作ろう！」と仲間に入れてもらう。 「いいこと考えた！！皆で、一緒に作ったら、大きいドミノが出来るよ。」とクラスの皆で協力して作る姿が見られた。

【結果と考察】

・興味やイメージが湧くような環境構成を作ることで、遊びに関心を持った。

・玩具を少し減らしたり、数を少なくすることで友達との距離が近くなり、いつもと違う一面を見つけることが出来た。

・なかなか遊びの輪に自分から入らない子も友だちに誘わることで、表情も明るくなり、自分の思いを伝えることが出来た。

Ⅴ　実践のまとめと課題

・友達と一緒に活動するためには、まず、一人一人の幼児の姿が自己発揮できることが大切と思う。その為に保育者は一人一人の良さ可能性を見つけ、言葉かけや環境構成の工夫が必要である。

・幼児の興味関心の把握は、幼児理解を深め信頼関係等、幼児理解を深めていく事が子ども達の育ちにつながっていく。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成２９年度　「幼稚園教育要領解説」　フレーベル館

様式３　「課題研究レポート」

一緒に活動する楽しさを味わうための援助と環境構成の工夫

―友達や保育教諭との関わりを通して―

大宜味村立　おおぎみこども園　教諭　氏名　宮城　はるか

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の第２章第４節「人間関係」の領域に「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」と記されており、また内容には「友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう」「友達との関わりを深め、思いやりをもつ」とある。幼児は、教師との信頼関係を築いていくことで安心して園生活を送り、次第に友達との関わりも増え教師が見守ってくれているという安心感から自分の思いを伝えたり自己を発揮でき友達との関わりも深まっていくのだと考える。

本学級は、４歳児（６年保育）男児１０名、女児１２名、支援児２名、計２４名在籍し、好奇心旺盛で明るい学級である。また、支援児が２名いるが支援児に対しても優しく接してくれる子が多く何事にも協力的な学級である。しかし、気の合う子同士で遊ぶ姿が多くあり、思いの違いからトラブルが起こると、すぐ教師に訴え、相手の思いを聞かずに自分の思いを強い口調で一方的に話す姿が見られる。また、言われた通りにすることはできるが、自ら自分なりの考えを主張する子が少なくいつも決まった子が発表する姿が見られる。このような実態を踏まえ、遊びや園生活を通して、友だちと協力して様々な体験を積み重ねながら、主体的・協力的に幼児自身が園生活を進めていけるようになるためにはどのような援助と環境構成の工夫が必要なのか研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①幼児が主体的に活動に取り組むことができるような援助と環境構成の工夫

活動の主体が幼児であるように、幼児が自ら活動が生まれやすく、展開しやすいように教師は意識・計画的に環境を構成していくようにする。

②友達と協力することの楽しさを味わうための援助と環境構成の工夫

友達と遊びや生活を共にし、試行錯誤する中で、考えや目的を共有できるような機会を設ける。一日の振り返りを設け、自分の思いを伝えたり、友達の思いにも気付けるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

《実践事例１》　「新しいグループを決めよう！」

【　幼児の実態　】

進級してしばらくは、前年度のグループを引き継ぎ幼児の様子を観察していた。すると、仲の良い子同士でいつも一緒に遊ぶ事が多く、他の子との関わりが少ないように見受けられた。また、イメージしたものを絵で表現したり、遊んでいる中で提案したりする姿もみられるようになってきた。

【保育教諭の願い】
☆仲良い子関係なく他の子とも関わってほしい。
☆支援児２名を通して、サポートする思いやりの心を育んでほしい。

【　　環境構成の工夫　　】

☆新しいグループはくじ引きによって決めるということを事前に伝えた。
☆４色（赤・黄・緑・青）の４つのグループに分けることを説明した。
☆テーブルの上にくじと同じ色の画用紙を貼り付け分かりやすくし、くじと同じ色のテーブルにいくよう声かけをした。

【　　保育教諭の援助　　】
☆くじを引く時のドキドキ・ワクワクの気持ちを楽しめるように、保育教諭も一緒に子ども達と楽しみ「なにがでるかな～？」等の声かけをする。
☆「新しいグループに名前をつけよう」と声かけし、グループで話し合わせ好きな絵を描かせてみた。新しいグループ名が決まると皆の前で「私は〇〇グループです」と確認させた。
☆支援児に対しては、くじを引かせたあと、落ち着くグループに振り分けた。

グループ名を話し合って決る様子

新しいグループを発表している様子

【　　幼児の変容　　】
☆最初は自分のグループやメンバーが分からずに戸惑っていた子、「〇〇さん〇〇グループだよ」と友達同士で声を掛け合って活動できるようになっていた。
☆支援児のいるグループは特に積極的に声を掛け合って協力する姿が見られた。
【　　結果と考察　　】
☆仲の良い子同士での活動が少しずつ新しいグループでの活動に移り、他の子との関わりも次第に増えて、グループ活動以外での場面でも楽しく遊ぶ姿が見られるようになった。

《実践事例 2》　「お当番をしてみよう！」
【　幼児の姿　】
☆保育教諭のお手伝いをする姿が多く見られる。
☆お手伝いには興味はあるが、いつも決まった子だけがやっているので、なかなか行動には移せず見ているだけの子もいた。

【保育教諭の願い】
☆友達と協力する楽しさを感じてほしい。
☆人の役に立つ喜びを感じてほしい。

似顔絵を使用して作成した当番表

【　環境構成の工夫　】
☆目に見えるように分かりやすい当番表を用意する。
☆習慣化できるように、毎日無理なく行うようにする。
【　保育教諭の援助　】
☆当番の日には、朝の会で当番の子の名前を呼び、前に出てきてもらい、「お当番さん頑張って下さい」「頑張ります」と全員が今日の当番を分かるようにする。
☆友達と協力してできやすい、テーブル運びと給食後の雑巾がけから行った。
☆保育教諭も側で見守り、「きれいになったね」「ありがとう」とその都度必要に応じて声かけを行い、自信に繋げていった。

【　幼児の変容　】

☆当番を忘れている子に対して、他の子が「今日はお当番だよ」と教えたり、困っていたら気付き一緒に手伝う姿が見られるようになった。

☆「今日はお当番だー」と言って喜ぶ姿が見られた。

☆当番に当たる子が楽しく当番活動をしている姿を見て他の子も当番以外の日でも自分からスリッパを並べたりと、意欲的に活動するようになった。

☆「何かお手伝いないの？」と聞いてくる子も増えた。

当番表を確認する様子

当番で協力して雑巾がけをする様子

【　結果と考察　】

☆当番表を見やすい位置に配置したことで、今日は当番だということが確認しやすくなり、自然と自覚するようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

☆「こんなしたら早くできるよー」や「こうしてやるんだよー」等の子ども同士が考えて経験したことを次の当番の子に教える姿が見られ、当番を通して工夫して活動することができるようになっていた。

☆新しいグループの中での活動を通して、友達のいい所や自分のいい所に気付くきっかけに繋がった。

②課題

☆グループの名前を決める時に絵を書いてもらったが、ジャンルがバラバラになってしまったので、先に保育教諭が「くだもの」「のりもの」「キャラクター」等のジャンルを決めておけばもっとスムーズに話合いが進められたと考えた。

③実践を通した自身の気付き、考え

☆幼児期は仲の良い子同士で遊ぶ姿が多く見られる。新しいグループを決めたり、当番活動を通して他の友達と関わる機会を意識・計画的に保育教諭が作ってあげる事が必要だと考えた。

☆本研究を通して保育環境を整え援助することの重要さを再認識した。

Ⅴ　今後の実践に向けて

☆研修を通して「活動の主体が幼児であるように」と学んでいても実践していく中で、保育教諭はどこまで援助すれば良いのかとの見極めが難しい。まずは、子ども達にさせてみる。どこまでできるか、どこから援助が必要なのかを様々な活動をとおして確認する必要があると考えた。

☆今後はたくさんの保育活動をとおして、援助と環境構成の工夫をさらに学んでいきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府文部科学省厚生労働省　平成 30 年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館

様式３【課題研究計画書】

幼児の好奇心や探求心を育み遊び込める環境構成と援助の工夫

～幼児理解に基づいた保育実践を通して～

豊見城市上田こども園　保育教諭　森　彩乃

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第１章第１節「幼保連携型認定こども園における教育及び保育の基本」には「保育教諭等は、園児の主体的な活動が確保されるよう、園児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。」と記されている。

本学級の実態としては、「５歳児（３年保育）」男児１６名、女児１３名、計２９名在籍している。進級児同士、出身保育園が同じ子同士で一緒に遊ぶ姿が多く見られ、新しい友達との関わりは少ない。虫とりや砂遊び、色水遊び等様々な遊びに興味を持つ子が多く、また、製作遊びでは自分なりに作ったり描いたり、友達の遊びの面白さに気付き真似たり、友達と一緒に遊びを進めようとする姿が見られる。しかし、様々な遊びに興味があることで、他の遊びに興味が移り、一つの遊びが長く続かず発展しない姿が見られた。

そこで、子ども達が好奇心や探求心を持って、考えたり試したりしながら遊びが広がるようになるためには、どのような環境構成や援助の工夫が必要か幼児理解を通して研究したい。

Ⅱ　研究内容

１　幼児の姿の読み取り、幼児理解について

(1) マップ型ドキュメンテーションを活用して保育記録を取り、SOAP の視点で書くことで、客観的に振り返って幼児理解に繋がるように努める。また、幼児の声をひろい記録することで、遊びを広げていけるように記録を工夫する。

(2) 幼児の姿に合わせた援助ができるように、職員間で情報共有し、幼児理解に努める。

２　環境や援助の工夫について

(1) 幼児が何に興味や関心をもっているのか実態を把握し、自分から「やってみたい」と取り組める環境、興味や関心が深まり意欲が引き出されるような環境の構成を工夫する。

(2) 自分の思いを伝えたり相手の話を聞いたりしながら、友達と一緒に遊びを進めていけるように援助を工夫する。

Ⅲ　研究計画

月	研　究　計　画
4 月～5 月	幼児の実態把握・課題の検討
6 月	研究テーマの検討（テーマ設定理由、研究内容、研究計画の検討含む）
7 月～11 月	理論研究・保育実践
（9 月）	（中間検討）
12 月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取組（実践）

1　実践事例１『ゆうなちゅらうみ水族館』

(1)保育の展開

６月後半、保育室に絵の具を用意すると、青い絵の具を使って海を描き魚作りが始まった。最初は、気の合う友達２・３人で発砲トレイを魚の形に切って作っていたが、周りで見ていた子も作り始め、遊びが少しずつ広がっていったので、クラス全体で海の生き物を描き、壁面に飾った。またその時期に、隣のクラスでは船作りが盛り上がっており、興味を持った４・５人が、自分達も作ってみたいと船作りも始まる。海・魚・船のイメージを持ちながら、初めは保育教諭が一緒に作っていると、魚が大型化しダイナミックな作品が増え、船もスクリューを付ける等発展していった。すると、作った魚を海や水族館のイメージで飾りたい、兄弟や他クラスを招待したいとの声が出て、お招き会をすることが決まり、招待状を作る姿が見られた。しかし、準備は進まず当日になってチケットが必要、魚や船の手直しが必要だと気付き、急ピッチに進めていた。お招き会では、初めは恥ずかしそうに招待者を見ているだけの子が多かったが、途中からは魚を教えたり、案内する子もいた。

浮かぶかな？画用紙は溶けて、沈んだよ。
浮かんだけど、進まないな。
どうした進む？

（資料を見ながら）
黒い線も入ってるよ。
何で作る？ペンで描く？テープで作ろうか？

(2)幼児理解

・前年度や４月から製作遊びを継続してきたことで、これまでの経験から平面だった物が立体的に変化していったのであろう。
・友達の作品を見て自分の物も欲しくなり、同じように魚作りをする子が増えていったのではないだろうか。
・カラーポリ袋やカラーガムテープ等、使いやすい材料を準備したことで、さらに大きい物を作りたいと大型化していったと思う。
・前年度に、年長児からクラス製作の動物園やお化け屋敷に招いてもらった経験から、他クラスを招待したいとの思いがでてきたのではないだろうか。しかし、招待状を出したことに満足し、必要な物の準備や係には当日気付き、慌てたのだと思われる。

(3)保育教諭の願い

・途中で飽きたり、諦めて他の遊びに移ることが多かったが、途中で諦めず最後まで取り組んでほしい。
・達成感を味わって、自信に繋げてほしい。
・友達とイメージを伝え合いながら遊ぶ楽しさを味わってほしい。

(4)環境（□）や援助（◎）の工夫

□イメージしやすいように、図鑑や写真資料等を準備する。
□子ども達のイメージに近づけるような、様々な素材を用意する。
◎具体的にイメージできるような言葉掛けをする。
◎友達の良さに気付いたり、アイディアを共有できるように言葉掛けやサークルタイムを設ける。

(5)幼児の反応（幼児の声、姿、行動等）変容の様子

招待会が終わると、「楽しかった」、「次やるときは、チケットも先に作らないと」、「案内係も必要だね」と、達成感を持ちながらも今回足りなかったことに気付く姿が見られた。また、魚作りと同じ方法で昆虫等好きな物を作る姿が見られ、以前は保育教諭に任せようとしたり、途中で他の遊びに移ろうとすることが多かったが、友達とイメージを伝えたり相談しながら進める姿が増えてきた。

成果：保育教諭が仲立ちし友達に作り方を聞いたりした中で、一緒に作ったりイメージを伝えあう楽しさを感じられるようになってきたのではないかと思う。

課題：様々なことに興味があり、遊びが続かず変わったり途中で終わることがまだあるので、遊び込む楽しさを味わう経験を増やしていく。

課題：友達とイメージを伝えあう際に自分の考えだけを伝える姿が見られるので、相手の思いにも気付けるように援助していく。

2　実践事例2『お店屋さん』

(1)保育の展開

丸い空き箱や花紙を使ってケーキを作りテーブルに並べる子がいると、他児が空き箱でレジを作り側に置いた。それを見て、画用紙でドーナツやアイスクリームを作る等、それぞれが気の合う友達と一緒に食べ物を作り始めた。ピザや寿司、沖縄そば等食べ物が増え、それぞれテーブルを分けコーナーを作り、陳列されていった。しかし、客役をする子がなかなかいなかったため、保育教諭がお金を作り客になった。すると、お金や財布を作ったり、保育教諭と一緒に買いに行きやり取りをする姿が見られた。しかし、保育教諭が離れると、子ども達だけでは遊びが続かなかった。また、同時期にダンボール箱で恐竜作りを楽しむグループもあり、クラス内で遊びが大きく二つに分かれていた。それぞれで遊びが発展しそうで発展しなかったため、話を聞くと、『ちゅらうみゆうな水族館』の経験からお客さんを呼びたいとの声が上がり、クラスでお客さん役、販売役に分かれオープンすることになった。

種類が豊富で迷っちゃう。
「どれにしようかな。おすすめはどれですか？」
メニュー表もあるので、好きな物作れますよ。

テーブルがあるよ。レストランみたい。
一緒に食べよう。

財布とお金を作って、やりとり。
「1000円ですよ。」
「これで足りるかな？おつりは？」

(2)幼児理解

・友達の作品に影響を受け、好きな食べ物を作って楽しんでいたのではないか。
・作品を飾る場をカウンターのようにしたことで、お店のイメージが沸き、興味を持ったのではないか。
・製作が好きな子が多いため、作る楽しさは感じ販売側は楽しいが、お客役をする楽しさは感じられなかったのではないか。

(3)保育教諭の願い

・それぞれが作った作品を活かしながら、友達と一緒にお店屋さんやレストラン等ごっこ遊びをすることで、遊びが発展する楽しさを味わってほしい。
・友達とやり取りしたり、意見を伝えたり、協力したりしながら遊ぶ楽しさを味わってほしい。

(4) 環境（□）や援助（◎）の工夫

□イメージしやすいように、カウンターの作りを工夫したり、レストランのようにテーブルを飾ったりして環境を整える。
◎お互いの意見を聞く場を設ける。

(5) 幼児の反応（幼児の声、姿、行動等）変容の様子

作ることへの自信がついた様子が見られる。また、友達関係が広がり、様々な友達とやり取りをする姿が見られるようになった。その中で、意見がぶつかることもあるが、子ども同士で仲介に入ったり話し合いながら、友達の気持ちに気付いたりするようになってきたように思う。

成果：自分達でイメージを膨らませ製作する楽しさを感じ、何でも作ってみようと自信がついた様子が見られる。
課題：製作遊びは、自分達で進めていくことができるようになってきたが、作って終わりでなく、そこからの遊びの発展や表現遊び等では保育教諭の仲介が必要であり、製作遊び以外の楽しさを感じる経験を増やしていく。
課題：事例1の時よりも、友達と意見が違う時に、他児が仲介に入ったり、相手の言葉を聞こうとする姿もみられるようになってきたが、まだ保育教諭が必要な場面もあるので、相手の意見も聞けるように援助していく。

Ⅴ　実践のまとめと考察

子ども理解を深める方法として、SOAPの視点や保育者間で子どもの様子の伝え合いを行ってきた。実践を通して、子どもの遊びが発展するには、様々な方法があると感じた。幼児理解と保育教諭の『次に経験してほしいこと』への願いを合わせていくために環境整備や関わり方等の援助の方法を今後も研究していく必要があると思った。今回の実践を通して、保育教諭がどこまで手伝うのかヒントの与え方等、発達や時期によって変えていく必要があると実感した。

また、環境整備では、レストランに見立てテーブルを配置すると一時はそこで遊ぶ姿も見られたが、長続きしなかった。子どもが本当に遊びたいことは何かを考え、魅力的な環境や遊びの充実のための関わり方等を工夫していく必要があると感じた。今後も、子ども達が好奇心や探求心を育み、遊び込めるように、幼児理解を基にして、環境構成と援助を工夫していきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成30年　『幼保連携型認定型こども園教育・保育要領解説』　株式会社フレーベル館
大豆生田啓友・おおえだけいこ　2020年　『日本版　保育ドキュメンテーションのすすめ』　小学館